

県道鰐田中線関係埋蔵文化財調査報告 第1集

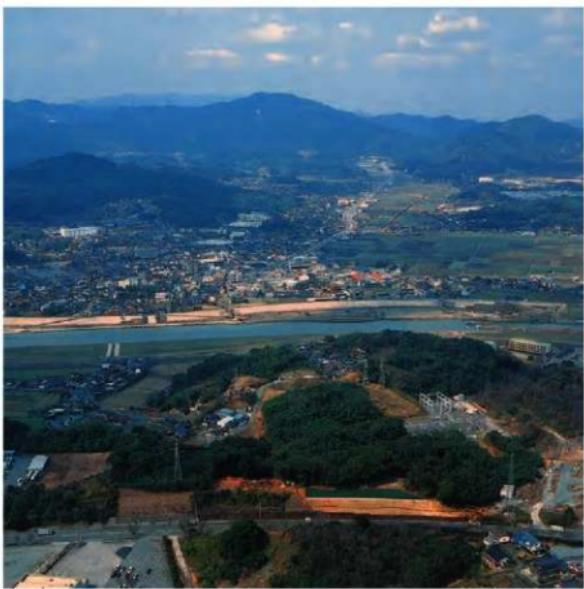
井手ヶ浦窯跡群

福岡県飯塚市所在遺跡の第2次調査

福岡県文化財調査報告書 第230集

2011

福岡県教育委員会



1 調査地上空より西を臨む（手前から川島古墳公園・遠賀川・正面奥に笠置山）



2 同 近景（空中写真）



1 調査地上空より北（直方方面）を臨む



2 同 近景（空中写真）



1 井手ヶ浦窯跡 2次調査地 2区空中写真（上が南東）



2 井手ヶ浦窯跡 2次調査地 2区全景（北西から、川崎易慈氏撮影・提供）



1 7・8・10号窯跡（北西から）



2 7・9・10号窯跡（西から）



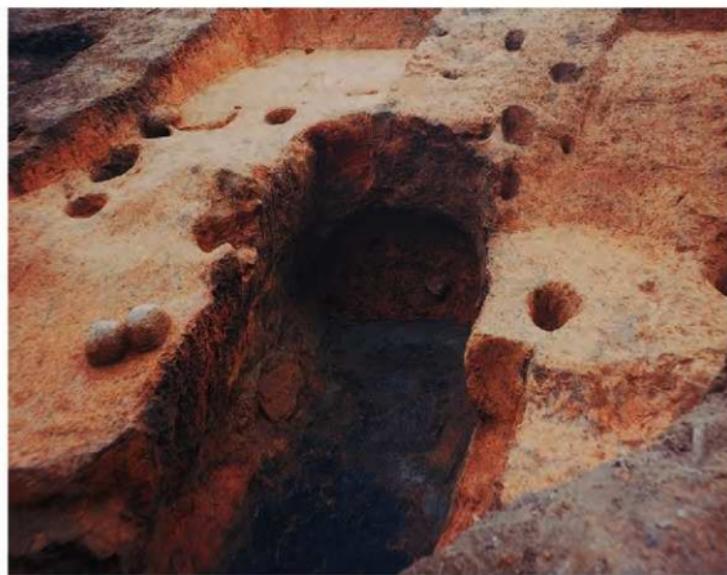
1 7号窯跡最終操業面全景（北西から）



2 7号窯跡最終操業面遺物出土状況（北西から）



1 8号窯跡最終操業面全景（北西から）



2 8号窯跡焼成部口天井部残存状況（北西から）



1 9号窯跡最終操業面全景（西から）



2 10号窯跡最終操業面全景（北西から）



1 2区出土遺物



2 1区出土土馬

序

福岡県教育委員会では、県道鯱田中線の道路改良事業に伴い、飯塚市大字鯱田に所在する井手ヶ浦窯跡群の発掘調査を実施しました。

遠賀川右岸の飯塚市川島・鯱田に広がる丘陵地帯には、装飾古墳の川島古墳を始め、古墳時代の遺跡が数多く分布することが知られていました。井手ヶ浦窯跡群もその一つですが、昭和 59 年に飯塚市教育委員会により 5 基の窯跡が調査されて以降、周囲に窯跡の広がりが確認されながらも、本格的な発掘調査は行われていませんでした。今回の発掘調査では、新たに 4 基の須恵器窯跡が非常に残りの良い状態で見つかり、一部はこれまでに確認されていた窯跡よりも時代が遡るなど、地域の歴史を考える上で、とても重要かつ貴重な資料を得ることができました。

本書が学術研究や地域文化の普及啓発・教育資料として活用され、文化財に対する理解と認識を深める一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査・整理作業並びに報告書の作成にあたり、御協力・御助言をいただいた多くの方々に対し、心から感謝申し上げます。

平成 23 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会
教育長 杉光 誠

例　言

- 1 本書は平成 19（2007）年度に都市計画道路鰯田中線（県道飯塚福間線）街路緊急地方道路整備事業に伴って発掘調査を実施した、福岡県飯塚市鰯田に所在する井手ヶ浦窯跡第2次調査の記録で、県道鰯田中線関係埋蔵文化財調査報告の第1集となる。
- 2 本遺跡の発掘調査・整理報告は、福岡県土木部公園街路課の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、遺物写真是文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影した。空中写真是九州航空（株）に委託した。
- 4 本書に掲載した遺構図は、内村明子・江上美枝子・川崎易慈・薦野富雄・近藤幸雄・瀧下良枝・田中辰男・浜田正道・山出忠夫の協力を得て、大里弥生と調査担当者が作成した。
- 5 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において、濱田信也・新原正則の指導の下に実施した。出土遺物の実測は調査担当者の他、平田春美・棚町陽子・田中典子・久富美智子・坂田順子・橋ノ口雅子・林知恵・堀江圭子・若松美枝子・寺岡和子・栗林明美・中村洋子・中川真理子・中川陽子が行った。製図は調査担当者の他に豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子が補助した。
- 6 本書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の 1 / 2 5, 0 0 0 地形図「直方」「飯塚」、および飯塚市発行の 1 / 2, 5 0 0 飯塚市基本図を改変したものである。
- 7 本書で使用する方位は磁北を表し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系を示す。
- 8 窒体熱残留磁化測定については、島居雅之氏（岡山理科大学）に分析を依頼し、玉稿を賜った。
- 9 炭化材の放射性炭素年代測定・樹種同定については（株）パレオ・ラボに分析を委託し、分析原稿を掲載した。
- 10 胎土分析については三辻利一氏（大阪大谷大学）に分析を依頼し、玉稿を賜った。
- 11 出土遺物観察表は、1区出土遺物・特殊遺物を城門義廣が、その他を一瀬智が作成した。
- 12 出土遺物及び写真・図面等の記録はすべて九州歴史資料館に保管している。
- 13 本書の執筆は、IV章の他、III章 2 - (2)「1区の出土遺物」・III章 4・V章 2 - (3)を城門、VI章を坂本真一、その他を一瀬が担当し、編集は一瀬が行った。

目 次

卷頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

Iはじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
3 調査・整理関係者	4
II位置と環境	6
1 遺跡の地理的環境	6
2 周辺地域の歴史的環境	8
III調査の記録	13
1 調査の概要	13
2 1区の調査	13
(1) 調査の概要と基本土層	13
(2) 調査の内容と出土遺物	13
(3) 小括	23
3 2区の調査	23
(1) 調査の概要と基本土層	23
(2) 検出遺構と出土遺物	26
1) 窯跡	26
2) その他の遺構	73
3) その他の出土遺物	76
(3) 小括	91
4 特殊遺物	92
IV自然科学分析の結果	98
1 各分析について	98
2 井手ヶ浦7号～10号窯跡の熱残留磁化測定結果	99
(1) はじめに	99
(2) 試料と測定方法	99
(3) 段階交流消磁結果の解析	100

(4) 考察	101
3 井手ヶ浦窯跡における放射性炭素年代(AMS測定)	108
(1) 測定対象試料	108
(2) 測定の意義	108
(3) 化学処理工程	108
(4) 測定方法	108
(5) 算出方法	108
(6) 測定結果	109
4 井手ヶ浦窯跡出土炭化材の樹種	111
(1) 試料	111
(2) 分析方法	111
(3) 結果	111
(4) 考察	111
5 井手ヶ浦窯跡群出土須恵器の化学特性	115
(1) はじめに	115
(2) 分析法	115
(3) 分析結果	115
V まとめ	121
1 窯跡の構造と年代について	121
(1) 窯跡の立地と構造について	121
(2) 窯跡出土須恵器と編年	124
2 その他の出土遺物に関する検討	129
(1) 7・8世紀に下る出土遺物について	129
(2) 出土土師器・“赤焼土器”について	129
(3) 土馬について	130
3 おわりに	131
VI 飯塚市鶴田地区発見の石蓋土壙墓について	133
1 はじめに	133
2 石蓋土壙墓	133
3 まとめ	134

図版目次

- 卷頭図版 1 1 調査地上空より西を臨む（手前から川島古墳公園、遠賀川、正面奥に笠置山）
 2 同 近景（空中写真）
- 卷頭図版 2 1 調査地上空より北（直方方面）を臨む
 2 同 近景（空中写真）

- 卷頭図版 3 1 井手ヶ浦窯跡 2次調査地 2区空中写真（上が南東）
2 井手ヶ浦窯跡 2次調査地 2区全景（北西から、川崎易慈氏撮影・提供）
- 卷頭図版 4 1 7・8・10号窯跡（北西から） 2 7・9・10号窯跡（西から）
- 卷頭図版 5 1 7号窯跡最終操業面全景（北西から）
2 7号窯跡最終操業面遺物出土状況（北西から）
- 卷頭図版 6 1 8号窯跡最終操業面全景（北西から）
2 8号窯跡焼成部口天井部残存状況（北西から）
- 卷頭図版 7 1 9号窯跡最終操業面全景（西から） 2 10号窯跡最終操業面全景（北西から）
- 卷頭図版 8 1 2区出土遺物 2 1区出土土馬
- 図版 1 1 1-A区全景（南西から） 2 1-A区全景（北東から）
3 1-B区全景（北東から）
- 図版 2 1 1-A区堆積状況①（C-C'間上半、南西から）
2 1-A区堆積状況②（B-B'間下半、南から）
3 1-A区堆積状況③（A-A'間下半、南から）
- 図版 3 1 2区全景（空中写真、上が南東）
2 2区上空から北を臨む（空中写真、1区部分は工事済）
3 2区遺構検出後全景（北から）
- 図版 4 1 谷下部グリッドC-2・3間土層（SX 2縦断南半、北東から）
2 谷下部グリッドB-2・3間土層（SX 2縦断北半、北東から）
3 谷下部グリッドB-2・C-2間東半土層（SX 2西半、北西から）
- 図版 5 1 谷下部グリッドB-3・C-3間西半土層（SX 2東半、北西から）
2 谷下部グリッドB-3・C-3間東半土層（9号窯跡前庭部横断、西から）
3 谷下部グリッドB-2・C-2間西半土層（10号窯跡焼成部横断①左半、北西から）
- 図版 6 1 7号窯跡最終面全景（北西から） 2 7号窯跡石組み構築面全景（北西から）
3 7号窯跡最終操業面 燃焼部石組み検出状況（北から）
- 図版 7 1 7号窯跡燃焼部 横断土層（北西から）
2 7号窯跡焼成部 横断土層①（北西から）
3 7号窯跡焼成部 横断土層②（北西から）
- 図版 8 1 7号窯跡燃焼部 縦断土層（北東から）
2 7号窯跡焼成部 天井部残存状況（北西から）
3 7号窯跡焼成部下位 縦断土層（北東から）
- 図版 9 1 7号窯跡焼成部中位 縦断土層①（北東から）
2 7号窯跡焼成部中位 縦断土層②（北東から）
3 7号窯跡排煙部 縦断土層（北から）
- 図版 10 1 7号窯跡最終操業面 前庭部縦断土層（西から）
2 7号窯跡焼成部下位 右側壁貼壁残存状況（北から）
3 7号窯跡焼成部下位 左側壁貼壁残存状況（西から）

- 図版 11 1 7号窯跡焼成部上位 右側壁貼壁残存状況（北から）
2 7号窯跡焼成部上位 左側壁貼壁残存状況（西から）
3 7号窯跡最終操業面 遺物出土状況①（北西から）
- 図版 12 1 7号窯跡最終操業面 遺物出土状況②（北から）
2 7号窯跡最終操業面 窯体内完掘状況（北西から）
3 7号窯跡最終操業面 排煙口検出状況①（西から）
- 図版 13 1 7号窯跡最終操業面 排煙口検出状況②（東から）
2 7号窯跡排煙部溝検出状況（南東から）
3 7号窯跡排煙部溝土層①（南から）
- 図版 14 1 7号窯跡排煙部溝土層②（北から）
2 7号窯跡最終操業面 断ち割り状況（北西から）
3 7号窯跡前庭部 断ち割り状況（縦断、西から）
4 7号窯跡燃焼部下位 断ち割り状況（縦断、西から）
5 7号窯跡燃焼部 断ち割り状況（横断左、北西から）
6 7号窯跡燃焼部上位 断ち割り状況（縦断、西から）
- 図版 15 1 7号窯跡焼成部下位 断ち割り状況（縦断、西から）
2 7号窯跡焼成部下位 断ち割り状況（横断左、北西から）
3 7号窯跡焼成部下位 断ち割り状況（横断右、北西から）
4 7号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（縦断、西から）
5 7号窯跡焼成部中～上位 断ち割り状況（縦断、西から）
6 7号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（横断左、北西から）
7 7号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（横断右、北西から）
8 7号窯跡焼成部上位 断ち割り状況（縦断、西から）
9 7号窯跡最終操業面 排煙口付近断ち割り状況（南西から）
- 図版 16 1 7号窯跡一次操業面 排煙口検出状況（南から）
2 7号窯跡石組み構築面検出状況（北西から）
3 7号窯跡燃焼部 右側壁石組み検出状況（北から）
- 図版 17 1 7号窯跡燃焼部 左側壁石組み検出状況（西から）
2 7号窯跡石組み構築・一次操業面 断ち割り状況（北西から）
3 7号窯跡右側壁石組み 断ち割り状況（北西から）
- 図版 18 1 7号窯跡一次操業面 燃焼部右側壁検出状況（石組み除去後、北から）
2 7号窯跡前庭部西半 横断土層（北西から）
3 7号窯跡前庭部東半 横断土層（北西から）
- 図版 19 1 7号窯跡前庭部下半 縦断土層（南西から）
2 8号窯跡最終面全景（北西から） 3 8号窯跡一次操業面全景（北西から）
- 図版 20 1 8号窯跡燃焼部 縦断土層上層（北から）
2 8号窯跡燃焼部 縦断土層下層（西から）
3 8号窯跡焼成部口 天井部残存状況（北西から）

- 図版 21 1 8号窯跡焼成部口付近 縦断土層（北から）
2 8号窯跡焼成部 横断土層①（北西から）
3 8号窯跡焼成部 横断土層②（北西から）
- 図版 22 1 8号窯跡焼成部 縦断土層下層（北から）
2 8号窯跡焼成部上位 縦断土層（北から）
3 8号窯跡排煙部 縦断土層①（北から）
- 図版 23 1 8号窯跡排煙部 縦断土層②（東から）
2 8号窯跡最終操業面 排煙口検出状況（南から）
3 8号窯跡最終操業面 排煙部右貼壁（北東から）
- 図版 24 1 8号窯跡最終操業面 排煙部左貼壁（南西から）
2 8号窯跡排煙部構土層（東から）
3 8号窯跡最終操業面 断ち割り状況（北西から）
- 図版 25 1 8号窯跡燃焼部 断ち割り状況（縦断、南から）
2 8号窯跡燃焼部 断ち割り状況（横断、北西から）
3 8号窯跡焼成部下位 断ち割り状況（縦断、南から）
4 8号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（縦断、西から）
5 8号窯跡焼成部 断ち割り状況（横断左、北西から）
6 8号窯跡焼成部 断ち割り状況（横断右、北西から）
7 8号窯跡焼成部中～上位 断ち割り状況（縦断、北から）
8 8号窯跡焼成部上位 断ち割り状況（縦断、北から）
9 8号窯跡焼成部上位 断ち割り状況（横断、北西から）
- 図版 26 1 8号窯跡最終操業面 排煙口付近断ち割り状況（南西から）
2 8号窯跡一次操業面 排煙口付近検出状況（南西から）
3 8号窯跡一次操業面 断ち割り状況（北西から）
- 図版 27 1 9号窯跡最終操業面全景（北西から）
2 9号窯跡燃焼部下位 縦断土層（南西から）
3 9号窯跡燃焼部上位 縦断土層（南西から）
- 図版 28 1 9号窯跡焼成部中位 縦断土層（北から）
2 9号窯跡焼成部 天井部残存状況（北西から）
3 9号窯跡焼成部上位～排煙部 縦断土層（南西から）
- 図版 29 1 9号窯跡焼成部 横断土層①（北西から）
2 9号窯跡焼成部 横断土層②（北西から）
3 9号窯跡最終操業面 遺物出土状況①（北西から）
- 図版 30 1 9号窯跡最終操業面 遺物出土状況②（北西から）
2 9号窯跡排煙部構土層（北西から）
3 9号窯跡最終操業面 断ち割り状況（北西から）
- 図版 31 1 9号窯跡燃焼部 断ち割り状況（縦断、西から）
2 9号窯跡燃焼部 断ち割り状況（横断左、西から）

- 3 9号窯跡燃焼部 断ち割り状況（横断右、北西から）
 - 4 9号窯跡燃焼部～焼成部下位 断ち割り状況（縦断、西から）
 - 5 9号窯跡焼成部下～中位 断ち割り状況（縦断、西から）
 - 6 9号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（横断左、北西から）
 - 7 9号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（横断右、北西から）
 - 8 9号窯跡燃焼部中位 断ち割り状況（縦断、西から）
- 図版 32 1 9号窯跡燃焼部 舟底状ビット検出状況（北西から）
2 10号窯跡最終面全景（北西から）
3 10号窯跡一次操業面全景（北西から）
- 図版 33 1 10号窯跡窯体検出状況①（7号窯跡前庭部床面、右奥は7号窯跡灰原灰層、東から）
2 10号窯跡窯体検出状況②（同上、右奥は7号窯跡前庭部灰層、西から）
3 10号窯跡燃焼部～焼成部下位 縦断土層上層（谷下部グリッドB-1・2間、東から）
- 図版 34 1 10号窯跡燃焼部～焼成部下位 縦断土層下層（西から）
2 10号窯跡焼成部中位 縦断土層上層（北東から）
3 10号窯跡焼成部中位 縦断土層下層（窯体内、北から）
- 図版 35 1 10号窯跡焼成部中～上位 縦断土層下層（窯体内、北から）
2 10号窯跡前庭部 縦断土層（南西から）
3 10号窯跡焼成部 横断土層①（谷下部グリッドB-1・C-1間、北西から）
- 図版 36 1 10号窯跡焼成部 横断土層②（北西から）
2 10号窯跡前庭部 横断土層（南東から）
3 10号窯跡最終操業面 断ち割り状況（北西から）
- 図版 37 1 10号窯跡燃焼部 断ち割り状況（横断、北西から）
2 10号窯跡燃焼部下位 断ち割り状況（縦断、北から）
3 10号窯跡燃焼部上位 断ち割り状況（縦断、北から）
4 10号窯跡焼成部下位 断ち割り状況（横断左、西から）
5 10号窯跡焼成部下位 断ち割り状況（横断右、北から）
6 10号窯跡焼成部下位 断ち割り状況（縦断、北から）
7 10号窯跡焼成部中位 断ち割り状況①（縦断、北から）
8 10号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（横断、北西から）
9 10号窯跡焼成部中位 断ち割り状況②（縦断、北から）
10 10号窯跡焼成部上位 断ち割り状況（縦横断、北西から）
- 図版 38 1 10号窯跡一次操業面 断ち割り状況（北西から）
2 SX 1全景（北東から）
3 SX 1土層（東から）
- 図版 39 1 SX 2全景（北東から）
2 热残留磁化測定サンプリング状況①（9号窯跡、北から）
3 热残留磁化測定サンプリング状況②（9号窯跡、北から）
- 図版 40 1 区出土遺物①

- 図版 41 1 区出土遺物②
- 図版 42 7 号窯跡出土遺物①
- 図版 43 7 号窯跡出土遺物②
- 図版 44 7 号窯跡出土遺物③
- 図版 45 7 号窯跡出土遺物④
- 図版 46 7・8 号窯跡出土遺物
- 図版 47 8 号窯跡出土遺物
- 図版 48 9 号窯跡出土遺物
- 図版 49 10 号窯跡出土遺物
- 図版 50 10 号窯跡・S X 1・S X 2・谷下部灰原・包含層出土遺物
- 図版 51 谷下部包含層出土遺物①
- 図版 52 谷下部包含層出土遺物②
- 図版 53 谷下部包含層出土遺物③
- 図版 54 谷下部包含層出土遺物④・特殊遺物
- 図版 55 炭化物分析試料
- 図版 56 炭化材顕微鏡写真
- 図版 57 胎土分析試料①
- 図版 58 胎土分析試料②
- 図版 59 胎土分析試料③
- 図版 60 胎土分析試料④
- 図版 61 胎土分析試料⑤
- 図版 62 胎土分析試料⑥・現地説明会

挿図目次

第1図 飯塚市と井手ヶ浦窯跡群の位置	1
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	7
第3図 井手ヶ浦窯跡群周辺地形図 (1/2,500)	9
第4図 井手ヶ浦窯跡第2次調査1区遺構配置図 (1/300)	14
第5図 1-A区土層断面図① (1/60)	15
第6図 1-A区土層断面図② (1/60)	16
第7図 1区出土遺物実測図① (1/3)	17
第8図 1区出土遺物実測図② (1/3)	18
第9図 1区出土遺物実測図③ (1/3)	19
第10図 1区出土遺物実測図④ (1/3)	21
第11図 1区出土遺物実測図⑤ (1/3)	22
第12図 1区遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)	23

第13図	井手ヶ浦窯跡第2次調査2区遺構配置図(1/300)	24
第14図	2区谷下部グリッド土層実測図(1/80)	25
第15図	7号窯跡最終操業面実測図(1/80)	折り込み
第16図	7号窯跡最終操業面遺物出土状況実測図(1/30)	折り込み
第17図	7号窯跡土層実測図(1/80)	折り込み
第18図	7号窯跡石組構築時・一次操業面実測図(1/80)	折り込み
第19図	7号窯跡貼床内出土遺物実測図①(1/3)	29
第20図	7号窯跡貼床内出土遺物実測図②(1/3)	31
第21図	7号窯跡最終操業面出土遺物実測図①(1/3)	32
第22図	7号窯跡最終操業面出土遺物実測図②(1/3)	33
第23図	7号窯跡最終操業面出土遺物実測図③(1/3)	34
第24図	7号窯跡最終操業面④・前庭部出土遺物実測図①(1/3)	35
第25図	7号窯跡前庭部出土遺物実測図②(1/3)	37
第26図	7号窯跡前庭部出土遺物実測図③(1/3)	38
第27図	7号窯跡前庭部出土遺物実測図④(1/3)	39
第28図	7号窯跡前庭部上層・排煙部溝出土遺物実測図(1/3)	41
第29図	7号窯跡灰原灰層出土遺物実測図①(1/3)	43
第30図	7号窯跡灰原灰層出土遺物実測図②(1/3)	44
第31図	7号窯跡灰原灰層出土遺物実測図③(1/3・1/4)	45
第32図	7号窯跡最終操業面出土焼台実測図(1/3)	46
第33図	8号窯跡最終操業面実測図(1/80)	折り込み
第34図	8号窯跡土層実測図(1/80)	折り込み
第35図	8号窯跡一次操業面実測図(1/80)	折り込み
第36図	8号窯跡貼床・貼壁内・最終操業面出土遺物実測図(1/3・1/6)	50
第37図	8号窯跡窓体内出土遺物実測図①(1/3)	51
第38図	8号窯跡窓体内出土遺物実測図②(1/3・1/6)	52
第39図	8号窯跡埋土上層出土遺物実測図(1/3)	54
第40図	8号窯跡前庭部・排煙部出土遺物・最終操業面出土焼台実測図(1/3)	55
第41図	9号窯跡実測図(1/80)	折り込み
第42図	9号窯跡最終操業面遺物出土状況実測図(1/30)	折り込み
第43図	9号窯跡土層実測図(1/80)	折り込み
第44図	9号窯跡貼床内・最終操業面・窓体内埋土・排煙部溝出土遺物実測図(1/3)	59
第45図	9号窯跡灰原灰層出土遺物実測図①(1/3)	61
第46図	9号窯跡灰原灰層出土遺物実測図②(1/3)	62
第47図	9号窯跡灰原灰層出土遺物実測図③(1/3)	63
第48図	9号窯跡灰原褐色土出土遺物・最終操業面出土焼台実測図(1/3)	64
第49図	10号窯跡最終操業面実測図(1/80)	折り込み
第50図	10号窯跡土層実測図(1/80)	折り込み

第 51 図	10 号窯跡一次操業面実測図 (1/80)	折り込み
第 52 図	10 号窯跡貼床内・最終操業面出土遺物実測図 (1/3)	68
第 53 図	10 号窯跡窯体内出土遺物実測図 (1/3)	69
第 54 図	10 号窯跡燃焼～前庭部灰層出土遺物実測図① (1/3)	70
第 55 図	10 号窯跡燃焼～前庭部灰層出土遺物実測図② (1/3)	71
第 56 図	10 号窯跡最終操業面出土焼台実測図 (1/3)	72
第 57 図	S X 1 実測図 (1/60)	73
第 58 図	S X 1 出土遺物実測図 (1/3)	74
第 59 図	S X 2 実測図 (1/80)	75
第 60 図	S X 2 出土遺物実測図 (1/3・1/6)	76
第 61 図	7・9・10 号窯跡灰原灰層出土遺物実測図① (1/3)	77
第 62 図	7・9・10 号窯跡灰原灰層出土遺物実測図② (1/3)	79
第 63 図	7・9・10 号窯跡灰原灰層出土遺物実測図③ (1/3)	80
第 64 図	7・9・10 号窯跡灰原灰層出土遺物実測図④ (1/3・1/6)	81
第 65 図	2 区谷下部包含層出土遺物実測図① (1/3)	82
第 66 図	2 区谷下部包含層出土遺物実測図② (1/3)	83
第 67 図	2 区谷下部包含層出土遺物実測図③ (1/3)	85
第 68 図	2 区谷下部包含層出土遺物実測図④ (1/3)	86
第 69 図	2 区谷下部包含層出土遺物実測図⑤ (1/3)	87
第 70 図	2 区谷下部包含層出土遺物実測図⑥ (1/3)	88
第 71 図	2 区谷下部包含層出土遺物実測図⑦ (1/3)	89
第 72 図	2 区谷下部包含層出土遺物実測図⑧ (1/3・1/6)	90
第 73 図	2 区谷下部包含層⑨・遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)	92
第 74 図	その他の特殊遺物実測図① (2/3・1/2)	93
第 75 図	その他の特殊遺物実測図② (1/3)	94
第 76 図	その他の特殊遺物実測図③ (1/3)	95
第 77 図	出土土馬・陶馬実測図 (1/2)	97
第 78 図	代表的な段階交流消磁の結果	104
第 79 図	全試料の段階交流消磁による磁化強度の変化	105
第 80 図	各窯の全試料の安定な磁化方向とそれらの平均磁化方向	106
第 81 図	各窯の平均磁化方向	107
第 82 図	地磁気永年変化曲線と平均磁化方向	107
第 83 図	曆年較正年代グラフ [参考]	110
第 84 図	井手ヶ浦 7・8・9・10 号窯跡出土須恵器の両分布図	117
第 85 図	井手ヶ浦群と古門群の相互識別 (K・C a・R b・S r)	118
第 86 図	1-A 区出土須恵器・土師器の両分布図	119
第 87 図	土師器の両分布図	120
第 88 図	周辺窯跡の構造と時間的位置 (いずれも 1/300)	折り込み

表目次

第1表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土炭化物（木炭）AMS年代測定・樹種同定試料リスト	98
第2表 試料ごとの安定な磁化方向が抽出できた消磁範囲	103
第3表 窯ごとの平均磁化方向	103
第4表 AMS年代測定①	109
第5表 AMS年代測定②	110
第6表 樹種同定結果	113
第7表 胎土分析データ①	113
第8表 胎土分析データ②	114
第9表 井手ヶ浦窯跡群における窯体比較	123
第10表 蓋坏の型式変遷	127
第11～37表 井手ヶ浦窯跡群第2次調査出土遺物観察表①～⑦	135～161



遠賀川からの丘陵遠景①（南西から）



遠賀川からの丘陵遠景②（北西から）

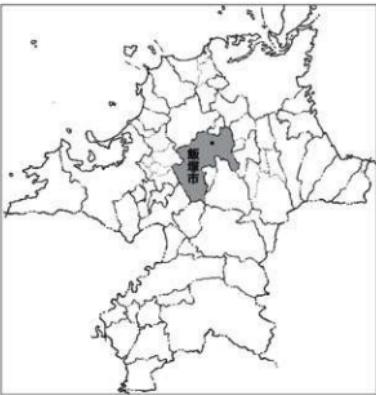
I はじめに

1 調査に至る経緯

県道飯塚福間線は、福岡県飯塚市から九州自動車道若宮 IC を経て同県福津市へ至る主要地方道である。沿道にはトヨタ自動車九州工場を始めとする大規模な工場が所在することから、近年、大型車の流入や飯塚市内での慢性的な渋滞、さらには事故等が発生する状況にある。このため、道路の起点を飯塚市幸袋の国道 200 号から、飯塚市鰐田の国道 200 号バイパスまで延長し、円滑な交通体系の確保を行うと共に周辺交差点の渋滞緩和や交通事故削減を目的に、都市計画道路鰐田中線の建設が計画された。街路緊急地方道路整備事業として平成 13 年度より開始された事業は、平成 28 年度の完成を目指して現在も進行中である。

本書が報告する井手ヶ浦窯跡第 2 次調査地について、平成 18 年 9 月に福岡県教育委員会が福岡県土木部に次年度予定事業の照会を行い、その回答を得て同年 12 月に福岡県教育庁総務部文化財保護課（以下、県教委）が飯塚市教育委員会（以下、市教委）に対し、事業地内における文化財の有無について照会を行った。事業地一帯の丘陵部には、かねてより古墳や須恵器窯跡が点在することが知られており、事業地内についても、市教委より周知の文化財包蔵地である「井手ヶ浦窯跡群」が存在するため、事前の確認調査が必要との回答を得て、県土木部企画課に同旨の通知を行った。そして県教委、市教委と県土木部飯塚土木事務所（現・飯塚県土整備事務所）都市施設整備課（以下、飯塚土木）との事前協議を行った結果、県教委・飯塚土木の立ち会いの下、市教委が主体となって確認調査を行うことになった。

確認調査は重機（バックホー）を用いて平成 19 年 6 月 18 日に II 工区（本調査時の 2 区）、6 月 26 日に I 工区（本調査時の 1 区）で実施し、合計 6 本のトレーナーを設けた。その結果、各トレーナーにおいて須恵器窯跡に関連すると考えられる遺構や、遺物（須恵器）が確認されたため、工事着手前に発掘調査を実施することとなり、後日行った協議の結果、県教委において発掘調査を実施することが決定した。なお遺跡名については市教委との協議の上「井手ヶ浦窯跡」、調査次数を第 2 次調査^①とした。



第 1 図 飯塚市と井手ヶ浦窯跡群の位置



確認調査の様子

2 調査の経過

以下、具体的な調査の経過を述べる。平成 19 年 7 月 17 日より 25 日まで調査対象地における現況の地形測量を行い、その間 7 月 23 日には重機による表土剥ぎを開始した。確認調査では 1 区・ 2 区ともに現地表より 30 ~ 40 cm で遺構面に達していることや、2 区の一部では表土直下で灰原が検出されたことから、重機による掘削深度は浅い範囲で止めることとなった。このため 7 月 26 日には表土剥ぎを終了した。しかし、表土剥ぎ時に窯跡遺構をある程度明確に認識できるまで上層の堆積土を下げなかつたことが、特に 2 区における遺構の発見の遅れと、手作業による掘削量の増大につながり、さらには窯跡 1 基の存在を見逃して、工事によって破壊させる結果となってしまった。なお、この 1 基については、焼成部以上の大半を消失させてしまったが、燃焼部以下は翌平成 20 年度に、飯塚市教育委員会が調査を行っている。

調査の経過に戻ると、8 月 6 日にプレハブなどの機材を搬入し、8 月 9 日には作業員を投入しての人力による掘削を開始した。工事の工程上、1 区の調査を先に終えて用地を引き渡す必要があつたため、まずは 1 区より調査を開始した。翌 10 日にはトレーナーより土馬 2 体が出土している。後述のように 1 区では遺構が検出されなかつたが、1-A 区では包含層の堆積があり、堆積状況を確認しながら掘削を進めた。この間、日中の暑さが非常に厳しく、降雨も多かつたこと、さらに作業員の方々には慣れない斜面での作業だったことなどから、調査はスムーズには進まなかつた。そして 9 月 27 日に 1-A・B 両区で全体写真を撮影し、2 区の調査に取りかかつた。

2 区では 9 月 28 日に遺構検出を開始し、斜面下方に灰原の広がりを確認した。しかし窯体や排煙口などは確認できなかつたため、灰原を掘削していくことで、大まかな窯跡の軸線を把握して、窯体の確認を目指すこととした。また灰原を含む斜面下方全体の堆積状況を把握する目的から、10 月 3 日より斜面下方にグリッド（谷下部グリッド）を組んで、掘削を開始した。10 月 15 日には、後に 8 号窯跡のものと分かる排煙口を確認したが、斜面に広がる灰原との位置関係に違和感が残つた。この頃より日中の暑さも和らぎ、調査もスムーズに進み始めた。しかし肝心の窯体は確認できなかつたため、10 月 16 日に斜面や灰原の堆積状況、既確認の排煙口の位置から、窯跡の存在が想定される箇所にトレーナーを設定し、谷下部グリッドと併せて掘削を行つた。

トレーナーの掘削でも当初窯体は確認されなかつたが、10 月 22 日に丘陵頂部において、表土剥ぎ時に遺構なしと判断して廃土を積んでいたすぐ脇で、排煙口と思しき窯壁を確認した。この地点か



作業にあたられた皆さん

ら等高線に直交するように斜面を下つた先には、2 区調査開始当初より斜面下方で確認していた灰原が広がつており、ここに灰原の発生源である窯跡の存在を確認し、7 号窯跡とした（市教委 1985『井手ヶ浦窯跡』で既発見、調査の窯跡を 1 ~ 6 号までナンバリングしているため、それをに統けて新発見の窯跡に番号を付した。）。そして翌 23 日より割付、焚口側から掘削を開始した。この時点で、先に確認していた排煙口と斜面下方に広がる灰原との関係性は薄れ、他にこの排煙口を伴う窯跡

の存在を認識した（8号窯跡）。7号窯跡や周辺で得られた遺物より、古墳時代の全長10m前後になる窯跡が想定されることから、この窯跡の灰原は調査区外に広がることが考えられたため、灰原の掘削から焚口を検出することを諦め、排煙口から等高線の直交方向に軸を設定して、焚口が想定される斜面下方の調査区境付近より掘削を開始した。本来であれば、表土剥ぎ・遺構検出により排煙口や灰原、窯体天井部の崩落痕跡などを平面的に把握して、割付・掘削を行うべきであるが、前記のように（結果的に）表土剥ぎ・検出が徹底できていなかったことや、調査の時点では、天井部が完存し、遺構面には排煙口と灰原しか現れてこない可能性もあったことから、このような手法を探すことになった。そして10月25日には7号窯跡の焚口と8号窯跡の前庭部を検出し、以後窯体内の掘削を進めた。

また10月23日には、谷下部グリッドの北東部分（B-3）で新たに灰原を確認し、この斜面上方に窯跡の存在が決定的となった（9号窯跡）。そして29日より9号窯跡灰原の掘削を開始している。さらに11月22日には、谷下部グリッドで7号窯跡灰原灰層下に堆積する赤褐色土の更に下層で新たな窯跡を確認した（10号窯跡）。このように2区で大型の窯跡4基が発見されたことで、当初想定していた以上に作業量の増大が考えられたため、同日、飯塚土木に対し、調査期間の延長を申し込んだ。

作業は11月28日に、7号窯跡の排煙口が確認された丘陵頂部付近の廃土を重機で移動し、翌日改めて丘陵頂部付近を中心、7号窯跡・9号窯跡の排煙口・窯背部の遺構検出を行った。7号窯跡では排煙口と排煙部溝、9号窯跡でも排煙部付近に遺構の存在を確認している。この間、7号窯跡・8号窯跡の窯体内と谷下部グリッドの掘削は続いている。そして12月5日には9号窯跡の窯体と排煙口を確認し、翌日には割付を行い、窯体内の掘削を開始した。12月19日には、7号窯跡において排煙部溝と前庭部を残し、窯体内の最終操業面までの掘削をほぼ終えた。そして10号窯跡の掘削に取りかかっている。

年内の調査は12月27日に終え、1月8日に作業を再開した。この日7号窯跡最終面の検出を終え、燃焼部付近に集中して出土した遺物出土状況の写真撮影を行った。8号窯跡についても1月15日に最終面までの掘削を終えたため、翌日の7号窯跡出土遺物の取り上げ終了を待ち、1月17日に7・8号窯跡最終面の全景写真を撮影した。1月24日には7号窯跡最終面の実測を終え、翌25日より窯体の断ち割りを開始した。そして1月28日には9号窯跡の焼成部以上と10号窯跡の最終面まで掘削を完了した。1月29日からは8号窯跡の断ち割りを開始し、翌30日に9号窯跡焼成部の遺物出土状況と7・8号窯跡の断ち割り状況、31日に10号窯跡最終面全景の写真撮影を行った。また同日より7・8号窯跡の貼床・貼壁の掘削と一次焼成面の検出を開始した。2月5日には10号窯跡最終面の遺物を取り上げ、断ち割りを開始し、翌6日には断ち割り状況の写真を撮影した。同日には8号窯跡を一次面まで完掘し、9号窯跡最終面の遺物を取り上げている。2月7日には7号窯



空中写真撮影風景

跡一次面を完掘し、10号窓跡の貼床・貼壁の掘削と一次面の検出を開始した。翌8日には10号窓跡一次面を完掘。2月14日には9号窓跡最終面を完掘し、全景写真を撮影した。そして2月20日には7・8・10号窓跡で全景写真を撮影し、翌21日にはラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。この日の午後には調査成果について、報道機関に対する記者発表を実施し、2月23日には現地説明会を開催した。当日の来場者は120名近くに及び、盛況であった。

2月25日からは7・8・10号窓跡で一次面、9号窓跡で最終面の断ち割りを開始した。27日には各窓跡で断ち割りを終え、状況を写真撮影した。翌28日には9号窓跡一次面の検出と、断ち割りも終え、2月29日には各窓跡窓体内の掘削作業を完全に終了した。3月3日には岡山理科大学鳥居雅之教授他2氏が来跡し、各窓跡で熱残存地磁気測定のサンプル採取を行った。翌4日と5日には、重機により調査対象地内で未調査の灰原部分に置いていた廃土を移動し、3月6日から11日まで「拡張区」として未調査部の灰原の掘削を行った。そして3月12日には重機による埋め戻しを行い、3月14日に機材の撤収を含め、調査を完全に終了した。

なお調査期間中には、県教委文化財保護課職員のほか以下のように多くの文化財関係者による来訪を得、調査を進めるにあたり有益な情報、御助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

9月11日飯塚市教委櫛山範一氏・八木健一郎氏、11月12日北九州市芸術文化振興財団梅崎恵司氏・同市立自然史・歴史博物館宮元香織氏、1月18日元静岡大学教授藤田等氏、1月23日嘉麻市教委松浦宇哲氏、1月24日飯塚市教委櫛山氏・八木氏、1月25日大野城市教委石木秀啓氏、2月15日九州歴史資料館杉原敏之氏・大庭孝夫氏、2月22日飯塚市教委嶋田光一氏、2月25日九州歴史資料館岡寺良氏、2月29日大野城市教委舟山良一氏。

3 調査・整理関係者

発掘調査及び整理、報告書作成の関係者は以下のとおりである。

福岡県教育庁総務部文化財保護課

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
総括	(発掘調査)	(整 理)	(整 理)	(報 告)
教育長	森山良一	森山良一	森山良一	杉光 誠
教育次長	橋崎洋二郎	橋崎洋二郎	亀岡 靖	荒巻俊彦
総務部長	大島和寛	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄
文化財保護課長	磯村幸男（本副理事）	磯村幸男（本副理事）	平川昌弘	平川昌弘
副課長	佐々木隆彦	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋
参考	新原正典	新原正典		
課長補佐	中薗 宏（本参考事）	前原俊史	前原俊史	日高公徳
課長技術補佐	池邊元明（本参考事）	小池史哲（本参考事）	小池史哲（本参考事）	小池史哲（本参考事）
	小池史哲（本参考事）	伊崎俊秋（本参考事）	伊崎俊秋（本参考事）	
庶務				
管理係長	井手優二	富永育夫	富永育夫	富永育夫
同事務主査			藤木 豊	藤木 豊
同主任主事	酒井大輔	藤木 豊	近藤一崇	近藤一崇

	柏村正央	近藤一崇	野田 雅	内山礼衣			
	小宮辰之	小宮辰之					
同主事	野田 雅	野田 雅	仲野洋輔				
調査・報告							
調査第一係長	小田和利	小田和利	吉村靖徳	吉村靖徳			
同技術主査	吉田東明（地域担当）						
同主任技師		岸本 圭（地域担当）	小澤佳恵（地域担当）	宮地聰一郎（地域担当）			
調査第二係長	飛野博文（本事務補佐）	飛野博文（本事務補佐）	飛野博文（本事務補佐）	飛野博文（本事務補佐）			
同主任技師	一瀬 智（調査担当）		坂本真一	坂本真一			
				城門義廣（報告書作成）			
同技師	城門義廣（調査担当）	城門義廣	城門義廣				
九州歴史資料館主任技師		一瀬 智	一瀬 智	一瀬 智（報告書作成）			
調査補助員	大里弥生						
整理担当							
事務補佐	濱田信也	濱田信也	新原正典	新原正典			
発掘作業員							
池田トシエ	池田保男	内村明子	江上美枝子	江藤広美	川崎易恵	河野美里	鶴野富雄
近藤幸雄	下村 忠	瀧下良枝	田中辰男	水山康子	濱田正道	藤中邦利	松岡貴美子
松岡洋治	山崎ミノコ	山崎佳子	山出忠夫	横溝早苗			

発掘調査・整理作業にあたっては、福岡県建築都市部公園街路課および福岡県飯塚土木事務所（現・飯塚県土整備事務所）都市施設整備課の関係者、地元である飯塚市教育委員会の各氏、近藤市町村の文化財担当者、あるいは鮎田・川島両区長を始めとする地域住民の方々など多くの方の御支援を得た。また現地説明会に際しては、九州電力株式会社北九州支店、みぞえ不動産株式会社に、所有地・管理地の使用について御高配を賜った。岡山理科大学の鳥居雅之教授には、学生諸兄とともに調査現場にお出でいただき、熱残留地磁気測定資料のサンプリングを実施していただいた。御理解・御協力いただいた関係各位に厚く感謝申し上げる。

また現場作業には、地元および周辺各地から上記の方々に作業員として参加いただいた。厳しい寒暑、急傾斜の足下など悪条件の中、熱心に作業にあたられた皆様に心から感謝申し上げる。

註

*1 井手ヶ浦窯跡群は昭和47年（1972）に初めて発見、灰原と燃焼部の一部が調査されて以降、市教委による分布調査で4地点9基の窯跡の存在が把握された。その後、昭和59年（1984）に土取り工事に伴い5基の窯跡について本格的な調査が市教委によって実施されている。これを第1次調査とし、今回の調査を第2次とした。

II 位置と環境

1 遺跡の地理的環境

井手ヶ浦窯跡群（いでがうらかまあとぐん）は、福岡県のはば中央に位置する筑豊盆地を南北に貫流する遠賀川の中流右岸に立地する。概ね福岡県飯塚市鰐田地区と川島地区にまたがる丘陵一帯に展開し、今回の調査地点は北緯 $33^{\circ} 39'$ 、東経 $130^{\circ} 41'$ 付近の、飯塚市大字鰐田 2219-1 に所在する。

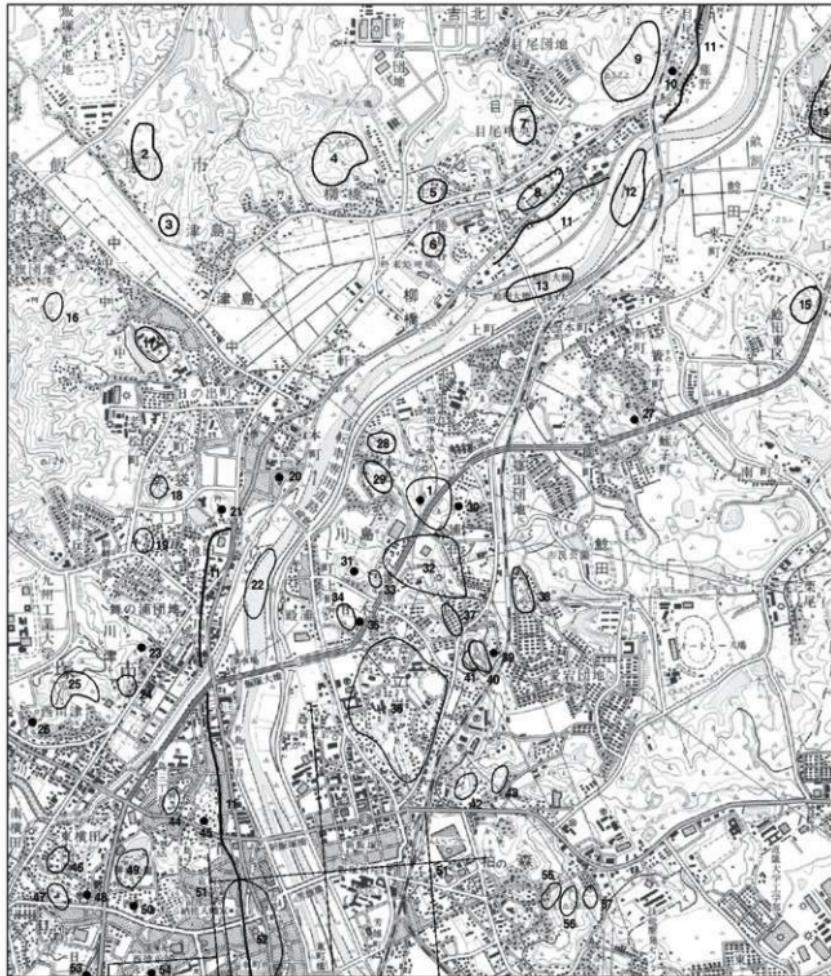
筑豊盆地は、西は三郡山地（三郡山 936 m）で福岡平野と、東は福智山地（福智山 901 m）で豊前平野と、南は英彦山・古処山地（英彦山 1199.6 m、古処山 859.5 m）で筑紫平野と画され、北方は、筑豊盆地から直方平野へ抜ける遠賀川によって開けるという地形的特徴を持つ。盆地の内部は、さらに遠賀川流域の嘉穂盆地と、その支流である彦山川流域の田川盆地に大きく分かれ、その境である南北に走る山地は古来より筑前国嘉麻郡・豊前国田川郡の国境となっている。北部九州に位置しながら、このように三方を高い山地に囲まれた盆地であるため内陸性の気候となり、年間降水量は他地域に比して少ないが年間の気温差が大きく、冬場には霜や積雪も多い地域である。

遠賀川は筑豊盆地を主たる上・中流域とし、ほぼ北流して響灘に注ぐ。幹川流路延長 61 km、流域面積 1026 km²で、筑後川に次ぐ県内第 2 位の一級河川である。英彦山・古処山地の嘉穂峰付近を発した遠賀川（嘉麻川）は、飯塚市の北部で西方より穂波川を合わせて北流する。合流部付近の沖積地上には、現在飯塚市の中心市街地が展開している。その西方には三郡山地から派生する龍王山（616 m）や八木山高地が連なり、北方には同じく笠置山（425 m）を主峰とする笠置山地が鞍手郡との境をなす。鞍手に抜けた遠賀川は、彦山川や大鳴川を合流しながら直方平野を北流し、遠賀郡一帯の低地を経て響灘に到る。直方平野は沖積世海進（繩文海進）の海城となり、極めて低平な地形となるが、河口部には大規模な三里松原の砂丘が広がっている。

一方、嘉穂盆地や田川盆地、大鳴川流域の若宮盆地などは、第三紀層や花崗岩が、遠賀川および各支流の開析・堆積作用によって低平化した沖積段丘・低地からなる平野部と、そのような河川浸食から免れた丘陵の複雑な分布によって構成される。第三紀層は、新生代の古第三紀に県内各地で生じた構造運動により形成された堆積岩層で、多くが丘陵を構成し、さらに石炭層を含む特徴がある。県内の主な炭田は、この古第三系の地層中に挟在しており、遠賀川流域の第三紀層を主体とする丘陵群も石炭を産出し、近代には一帯に国内屈指の筑豊炭田を誕生させた。このような筑豊盆地に分布する第三期層や花崗岩からなる丘陵には、弥生時代の集落、古墳や横穴など古くから多くの遺跡が営まれている。

このうち飯塚市立岩から同市川島・鰐田にかけての、遠賀川と建花寺川の合流部東側一帯に広がる立岩丘陵は、花崗岩とそのバイラン土からなる標高 30 ~ 60 m の低丘陵である。地盤が安定していて鉱害も少ないと早くから公共施設の建設が行われ、戦前に立岩遺跡が発見されているほか、近年も宅地造成・道路建設・土取りによって多くの遺跡が発見、調査されている。井手ヶ浦窯跡群もこの立岩丘陵の北部に位置し、昭和 47 年（1972）の国道 200 号バイパス建設工事に伴って発見されたものである。

井手ヶ浦窯跡群が所在する飯塚市は、嘉穂盆地の北部中央に位置する。その中心市街地は遠賀川と穂波川の合流部にあたり、古くから遠賀川を利用した水運と、北部九州を縦横に結ぶ陸上交通が



1. 井手ヶ浦窯跡群
 2. 新子ジグ遺跡
 3. 檻ノ鼻遺跡
 4. 大塚谷古墳群
 5. 山ノ鼻古墳
 6. 岩鼻遺跡
 7. 下ノ谷遺跡・窯跡
 8. 天倉町遺跡
 9. 山ノ谷古墳群
 10. 貴船神社古墳
 11. 長崎街道
 12. 目尾遠賀川河床遺跡
 13. 鮎田遠賀川河床遺跡
 14. 石丸・石丸園地遺跡
 15. 北ノ浦遺跡・横穴群
 16. 野間古墳群
 17. 幸袋中学校遺跡・
幸袋中学校裏古墳群
 18. 砂原古墳群
 19. 舞ノ浦古墳群
 20. 一字一石塔
 21. 許斐城跡
 22. 犀ヶ浦遠賀川河床遺跡
 23. 星敷1号墳
 24. 川津遺跡
 25. 末高・川津古墳群
 26. 水祖神社裏古墳
 27. 鮎田城跡
 28. 鮎田古墳群(1・2号)
 29. 川島(1~3・10~12号)
 30. 福田横穴
 31. 寺山古墳
 32. 川島古墳群(4~9号)
 33. 山村遺跡
 34. 宮ノ裏古墳群
 35. 宮ノ脇古墳
 36. 立岩遺跡群
 37. 勝負坂横穴群
 38. 小池横穴群
 39. 市ノ間窯跡
 40. 高尾山古墳群
 41. 施忠公園遺跡
 42. 反元遺跡
 43. 立岩サコ古墳群
 44. 亀甲遺跡・
鯛田(3号)古墳群
 45. 庚申塔遺跡
 46. 庄ノ町横穴群
 47. 東横田横穴群
 48. 権山古墳
 49. 勝盛公園横穴群
 50. 頭割古墳
 51. 飯塚条里遺構
 52. 飯塚宿跡
 53. 日鉄構内横穴
 54. 金比羅山古墳
 55. 柏の森遺跡
 56. 柏の森古墳群
 57. 上ノ谷遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

発達し、近世には福岡藩の穀倉であった嘉麻・穂波両郡の年貢米の集積地、および小倉と長崎を結ぶ長崎街道の宿場町“筑前六宿”的一つとして賑わいを見せている。現在でも長崎街道を継承した国道200号が市域を縦貫し、福岡から市域を東西に横断して田川・行橋に通じる国道210号と市中心部で交差する。また国道211号が嘉麻市・大分県日田市に向かって南に延びる。鉄道も国道200号と並行してJR筑豊本線が南北に走り、東西にはJR篠栗線・後藤寺線が延びる交通の要衝である。

一方で、筑豊という地域概念を生み、その名称および飯塚の名を各地に知らしめたのは筑豊炭田である。『筑前国続風土記』の「燃石 遠賀郡、鞍手、嘉麻、穂波、宗像郡の中、所々山野にこれあり。村民是をほり取て、薪に代用ゆ。…烟多く臭悪しことも、よくもえて火久しくあり。」のほか元禄期の史料には、この地域で石炭が産出・利用されていたことが窺える¹。18世紀以降には、薪炭の不足に伴う代替燃料として石炭の採掘が産業化したようで、藩営による採炭・販売も行われ、福岡・博多の都市部や瀬戸内地域の製塩業等に供給されている²。明治になって採掘権が民間にも開放されるが、本格的な炭鉱の開発は八幡製鉄所の開設³など、日清戦争前後に始まる近代重工業化を待つ。これをきっかけに中央資本の進出と開発、それに刺激を受けた地場資本による開発も進み、日本の近代化を支えるエネルギーとして生産量が増大した。

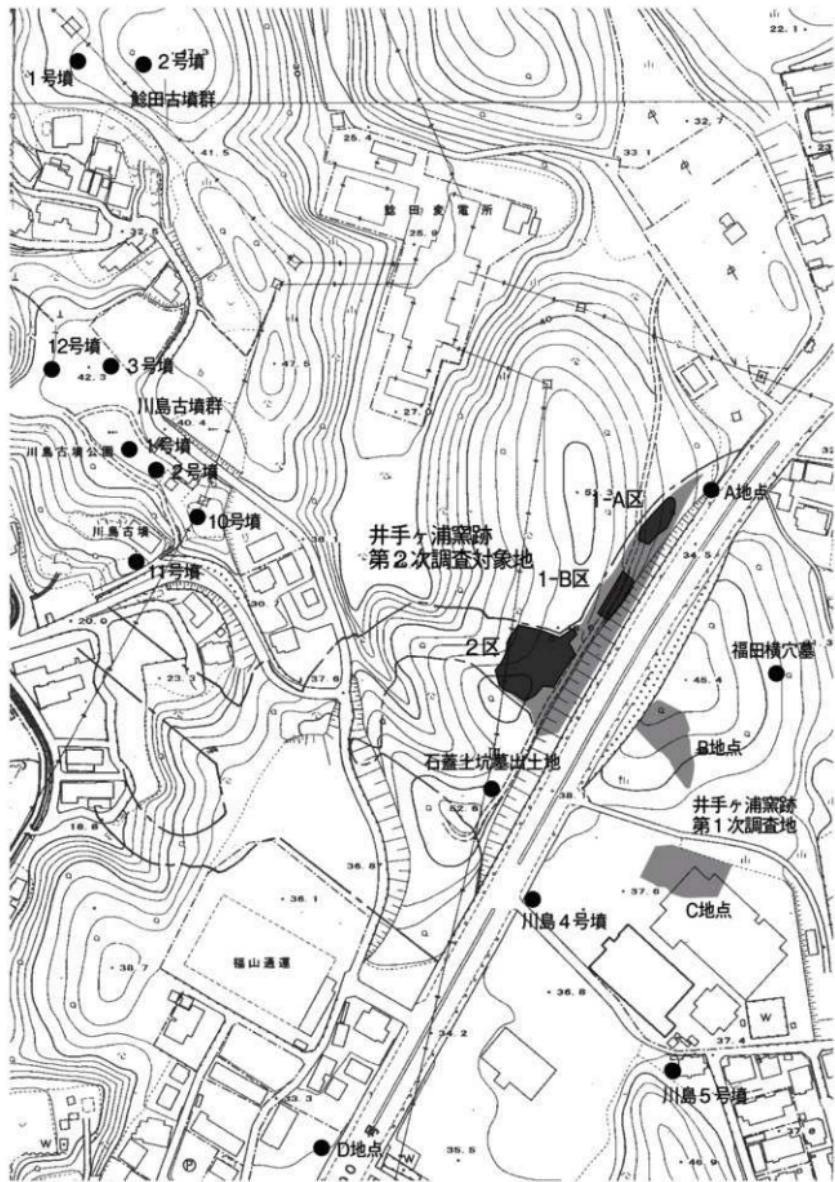
石炭鉱業の発展と共に、地域の近代化や鉄道網の開通などインフラ整備も進んだ。飯塚市⁴でも多くの炭鉱労働者を受け入れて人口が増加し、また地場資本主の邸宅や劇場など娯楽施設が設けられたことで諸産業も活性化、筑豊唯一の中心都市・「炭都飯塚」として発展する。戦後復興期には最盛期を迎えるが、昭和30年代のエネルギー革命以降、石炭産業の急速な斜陽化とともに人口の流出が相次いだ。そのような中で基幹産業の再編を基軸に方針転換が図られ、近年では企業・大学等の誘致を行って「情報産業都市」・「学園都市」としての街づくりが進んでいる。また、旧宿場町や街道、石炭産業の歴史的遺産・文化財を生かした「観光都市」としても注目されつつある。

平成18年3月26日、いわゆる“平成の大合併”により、それまでの飯塚市、額田町、庄内町、筑町、穂波町の1市4町が合併し、新「飯塚市」が発足した。平成21年12月時点人口13万3500人、面積214.13km²におよぶ。

2 周辺地域の歴史的環境

井手ヶ浦窪跡群周辺の飯塚市北部一帯では、旧石器時代の遺跡は明らかでないが、縄文時代になると遠賀川河床（川島・鈴田・目尾）において縄文前期～晩期にわたる遺物の出土が知られる。これらはいずれも遠賀川の川砂採取の際に出土したもので、深い場所より出土することや、完形品を始め残存状態が良好な土器が採取されることから、河流によって二次的に堆積した遺物ではなく、河床下に遺跡が存在する可能性が指摘されている。

弥生時代には遺跡数が増加し、特に前期後半以降になると盆地内各地に分布する丘陵上への進出が目立つ。これらは貯蔵穴と住居から構成される集落を主とし、前期以来継続して展開してきた小規模な遺跡が、中期になると丘陵上に群集し大規模な遺跡群を形成するようになる。中でも、立岩丘陵上の立岩遺跡群は、前漢鏡を持つ焼棺墓群や石庖丁製作場跡を伴う、嘉穂盆地でも代表的な弥生遺跡群として知られる。立岩堀田遺跡の焼棺墓群からは前漢鏡10面や銅矛、その他多くの鉄製武器が出土した。特定有力者層の集団墓地で、中でも6面の前漢鏡が集中する10号焼棺墓はその首長墓と考えられる。立岩焼ノ正遺跡は弥生前期末～中期中葉の集落で、鉄製鑿や鉄片、銅戈鋌型が出



土しており青銅器の製作が行われている。立岩下ノ方遺跡では袋状貯藏穴 39 基が検出され、遺物は銅劍鋸型のほか、製作途中の石庖丁破片が多数出土しており、周辺での出土も含め、この一帯で石庖丁の集中的な生産が行われたことが窺われる。立岩で生産された多くの石庖丁は、福岡県内を中心とする北部九州一帯にもたらされており、交通の要衝という立地を生かした石庖丁の大量生産と交易活動が営まれたことで、立岩遺跡群が北部九州でも有数の集団へと発展したことが知られる。

しかし弥生後期になると市域北部の遺跡分布は再び稀薄となり、その状況は古墳時代前期まで続く。中期には遠賀川左岸で川津古墳群が造営される。3基の古墳が調査されており、5世紀前半から6世紀前半にかけて連続的に造営されたことが明らかになった。このうち1号墳では箱式石棺の主体部が良好な状態で検出され、市史跡に指定されている。古墳時代中期～後期にかけては、嘉穂盆地一円で複数の有力な古墳群が形成されるようになる。特に6世紀中頃～7世紀にかけては、丘陵上や斜面に後期群集墳と横穴群が多数造営されていく。飯塚市目尾の山ノ谷古墳群は、未調査だが30m級の前方後円墳をはじめ、14基の円墳群の存在が知られている。同じく目尾では馬・人物の埴輪が出土した下の谷埴輪窯跡や、阿蘇系凝灰岩を用いた家形石棺の出土が、6世紀前半に属するものとして報告されている⁴⁵。

6世紀前半の立岩丘陵北西部には、井手ヶ浦窯跡群から南西700mの位置に宮ノ脇古墳が現れる。全長35mの前方後円墳で、複数の横穴式石室を持ち、内部から大型の器台や鏡板付轡・杏葉などの馬具が出土している。続く時期には、宮ノ浦古墳の北200mに全長68mの寺山古墳が出現し、これを首長墳として立岩丘陵一帯に川島・鈴田・宮ノ裏等の円墳群が造営されていく。寺山古墳は嘉穂盆地でも最大級の前方後円墳で、内部主体は不明だが、後円部では周溝や人物・馬・盾などの形象埴輪、円筒・朝顔型埴輪、葺石が確認されている。また川島古墳（11号墳）は径15mの円墳で、複室の横穴式石室内に人物や円・三角文が描かれた装飾古墳である。時期は6世紀末に属し県指定史跡である。そして、これら寺山古墳や川島・鈴田古墳群と同一丘陵上に隣接して、しかも同時期に営まれたのが井手ヶ浦須恵器窯跡群である。これまでの調査成果では6世紀後半には確実に操業が開始され、8世紀までの遺物が採取されている。その製品が周辺古墳群に供給されたことは想像に難くないが、須恵器生産者集団と古墳群を営んだ集団との社会的関係も興味深い課題である。さらに後続する時期には、窯跡群付近に福田横穴や勝負坂横穴群、谷を挟んだ東の丘陵に小池横穴群が形成される。嘉穂盆地をはじめ筑豊地域では、第三期層からなる丘陵に多くの横穴が営まれており、立岩丘陵の周囲では東に北ノ浦横穴群、西には横田や片島にも横穴群が築かれている。これらの横穴群にも、井手ヶ浦の製品は供給されていたであろう。なお、寺山古墳と同じ6世紀中頃には、窯跡群から南へ約9kmの桂川町寿命に装飾古墳の特別史跡王塚古墳が造営されている。

この時期に並行する出来事としては、「日本書紀」の繼体天皇21年（527）⁴⁶に筑紫君磐井の乱が平定されたことで、北部九州に対してヤマト政権による地域支配が及び始める。繼体天皇22年（528）には筑紫君葛子により糟屋屯倉が献上され、安閑天皇2年（535）には「鎌」「穢波」をはじめとする北部九州から瀬戸内海そして畿内に至るルート沿いの諸国に屯倉が設置されている。井手ヶ浦における須恵器生産の開始や、寺山古墳・王塚古墳の出現と急激な群集墳・横穴群の展開は、屯倉の設置に始まる地域社会の劇的な変動を反映したものとも考えられよう。

このほか7・8世紀には周辺に明確な遺跡は確認できない。窯跡の北東約4kmの旧額田町には鹿毛馬神龍石が所在し、7世紀の須恵器大甕片が出土している。また南西約10kmの旧筑穂町には大分

廢寺があり、古くから新羅系古瓦を出すことが知られている。現在は塔跡の礎石 16 個が残るのみだが、調査では大量の瓦が出土するとともに、法起寺式の伽藍配置と 7 世紀末から 8 世紀の造営が推定されている。ともに国指定史跡である。律令期になると大宰府から大分廢寺付近を通過して、田川・周防灘沿岸へ続く官道が通じており市域を横断するが、具体的なルートは不明である。また現在の市街中心部一帯に条里制が敷かれたようで、「丁ノ坪」「五ノ上」などの小字が残るが、施行がどこまで遡るかは不明である。

平安期以降の嘉徳盆地では、平野部を中心に多数の莊園・寺領が形成されていく。特に水利・水運の利便性に富む遠賀川とその支流域に宇佐宮領・宇佐弥勒寺領が集中している。立岩丘陵一帯でも、宇佐宮領の立岩別符が確認できる。南北朝期には嘉徳盆地で両朝の勢力が錯綜し、室町期にも九州探題渋川氏と守護少弐氏との抗争が続く。そのような中で立岩別符の領有権をめぐって宇佐氏・到津氏や在地領主鯫田氏・内山田氏の活動、あるいは求菩提山領の存在が確認できる。戦国期には大内氏と少弐・宗氏、大内氏滅亡後は大友氏・毛利氏、そして秋月氏が当地の領有をめぐって争った。このような中世の攻防に伴う周辺遺跡として、鯫田城跡、許斐城跡、白旗山城跡、川津遺跡の陣跡がある。

天正 15 年（1587）の豊臣秀吉による九州平定後、筑前一国は小早川氏領、慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦い後は黒田氏領となる。同時に黒田如水・長政が豊前中津より筑前入部の際は、飯塚村太養院に宿泊後、八木山越を通って博多に向かっている。その後、慶長末年から寛永年間にかけて長崎街道と飯塚宿が整備され、飯塚は水陸交通の要衝・在郷町として栄える。長崎街道は、長崎と上方さらには江戸を行き来する多くの著名人が通過し、飯塚宿にも宿泊している。『続風土記』には「上方より西南諸州往来の駅なり。国中の郷里にて民家多き事、姪浜甘木につづけり。蘆屋川（遠賀川）の上なるが故、川船多く、運漕の便よくして、海味もともしからず。富人も又頗在て、にきはへる所也」と伝えている。

註

*1 貝原益軒「筑前国続風土記」巻 29 「土産考」上、1706 『福岡県史資料』続第 4 輯地誌編 1、福岡県、1943。このほかオランダ東印度会社の医師ケンペルによる元禄 4・5 年（1691・92）の『江戸參府旅行日記』（齊藤信訳、東洋文庫 303 『江戸參府旅行日記』、平凡社、1977）に、木屋瀬～黒崎間で「炭坑を見た」、「木屋瀬の人々は石炭を燃やすためか、大変黒く汚れて見える」旨の記述がある。

*2 柴多一雄「石炭仕組」（『福岡県史』通史編 福岡藩（2）、西日本文化協会、2002）。

*3 明治 29 年（1896）に製鉄所官制が公布、明治 34 年（1901）に操業を開始する。

*4 明治 22 年（1889）に飯塚町が発足後、同 42 年に笠松村と合併、昭和 7 年（1932）に市制を施行する。同 38 年には幸袋町・二瀬町・鍋西村を編入する。

*5 佐田茂・高倉洋彰「九州の家形石棺」（『筑後古城山古墳』大牟田市教育委員会、1972）

*6 「日本書紀」の中でも繼体～欽明紀の紀年については問題が指摘されており、磐井の乱についても亀井輝一郎氏が「繼体天皇 21 年」＝丁未年（527）が事実であるのか疑問を呈している。亀井輝一郎「6 磐井の乱の前後」（新版「古代の日本」③『九州・沖縄』、角川書店、1991）149 頁を参照。同様に、以下「繼体」「安閑」の紀年と西暦の関係にも問題がある。

その他の参考文献

- ・児島隆人・藤田等『嘉徳地方史』先史編、嘉徳地方史編纂委員会、1973
- ・『福岡県の地名』平凡社、2004
- ・飯塚市文化財調査報告書第 2 集『小池横穴群』飯塚市教育委員会、1981

- ・飯塚市文化財調査報告書第8集『辻古墳』飯塚市教育委員会、1989
- ・飯塚市文化財調査報告書第9集『井手ヶ浦窓跡』飯塚市教育委員会、1985
- ・飯塚市文化財調査報告書第8集『辻古墳』飯塚市教育委員会、1989
- ・飯塚市文化財調査報告書第13集『川津遺跡群』飯塚市教育委員会、1990
- ・飯塚市文化財調査報告書第14集『川島古墳』飯塚市教育委員会、1991
- ・飯塚市文化財調査報告書第24集『飯塚市内遺跡詳細分布調査報告書』飯塚市教育委員会、1997
- ・飯塚市文化財調査報告書第34集『狩場・一ツ家・古賀ノ下・東光・椎木浦遺跡』飯塚市教育委員会 2008
- ・福岡県文化財調査報告書第184集『長崎街道』歴史の道調査報告書第1集、福岡県教育委員会、2003
- ・福岡県文化財調査報告書第216集『彼岸原遺跡』福岡県教育委員会、2008



川島古墳公園①



川島古墳公園②

III 調査の記録

1 調査の概要

井手ヶ浦窯跡第2次調査地は、南北に伸びる標高50m前後の低丘陵地に位置し、対象地は尾根をまたがって東西の斜面に及ぶ。なお尾根頂部は鉄塔管理用の道路で削平を受け、対象地東側は、国道200号バイパスの道路開削により、丘陵全体が切り通されて失われた状態であり、残る東西の斜面において発掘調査を実施した。このうち尾根より東の北東に向かって下る斜面を1区、尾根より西の北西に向かって開く小谷の奥部を2区とした。調査面積は全体で1340m²である。詳細は以下、各調査区毎に記す。

2 1区の調査

(1) 調査の概要と基本土層

調査の概要 (第4図、図版1)

1区は、確認調査の結果に基づく遺構の残存状況や、作業の安全性を考慮した上で、中央部分については調査を行わず、残る部分を北側の1-A区、南側の1-B区と2つの調査区に分けて調査を行った。北東に下る斜面に位置し、標高は41～47m、調査面積は約310m²である。確認調査では1区においても排煙部や前庭部など須恵器窯跡とみられる遺構が残存するとされていたが、結果的には、包含層が残存するのみで、遺構は検出されなかった。

但し、1区の堆積土中には須恵器を主体に比較的多くの遺物が認められ、出土遺物はパンケース8箱になる。特に複数体の陶馬・土馬や、2区検出の窯跡群と時期の異なる須恵器の出土は、窯跡群全体の時期や展開、位置づけを考える上でも特筆すべきものと考える。

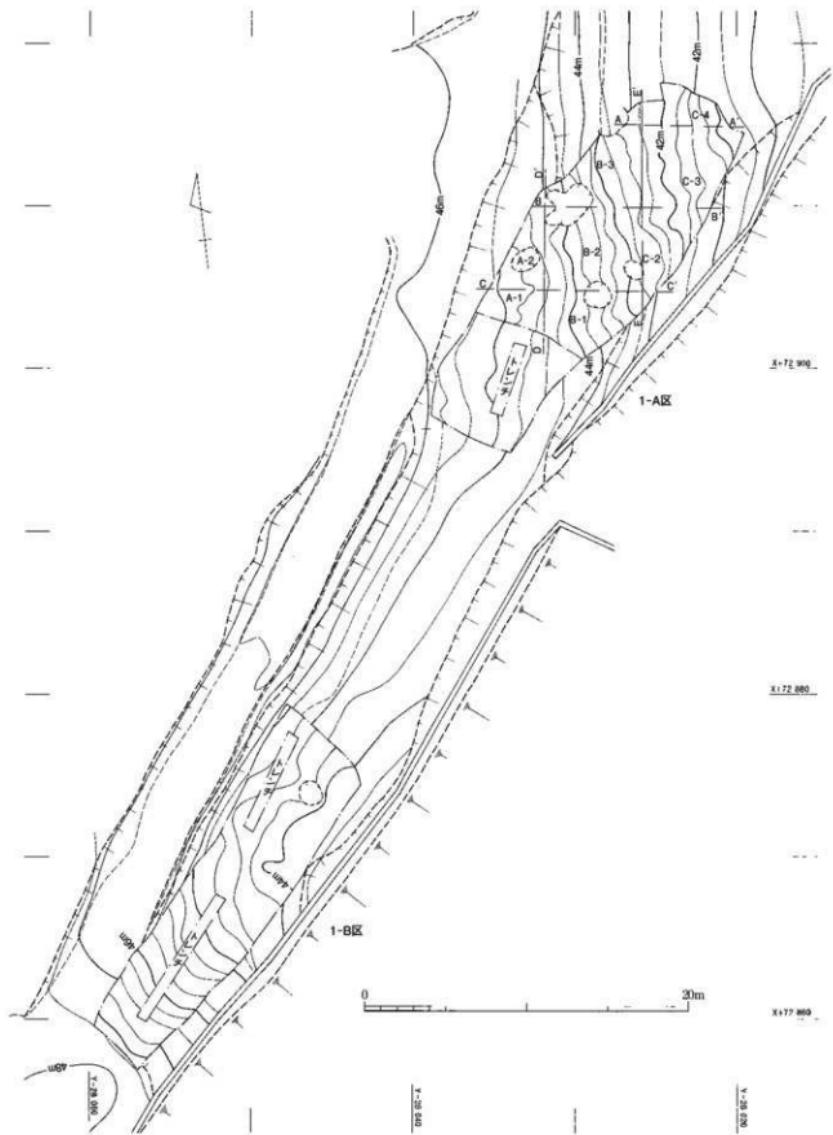
基本土層 (第5・6図、図版2)

第5・6図は1-A区全体に、等高線に対して平行および直交方向に設定したグリッドの土層断面図である。1-A区では南西側は丘陵頂部に近く、薄い堆積土が見られるだけだが、北東側に斜面を下るに従って、丘陵頂部からの流入土が厚く堆積する。この流入土中に遺物が含まれる。斜面下方では土層の乱れが見られるが、遺構ではなく、木根等により生じた坑に流入土が堆積したものと考える。以上のように、基本的には花崗岩系の岩盤とその風化土の上に、丘陵頂部方向からの流入土が遺物を含んで堆積する状況が認められる。1-B区では丘陵頂部に近いこともあり、表土剥ぎの時点で花崗岩系の岩盤や地山土が露出していた。

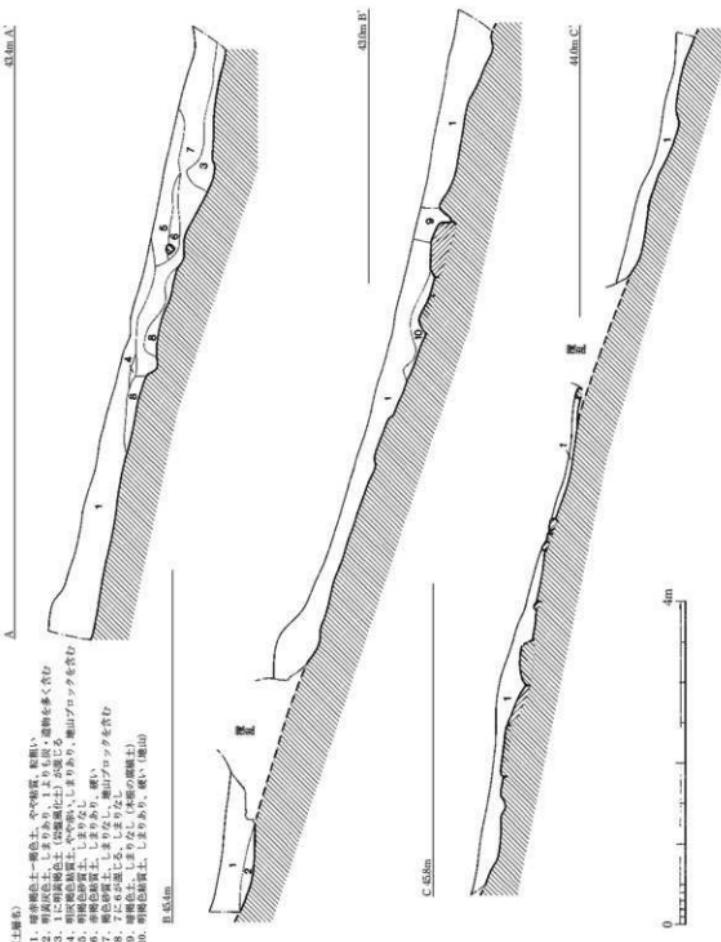
(2) 調査の内容と出土遺物

1-A区 (第4～6図、図版1・2)

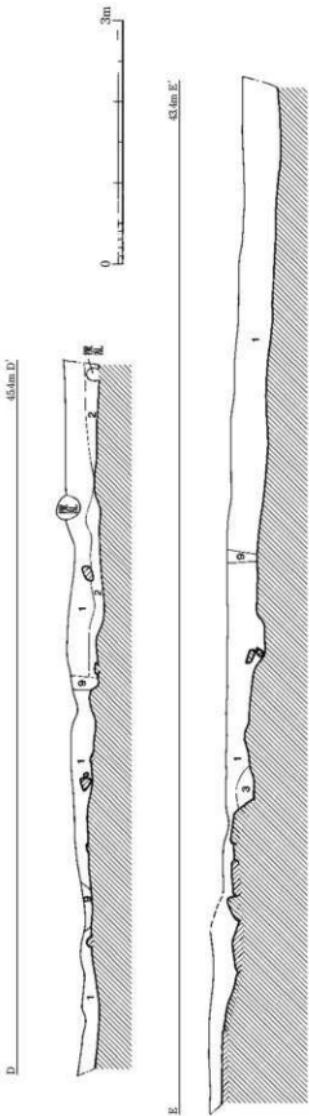
1-A区は北東向きの斜面に設定した2つの調査区のうち、北側の調査区である。調査区は長辺約25m×短辺約7～8mの長方形で、平面上の面積は約202m²である。調査区内南西側の丘陵頂部に近い部分では、表土を剥いた時点では岩盤が露出しており、遺構は認められなかった。一方、調査区中央から北東部の斜面でも、遺構検出の結果、遺構は確認されなかったが、地山とは異なる土の堆積があったため、その堆積状況を確認するために2ヶ所のトレーナーを設けたところ、比較的厚い



第4図 井手ヶ浦窯跡第2次調査1区遺構配置図 (1/300)



第5図 1-A区土層断面図① (1/60)



第6図 1-A区土層断面図② (1/60)

堆積土と土馬を含む遺物を確認した。このため土層確認のためのグリッドを設定して、遺構の有無を確認しながら掘り下げていくこととした。その結果、遺構は認められなかったが、丘陵頂部よりの流れ込みと考えられる土が、斜面を下るに従って厚く堆積する状況が認められた。厚さは斜面下方で最大0.6m。堆積土からは須恵器を中心としながらも、時期・種類共に2区よりも豊富な遺物が、パンケース8箱分出土した。

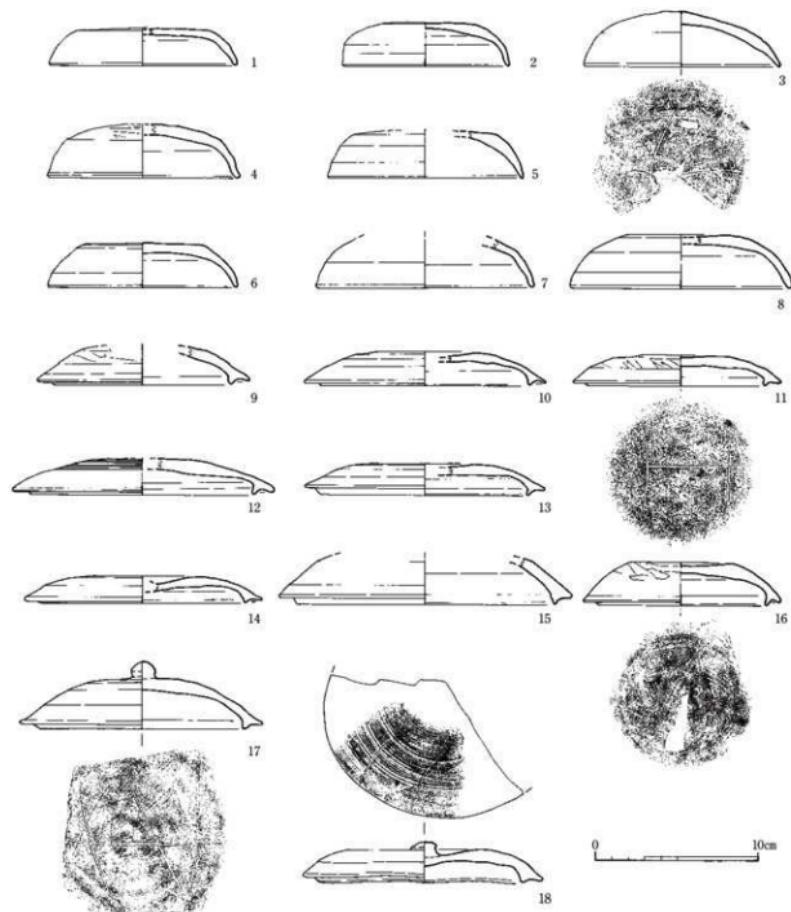
1-B区（第4図、図版1）

1-B区は1-A区の南西20mの場所に設定した調査区である。同じく北東向きの斜面上に位置する。調査区は長辺約23m×短辺4~7mの長方形で、平面上の面積は約138m²である。表土を剥いた時点では、岩盤や非常に固く締まった花崗岩バイラン土から成る地山が現れていた。遺構検出の結果、遺構は認められず、遺物も表土剥ぎと遺構検出時に、表土に混じって数点の遺物が出土したのみである。念のために2ヶ所のトレーニングを設けて、土の状態・遺物の有無などを確認したが、遺構・遺物とも認められなかった。

1区の出土遺物（第7~12図、図版40・41）

1区から出土した土器は図化したものだけでも須恵器を中心として90点ほど出土しており、壺蓋・身のほか鉢、皿、高杯、壺、甕などが出土している。時期は6世紀末~8世紀前半頃にあたり、先述した北東側の斜面において出土した。斜面はおよそ12~20°の勾配を持ち、調査区内での比高差は3~4m程ある。その斜面に自然堆積したと考えられる包含層から、上記の遺物が出土した。

1~18は須恵器の壺蓋である。1~8は素口縁のもので、9~18は口縁にカエリが付くものである。1、2、5、6、11、16は天井部が平坦になり口径も10~12cmほどでやや小さい。1、2、5、6に関しては短頸壺の蓋である可能性もある。17、18はつまみが残存し、前者は宝珠形、後者は焼け歪みがありやや不明瞭だが、ややつぶれており、ボタン状になる。この他、器高が低い10、12、13、14もボタン状のつまみが付くと考えられる。3、

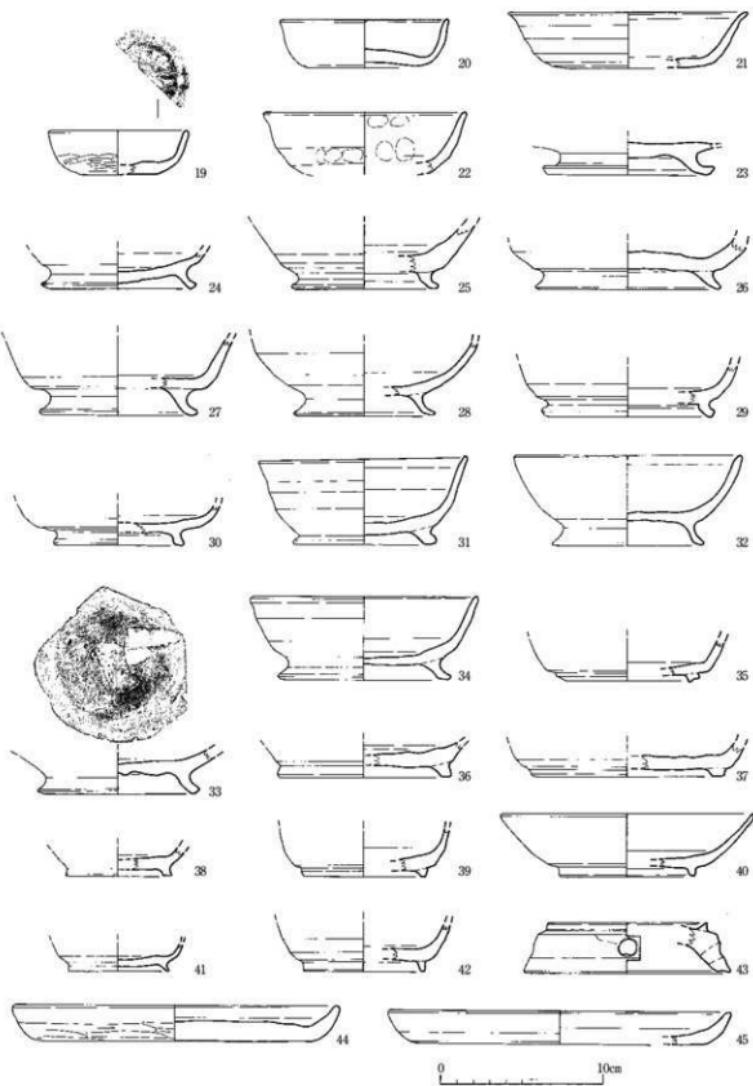


第7図 1区出土遺物実測図① (1/3)

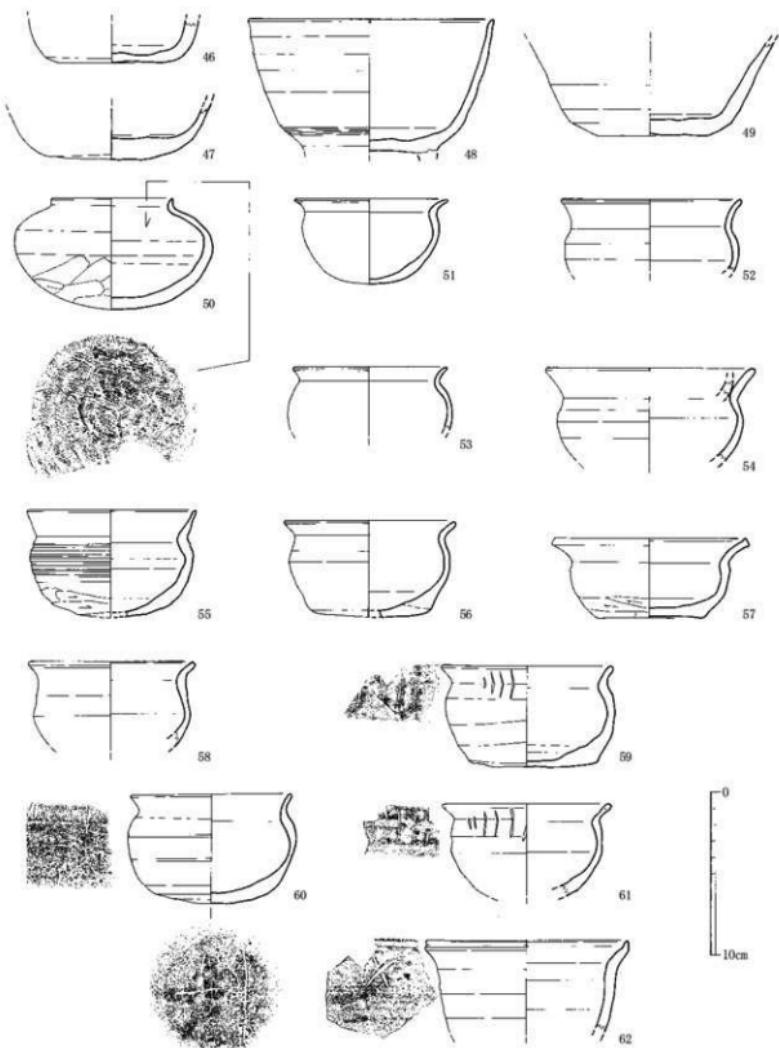
11、16、17の内面および18の外面にはヘラ記号が施され、4の内面には「く」字状の工具痕がみられる。

19～42は須恵器の坏身である。19～22は高台が付かず、そのうち19、20は口径8.5～10.5cm程度の小型のもので、21、22は口縁がやや外反する。23～42は高台が付き、23～34は高台が踏ん張るタイプで、35～42は内接するタイプのものである。高台部分のみが残存しているものが多く、全体の器形ははつきりしないが、38、39、41、42のように高台径6～8cm程度の小型のものが見られる。19、33の内面にはヘラ記号が施される。23、28は高台が屈曲し、高台付き碗の可能性もある。

43は須恵器の円面硯である。復原底径12.6cm、硯部径9.7cm、器高3.05cmを測る。脚部に径1cm



第8図 1区出土遺物実測図② (1/3)



第9図 1区出土遺物実測図③ (1/3)

の孔を穿つ。上面をヘラケズリした後、突出部を付け、回転ナデで仕上げたものと考えられる。

44、45は須恵器の皿である。ともに底部は平坦である。44は外面の下部に不定方向のケズリが見られる。

46～49は碗と考えられる。46は焼成不良のため土師質で、底部は平坦である。47は底部がやや丸みを持ち、体部がやや外反する。48は体部下半にカキメを施し、底部は平坦である。底部端に接合痕が残っており、高台付き碗になる可能性もある。49は体部下半から底部にかけてヘラケズリを行い、体部は直線的に外反する。底部は平坦である。

50は短頸壺である。底部外面には不定方向のケズリを施し、内面には直径1.5cm程度の棒状の工具を用いてタタキを施す。口縁部分を貼り付けた痕跡が一部内面に見られる。

51～62は鉢である。51は内外面共に灰被りおよび自然釉が見られ調整は不明である。54は口縁部に自然釉が見られ、口縁屈曲部には他の須恵器片が釉着している。焼成時に重ねて置いていたものと考えられる。55は胴部外面に浅い凹線が見られ、底部はやや焼成が不良である。56は底部内面に円形に灰被りが見られ上向きに焼成されたものと考えられる。その内側径5cm及び底部外面は焼成不良で灰白色を呈しており、焼成の際に中にトチン様の台を置き、間をあけた状態で同様の器種を重ねたか小形の器種を中心に入れたものと考えられる。57は他のものに比べて器高が低く口縁が外反する。底部は回転ヘラ切りで平底に仕上げており、他の例とは器形、作り方共に異なる。59は56と同様に内面灰被りの内側にトチン様の痕跡が見られる。しかし、底部中央からややずれており、外面の一部にも灰被りが見られることから、30°程傾いた状態で焼成されたものと考えられる。口縁部から頸部にかけての外面に4本以上の縦線を配したヘラ記号が見られる。60は内外面共に灰被りおよび自然釉が見られ、調整は不明瞭だが、外面には2条の凹線が見られる。底部及び胴部外面にヘラ記号が見られる。61は残存状態が悪いものの、59と同じく口縁から頸部にかけての外面に5本以上の縦線を配したヘラ記号が見られる。62は他の例より口縁部の屈曲が明確でなく、口唇部に凹線を施している。胴部外面には「×」のヘラ記号が見られる。

63～65は高坏である。63は土師器で、64、65は須恵器である。65は頸が細く、外面にカキメを施し、内面には「×」のヘラ記号が見られる。

66は焼き台か。上面は平坦であり、剥離した痕跡が無く、また還元して青灰色を呈している部分があるため、このままの状態で使用したものと考えられる。ただし、何か乗せたような痕跡も認められず、使用されていない可能性もある。

67は双耳壺の耳である。図面上の右から左に向かって穿孔がなされている。

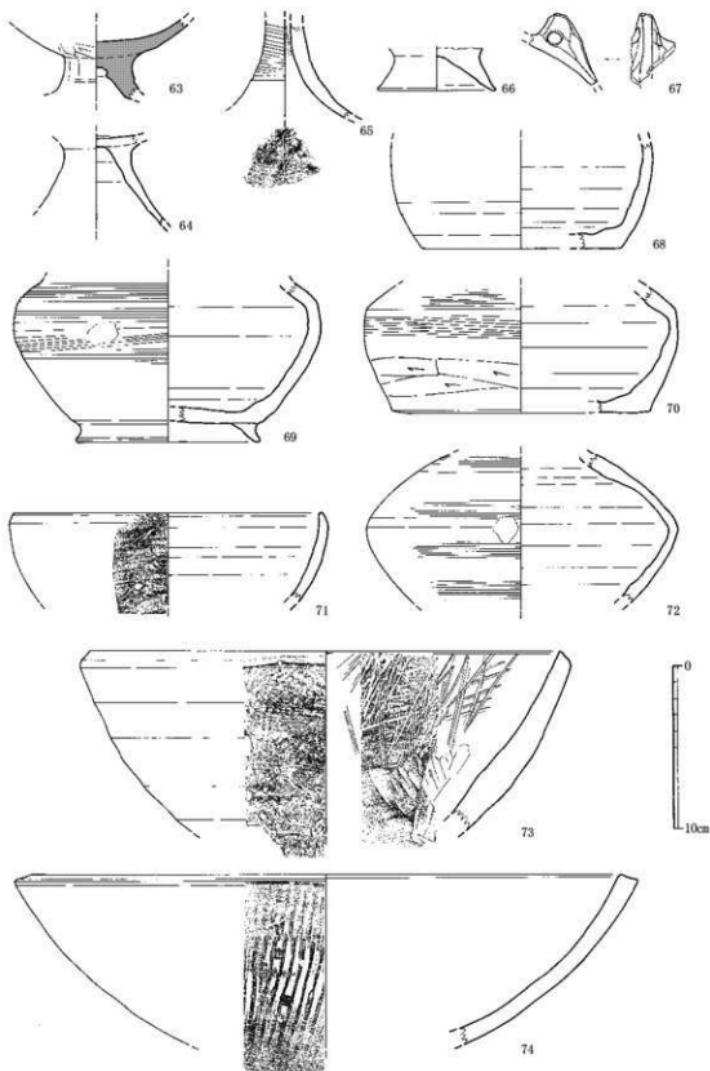
68は瓶子か。底部の一部のみが残存しているため、正確なことは不明であるが、底径が小さいことから瓶子の可能性がある。

69は壺である。踏ん張るタイプの高台が付き外面にカキメを施す。口縁部が接合していたと考えられる部分で剥離している。

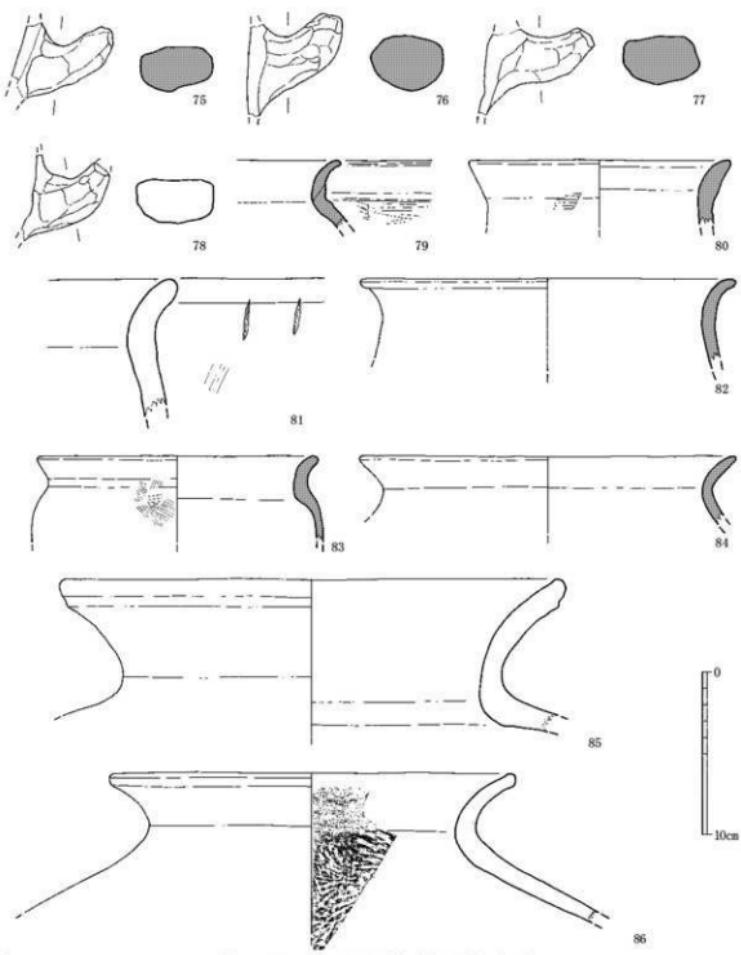
70は平瓶である。平底で、肩は明確な稜線をもって屈曲する。

71は碗である。口唇部のみがやや内傾し、外面にはヘラ記号が見られる。

72も平瓶か。胴部が張り出し、ほぼ中央に最大径をもつ。稜部分に梢円形の平坦部があり、工具が当たった痕跡か。内面下部に凸線状の稜を持つ。壺の可能性もあるが、器壁が薄く平瓶の可能性が高い。



第10図 1区出土遺物実測図④ (1/3)



第11図 1区出土遺物実測図⑤ (1/3)

73、74は鉢である。73は外面タタキを施した後ナデ、内面ナデ後細い棒状の工具ならびに細い板状の工具で縦方向に不規則に線を刻む。中には深さ1mmほどあるものもあり、その下部にあるケズリ様の痕跡も粗い。破断面にかかっているが、口唇部を削り取り口にしているのが確認できる。74は外面上部に平行タタキの痕跡が強く残り、木目もはつきりと観察できる。内面には径2cm程の凸凹が見られ当て具の痕跡と考えられるが、粗いナデにより回みのみが残る。口唇部はナデにより浅く窪む。

75～78は瓶の取手である。78のみが須恵器で他は土師器である。78は器表に貼り付けたところ



第12図 1区構造検出時出土遺物実測図(1/3)

で剥がれる。

79～86は甕である。79、80、82～84は土師器、81、85、86は須恵器である。79は口縁部の屈曲が強く内面および外面に稜を持つ。80は口縁部の屈曲が弱く、復原口径も小さい。全体が磨滅しているが、肩部にハケ状の痕跡が残る。81は須恵器の甕で器壁は厚い。頸部に縱方向の線刻を2条施し、胸部はタタキの痕跡が残る。83は79と同じく口縁部の屈曲が強く稜を持つ。

87～91は1区検出時に出土した遺物である。87は壺蓋である。外面の一部はケズリを施している。88、89は坏身である。88は高台が踏ん張るタイプ、89は内接するタイプである。89の口縁部はやや外反しており、口径は10cmと小さい。90、91は皿である。ともに底部に近い外面を不定方向にケズリ、底部はヘラ切りを施す。

(3) 小括

以上のように、1区では遺構は検出されず、斜面に流れ込む包含層を確認したのみである。しかし遺物は、須恵器を中心とし土師器、石製品が出土し、須恵器の器種や時期も比較的多岐にわたる。また後述する陶馬・土馬や陶製・石製紡錘車など特殊遺物も出土した。出土状況からは、これらの遺物の由来が生産に伴うものか、消費に伴うものか明確ではない。これについては胎土分析で興味深い結果が出ており、それを踏まえた上で、改めてV章で触れたい。

3 2区の調査

(1) 調査の概要と基本土層

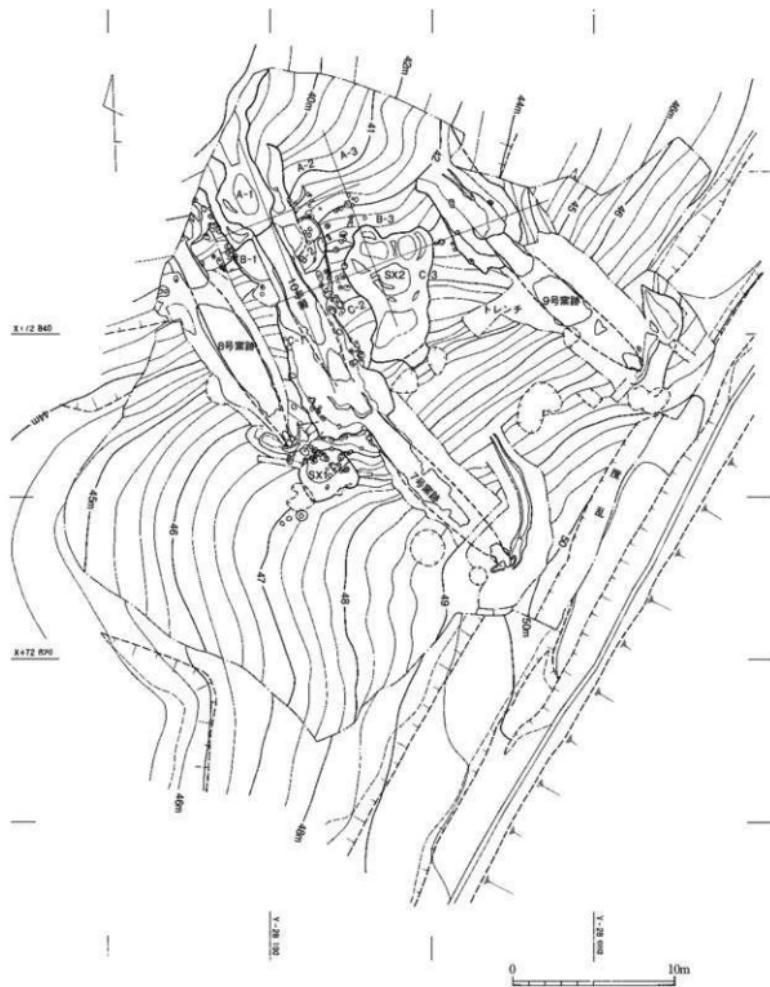
調査の概要(第13図、図版3)

2区では、確認調査の時点で複数の須恵器窯跡の存在が想定されたが、調査の結果、当初の予想を超えて、4基の須恵器窯跡と2基の土坑、および多数のピットを検出した。また、表土剥ぎ段階で良好に灰原の広がりを確認したため、多量の遺物の出土が考えられたが、やはり各窯跡の窯体内や灰原からをはじめとして大量に出土し、その数はパンケース270箱に及ぶ。調査区は北西に開く小谷の斜面へ丘陵頂部に位置し、標高は39.5～50m、面積は約1030m²である。

4基の窯跡はいずれも古墳時代の10mを超える長大な窯体を持つもので、うち3基は土坑も含めて調査区中央に密集し、1基は東側にやや離れて位置する。斜面下方に向けて広がる灰原と合わせると、谷の最奥部となる調査区中央から東側にかけての斜面上に遺構の分布が集中する。一方、谷を包み込む小尾根となる調査区西側には遺構は認められない。

基本土層(第14図、図版4・5)

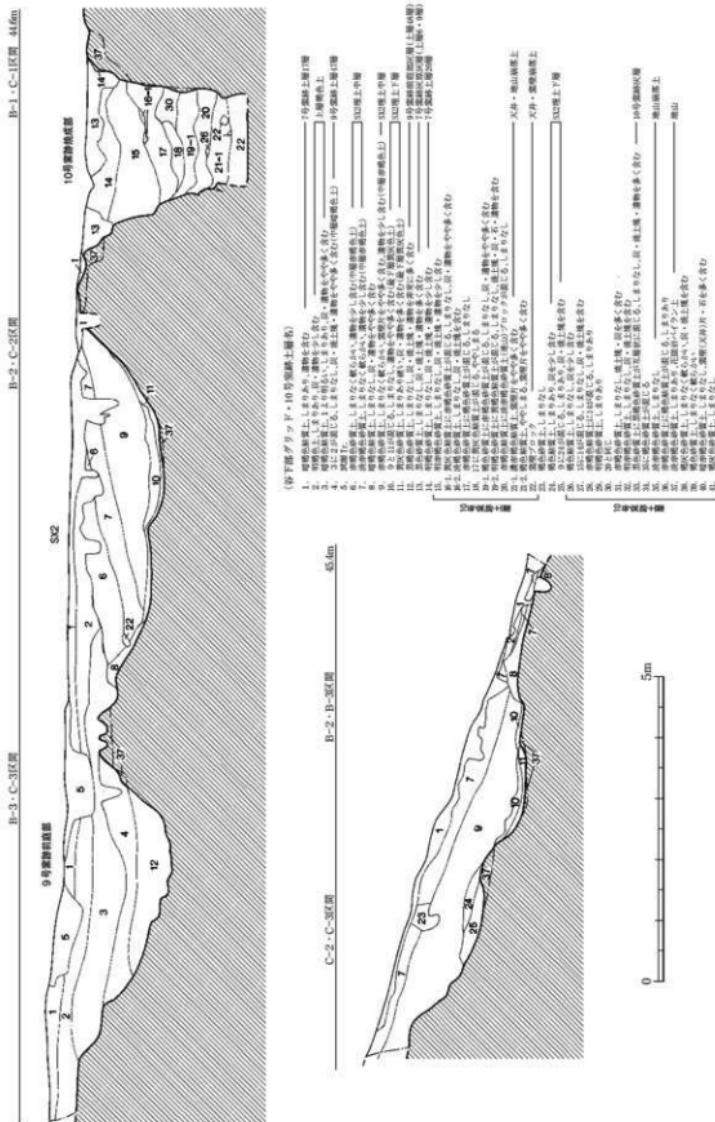
第14図上の土層図は、2区のうち谷下部分を横断するように堆積状況を観察したものである。2



第13図 井手ヶ浦窯跡第2次調査2区遺構配置図 (1/300)

区谷下部の西側では、表土直下に7号窯跡の灰原灰層（13層）が広がり、その下に花崗岩バイラン土の地山（37層）からなる遺構面が現れ、8号窯跡や10号窯跡等の遺構が認められる。一方東側には、表土直下に包含層（1・2層）があり、その下層が地山あるいは9号窯跡・SX2等の遺構埋土（3層以下）となる。

また斜面上方にも、7・9号窯跡土層図に見えるように、表土と地山との間に堆積土（第17図1層・第43図4層）が認められるが、出土遺物や、土質・色からも後世の堆積土と考えられる。



第14図 2区谷下部グリッド土層実測図 (1/80)

以上のように、2区では全体的に花崗岩バイラン土の地山を掘り込んで、遺構が營まれている。

(2) 検出遺構と出土遺物

1) 窯跡

7号窯跡（第15～18図、図版6～19）

窯跡は2区のほぼ中央、北西に向かって開く小谷の最高部に位置する。窯跡のすぐ後ろは丘陵の尾根となり、現在は国道200号バイパスのために開削されるが、元来は南東に下る斜面だったと思われる。標高は約45～50mで、今回調査した4基の窯跡で最も高い位置にある。10号窯跡の南東に連続するように築かれ、前部が8号窯跡の排煙部溝や10号窯跡窯体を切る。本調査地で最初に確認した窯跡である。表土を除去した時点で、斜面下方の広い範囲に灰原が現れ、遺構検出時に排煙口を確認した。

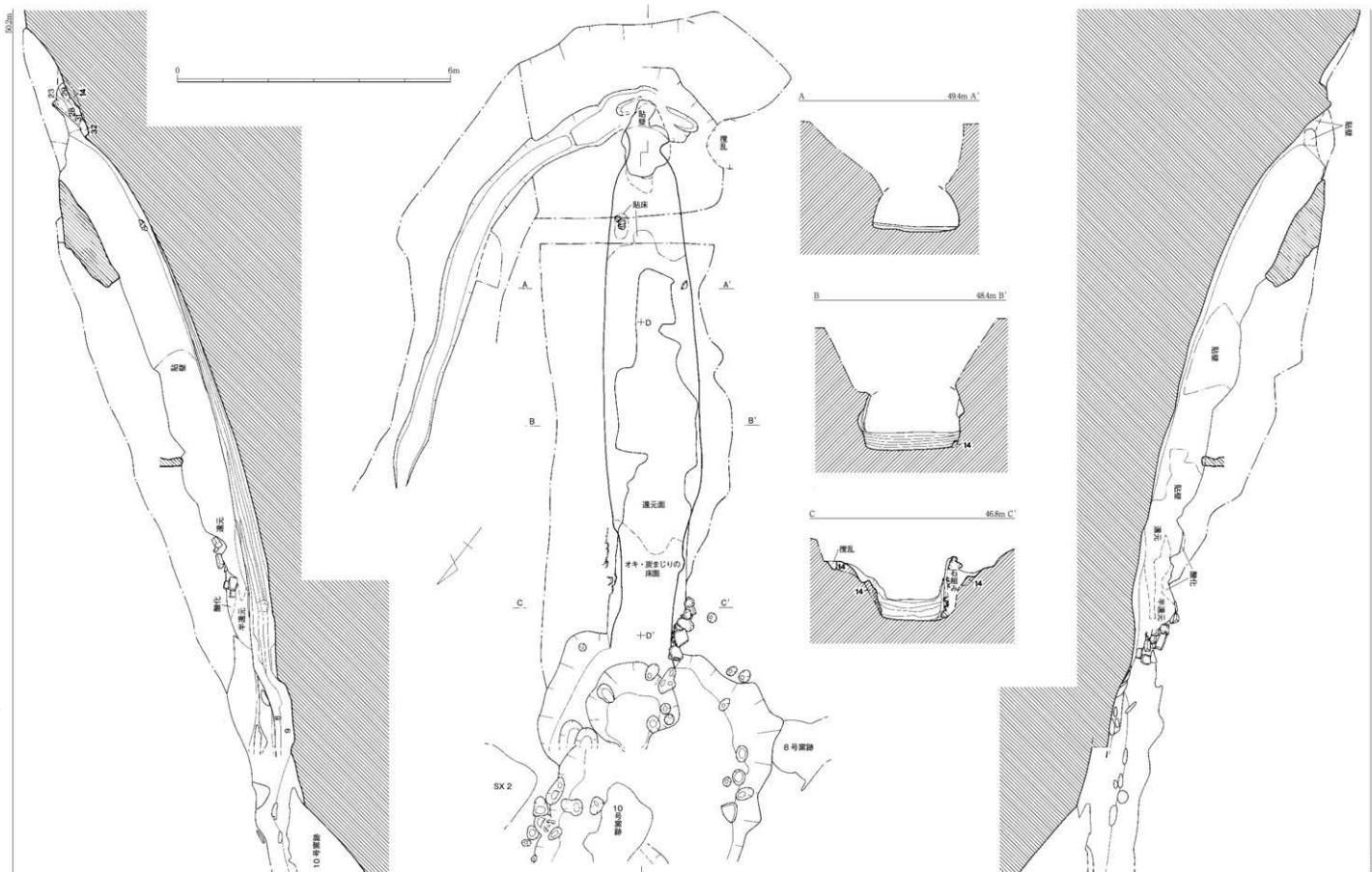
花崗岩バイラン土をトンネル状に掘り抜いた地下式の登窯（あがねやき）で、焚口～排煙口の窯体水平長は最終焼成面で約12.5m、一次焼成面で約12.0mを測る。主軸はN-36°-Wで、概ね南東～北西となる。平面プランは中ぶくらみの胴張り形で、焚口と排煙部が狭くなる。天井部は大半が既に崩落していたが、焼成部上位～排煙口では状態良く残っていたため、一部ベルト状に残したところ、トンネル状に構築された窯体の断面がわかりやすく観察できた。しかし焼成部の多くは、崩落した地山とその後の堆積土で厚く埋り、地表から床面までの深さは、深いところで2.3m以上に及ぶ。焼成部～排煙口の窯体は、被熱によって内側から青灰色、黄灰色、赤色に変色する。

貼床は砂質土からなり、燃焼部～焼成部のほぼ全面にわたって認められた。燃焼部～焼成部下位にかけては最も厚く、最大48cmの厚さに計9面の操業面を確認した。燃焼部～焼成部下位の最終操業面からは、蓋坏を主体とする製品が焼き集められた状態で出土した。中には蓋と坏がセットで出てきたものもあり、良好な一括資料を得ることができた。貼壁による補修の痕跡も燃焼部～焼成部中位まで認められた。燃焼部左右の側壁には石組みを検出したが、断ち割りの結果、石組み裏側の被熱状況より、残存する石組みが窯室当初のものではなく、1回もしくは数回の操業後に組まれたものと分かった。また排煙部の窯体は、一次操業時のものが改修を受けて、最終操業時には約70cm長く継ぎ足されていた。さらに排煙部から窯跡左側の斜面下方に伸びる溝を検出した。

焚口・燃焼部 暗褐色系の軟らかい埋土（2～4層）を除去したところ、集積する遺物を検出した。この遺物はオキ・炭が混じる硬化面の直上に乗ることから、この硬化面を最終操業面と判断した。従って、5・6層は最終操業に伴う灰層と考えられる。

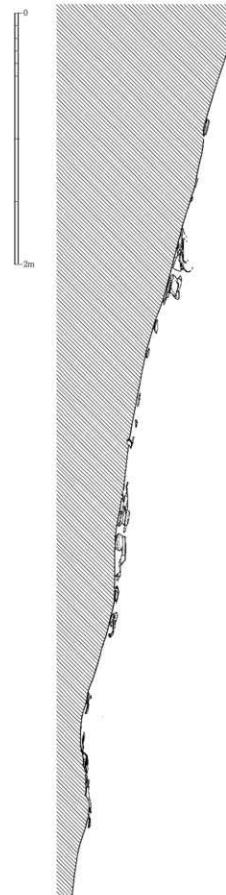
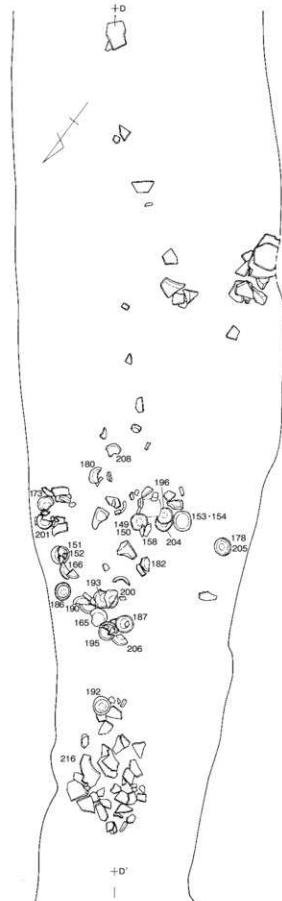
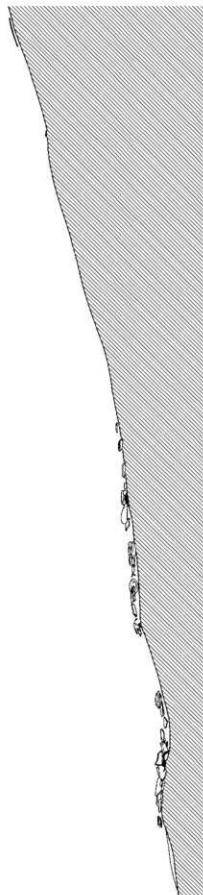
最終面の燃焼部は、焚口幅1.3m、焼成部境幅1.4m、長さ2.9mで、床面の傾斜角は4°となる。貼床は8層に分層でき、厚さは42～48cmを測る。左右の側壁は石が組まれて補強される。検出した石組みは、左側壁は疎らだが右側壁は密で、しっかりと築かれた感がある。石組みの表面には更に貼壁が施され、表面は弱い還元を受けて黄褐色を呈していた。なお、断ち割りの結果、窯室直後の操業があった後に、石組みや貼壁など側壁の補修が行われながら数回の操業があり、その後貼床を重ねられながら操業が続けられたことが確認できる。但し、左側壁の石組みについては、それを廻る操業の痕跡は見られなかったため、窯室時に築かれた可能性もある。

貼床・貼壁 を除去すると一次操業面を検出できる。一次面は最終面よりも幅広だが、長さは短く、傾斜は若干強くなり、焚口幅1.4m、焼成部境幅1.8m、長さ2.4mで、床面傾斜角は6°を測る。



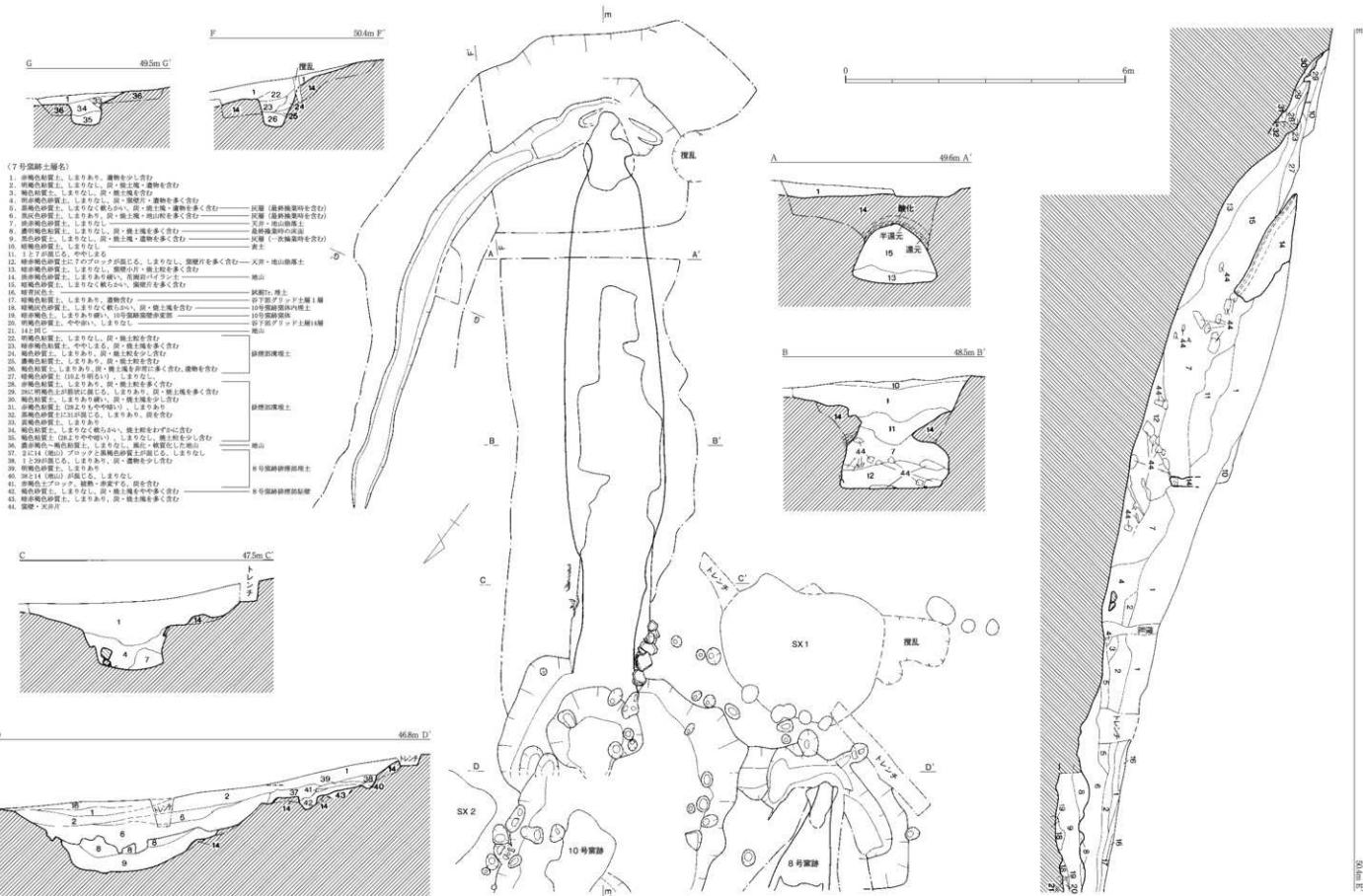
第15図 7号窯跡最終操業面実測図 (1/80)

66cm



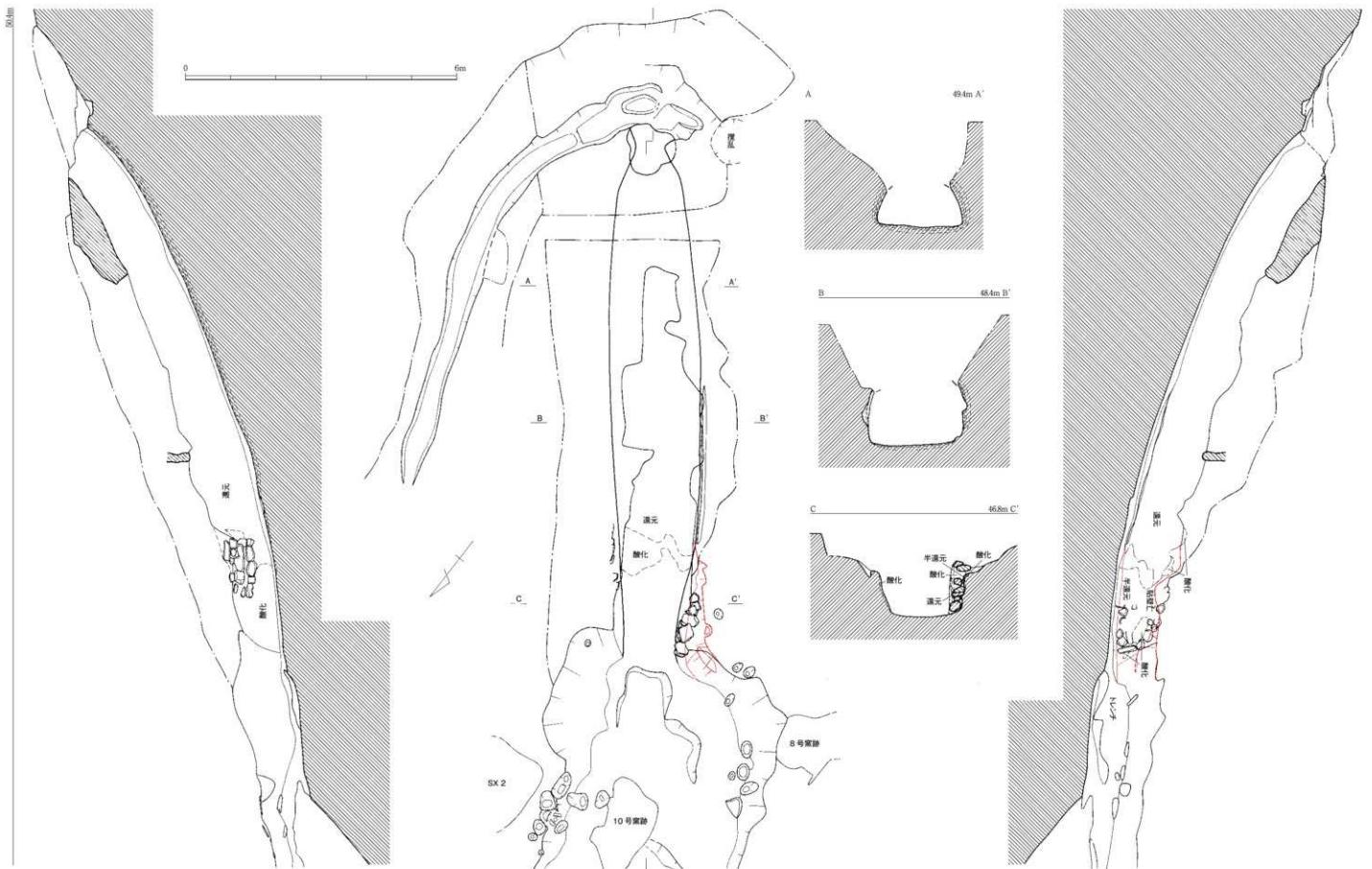
66cm

第16図 7号窯跡最終採集面遺物出土状況実測図 (1/30)



第17図 7号窯跡土層実測図 (1/80)

80m



第18図 7号窯跡石組構築時・一次操業面実測図 (1/80)

左右の側壁面は弱還元あるいは酸化して黄褐色～赤褐色を帯びる。

側壁は最終面・一次面とも外側に開きながら立ち上がり、天井部が設けられた痕跡はない。土層断面にも燃焼部に天井崩落土は認められない。だが側壁表面は弱い還元を受けていることから、焼成時には仮設の天井を架けて閉塞したことが考えられる。

焼成部 天井・地山が崩落したものと思われる堆積土（7・12層）を取り除くと、強く還元して青灰色を帯びた床面が現れた。床面には燃焼部ほど密ではないが遺物が散在していた。

最終面の焼成部は中位で最大幅をとり幅2.1m、長さ7.8mとなる。床面傾斜角は燃焼部境の11°から弓なりに上がって焼成部上位で30°を測る。下位から中位にかけての左右側壁にはスサ入り粘土による貼壁が認められた。燃焼部から続く貼床は、上位に向かって薄くなりながらも、ほぼ全面に認められた。一次面でも中位が最大幅となり、幅2.05m、長さ8.0mを測る。床面傾斜角は燃焼部境の15°から弓なりに上がり、上位で25°となる。下位の右側壁沿いには、補修の結果できたものであろうか、床面より高さ10cm程の段が1段、長さ3.5mにわたって検出された。一次面でも床面・壁面ともよく還元し、固く焼き締まっていた。天井部は大部分が窓体内に崩落するが、焼成部上位で残るほか、下位の一部で左壁から天井頂部近くまで残る部分があった。そこで焼成部の高さを計測すると、焼成部下位では最終面0.9m、一次面1.3m、上位では最終面1.15m、一次面1.2mを測る。

奥壁・排煙部 奥壁は焼成部上位から、やや傾斜を強くして斜めに立ち上がり、明確な煙道を持たずには排煙口に至る。幅は奥壁最奥部で最も狭まり幅0.6m、傾斜はやや弓なりになるが45°。奥壁より続く排煙口付近には改修の痕跡があり、最終操業時の排煙口は、一次操業時の排煙口に壁が繋ぎ足されて、窓体が奥上方に延長する形で検出した。排煙部を奥上方に延ばすことで、排煙・炎の引きを改良する目的で施されたと考える。このため長さは最終面で1.6m、一次面で0.9mとなるが、奥壁の傾斜はほぼ変わらない。なお、補修の時期は不明である。

排煙部溝 排煙口のすぐ後方から窓体の左側を通り、斜面下方に伸びる溝を検出した。全長は約11.5m。残りの良いところで上端幅0.75m、底部幅0.5m、深さは0.6mを測るが、斜面下方の先端に向かって浅くなる。埋土に炭化物や焼土塊を多く含んでおり、窓体付近の堆積土がさらに移動して埋まったものと考えられる。併せて特筆すべきこととして、排煙部が補修された際、この溝を埋めて排煙部が延ばされていることが挙げられる。つまり少なくとも最終操業時には、溝が人為的に埋められた上で、操業が行われたといえる。溝が機能した一次面では、排煙口に溝が直に接続する。溝底部は、排煙口すぐ背面にピット状の掘り込みがありやや低くなるが、その周囲の高さは排煙口とほぼ水平である。

このような排煙部から斜面下方に伸びる溝の機能については、排水溝・作業路など諸説あるが、本遺構については流水の痕跡や床面の硬化などは認められない。排煙の調整や通風の役割を想定すべきか。

前庭部 上層に堆積する灰層（6層）を除去したところ、炭や焼土塊を含むが灰層とは異なる明褐色土（8層）を検出し、この上面を最終面の前庭部と判断した。最終面の前庭部は焚口より大きく開き、半円形となってそのまま斜面下方に伸びる。最大幅は5.35m。さらに焚口直下には径約2.0mの不整円形で、深さ30cmの凹みを持ち、上面からの深さは最大値1.2mを測る。

最終面の前庭部を形成する明褐色土と下層の灰層（8・9層）を除去すると、地山を掘り込んだ

一次面の前庭部が現れた。やはり焚口より大きく開いて半円形となり、斜面下方に伸びて 10 号窯跡の天井崩落による陥没につながるようである。また焚口直下に方形の小段、それに続く右側にも不整形の小段が検出された。小段の深さはいずれも約 20 cm で、前庭部全体では最大幅 5.35 m、深さは最大値 1.6 m を測る。なお、前庭部内から外側の周囲にかけて径約 20 ~ 50 cm のピットを多数確認したが、これは木根によるものと思われる。

灰原 焚口より前庭部を経て、陥没した 10 号窯跡に沿って斜面を下る。前庭部では明褐色土の間層（8 層）により分層できたが、10 号窯跡上の堆積になると灰原の土層は明確ではない。灰原は 10 号窯跡の燃焼部付近より急に広がり、8 号窯跡の埋土上にも及ぶ。さらに斜面下方の調査区外にも伸び、その範囲は焚口より長さ 20 m 以上、斜面下方では幅 10 m 程にも及ぶ。但し、斜面下方の調査区境付近では 10 号窯跡の灰原灰層と混合し、明確には区別できない。厚さは、前庭部で最も厚い約 1 m から、薄くなりつつ斜面を下るが、10 号窯跡の前庭部付近でも 35 cm 前後の堆積がみられた。また、木根と思しきピット状の落ち込みを多数検出した。

最終操業面遺物出土状況（第 16 図、図版 11・12）

燃焼部から焼成部下位にかけての最終操業面で多数の遺物が集中して出土した。最も手前の燃焼部と焼成部下位の右壁際で、破碎した甕が出土したほか、燃焼部・焼成部境付近では、完形のセット品を含む多くの蓋坏が認められた。焼成後開けられていないと思われるセット品や焼成不良の製品もあり、操業終了時に残された製品が掻き集められたものと考えられる。

出土遺物

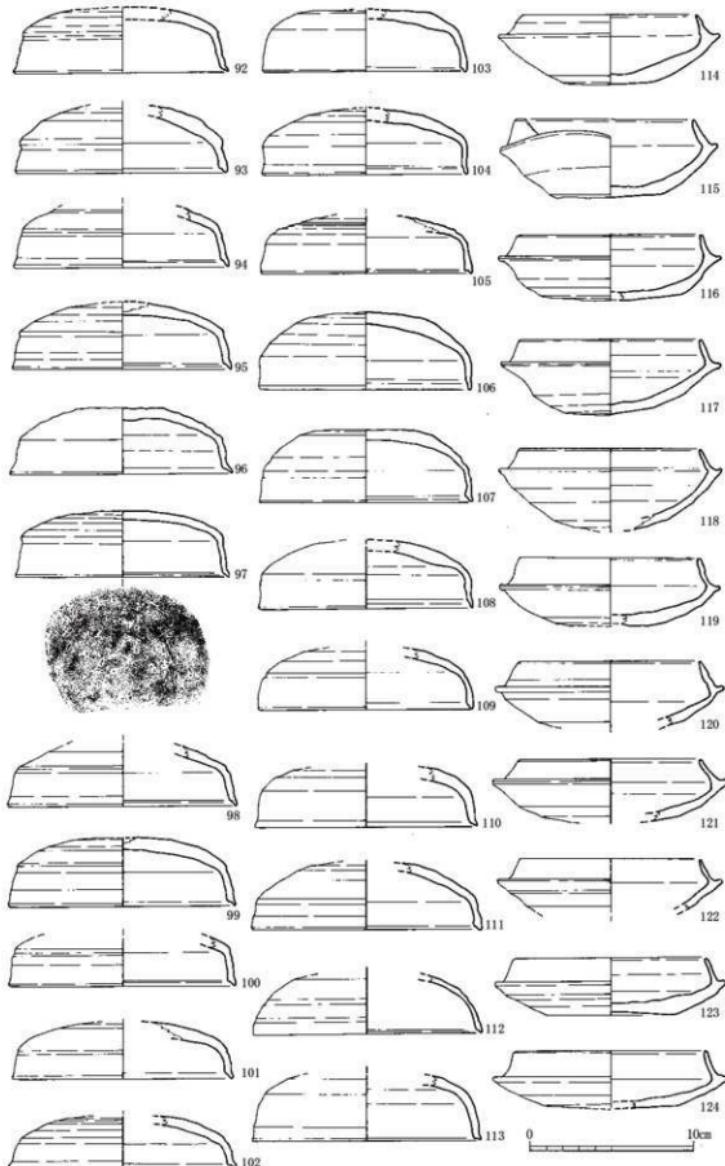
貼床内出土遺物（第 19・20 図、図版 42）

92 ~ 148 は燃焼部・焼成部の貼床内より出土した。いずれも須恵器である。

92 ~ 113 は坏蓋。残存状況は全て 1/2 以下である。口径は 92 ~ 94・103 ~ 109 は 12.4 ~ 13.2 cm、95 ~ 102・110 ~ 113 が 13.4 ~ 14.0 cm を測る。概ね天井が高く作られ、特に 92・95・97・99 は口縁部が高く、全体的に丁寧な作りである。天井・口縁部の境は、92 ~ 100 のように稜もしくは強い沈線により明瞭なもの、101 ~ 113 の浅い沈線や屈曲により判断されるものがある。口縁端部内側は、内傾もしくは沈線状の段となる。ヘラ記号は 95「〇」、97「⊕」、104「×」又は「╋」、106「△」、107「╋」、108「||」と、形状は不明だが 101・103・112 に確認できる。いずれも天井部内面に大きく施される。

114 ~ 134 は坏身。117 が完形、115 が 3/4、他は 1/2 以下の残存である。口径は 114 ~ 126 の 10.7 ~ 11.7 cm、127 ~ 134 の 12.0 ~ 12.8 cm に大別できる。底部は 114 ~ 118 のように深く丸みを持つものから、123・124・131 のように扁平なものがある。立ち上がりは全体的に内傾しながらも高く作られるが、129・130・131・134 は内傾後直立する。口縁端部に段はない。ヘラ記号は 115「△」、118「||」、128「⊕」と、形状は不明だが 120・132・133 に確認できる。いずれも底部内面に大きく施される。

135 ~ 138 は口径 12.0 未満の蓋で、短頸壺に付くと思われる。135 は口径 8.8 cm と最も小さく、他は 11.0 ~ 11.8 cm に収まる。135・136・138 では天井部は丸く高く作られ、口縁部とは稜または沈線で明瞭に境される。一方 137 は天井部は扁平で、口縁部とは屈曲により分けられる。口縁端部内側はいずれも内傾もしくは沈線状の段を有する。135 の天井部内面にはヘラ記号「||」が認められる。139 ~ 141 は短頸壺。139・140 は小型で、口径は各 7.2 cm、9.2 cm。いずれも扁平な体部に



第19図 7号窯跡貼床内出土遺物実測図① (1/3)

短く直立する口縁部を持つ。体部の最大径は上位になり、139は特に肩を張る。蓋を有するタイプで、139の肩部外面には蓋重ね焼きによる焼けムラが確認できる。141は口縁部を欠く。体部最大径は中位となり、20.8 cmを測る。体部外面上位には沈線1条と斜線文を配し、中位以下にはカキメを施す。頸部外面に蓋口縁端部の破片が付着し、重ね焼き痕を残す。

142～145は甕の口縁部破片。144がやや内湾するほかは、ほぼ直線的に外上方に伸びる。142は端部が上方に面を取る。144はわずかに残る頸部外面に波状文が確認できる。146は瓶類の口縁部破片。外面に波状文を施し、口縁端部は断面方形に作られる。提瓶か。147は提瓶の輪状把手。148は器台の脚部下位片。端部に向けて大きく外反し、脚部径は38.0 cmを測る。外面には3条の沈線で画された間に、波状文と刺突文が施され、内面は板状の工具による横ナデ痕が明瞭に残る。長方形の透かしが配される。

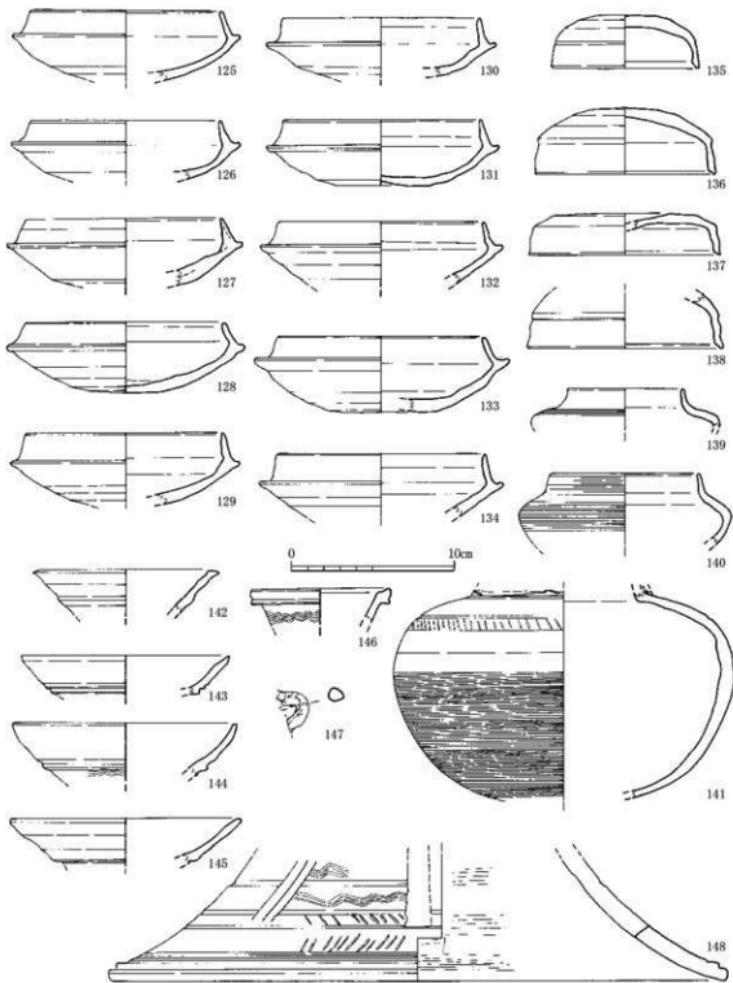
最終操業面出土遺物（第21～24図、図版42～44）

149～216は最終操業時の床面直上から出土した遺物で、いずれも須恵器。149～154および178・205は蓋・坏のセットで出土した。

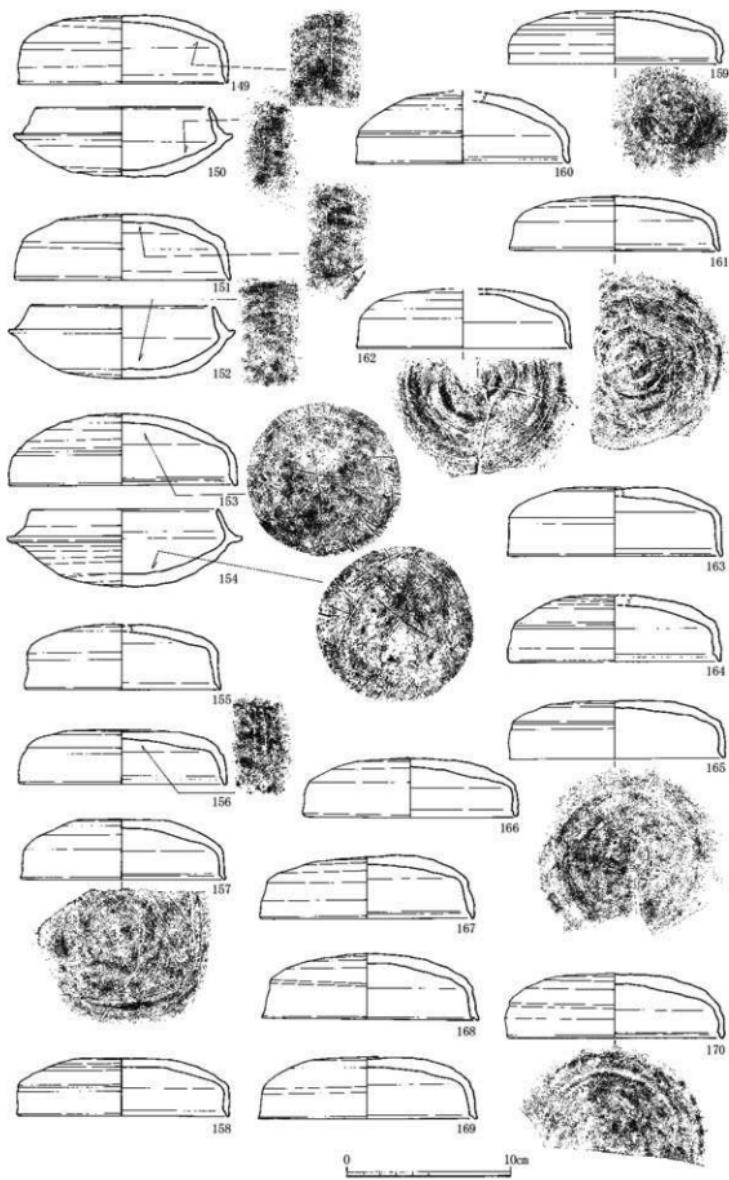
149・151・153・155～184は坏蓋。このうち149・151・153・164・168・178は完形またはほぼ完形、166・167・171・173は2/3以上の残存状況で出土した。口径は155が12.0 cmで短頸壺蓋の可能性もあるほか、149・156～171が12.6～13.3 cm、151・153・172～183が13.4～14.2 cm、184は14.8 cmを測る。全体の外形は149・151・155・163・164・167・168・172・175・178・179・184のように口縁部が高く、深い形状となるものから、156・159・161・162・165・166・171・173・176・177・180～183のように扁平な形状のものがある。天井・口縁部境は149・151・155・163・175・179・181では稜や強めの沈線が明瞭だが、153・156～162・164～174・176～178・180・182～184では浅い沈線や屈曲により判断される。口縁端部内側は、内傾または沈線状の段が施されている。またいざれも天井部外面に回転ヘラ削りが施されるが、183は手持ちヘラ削りである。ヘラ記号は149・151・156・163・173の「||」は天井部内面隅に、153・159・165・166・170・178・182・184の「＊」、157・161・176の「◇」、158「|||」、160「キ」、162「|||」、169「×」、171「ゆ」、174・181「十」は天井部内面の中央部から全体にかけて施される。

150・152・154・185～212は坏身。150・152・154・186・187・194・200・204・205・207は完形またはほぼ完形、189・190・192・195・196・198・201は2/3以上の残存である。口径は185の10.0 cm、212の13.0 cmのほか、150・152・186～202は10.5～11.4 cm、154・203～211は11.5～12.0 cmを測る。底部は152・154・205・207・212のように深く丸みを持つものもあるが、185・190・191・197・200～204のように扁平なものが多く見られる。立ち上がりは全体的に内傾しながらも高く作られ、203・204・206は内傾後直立気味になる。口縁端部に段はない。ヘラ記号は150・152・203の「||」は底部内面隅に、154・186・192・205の「＊」、200の「◇」、185・188・190・195・197・201「|||」、191「＊」、194・198・199「十」、196「++」、204「ヰ」、は底部内面の中央部から全体にかけて施される。193・210・211は形状不明。

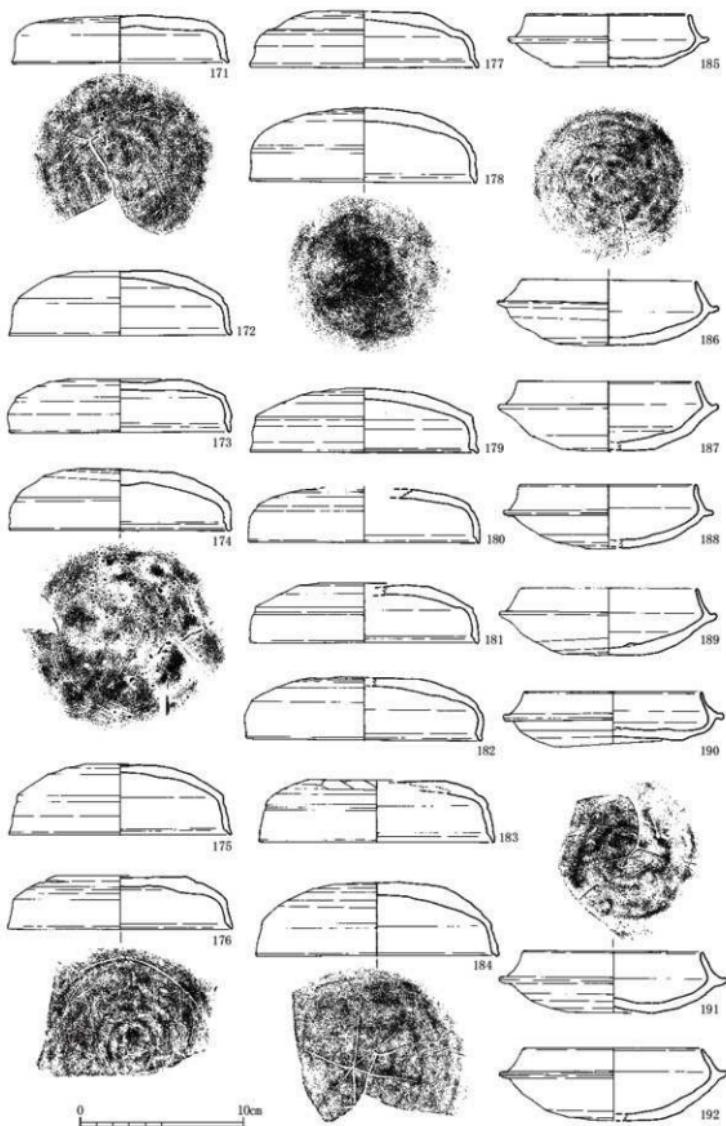
213・214は短頸壺蓋。口径は各11.8 cm、12.0 cm。いざれも全体的に扁平で、天井・口縁部境に稜や沈線はない。口縁端部内側には段を有する。天井部内面にはヘラ記号「|||」が認められる。215は甕口縁部片。短く直線的に外反する。外面の端部下に突帯を作る。216は甕。口縁部～体部上位は完存する。体部は丸く、口縁部は短く直線的に外反する。



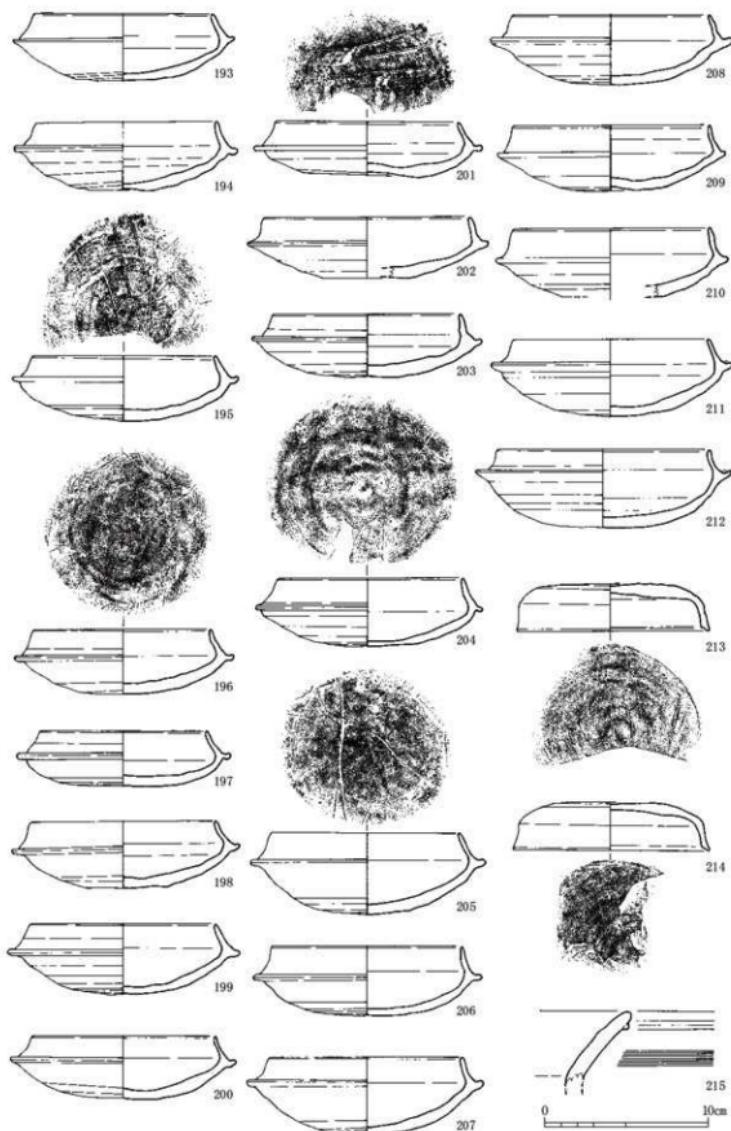
第20図 7号窯跡床内出土遺物実測図② (1/3)



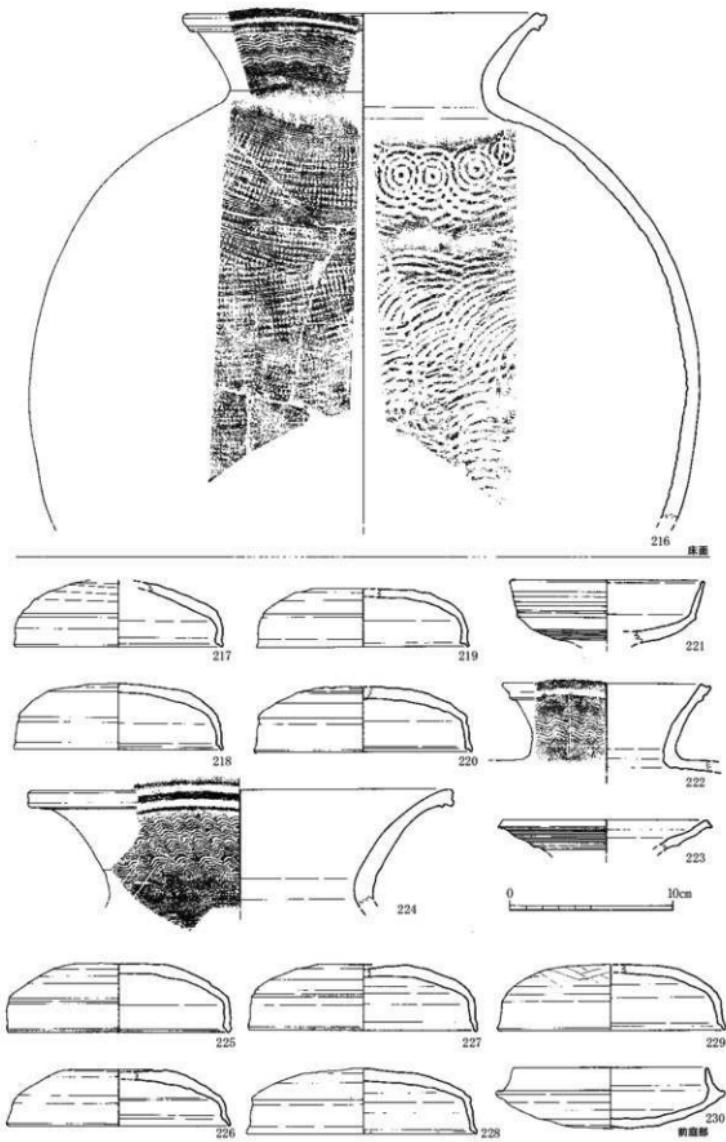
第21図 7号窯跡最終操業面出土遺物実測図① (1/3)



第22図 7号窯跡最終操業面出土遺物実測図② (1/3)



第23図 7号窯跡最終操業面出土遺物実測図③ (1/3)



第24図 7号窯跡最終操業面④・前底部出土遺物実測図① (1/3)

前庭部灰層出土遺物（第24～27図、図版44）

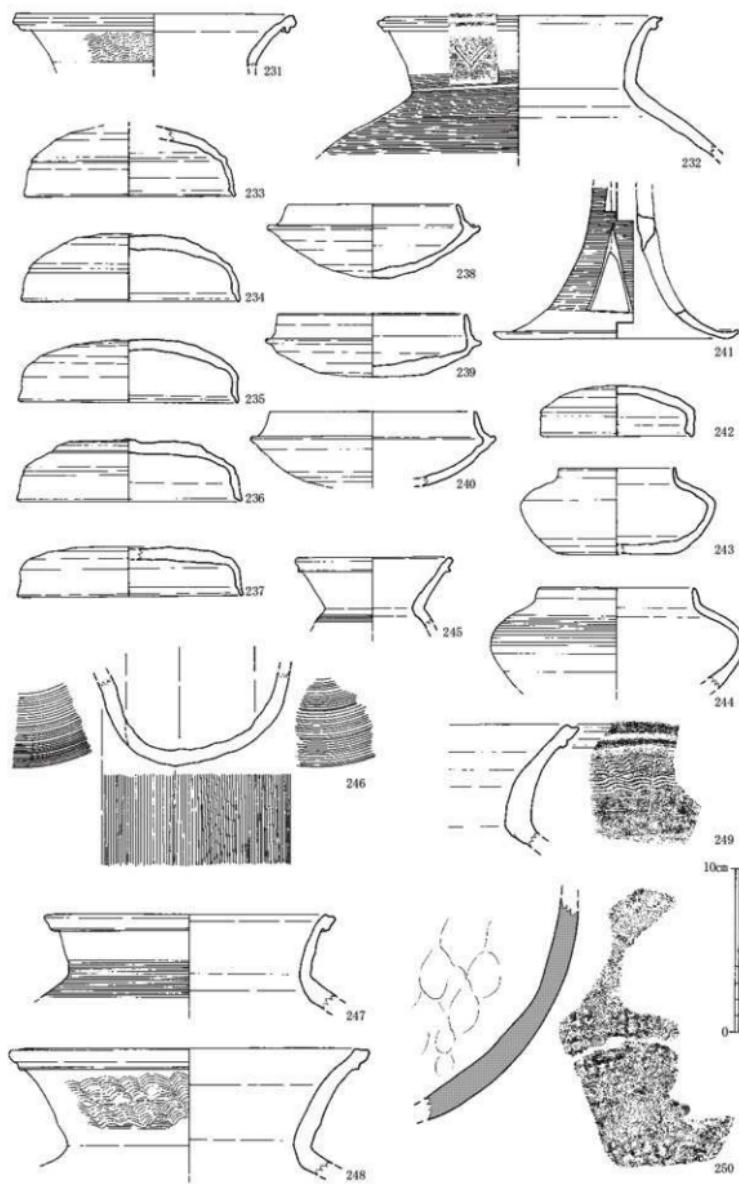
217～284は前庭部5～9層の出土遺物。250のみ土師器で、他は全て須恵器である。

217～224は最下層の灰層9層から出土した。217～220は坏蓋。218～220は1/3以下の残存である。口径は217～219は12.6～12.8cm、220は13.4cmを測る。全体の外形は概ね218・220は口縁部が高く、深い形状だが、217・219は扁平となる。天井・口縁部の境は220は沈線により明瞭な稜となるが、他は浅い沈線による。口縁端部内側には沈線状の段が施される。ヘラ記号は217天井部内面に認められる（「+」）。221は高坏。坏部1/8が残存する。口縁部外面には櫛状工具によるナデ、底部外面にカキメが施される。222は口縁～頸部が残存する。わずかに残る体部の開き具合や、内面の同心円當て具痕から横瓶と思われる。口縁部外面にヘラ記号「ト」を記す。223は壺の口縁部破片。外面全体にカキメを施す。224は甕の口縁部。強く外反する。外面に波状文とヘラ記号を施す。

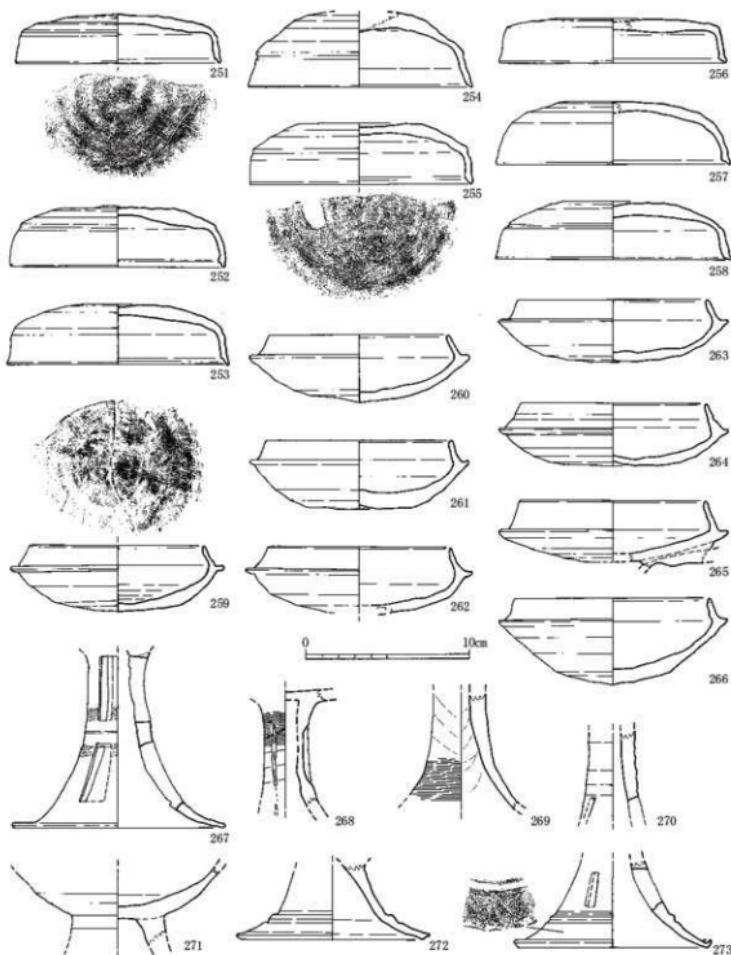
225～232は上（5・6層）下（9層）の灰層に挟まれた明褐色土の間層（8層）から出土した。225～229は坏蓋。いずれも残存は1/2以下で、復元ながら口径は13.6～14.0cmと大きめである。全体の外形は、扁平な226を除き、口縁部が高く深い。天井・口縁部境も、屈曲による226の他は、強い沈線や稜により明瞭に作られる。口縁端部内側は内傾もしくは沈線状の段となる。天井部外面は回転ヘラ削り調整だが、229は手持ちヘラ削りである。また227の天井・口縁部境の沈線と口縁端部外面には櫛状工具による調整痕が残る。ヘラ記号は226に「+」、229に「△」が認められる。230は坏身。口径は11.4cmを測る。底部は扁平で、立ち上がりは内傾しながらもやや高く直立気味に作られる。231は壺又は瓶類の口縁部破片。外面に波状文を施す。232は甕。口縁～肩部の3/4が残存する。口縁部は短くやや外反する。頸～肩部外面にカキメを施し、口縁部外面にはヘラ記号「▽」を記す。

233～250は5・6層から出土した。233～237は坏蓋。残存は1/3以下である。口径は233は12.8cm、他は13.4～13.8cmを測る。全体の外形は233を除き、概ね扁平である。天井・口縁部境は233・236で強い沈線による稜が認められるが、他は浅い沈線もしくは屈曲による。口縁端部内面はいずれも沈線状の段となる。ヘラ記号は234「+」、236「△」と形状不明だが233の天井部内面に認められる。238～240は坏身。239は完形品である。口径は238が10.6cm、239が11.4cm、240が12.6cm。全体の形状は239が最も扁平な感があるが、立ち上がりは直立して高く作られる。240は深く丸みがある底部を持つ。ヘラ記号は形状不明だが238に認められる。また239の蓋受部には蓋との重ね焼き痕が残る。241は長脚高坏の脚部下半。外面にカキメを施し、三角形の2段透かしを3方向に配する。242は短頸壺蓋。3/4が残る。口径9.1cm、器高3.1cm。天井・口縁部境には沈線が巡り、口縁端部内面にも沈線状の段を持つ。天井部内面に形状は不明だがヘラ記号が確認できる。243・244は短頸壺。いずれも小型で口径は各7.0cm、9.6cmを測る。243は体部中位で最大径を取り、口縁部は外反する。244は体部上位で最大径を取り口縁部は内傾する。また体部上位の外面にカキメを施す。なお、いずれも肩部に蓋を重ね焼きした痕跡が残る。245・246は提瓶。245は口縁～頸部破片。口縁部は直線的に伸びる。わずかに残る体部外面にカキメを残す。246は底部の破片。体部外面の両側に回転カキメが残る。247～249は甕の口縁部。247は短く外傾する。頸部外面にカキメを施し、口縁部外面にヘラ記号「▽」を記す。248は頸部からやや強く外傾する。外面にカキメ・波状文を施す。249は短く外反する。外面に波状文とヘラ記号「+」が認められる。

250は土師器甕の体部下位破片。全般的に摩滅して調整は不鮮明だが、内面にはタテ方向のヘラ



第25図 7号窯跡前部出土遺物実測図② (1/3)

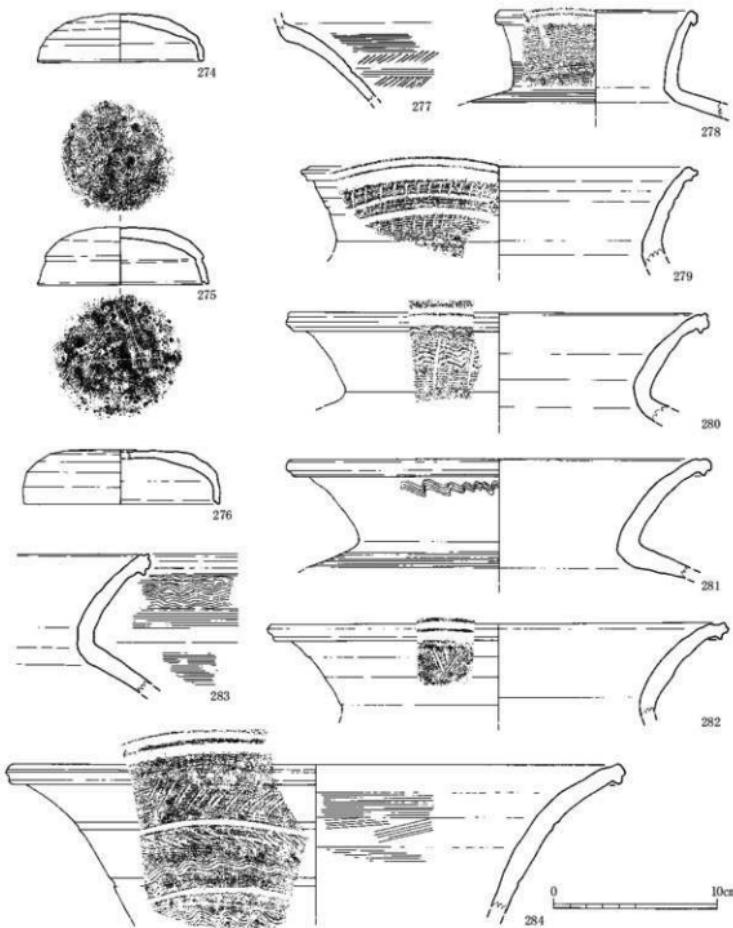


第26図 7号窯跡前庭部出土遺物実測図③ (1/3)

削りの後ナデ、外面には格子目タタキの痕跡が認められる。

251～284は6～9層一括で取り上げた。251～258は壊蓋。いずれも1/2以下の残存状況である。口径は251・252が～13.0cm、253～256は13.6～14.0cm、257・258は14.4cmを測る。全体の形状は天井部が高い254の他は、概ね扁平である。天井・口縁部境は沈線または稜が作られるが、256は屈曲によって判断され、257においては明瞭な境は認められない。口縁端部内面は内傾もしくは沈線状の段を作る。ヘラ記号は257を除く全てで天井部内面に認められる。形状は251「×」、252「米」、254「丶」、255「卍」、256「卌」、253・258は不明。

259～266は壊身。259は残存良好、262は底部を欠き、他は1/3以下の残存である。口径は



第27図 7号窯跡前庭部出土遺物実測図④ (1/3)

259・260が~10.8cm、261~265は11.2~11.6cm、266は12.0cmを測る。全体の形状は概ね扁平だが、266は底部を深く作る。立ち上がりは内傾するが、262・264・265は高く作られる。ヘラ記号は259「||||」、262「＊」、形状不明だが263・265の。いずれも底部内面に認められる。なお260の蓋受部に重ね焼き痕が、265の底部外面に重ね焼きによる別個体片の付着がある。

267~290は長脚の高杯。267は脚部の残存。中位外面に粗雑な沈線2条と波状文を施し、上下2段の長方形の透かしを3方向に配する。上部には坏部との擬口縁が露出する。268は脚部上半が残存し、透かしを模したタテ方向の刻み目が3方向に配される。明確には残存しないが、下半にも配されて2段になると思われる。269は透かしは無い。脚部中位の残存で、下半の外面にカキメ、内面にヘラ記号「†」が残る。外面にシボリ痕がある。270は脚部中位破片。長方形透かしを3方

向に配するが、1段のようである。271は坏底部。口縁部と脚部を欠く。272・273は短脚のタイプ。272は下位外面に2条の沈線で稜が作られる。273も同じく稜が作られるほか、3方向長方形の透かしを持ち、下位外面にヘラ記号「△」が刻まれる。

274～276は短頸壺の蓋。274・275は天井・口縁部境に沈線・稜を持つが、276は屈曲する。口縁端部内面は275・276では内傾による段となるが、274の端部は丸く終わる。なお275には天井部の内外両面にヘラ記号「△」が認められる。277は短頸壺。肩部の破片である。外面頸部下にカキメ、その下位に沈線2条を挟んだ斜線文を施す。278は提瓶か。口縁へ頭部下が残存する。わずかに残る体部外面にタテ方向のカキメと、内面にタテ方向の回転ナデ痕が残る。279～283は甕。279～282は短く外反する口縁部を持つ。279は外面に斜線文を配し、280は波状文とヘラ記号「|」を施す。281口縁部外面の波状文は粗雑で、肩部外面にはカキメを残す。282は口縁部外面にヘラ記号「▽」を記す。283は口縁部外面カキメ後、上半に波状文、体部外面はタタキ痕後カキメ、内面には同心円当て具痕を残す。284は大甕。口縁部上半の破片で、口径は37.0cmを測る。外面はタタキ後回転ナデで整え、沈線と刺突文や波状文を施す。また内面にも工具によるヨコナデで、カキメ状の調整痕が残る。

前庭部上層出土遺物（第28図、図版44）

285～296は前庭部の埋土上層から出土した。全て須恵器である。

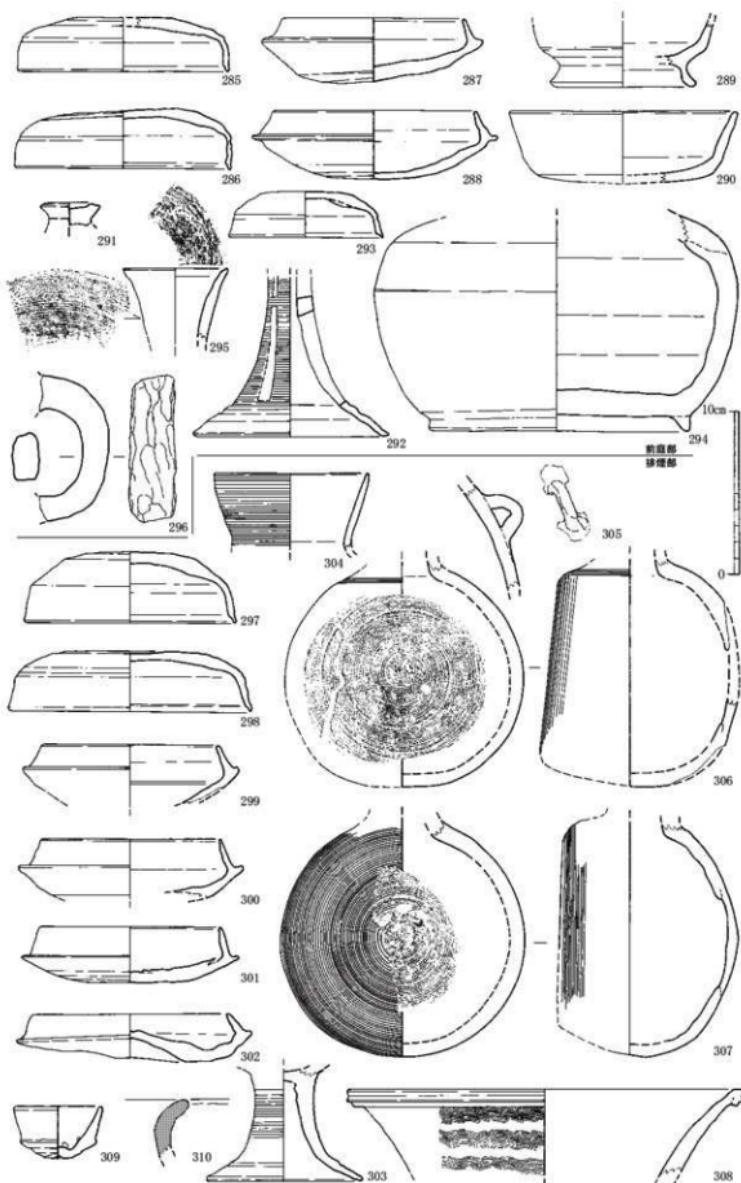
285・286は坏蓋。286はほぼ完形である。外形は扁平で、天井・口縁部境に沈線を持つ。口縁端部内面は沈線状の段となる。いずれも天井部内面にヘラ記号がある。285は形状不明、286は「＊」。287・288は坏身。口径は11.2cmと12.2cm。外形はいずれも扁平で、立ち上がりは内傾する。底部内面には287に「×」、288は摩滅して形状不明だがヘラ記号が認められる。289・290も坏身だが、窯跡の時期を下る。289は底部外面のやや内側に「ハ」字形に開くやや高い高台が付く。高台径8.4cm、290は高台が付かない。口径13.8cm。身は深く、底部は平らで、口縁部はわずかに外反して伸びる。

291は蓋のつまみ。高坏の蓋か。下部の蓋接合面に擬口縁を残す。292は長脚の高坏。脚部下半が残存する。中位外面にカキメを施し、長方形の2段透かしを3方向に配する。下位外面には2条の沈線による稜が巡る。293は短頸壺の蓋。口径9.4cm。天井・口縁部境に沈線、口縁端部内面に沈線状の段を作る。天井部内面にヘラ記号「ヰ」を記す。294は壺。長頸壺か。底部は完存し、体部も1/3残存する。底部は平らで、端には非常に粗雑な断面三角形の高台が付く。体部は丸く、中位で最大径22.3cmとなる。内外面ヨコナデ調整で、一部に粘土紐痕を残す。295は瓶類の口縁部。外面カキメ後上半に波状文を施す。また口縁端部の内面はヘラ状工具でナデ調整する。296は半円形の把手。断面方形で左右の側面は工具による削りで面を作る。瓶類や鉢に付くものか。

排煙部出土遺物（第28図、図版44・45）

297～308は排煙部に取り付く構埋土から、309・310は窯体外の排煙口付近から出土した。297～309は須恵器、310は土師器である。

297・298は坏蓋。297は口縁部が高く、天井部も丸みを持つ。天井・口縁部境は屈曲によって分けられ、口縁端部内面には内傾による段が付く。天井部内面にヘラ記号「ヰ」を刻む。298は扁平で、天井・口縁部境に沈線が巡る。口縁端部内面は沈線状の段となる。299～302は坏身。外形は扁平で立ち上がりは内傾するが、300・301は高い立ち上がりを持つ。302は底部が大きく焼け歪む。301・302の底部内面には各「△」・「×」のヘラ記号が認められる。303は短脚の高坏脚部。外面中



第 28 図 7 号窯跡前庭部上層・排煙部溝出土遺物図 (1/3)

位にカキメ、下位に沈線 1 条を施す。脚端部内面に沈線状の段を作る。304 は瓶類の口縁部。提瓶か、外面前方にカキメを施し、形状不明だがヘラ記号を記す。305 は提瓶の体部上位破片。外面に輪状把手が付く。306・307 は提瓶。いずれも口縁部を欠くが、体部の残存状況は比較的良好である。体部最大径は 306 が 14.6 cm、307 が 14.9 cm。体部の形状は被蓋部側が丸く、他方が平坦な、やや扁平な球体をなす。被蓋部・平坦部両側の外面全体に回転カキメを施す。また、平坦部側の外面には 306「人」、307 は形状不明のヘラ記号が確認できる。308 は甕の口縁部上半破片。外面に波状文を施す。309 は小型の器状製品。口径 7.4 cm、器高 3.2 cm。口縁部は底部中央から外上方に直線的に伸び、外面にのみ境となる棱を作る。調整は外面の底部中央はナデ、他は回転ナデ。子持ち製品の「子」や天地が逆で脚の可能性もあるが、接合痕が無いことや、ナデ調整を施していることから、完結する製品とも考えられる。

310 は土師器の甕または甌と思われる口縁部の破片。強く短く外反する。

灰原灰層出土遺物（第 29～31 図、図版 45・46）

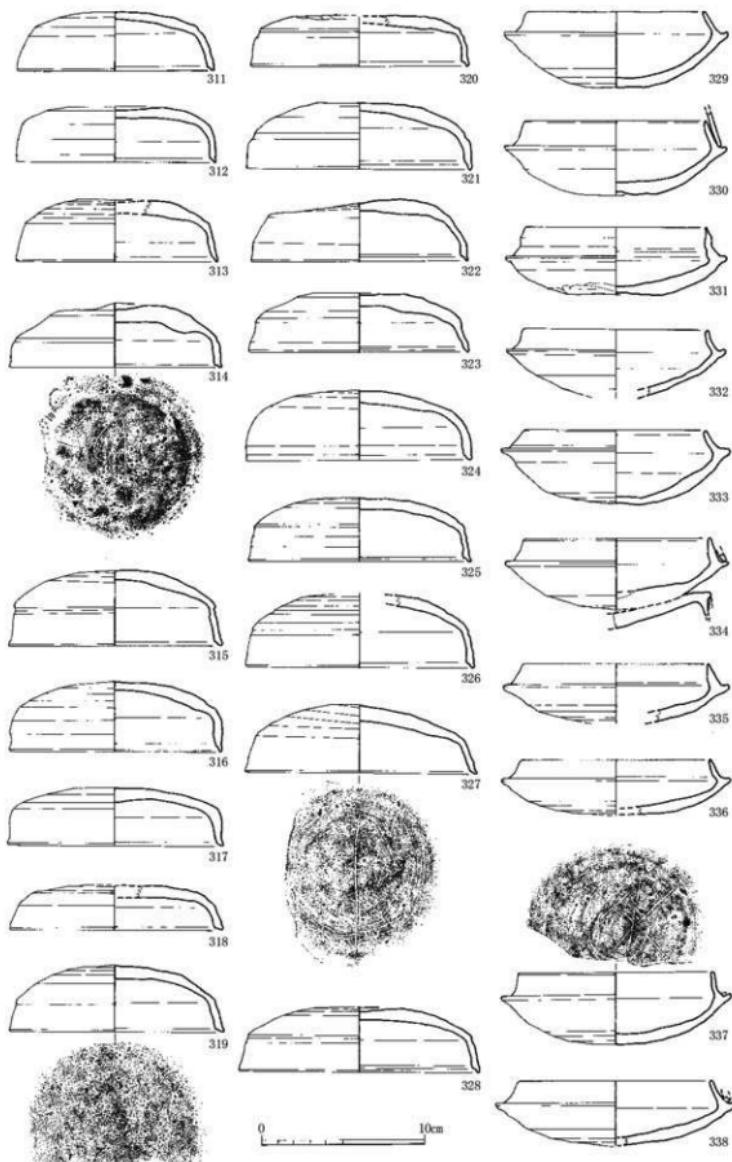
311～370 は灰原灰層から出土した。全て須恵器である。

311～328 は坏蓋。口径は 311・312 は 12.2 cm、313～320 が 12.6～13.4 cm、321～328 が 13.6～14.6 cm を測る。全体の外形は 313・315・316・319・324～326・328 のように口縁部が高く深い形状となるもの、あるいは 311・312・314・317・318・320・323 のように扁平な形状のものがある。天井・口縁部の境は 315・321・325・328 では稜や強い沈線が明瞭だが、314・320・326 では浅い沈線、311～313・316～319・322～324・327 では屈曲で判断される。口縁端部内側は、いずれも内傾もしくは沈線状の段となる。また天井部外面はいずれも回転ヘラ削りが施されるが、320 は手持ちヘラ削りである。ヘラ記号は 312・324「ヰ」、313「×」、314「4」、316「中」、317「十」、318「卅」、319・327「！」、および形状不明だが 323・326 で天井部内面に認められる。なお、316 の口縁部内面には、重ね焼きした蓋身口縁部片が付着する。

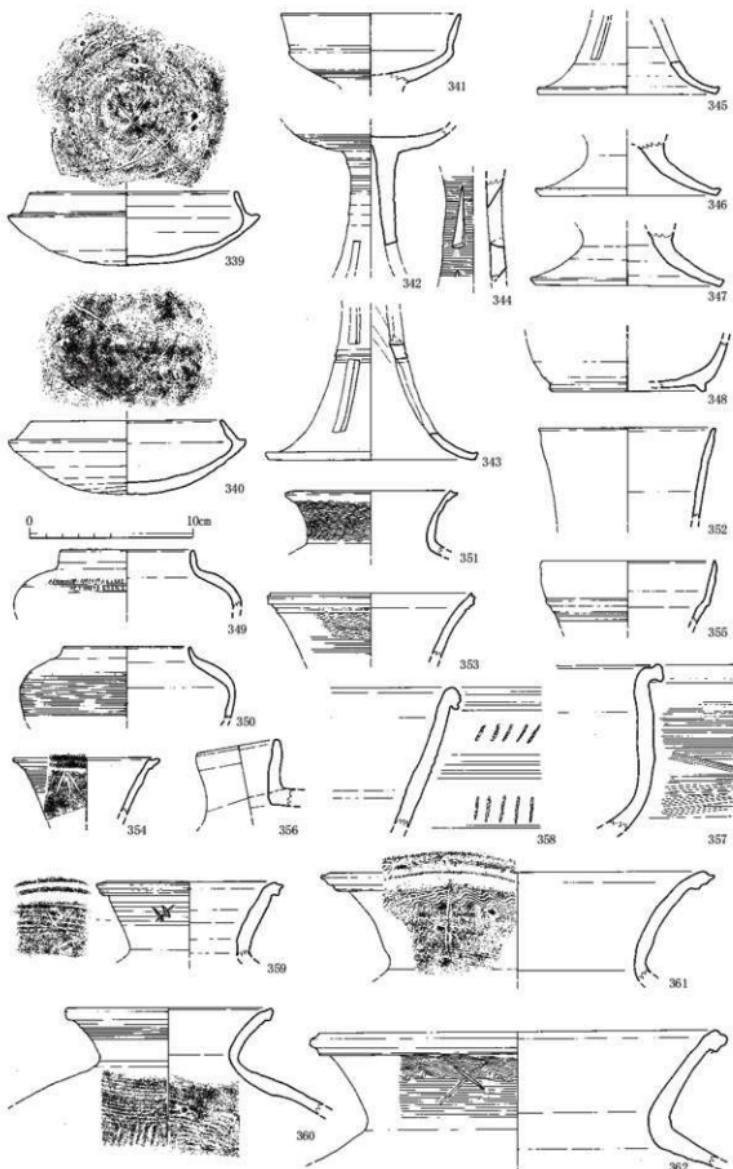
329～340 は坏身。340 はほぼ完形である。口径は 329～333 は 10.7～11.2 cm、334～339 は 11.5～11.9 cm、340 は 12.5 cm を測る。外形は 329・330・333・337 のように底部が深く丸みを持つものもあるが、331・332・334～336・338～340 のように扁平なものが多く見られる。立ち上がりは全体的に内傾するが、331・334 は高く、331・337 はさらに直立気味に作られる。底部外面の調整はいずれも回転ヘラ削りだが、331 は手持ちヘラ削りである。ヘラ記号は 330・338「×」、337「ヰ」、339「十」、340「！」が、336 は形状不明だが、いずれも底部内面に認められる。なお 330・334・338 には蓋受部に重ね焼きした蓋口縁部破片が付着する。334 についてはさらに底部外面にも重ね焼きした別の坏身底部片が付着する。

341～347 は高坏。341 は坏部の残存。長脚タイプか。底部は深めで、口縁部境に稜を作り、口縁部は外反する。底部外面にカキメを施す。脚部が接合した擬口縁が残る。342～344 は長脚。342 は坏底部～脚部中位の残存。坏底部外面と脚部上位にカキメ、中位に沈線を模した強めのナデを施し、下位には長方形の 1 段透かしを 3 方向に配する。343 は脚部下半。3 方向に長方形 2 段透かしを持ち、中位には 2 条の沈線が巡る。内面にシボリ痕がある。344 は中位のみ残存。外面前方にカキメが見られ、三角形の 2 段透かしが 3 方向に配される。345 は短脚か。長方形透かしが 3 方向に確認できる。346・347 は短脚高坏の脚部。いずれも坏部との擬口縫が露出する。

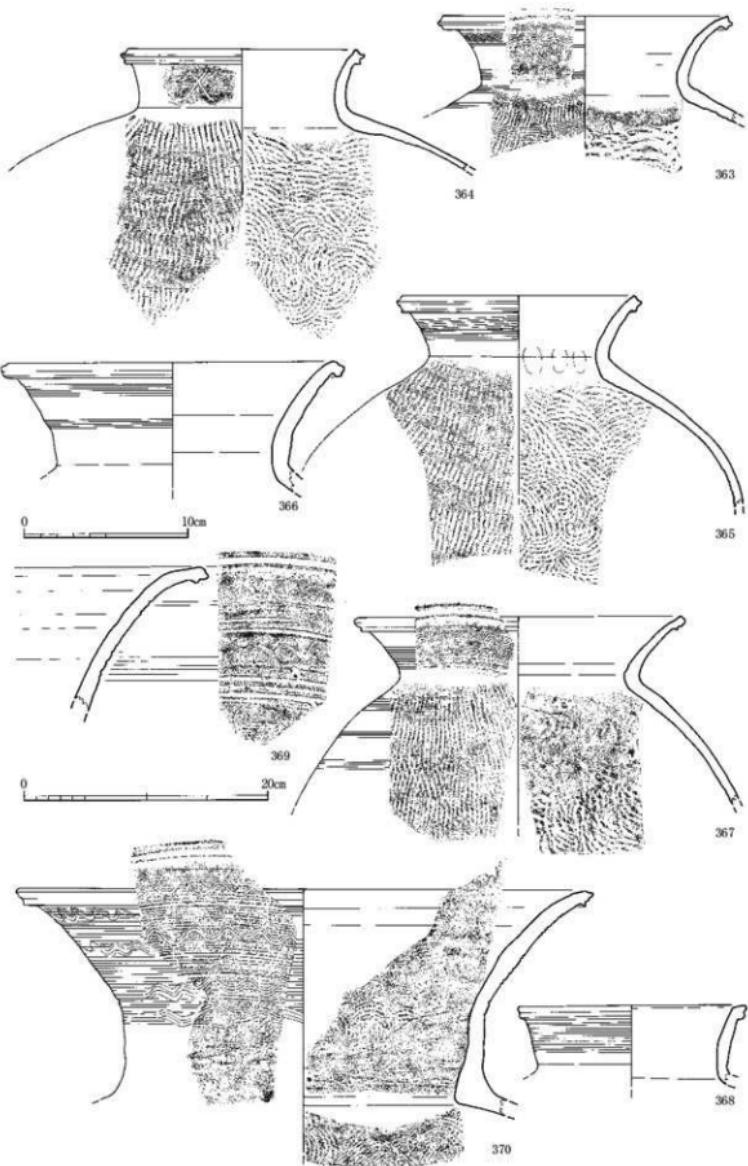
348 は窯跡とは時期が異なる坏身。底部隅に外に開く断面台形の短い高台が付く。



第29図 7号窯跡灰原灰層出土遺物実測図① (1/3)



第30図 7号窯跡灰原灰層出土遺物実測図② (1/3)



第31図 7号窯跡灰原灰層出土遺物実測図③ (1/3・1/4)

349・350は小型の短頸壺。349は肩部外面に刺突文と沈線、頸基部の外面に細い沈線状のナデを施す。350は口縁部が内傾する。体部中位外面にカキメ。351は壺の口縁部。外面に粗雑だが密な波状文を施す。口縁端部は上面に面を作る。352は長頸の壺か。基部は残らないが、残存する最下部でも径9cmと太く、わずかに外反しながら長く上に伸びる。353・354は壺又は瓶類の口縁部。354は外面にヘラ記号「△」を残す。355は腹の口縁～頸部。口縁部はやや内湾する。356は平瓶の口縁部。風船技法による蓋の痕跡が一部残る。357は鉢もしくは器台台部の可能性も考えられる。底部を欠くが、体部はわずかに内湾しながら直立し、口縁部は外に強く短く屈曲する。端部は上下にやや肥厚して作られる。体部外面にカキメ、底部外面には摩滅する格子目タタキ痕が認められる。358は器台台部の口縁部破片。外上方に直線的に伸び、端部は外に折り曲げられ、外面に稜を作り、外面には3条の沈線を挟む上下に列点文が巡る。

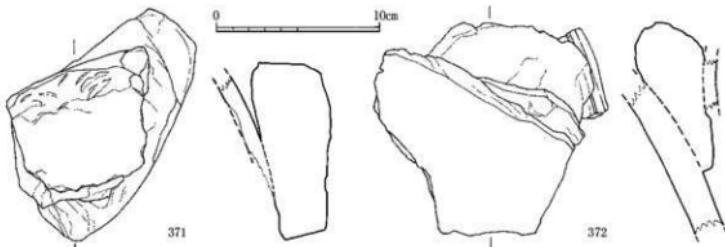
359～368は甕。359・360は小型の甕。359は外面にカキメとヘラ記号「▽」が残る。361は短く外反する口縁部。外面に波状文とヘラ記号「イ」、頸部付近にカキメが残る。362は強く外傾する直線的な口縁部。外面にカキメ・波状文とヘラ記号「×」を認める。363・364も口縁部外面にヘラ記号「×」を持つが、363は短く強く外反し、外面に波状文を施す。364は直立気味でやや外反する。365は短く外傾する口縁部に、外面カキメを施す。頸部内面に指頭圧痕を残す。367は外反しながら長く伸びる口縁部。367は短く強く外傾する口縁部。体部は肩を張らずに中位へと伸びる。368は短くやや外傾する口縁部。外面カキメを施す。壺の可能性もあるか。369・370は大甕。370は口径46.0cmを測る。口縁部外面はカキメ後波状文と沈線を施し、下位には一部格子目タタキ痕を残す。口縁部内面はヨコナデだが、中位まで同心円当て具痕も残る。

最終床面出土焼台（第32図、図版46）

最終床面直上からは、焼台として使用されたと考えられる被熱したこぶし大の石や粘土塊が多数出土した。取り上げについては特徴的なもの、特に製品の付着が認められるものに限り、そのうちここでは、焼台自体や付着した製品の状態の良いものについてサンプル的に紹介する。

371は平面長形で断面方形の石に須恵器甕の体部破片が付着する。体部破片の表面は大半が破裂するが、一部に同心円当て具痕が残る。割れ口は2次的な被熱を受けていない。石の表面は底部となる面を除いて強い熱を受け、暗褐色を呈して一部灰被りする。372は扁平な粘土塊の表裏に須恵器大甕の体部破片と甕口縁部の破片が付着する。粘土塊および須恵器破片は割れ口を含めて全面が激しく被熱し黒灰色となる。

以下に報告する3基の窯跡でも、焼台については同様にピックアップして報告する。



第32図 7号窯跡最終操業面出土焼台実測図（1/3）

8号窯跡（第33～35図、図版19～26）

窯跡は2区北西部の斜面上、7号窯跡前部の西約5mに位置する。前部の大半から下位は調査区外となり、検出した範囲は焚口以上である。標高は約40～47mで、排煙部に取り付く溝が7号窯跡の前部に切られる。遺構検出時に排煙口を確認したが、その斜面下方には7号窯跡の灰原が広がっており、窯体はやや遅れて検出した。

花崗岩バイラン土をトンネル状に掘り抜いた地下式の登窯（窖窯）で、既に調査済みの井手ヶ浦窯跡群の中では最も規模が大きい窯跡である。焚口～排煙口の窯体水平長は最終焼成面で約13.9m、一次焼成面で約13.7mを測る。主軸はN=20°～Wで、概ね南南東～北北西となる。平面プランは中ぶくらみの胸張り形で、焚口と排煙部が極端に狭くなる。天井部は大半が既に崩落していたが、焼成部入口付近と焼成部最奥部～排煙口で残存していた。だが焼成部の多くは、崩落した地山とその後の堆積土で厚く埋まり、地表から床面までの深さは、深いところで約2.9mに及ぶ。焼成部～排煙口の窯体は、被熱による変色で、窯内側から概ね青灰色、黄灰色、赤色に変化する。

貼床は砂質土からなり、燃焼部～焼成部のほぼ全面にわたって認められた。焼成部下位～中位にかけては最も厚く、最大22cmの厚さに計6面の操業面を確認した。燃焼部には貼壁は認められないが、焼成部下位の左右側壁には、スナ入り粘土の貼壁による補修の痕跡が一部窺われる。しかし既に窯壁が崩落して地山のバイラン土が露出する部分が多く、貼壁の範囲は把握できなかった。また、焼成部下位の左側壁に貼壁による2箇所の不自然な補修箇所が認められ、貼壁を除去したところ、中に被熱していない褐色土と甕片を主とする多量の須恵器片が充填された横穴を検出した。また排煙部は、7号窯跡と同じく、当初の操業時のものが改修され、最終操業時には約30cm長く繰ぎ足されていた。さらに排煙部より窯跡左側の斜面下方に伸びると想定される溝を検出したが、溝は長さ約5mで7号窯跡の前部に切られ、その先は確認できなかった。

焚口・燃焼部 上層に薄く堆積した7号窯跡灰原灰層（1層）を取り除き、褐色系の埋土（17・18・21層）を掘り下げたところ、暗灰色を呈して硬化した最終操業床面と、焚口付近で灰層（20層）を確認した。床面の焚口右側は調査区外となるため検出していない。最終面の燃焼部は、調査区境に接する焚口近くで幅1.0m、焼成部境幅1.3m、長さ2.6mで、床面の傾斜角は3°となる。貼床は5層に分層でき、厚さは4～7cmを測る。貼壁は認められない。左右の側壁面は概ね弱還元あるいは酸化して黄褐色～赤褐色を帯びるが、焼成部境近くの下部は灰色に還元する。一次操業面は最終面より更に幅が狭まる。焚口付近で幅0.9m、焼成部境幅1.0m、長さ2.2mで、床面傾斜角は4°を測る。床面は焚口側半分が酸化、焼成部側半分は半還元を受ける。

天井部は確認できないが、崩落の痕跡が土層に見られることや、焼成部入口上部の燃焼部に面する壁面が還元を受けていたこと、左右側壁がほぼ直立して立ち上がることから、上部は完全にオーブンに造られたようである。そして側壁の被熱状況から、焼成時には焼成部境を中心に閉塞されたと考えられる。

焼成部 上層には7号窯跡灰原灰層の下に、遺物（須恵器）をやや多く含む2～4層が堆積する。天井・地山崩落後の堆積土に流れ込む状況から、8号窯跡と直接関係するものではなく、斜面上方の7号窯跡に関係すると考えられる。特に3層は薄く伸びる黄灰褐色粘質土が遺物（須恵器）を多く含むもので、上下の堆積土と質が大いに異なり特徴的である。7号窯跡のメンテナンスや製品に関わる粘土であった可能性も考えられよう。窯体内には崩落した地山とその後の流入土が厚く堆積し、掘

り進むと天井崩落土（6・8・22・26～28層）、そしてその下層より青灰色の床面が現れた。

最終面の焼成部は中位で最大幅をとり幅2.2m、長さ10.2mとなる。床面傾斜角は燃焼部境の18°からやや弓なりに上がって焼成部上位で30°を測る。燃焼部から続く貼床は、焼成部下位で最も厚く重なり、上位に向かって薄くなるが、全面で確認できる。一次面でも中位が最大幅となり、幅2m、長さ11.5mを測る。床面傾斜角は燃焼部境の13°から弓なりに上がり、上位で30°となる。床面の被熱状況は燃焼部境近くで半還元となるが、概ねよく還元し、固く焼き縮まっていた。なお、下位の左壁で検出した2箇所の横穴は、内面が被熱しておらず、また中に不良品を充填する状況から、意図的に穿たれたものではなく、窯跡の操業期間中に不意に出来てしまった横穴で、応急的に内部を埋めて、表面を貼壁で補修したものと考えられる。横穴が出来た理由については、地山に含まれる石塊が、転がり落ちて出来た可能性がある。8号窯跡の焚口や、9号窯跡でも花崗岩バイラン土の地山に、花崗岩の比較的大きな石塊が残っている場合が散見され、壁面に露出していた石が外れて、痕跡の穴が残ったのではないだろうか。

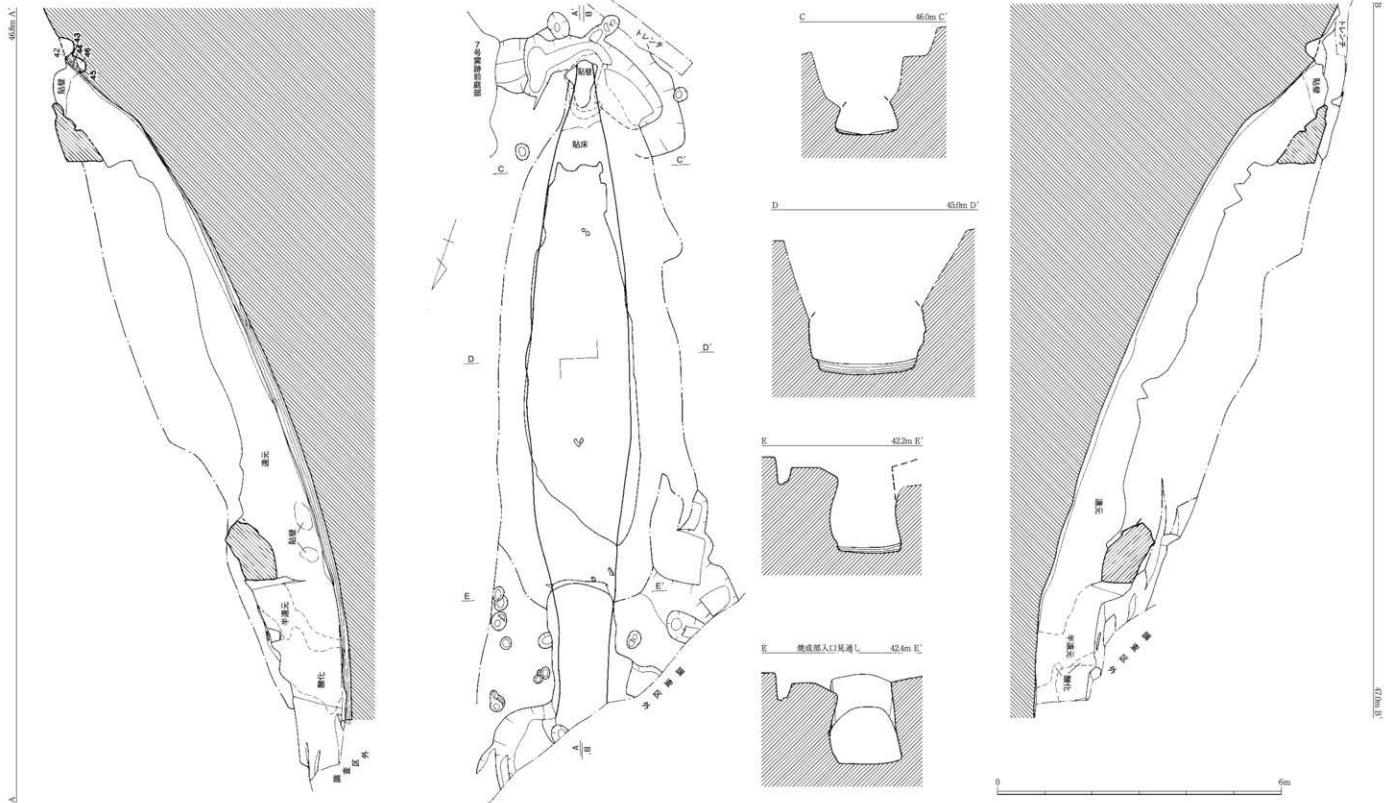
天井部は焼成部入口付近と最奥部で残る。前者は燃焼部境より長さ1.4m残存する程度だが、床面からの高さは燃焼部境の0.9mから、焼成部側で1.45mと大きく広がり、後者では高さ1.2mとなる。床の幅、天井の高さとも、燃焼部・排煙部近くで狭く、焼成部で広く造られたことが窺える。

奥壁・排煙部 奥壁は焼成部上位から、傾斜を強くしてほぼ直線的に斜めに立ち上がり、明確な煙道を持たずには排煙口に至る。幅は奥壁最奥部で最も狭まり幅0.26m、傾斜は50°を測る。7号窯跡と同じく、奥壁より続く排煙口付近は補修を受け、最終操業時の排煙口は、一次操業時の排煙口に壁が繋ぎ足され、排煙部自体が奥上方に延びる形で検出した。このため長さは最終面で1.3m、一次面で1.0mとなる。奥壁の傾斜は補修前後でほぼ変わらず、補修の時期は不明である。

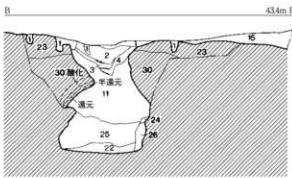
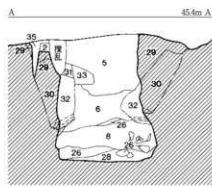
排煙部溝 排煙口のすぐ後方に溝を検出した。窯体の左側を通り、斜面下方に伸びると想定されるが、残存長約5mのところで7号窯跡の前庭部に切られ、その先は失われる。残りの良いところで上端幅1.15m、底部幅0.4m、深さは0.4mを測る。埋土に炭化物や焼土塊が多く含んでおり、窯体付近の堆積土がさらに移動して埋まったものと考えられる。また7号窯跡と同じく、排煙部改修の際に当初の溝を埋めて窯体が延長されるが、8号窯跡では排煙口検出の際に背部の埋土を掘削してしまい、土層観察ができなかった。このため7号窯跡同様、最終操業時には埋められていた可能性もあるが、不明である。もし最終面にも存在したならば、排煙部の改修に合わせて溝も掘り直され、第33図のように排煙口に直接取り付き、底部は排煙口よりも低くなる。一次面検出の溝も排煙口に直接取り付き、底部は低くなる。

前庭部 大部分が調査区外にあたるため、検出したのは焚口付近左側の一部である。上層に堆積する7号窯跡灰原灰層（1層）の下層に褐色系のしまりのない堆積土（19層）があり、それを除去したところ、操業に伴う灰層の堆積（20層）を確認し、灰層の下面を最終面の前庭部として検出した。前庭部は焚口より大きく開き、方形に近いプランとなる。調査区外の右側も上端では外に開くプランが確認できるため、同様のプランを想定すると、幅は約4m、床面では約2.8mとなる。左側の開く部分の床面は高さ8cm程の低いテラスとなり、灰層・貼床は見られない。また床面には径40cm、深さ10～20cmのピット1基を検出した。一次面は床面が8cm程低くなる以外は詳細不明である。

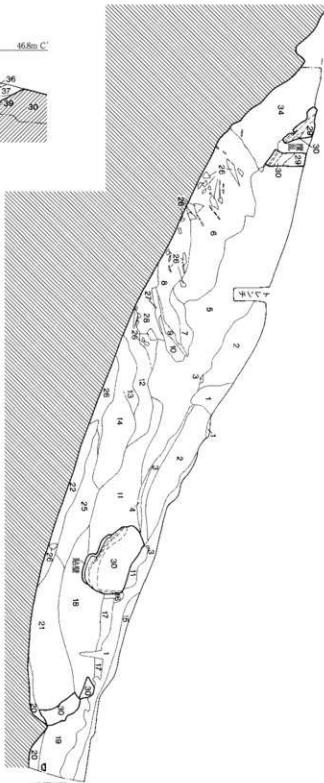
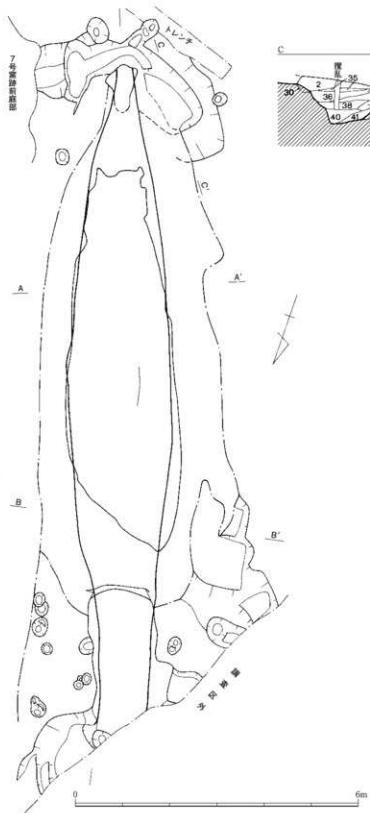
灰原 燃焼部と前庭部で灰層の一部（20層）を確認したのみで、検出していない。大半は斜面下方の調査区外に続くと考えられる。



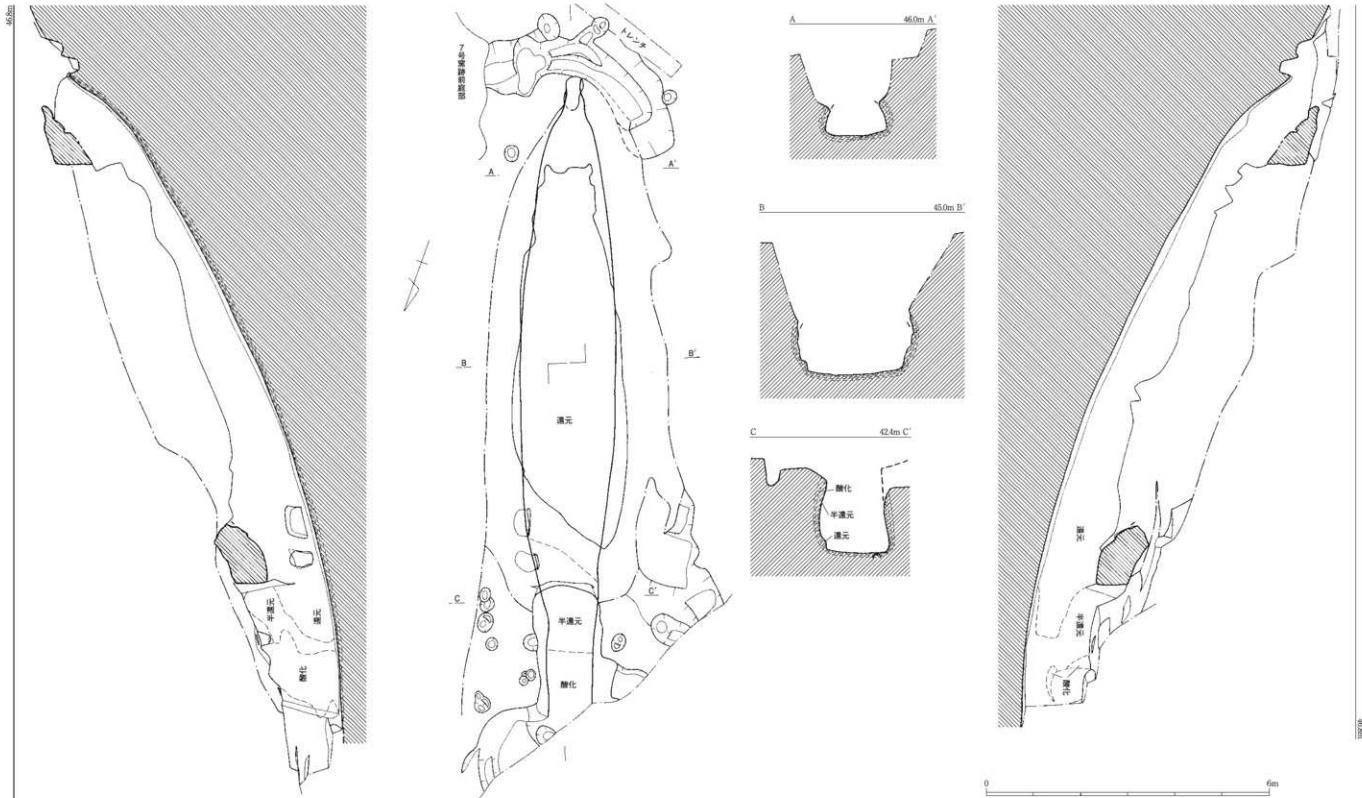
第33図 8号窯跡最終操業面実測図 (1/80)



（8号窑出土属名）
1. 瓷名：黑釉瓷碗（1件）；2. 植物名：杏仁（1件）



第34図 8号窯跡土層実測図 (1/80)



第35図 8号窓跡一次操業面実測図 (1/80)

出土遺物

貼床・貼壁内出土遺物（第36図、図版46）

373～389は燃焼部・焼成部の貼床内および、焼成部下位の左壁で検出した横穴内より出土した。いずれも須恵器である。

373～380は坏蓋。残存状況は377が口縁部を欠き、374は1/2強、他は全て1/3以下である。口径は373・374・378・379は12.8～13.2cm、375・376・380は14.0～14.2cmを測る。377も残存部から想定すると14.0cm以上となる。全体の外形は概ね口縁部が高く、深い形状となるが、373は扁平である。天井・口縁部の境は、378・380では最も強く強い沈線により明瞭だが、377は浅い沈線、他は屈曲によって判断される。口縁端部は、ほぼ内側に内傾もしくは沈線状の段を作るが、374は外向きに面を取る。またいずれも天井部外面には回転ヘラ削りが施されるが、376は手持ちヘラ削りである。ヘラ記号は373「○」、375「×」が天井部内面に確認できる。

381～385は坏身。384は完形、381は1/2、他は1/4以下の残存である。口径は381が10.0cm、382～384は12.0～12.6cmで、385は13.0cmを測る。底部はいずれも深く丸みを持つ。立ち上がりは全体的に内傾するが、382・384は直立気味に高く作られる。口縁端部に段はない。ヘラ記号は382「×」、383「|」、385「+」が底部内面に施される。

386は高坏。坏部1/3が残存する。長脚タイプか。底部は深く、口縁部境に稜を作り、口縁部は外反する。底部外面に列点文が巡る。387は壺の体部。中位～下位が残る。外面下位に平行タタキ痕と全体にカキメ、内面下位に同心円當て具痕が認められる。388は甕。頸部は緩やかに曲がって外反する口縁部へ続く。外面は頸部を除く残存する全体にタタキ後カキメが残り、体部内面の同心円タタキは後ナデ調整される。389は大甕。口縁部1/4が残存し、口径42.6cmを測る。頸部から直立した後外反する。外面はカキメ後沈線・波状文が施され、内面には同心円當て具痕を残す。

最終床面出土遺物（第36図）

390～393は最終操業時の床面直上から出土した遺物。いずれも須恵器である。

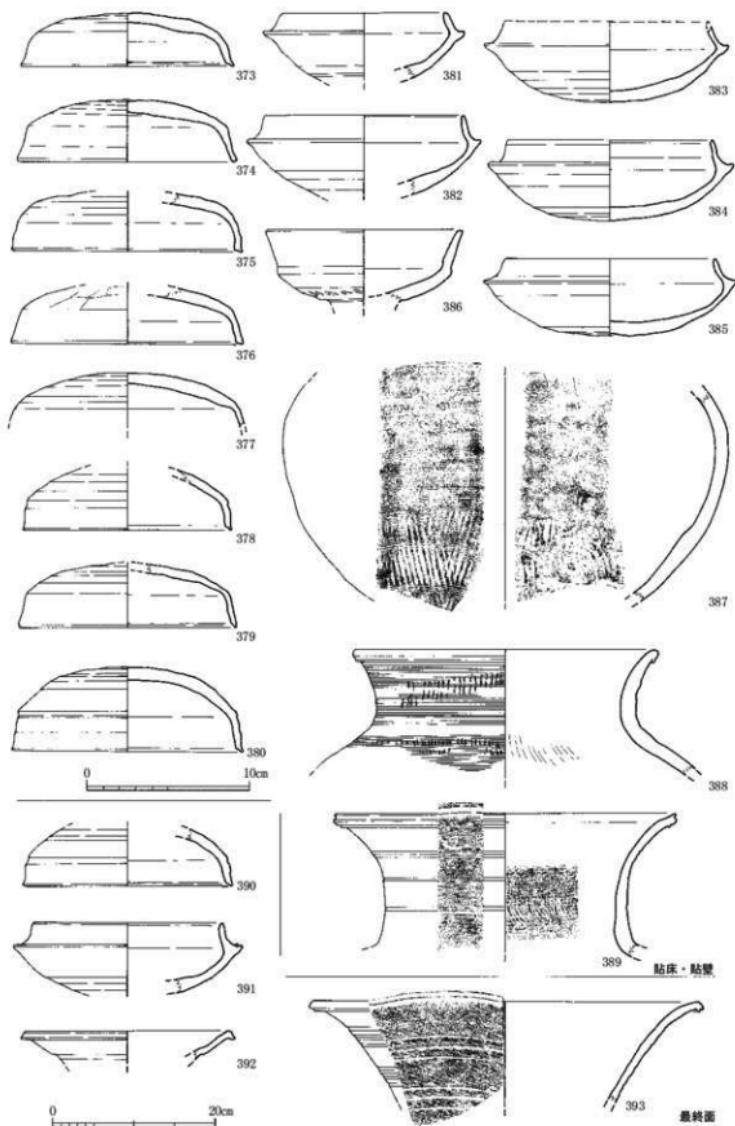
390は坏蓋。1/4の破片で天井部を欠損する。口径12.6cm。天井・口縁部境に強い沈線を持ち、口縁端部内側は沈線状の段となる。天井部内面には形状不明のヘラ記号が残る。391は坏身。1/3の残存で底部の中央を欠く。口径は11.6cmを測る。立ち上がりはやや内傾するが、直立気味になられる。392は甕の口縁部破片。頸部境に沈線が巡り、口縁部は大きく開く。393は大甕の口縁部破片。大きく外反し、口径は49.0cmを測る。外面にカキメ後沈線・波状文を施す。

燃焼部灰層出土遺物（第37図、図版46）

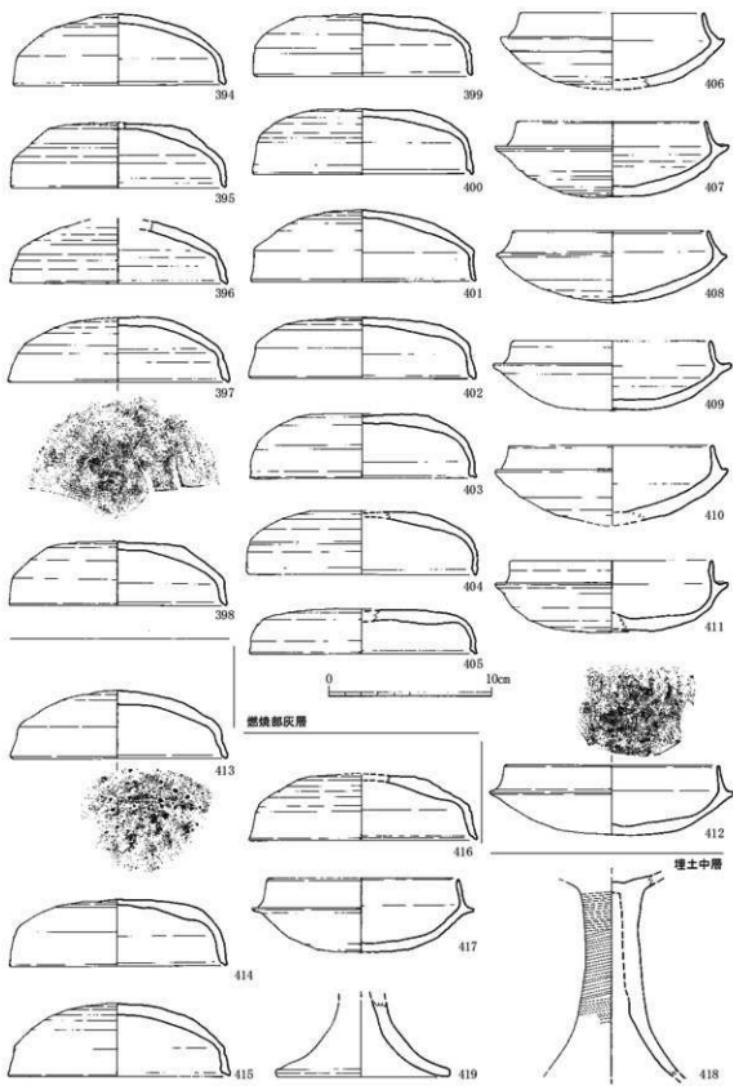
394～412は燃焼部20層の出土遺物。全て須恵器である。

394～405は坏蓋。401は残存良好で、394はほぼ完形だが焼け歪む。395・397・400・403は1/2が残存するが、他は1/4以下の破片である。口径は394～400が12.8～13.6cm、401～405は13.8～14.2cmを測る。全体の外形は概ね口縁部が高く深い形状だが、405は顯著に扁平である。天井・口縁部の境は、多くが屈曲または浅い沈線によって判断され、稜や強い沈線は401・402で認められる。口縁端部内側には内傾もしくは沈線状の段が施される。ヘラ記号は397「+」、399「×」、402・405「×」、403「+」と、形状不明だが395・396・398・400で、天井部内面に認められる。

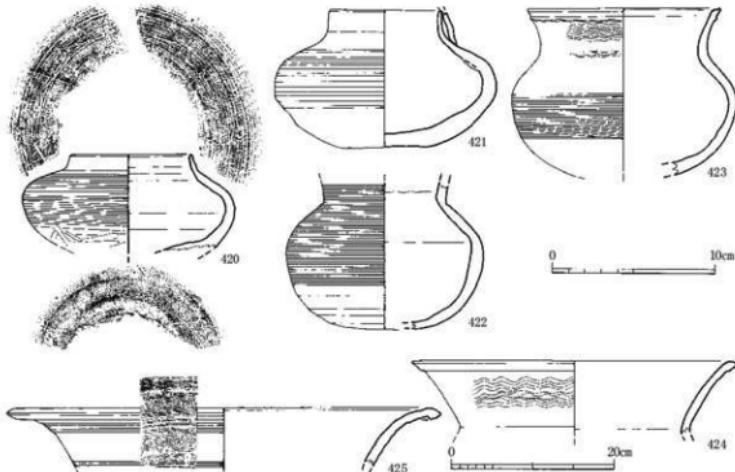
406～412は坏身。406～408・410は1/2、他はそれ未満の残存である。口径は406・407は11.8cm、408～411は12.2～12.6cm、412は13.1cmを測る。全体的に底部は深く作られ、特に411は顯著



第36図 8号窯跡貼床・貼壁内・最終操業面出土遺物実測図 (1/3・1/6)



第37図 8号窯跡窯体内出土遺物実測図① (1/3)



第38図 8号窯跡窯体内出土遺物実測図② (1/3・1/6)

である。立ち上がりは概ね内傾するが高く、410・411は直立する。ヘラ記号は407「○」、410・412「×」、411「++」と、形状不明だが406で天井部内面に認められる。

窯体内埋土中層出土遺物（第37・38図、図版46）

413～425は窯体内埋土中層から出土した。全て須恵器である。

413～416は坏蓋。413と415は1/2、他は1/3の残存である。口径は13.0～14.0cm。外形は概ね口縁部が高く天井は深い。天井・口縁部境は、415は不明瞭な稜、414・416は浅い沈線を持つ。413は屈曲による。口縁端部内面は内傾もしくは沈線状の段となる。いずれも天井部内面にヘラ記号がある。413「++」、414「||」、415「十」、416「△」。また414は口縁端部に身との重ね焼き痕が残る。

417は坏身。1/2が残存する。口径は11.8cm。底部は深く、立ち上がりは直立気味に高く作られる。口縁部外面に重ね焼きに伴う蓋口縁部片が付着する。418は長脚高坏の脚部上半。外面にカキメとシボリ痕が見られる。419は短脚高坏の脚部下半。内面2カ所に「||」、外面1カ所に「|」のヘラ記号が刻まれる。

420・421は小型の短頸壺。420は底部中央を欠くが、他は2/3が残存する。外形は扁平で、口縁部は内傾する。体部外面にカキメ、底部外面に手持ちヘラ削りを施す。肩部外面の全体にヘラ記号「×」を連ねて巡らすほか、底部内面にも「×」を記す。肩部外面に蓋の重ね焼き痕を残す。421は口縁部がやや直立する。体部外面中位にカキメを施す。口縁部外面に重ね焼きによる蓋口縁部片が付着する。422・423は小型の広口壺。422は体部が丸く口縁部を欠くが、頸部から外傾して直線的に伸びると思われる。外面頸部～体部中位にカキメを施す。423は体部がやや扁平で、口縁部が外反する。外面口縁部に波状文、頸部に爪形文を巡らし、体部中位にカキメを施す。424は壺又は甕の口縁部。短くやや外反する。外面に波状文が巡る。425は大甕の口縁部上半。大きく外反する。外面に波状文・沈線を施す。

窓体内埋土上層出土遺物（第39図、図版46・47）

426～437は8号窓跡の埋土上層（2～4層）から出土した。全て須恵器である。この上層は先述のように、8号窓跡とは直接関係せず、7号窓跡に關係するものと考えられる。

426～430は坏蓋。428はほぼ完形、427も2/3が残る。他は1/3以下。口径は428が13.9cmで他は12.3～13.2cm。426～429は扁平で天井は低いが、430は口縁部が高く、全体の外形も深い。430は特に作りが丁寧である。口縁・天井部境は、426・427・430では明瞭な稜や強めの沈線で分かれるが、429は浅い沈線、428は屈曲で判断される。427の沈線は一部で2重になる。口縁端部内面はいずれも沈線状の段となる。ヘラ記号は427以外に認められ、いずれも天井部内面に426「||」、428「C」、429「\」と、形状不明だが430に認められる。431～433は坏身。431は完形で口径10.5cm、他は残存1/4で口径は11.0～11.4cm。433は底部が深めだが、他は扁平な形状で、立ち上がりはいずれも内傾が強い。433は蓋受部に蓋との重ね焼き痕が残る。ヘラ記号は432「+」と433「x」が底部内面に刻まれる。

434・435は短頸蓋。434は小型の製品で、体部中位で最大径14.9cmを測る。口縁部は短く内傾する。肩部外面に上下2段の刺突文が巡る。また重ね焼きに伴う蓋口縁端部片が付着する。435は口縁～体部中位1/4が残り、口径は11.6cmを測る。口縁部は直立する。体部外面にカキメの後、上から波状文、刺突文3段と沈線1条を挟んでさらに波状文が確認できる。436・437は甕。436は口径14.8cm。体部は肩が張り、上位に最大径を取る。口縁部はやや外反する。口縁部外面に粗雑な波状文が2条、体部外面の上位～中位にカキメが施され、肩部には点状の刺突文が認められる。また体部内面の下位には同心円当て具痕が残る。437は肩が張らず、中位が最大径となる。口縁部外面にカキメと粗雑な波状文、体部外面にもカキメが施される。

前庭部出土遺物（第40図、図版47）

438～452は前庭部から出土した。全て須恵器である。このうち441・446・447は灰層（20層）出土である。

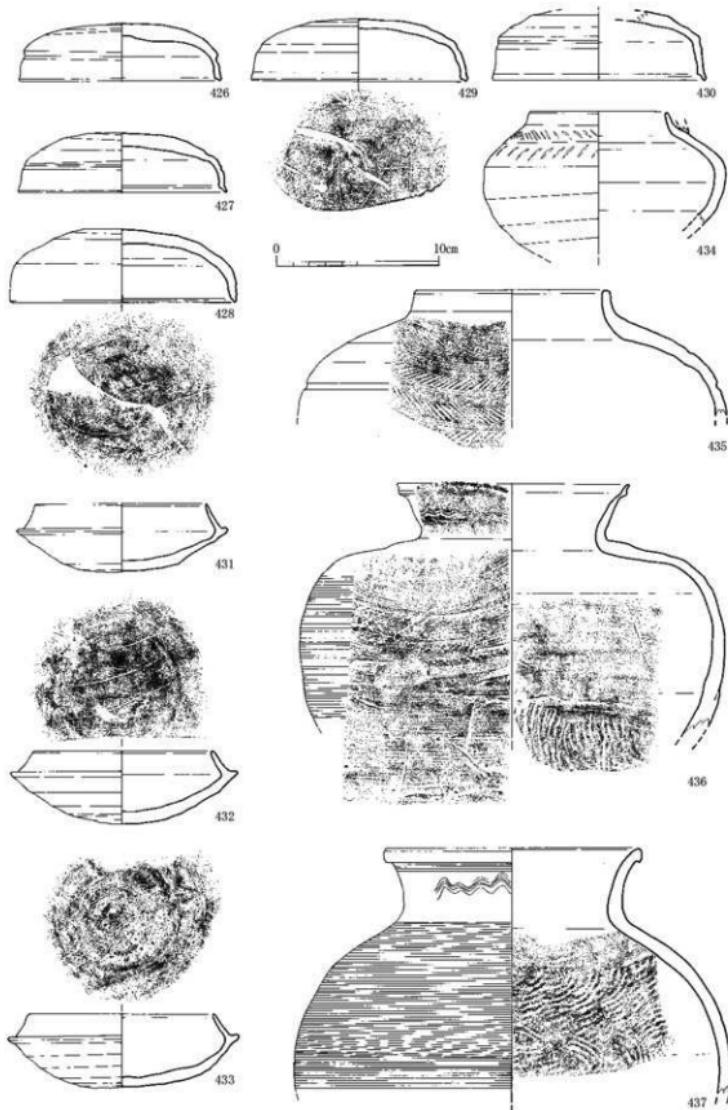
438～443は坏蓋。439・440・442は残存が1/2以上、他はそれ以下である。口径は438～440が12.8～13.2cm、441～443は13.8～14.0cmを測る。全体の外形は438が顎著な扁平であるほかは、口縁部が高く深い形状となる。天井・口縁部境は、439～441では明瞭な稜あるいは深い沈線だが、442・443は浅い沈線、438は屈曲による。口縁端部内側はいずれも内傾または沈線状の段となる。ヘラ記号は438「◎」と440「+」が天井部内面に見られる。

444～447は坏身。445・446が1/2残る。口径は444が11.0cm、他は11.5～12.2cm。全体の外形は444・445は底部が丸く深い。一方446・447は全体的に扁平である。立ち上がりは444で内傾が強いが、445・446は高く直立する。ヘラ記号は444「+」、447「+」が底部内面に刻まれる。

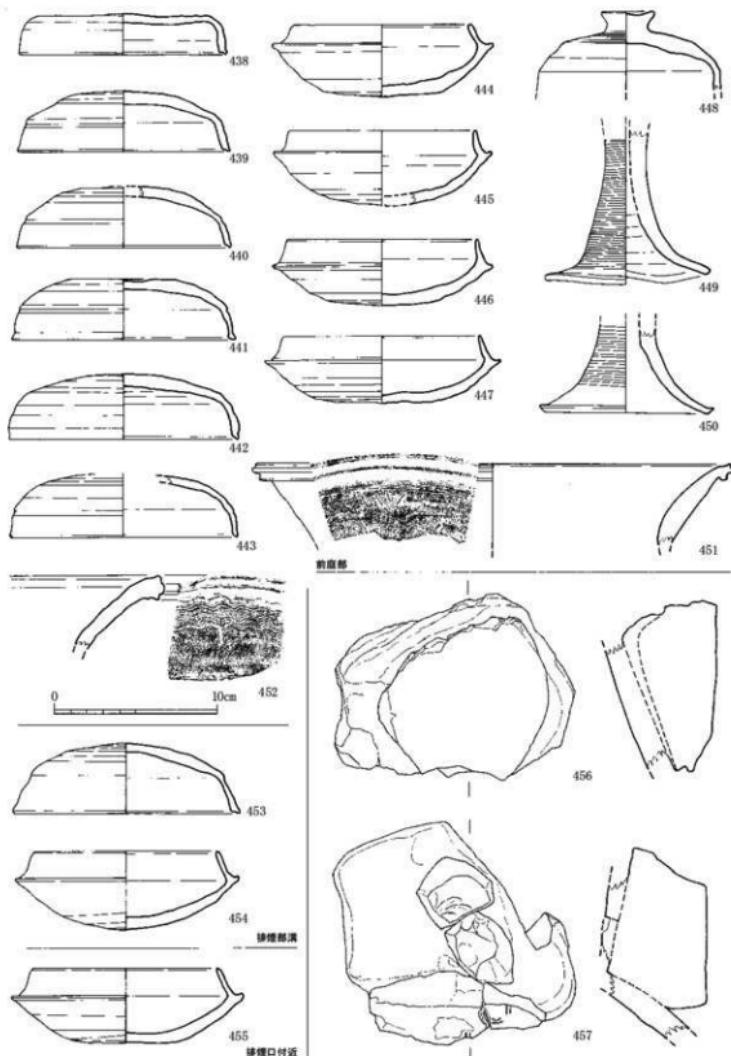
448は高壺の蓋。口縁部を欠くが、天井部の残存は良好である。高い口縁部と丸い天井部で、全体的な形状は深い。天井部外面にカキメを施し、中央にはつまみが付く。つまみは径3.1cm。449・450は高壺の脚部。いずれも外面にカキメを施す。449は長脚タイプで、脚端部が大きく焼け歪む。450は短脚か。451・452は甕の口縁部。451は短く外反し、端部は上・外・下に稜を作る。外面にヘラ記号「x」を記す。452は上半の破片。外面に波状文が巡り、ヘラ記号「|」が残る。

排煙部出土遺物（第40図、図版47）

453・454は排煙部に取り付く溝埋土下層から、455は窓体外の排煙口付近から出土した。いずれ



第39図 8号窯跡埋土上層出土遺物実測図 (1/3)



第40図 8号窯跡前庭部・排煙部出土遺物・最終操業面出土焼台実測図 (1/3)

も須恵器である。

453は壺蓋。全体的に深い外形で、口縁部は高いが「ハ」字状に開く。天井・口縁部境は屈曲によつて分けられ、口縁端部内面には低く内傾する段が付く。454・455は壺身。いずれも残存状況は良い。外形はやや扁平で、立ち上がりは高いが内傾する。454は蓋受部に重ね焼き痕を残す。

最終床面出土焼台（第40図、図版47）

456は断面不整三角形の石に須恵器甕の体部破片が付着する。甕片と石の間には粘土が貼られ、粘土の表面は溶けて流れたようになる。甕片の表面は強く被熱するが、わずかに同心円當て具痕が確認できる。割れ口は2次的な熱を受ける。石の表面は底部となる面を除いて強い熱を受け、甕片を含む被熱面は暗灰色～暗灰褐色を呈する。457も断面方形の石に須恵器甕の体部破片が付着する。こちらは石と破片の間に粘土は認められない。甕片の表面には一部、同心円當て具痕が残る。また2次的な熱は受けおらず、表面・割れ口とも明青灰～灰色を呈する。石の表面は底部となる面を除いて広い範囲が灰を被り、黄灰色となる。

9号窯跡（第41～43図、図版5・27～32）

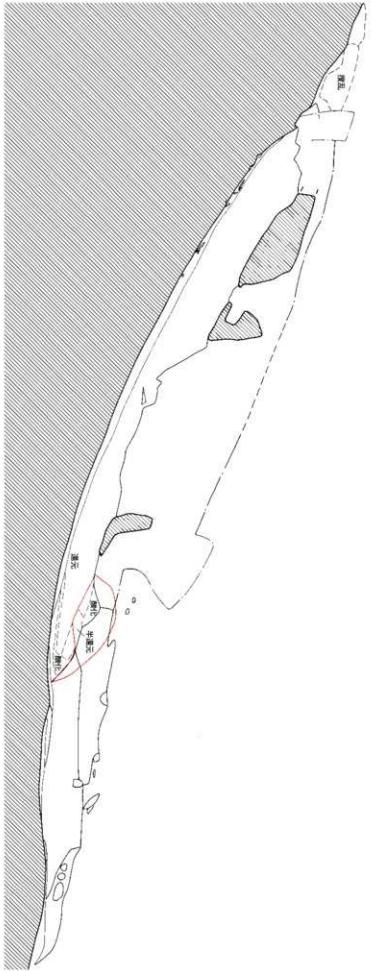
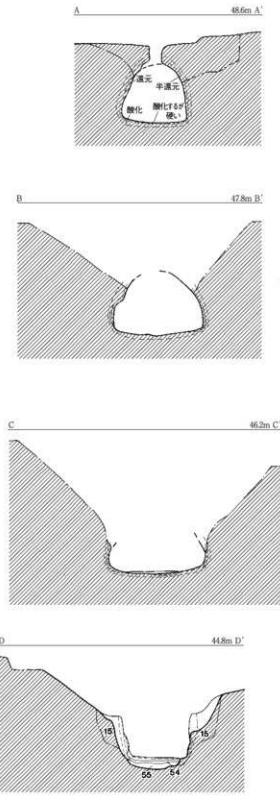
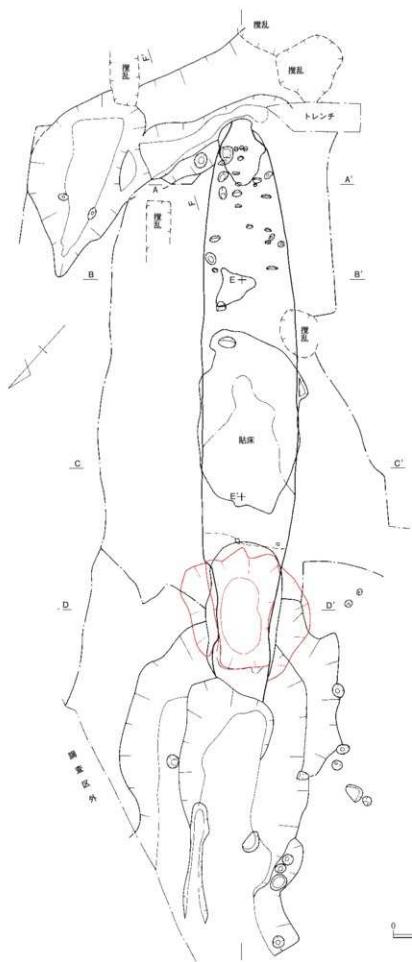
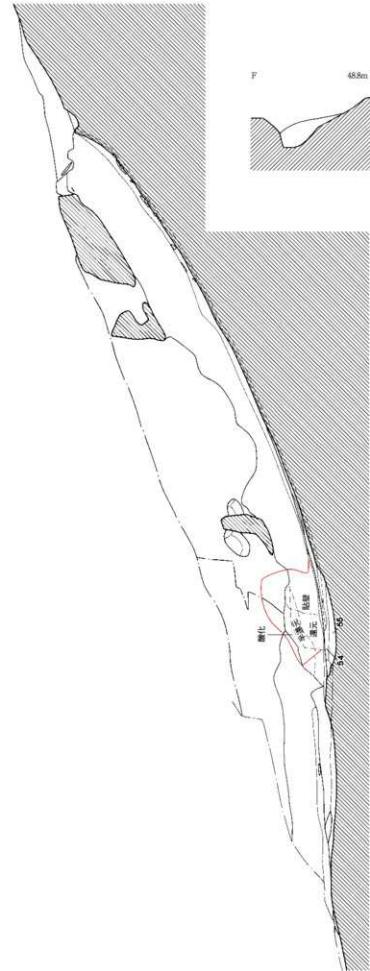
窯跡は2区東部の斜面上、7号窯跡の北東約12m、SX2の東1.5mに位置する。今回検出した4基の窯跡のうち唯一他の窯跡から距離を置いて築かれている。標高約42～49mと、7号窯跡に次いで高い位置にあり、窯跡のすぐ後ろはやはり丘陵の尾根となる。斜面下方で遺物が散布していたことから、早い段階で窯跡の存在が想定されたが、表土剥ぎ・遺構検出時には明確な遺構を認識できず、谷下部グリッドの掘削で灰層を確認したことで、窯跡の位置を認識できた。その後排煙部周辺を検出して掘削を始めたが、燃焼部付近は掘削土を運ぶ作業路下となっていたため、最後に掘削を行っている。

花崗岩バイラン士をトンネル状に掘り抜いた地下式の登窯（窑窟）で、焚口～排煙口の窯体水平長は約12.2mを測る。主軸はN-42°-Wで、概ね南東～北西となる。平面プランは中ぶくらみの胴張り形で、焚口と排煙部がやや狭くなる。天井部は焼成部の中位のほか、燃焼部境と排煙口付近で既に崩落していたが、焼成部下位の一部と上位で残存していた。だが焼成部の多くは、崩落した地山とその後の堆積土、あるいは排煙口からの流入土で厚く埋まり、地表から床面までの深さは、深いところで約2.4mに及ぶ。焼成部～排煙口の窯体は、被熱によって概ね内側から青灰色、黄灰色、赤色に変色する。

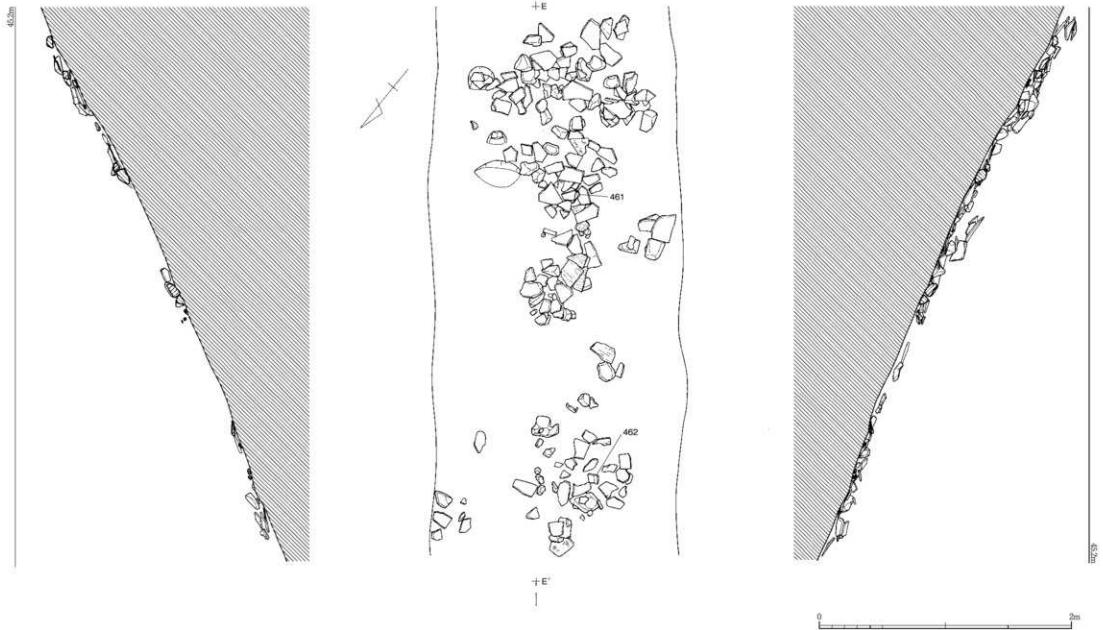
貼床は砂質土で燃焼部～焼成部中位にかけて認められた。燃焼部の最も厚い所で8cm、操業面は2面であり、他の3基の貼床が5枚～8枚、22～48cmの厚さであるのと比べると、9号窯跡があまり使用されないうちに、天井が崩落して廃窯されたことが想像される。燃焼部の貼床下層では、舟底状ピットを検出した。貼壁は燃焼部左右の側壁にみられた。焼成部下位～中位の最終操業面からは、甕を主体とする製品破片や焼台がまとまって出土した。最終操業後、一部の製品が窯内に残っている状態で、天井部が崩落したものと考えられる。また焼成部上位の床面には、製品を安定させて据えるためと考えられる小ピットが不規則に配されていた。排煙部では、窯跡左側の斜面下方に伸びる溝を検出した。

焚口・燃焼部 上層に堆積する褐色土（4・11・46層）を取り除き、遺物や焼土塊を含むしまりのない暗褐色土（12・47層）を掘り下げると、黒色の灰層（48層）が現れた。その下面を燃焼部床面

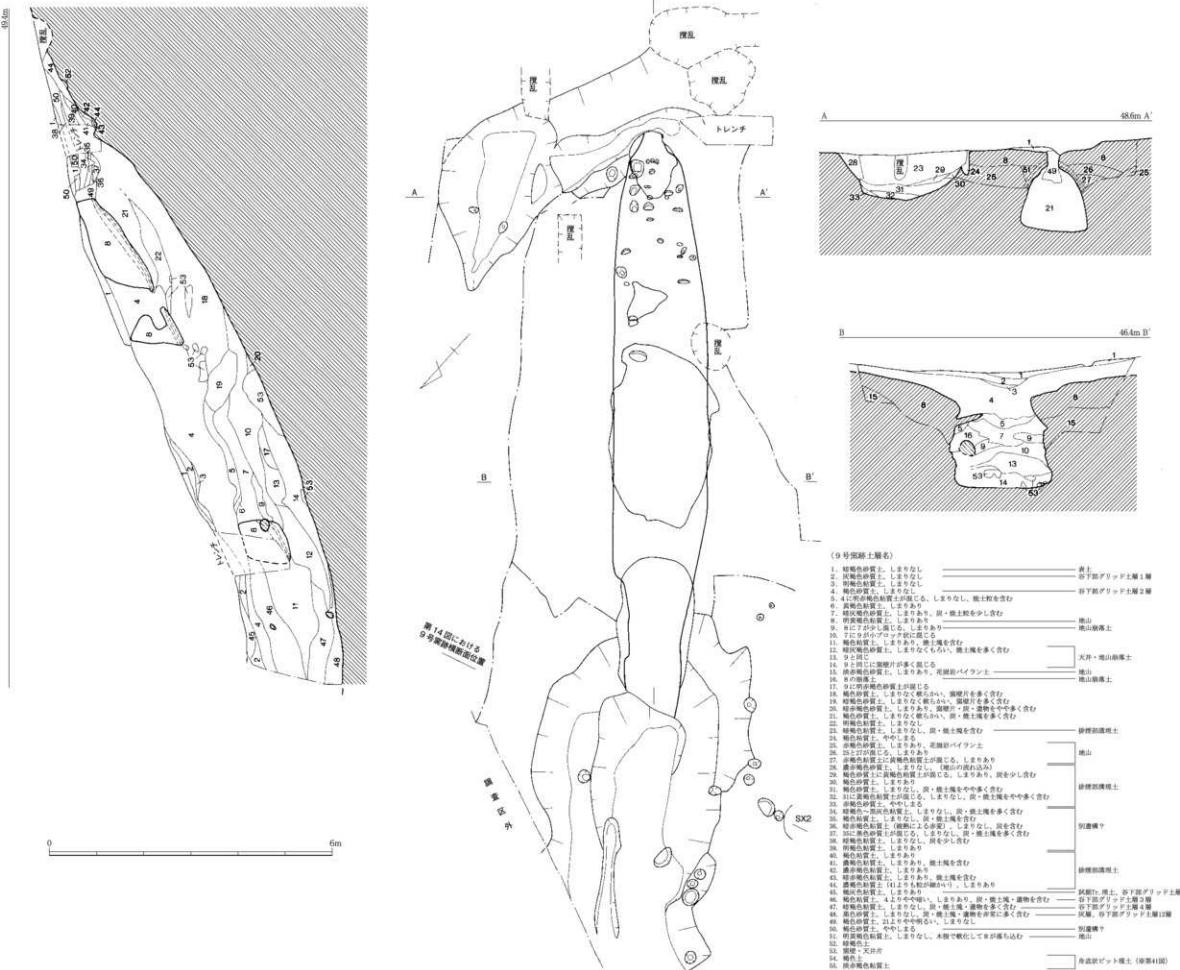
40 km



第41図 9号窯跡実測図 (1/80)



第42図 9号窯跡最終操業面遺物出土状況実測図 (1/30)



第43図 9号窓跡層実測図 (1/80)

として検出した。

最終面の燃焼部は焚口近くで幅 1.0 m、焼成部境幅 1.3 m、長さ 2.5 m で、床面の傾斜角は 10° となる。床面の大半は弱い還元を受けて灰色を帯びるが、焚口付近では被熱の跡は見られない。貼床は上半部に 1 枚確認され、厚さは 8 cm を測る。一次操業面は、幅は最終面と変わらないが、長さが 2.9 m と伸び、床面傾斜角は 8° を測る。さらに貼床を除去した下層では舟底状ピットを検出した。操業面からの深さは 27 cm で、2 層の理土 (54・55 層) からなる。平面プランは長軸 2.6 m × 短軸 1.1 m の楕円形で、床面に被熱の跡は見られない。焼成前に埋められたと考える。貼壁は左右側壁に確認できた。切り合い関係から、舟底状ピットを埋める過程で構築されていることが分かる。壁面は焼成部から続く還元面が、次第に細くなりながらも中央部付近まで伸びる。

天井部は確認できなかったが、崩落の痕跡が焼成部に近い一部の土層に見られるのみであることや、左右側壁の立ち上がり、及び被熱状況から、やはり上部はオープンに造られ、焼成時には焼成部境を中心で閉塞されたと考えられる。

焼成部 埋土下層の天井・地山の崩落土 (13・14・53 層) や排煙部からの流入土 (18 層) を取り除くと、甕片・焼台を中心とする多量の遺物と、その直下に強く還元して青灰色を帯びた床面を検出した。

最終面の焼成部は中位で最大幅をとり幅 2.0 m、長さ 9.2 m となる。床面傾斜角は燃焼部境の 16° から弓なりに上がって焼成部上位で 35° を測る。焼成部の傾斜は、他の 3 基と比べて最も強い。燃焼部から続く貼床は、焼成部下位の一部で 2 枚となるが、全体的には 1 枚が薄くなりつつ中位まで広がる。薄い貼床のため一次面でも幅は最終面と変わらないが、長さは 8.8 m、燃焼部境の床面傾斜角は 18° となる。床面の被熱状況は燃焼部境近くで半還元となるが、全体的には還元して固く焼き締まる。但し焼成部上位の床面は焼成温度が低かったようで、赤みを帯びている。また焼成部上位の床面には、最小径 8 cm、最大径 38 cm のピット（中には「L」字状にカットされたものもある）26 個を検出した。焼台と同様、焼成する製品を急斜面に安定して据える目的があると考えられる。ピットの配置は不規則で、ピット内部は熱を受けていない。

焼成部中位の右側壁に不自然な横穴があるが、8 号窓跡焼成部でも述べたように、花崗岩バイオレン土の地山に含まれる石塊が転がり落ちて出来たもので、9 号窓跡では特に修復しなかったものと考えられる。横穴内部は周囲の壁面同様に良く還元を受けている。このほかにも見通し図や土層図に示したように、焼成部下位の天井残存部で地山中から花崗岩の石塊が出てきている。

天井部は燃焼部下位の一部と上位の大半で残る。焼成部の高さを計測すると、燃焼部境近くで最終面より 0.7 m、その 0.7 m 奥で 0.84 m、焼成部中位付近で 1.2 m、上位で 1.3 m を測る。他の 3 基同様、燃焼部近くは幅・高さとも狭く造られるが、排煙部近くの絞りは、7・8 号窓跡に比べて緩い。

奥壁・排煙部 奥壁は焼成部上位から、傾斜を強くしてやや弓なりに立ち上がり、明確な煙道を持たずに排煙口に至る。幅は排煙口で最も狭まり幅 0.4 m、傾斜は焼成部境で 50° 、奥壁上半は 60° ~ 70° を測る。天井部は最奥部・排煙口が欠損する。

なお排煙部付近の埋土について、土層図では排煙口から窓体内に流入したと考えられる堆積土 (21・49 層) や排煙部の堆積土 (40 ~ 44 層) を切り込む不整合面が確認できる (34 ~ 39・50 層)。被熱により赤変する層 (36 層) や、炭化物・焼土塊を多く含む層 (34・37 層)などを含むが、層位的に 9 号窓跡の操業に関連するとは考えにくい。平面的に排煙部の埋土上層との差異を認識できなかつ

たため、窓跡と一連に掘削してしまったが、9号窓跡の埋没後に形成された遺構の可能性がある。

排煙部溝 排煙口のすぐ後方に溝を検出した。窓体の左側に巡り、斜面下方に伸びる。排煙部後方から右側は擾乱やトレーンで失われるが、全長は約7m余に復元できることと考えられる。排煙部の大規模な掘り込みを含めると、幅は2m前後にもなるが、溝本体は上端幅0.6~1.0m、底部幅0.14~0.78m、深さは深いところで0.6mを測る。窓体左側の先端側4m程は不整長形の土坑状に一段掘り込まれており、土層断面上で上端幅は2.7m、底部幅0.9m、深さ1.0mを測る。下層の堆積土に炭化物や焼土塊が多く含んでおり(31・32層)、窓体付近の土が移動して埋まつたものと考えられる。排煙口に直接取り付き、底部の高さは排煙口よりも低くなる。

前庭部 谷下部全体に広がる堆積土(2・4層)と中層の褐色土(46・47層)除去すると、燃焼部から続く灰層(48層)が現れる。この下面が前庭部床面である。

前庭部は焚口より大きく開き、やや乱れた半円形となってそのまま斜面下方に伸び、ややしほんだ後に左右の裾が「ハ」の次状に開いて終わる。最大幅は4.7m。内部の左右にテラスや屈曲を持ち、焚口直下には不整方形の凹みがあって斜面下方に伸びる。凹みは幅1.8m、深さ0.36mで、上面からの深さは1.1mを測る。凹みの下方左側にはさらに小溝状の掘り込みが付く。その長さは2.5m、幅は0.2~0.5mで、深さは1cm程度である。前庭部内や周囲に複数のビットを確認したが、木根によるものと思われる。

灰原 燃焼部より前庭部を経て、斜面下方に伸びる。前庭部右側上端の延長ラインより西側には広がらず、東側に偏りながら標高41.0m付近まで確認された。さらに北東側の調査区にも伸びるため、その範囲は焚口より長さ11m以上、斜面下方で幅3m以上となる。灰層の厚さは前庭部では0.6mを測り、斜面を下るに従って次第に薄くなる。

最終操業面遺物出土状況(第42図、図版29・30)

焼成部中位を中心に、最終操業面の直上で多数の遺物が集中して出土した。そのほとんどが破碎した甕破片と、焼台に使用されたと考えられる手のひら大の石で、製品の破片が軸着する石も見られた。また点数は少ないが蓋環の破片も認められる。出土状況から、最終操業後に一部の製品が窓内に残った状態で、天井部の崩落により破碎・埋没したものと考えられる。

出土遺物

貼床内出土遺物(第44図)

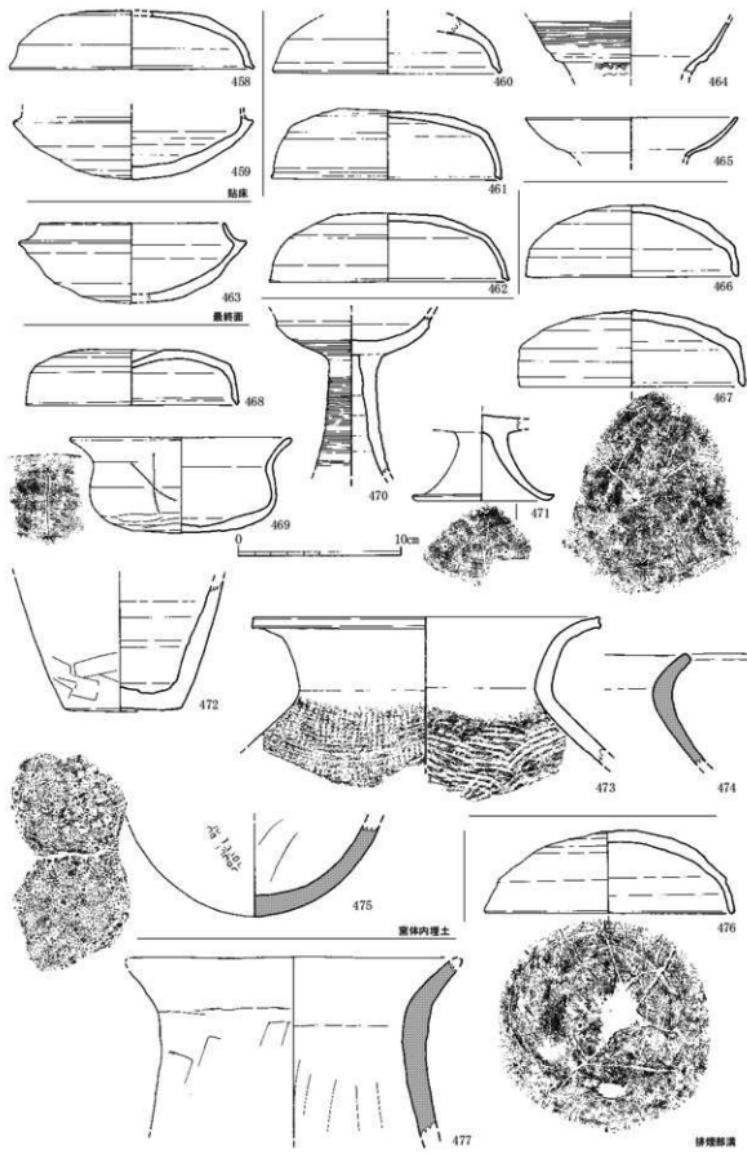
458・459は焼成部の貼床内より出土した。いずれも須恵器である。

458は坏蓋。残存1/8の破片である。口径は15.0cm。全体の外形は扁平で、口縁部も低い。天井・口縁部の境は、わずかに屈曲する。口縁端部内側は内傾の段となる。459は坏身。口縁部を欠くが、蓋受部以下1/4が残る。最大径は14.7cm。底部は丸く深い。

最終床面出土遺物(第44図)

460~465は最終操業時の床面直上から出土した遺物。いずれも須恵器である。

460~462は坏蓋。461は口縁部の残存はわずかだが、天井部は完存する。他は1/4の残存で、460は天井部を欠く。口径は14.0~14.6cm。全体の外形は461・462は口縁部が高く深い形状だが、460は低い。天井・口縁部境は461は強めの沈線を持つが、他の2点はわずかな屈曲による。口縁端部内側は沈線状の段となる。ヘラ記号は無い。463は坏身。1/2の残存で底部の中央を欠く。口径は11.3cmを測る。底部は丸く全体の形状は深い。立ち上がりは内傾する。464・465は甕。464は頸



第44図 9号窯跡貼床内・最終操業面・窓体内埋土・排煙部溝出土遺物実測図 (1/3)

～口縁部の破片で、端部を欠く。頸部境に稜を作る。頸部外面に波状文、口縁部外面にカキメを施す。465は口縁部破片。頸部境は緩やかに屈曲し、口縁部はやや内湾して伸びる。

窯体内・排煙部溝埋土出土遺物（第44図、図版48）

466～477は窯体内および排煙部に取り付く溝の埋土から出土した。このうち466・467が燃焼部灰層（48層）出土で、476・477が排煙部溝出土である。474・475・477が土師器であるほかは、全て須恵器である。

466～468・476は坏蓋。467・476はほぼ完形で、他は1/4以下の残存である。口径は467が13.8cm、476が15.3cm、他の2点は13.0cm。全体の外形は466・467・476は深い形状で、特に467は口縁部が高く作られる。468も口縁部が高いが、天井部が焼け歪む。天井・口縁部境は466・468で浅い沈線となるが、467・476は屈曲による。口縁端部内側は466・467で内傾、468で沈線状の段となる。476は段が無く、丸く作られる。ヘラ記号は467「△」と476「◎」が天井部内面に認められる。

469は碗とした。底部と口縁～体部3/4が良好に残る。平らな底部から体部は内湾気味に立ち上がり、頸部から短い口縁部が強めに外反する。端部は丸く終わる。口径13.3cm、器高5.9cm。底部外面は中央部が回転へラ切り後ナデ、体部境に近い部分は手持ちへラ削りで整う。体部は内外面回転ナデ、底部内面は不定方向のナデ。体部外面にヘラ記号「×」が大きく刻まれる。470・471は高坏。470は長脚タイプで、坏底部～脚部中位が残る。坏底部外面と脚部外面にカキメ、中位外面に2条の浅い沈線が施される。471は短脚タイプの脚部。内面にヘラ記号「△」が残る。472は鉢か。体部下半～底部が残る。底部は平らで、体部は外傾して直線的に伸びる。底径7.1cm。調整は底部外面が回転へラ切り後ナデ、体部外面が下位は横方向の削り、中位はナデで整える。内面は体～底部にかけて強い回転ナデの跡が残る。473は甕の口縁～肩部。肩は張らず、口縁部は頸部から外傾し、さらに外に屈曲する。

474・475・477は土師器の甕。474は口縁部の破片、475は底部の破片である。475は外面に格子目タタキ痕残す。内面はヘラケズリ。477は端部を欠くが、口縁～体部上位が残る。摩滅するが、体部外面タテハケ後ナデ、内面縱方向の削りで整う。

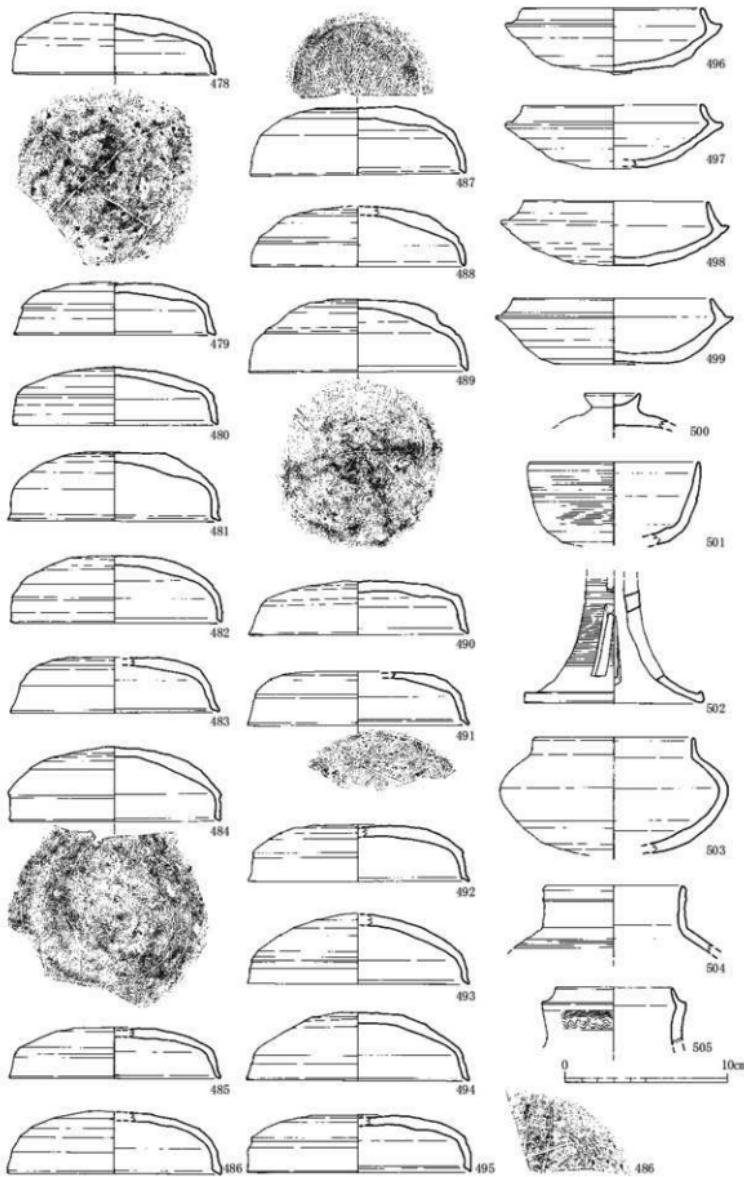
前庭部・灰原灰層出土遺物（第45～47図、図版48）

478～517は前庭部から灰原にかけての灰層から出土した。全て須恵器である。

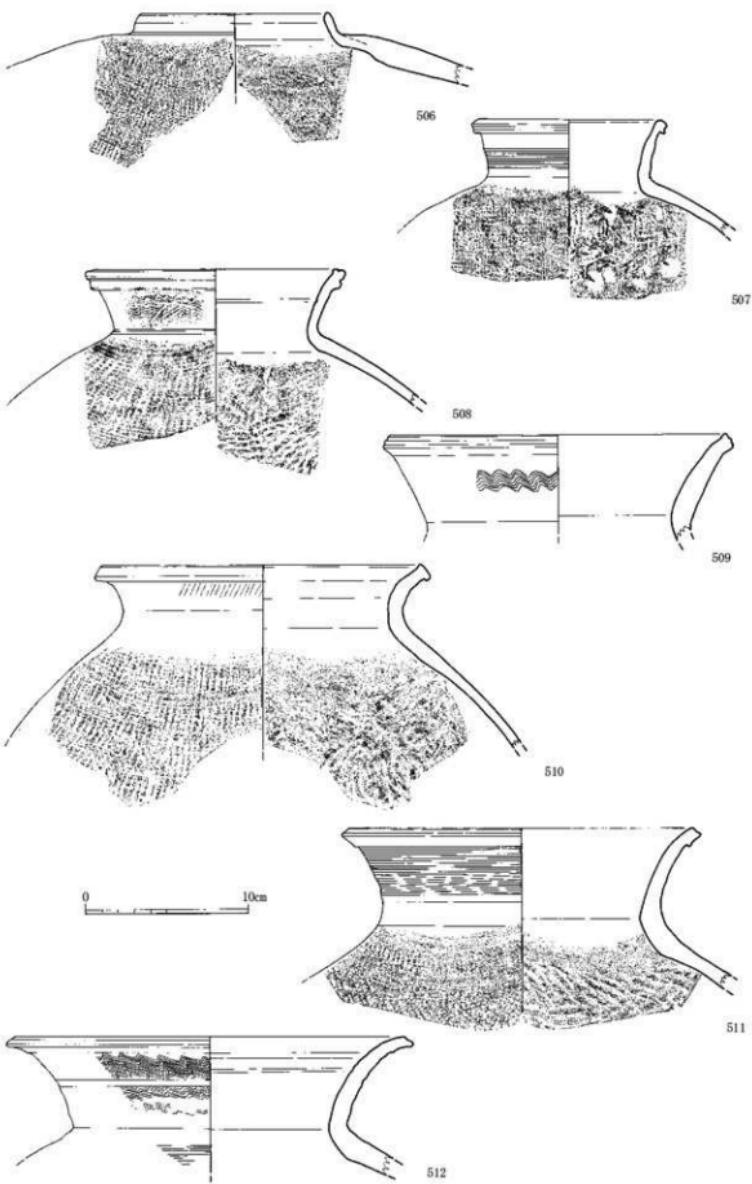
478～495は坏蓋。485・487～490は1/2、他は1/3以下の残存である。口径は478～481が12.3～12.4cm、482～488が12.8～13.2cm、489～495が13.4～13.8cm。外形は478～480・483・485・486・488・490～492・495は扁平で、他は天井部が高く作られる。特に481・487は口縁部も高い。天井・口縁部境は、479・480・485・488・489・491・492・495で稜が作られるが、480・481～483・486・487・490・494のように屈曲のみの物も多い。口縁端部内面はいずれも内傾もしくは沈線状の段となる。ヘラ記号は478・479・483「×」、482・493「○」、484「◎」、489「△」、490「△」と、形状不明の485・486・491・492が天井部内面に認められる。

496～499は坏身。497・498が1/2、他は1/4が残存する。口径は496～498が～11.4cm、499は12.2cm。いずれも扁平で、立ち上がりも低く内傾するが、498の立ち上がりはやや高い。499は蓋受部に蓋の重ね焼き痕が確認できる。ヘラ記号は全て底部内面で認められ、496「○」、498「△」で、他の2点は形状不明である。

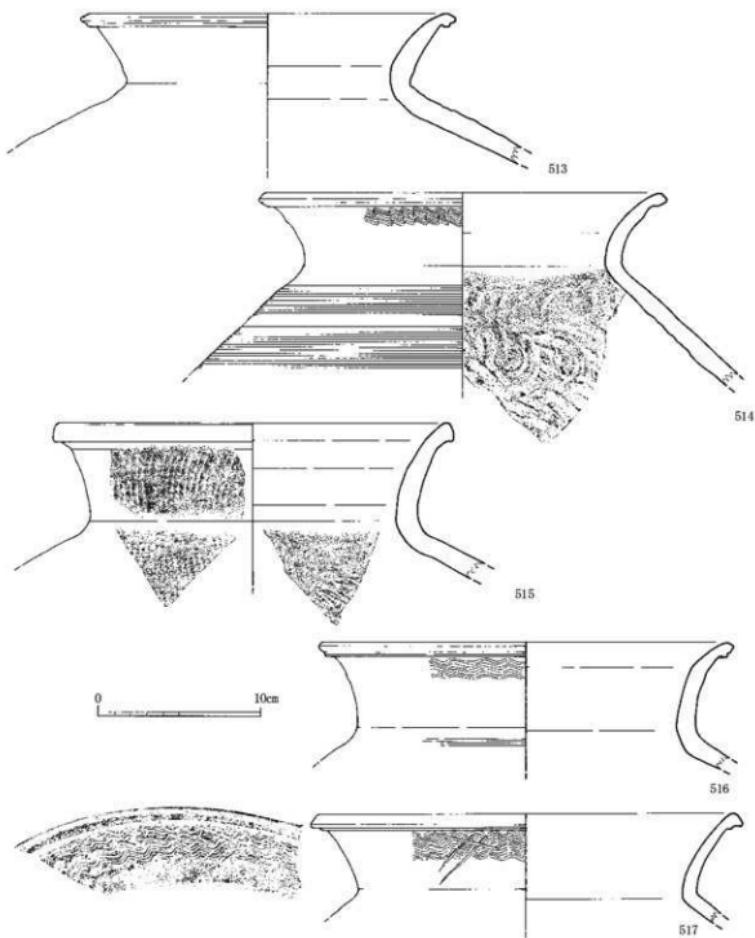
500～502は高坏。500は蓋。つまみとその付近の天井部破片である。つまみ径は3.4cm。501は



第45図 9号窯跡灰原灰層出土遺物実測図① (1/3)



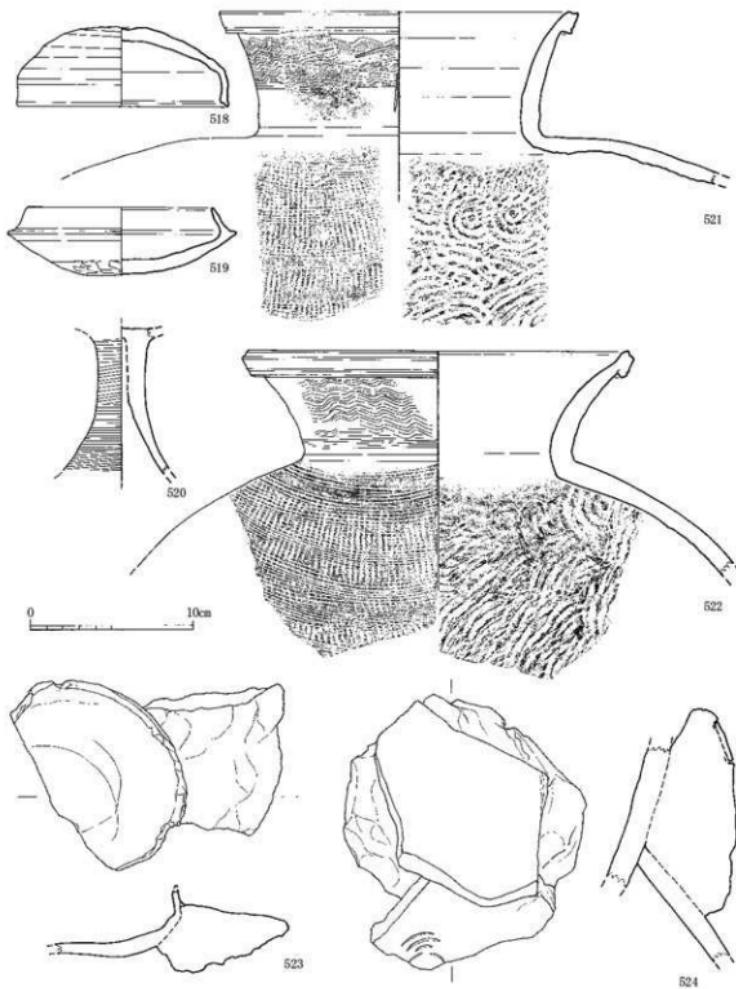
第46図 9号窯跡灰原灰層出土遺物実測図② (1/3)



第47図 9号窯跡灰原灰層出土遺物実測図③ (1/3)

坏部の破片。体部外面にカキメと、中位に1条の沈線を施す。502は長脚高坏の脚部下半。外面カキメの後、中位に粗雑な沈線2条を施し、上下2段の長方形透かしを3方向に配する。

503は小型の短頸壺。口縁部は短く直立し、体部中位に最大径14.0cmを測る。肩部外面に蓋との重ね焼き痕を残す。504も短頸壺だが、口縁部がやや高く、端部外面に2段の稜を持つ。体部外面にはカキメを残す。505は有蓋タイプの壺。口径7.0cmの小型品である。口縁～頸部1/2が残存する。頸部はやや外反して蓋受部を作り、立ち上がりは短く内傾して反り上がる。頸部外面に粗雑な波状文が残る。506は中型の短頸壺。口縁～肩部の破片である。口縁部は内傾し肩部は外に大きく広がる。



第48図 9号窯跡灰原褐色土出土遺物・最終操業面出土焼台実測図(1/3)

体部外面に格子目タキ後ナデ、内面に同心円當て具痕を残す。507は横瓶か。口縁～肩部1/4が残る。口縁部外面にカキメ、体部外面に平行タキ後縦方向のカキメ、内面に同心円當て具後ナデを施す。

508～517は甕。いずれも短く外反する口縁部を持つ。508は口縁～肩部1/4の残存。口縁部は直線的である。口縁部内面に1条の沈線、外面に波状文とヘラ記号「フ」が残る。509は口縁部1/2が残る。器壁が厚い。外面に波状文が巡る。510は口縁～体部上位の破片。口縁部外面にもタタキが及び、その後回転ナデされる。511は口縁～頸部付近1/2の残存。口縁部外面にカキメが密に巡る。512は

口縁部外面に波状文と沈線 1 条、体部外面にカキメが残る。513 は体部外面カキメ、内面同心円当て具痕が残るが、灰被りや黒色の付着物によりいずれも不鮮明。514 は肩が張らず、体部中位まで直線的に伸びる。口縁部外面に波状文を施す。515 も口縁部外面までタタキが及び、その後回転ナデされる。517 は口縁部外面に波状文とヘラ記号「ヶ」が残る。

灰原灰層下褐色土出土遺物（第 48 図、図版 48）

518 ~ 522 は 9 号窯跡前庭部よりも、斜面下方の灰原において、灰層下に薄く堆積する褐色土より出土した。いずれも須恵器である。

518 は壺蓋。残存 1/4 で、口径 12.6 cm。外形は天井部が高い。口縁・天井部境は屈曲により、口縁端部内面は内傾して段となる。天井部内面にヘラ記号が認められる 519 は壺身。ほぼ完形で、口径 11.4 cm。全体的に扁平で、底部は浅い。立ち上がりは低く内傾する。底部外面は手持ちヘラ削りで整う。底部内面にヘラ記号は「×」が刻まれる。520 は長脚高壺の脚部。下位を欠く。外面全体にカキメを施す。521・522 は甕。いずれも口縁～肩部の破片。521 は肩が張り、口縁部はやや外反して立ち上がる。口縁部外面にヘラ記号を刻む。522 は肩が張らず、口縁部は強く外反する。

最終床面出土焼台（第 48 図、図版 48）

523 は断面不整三角形の石に須恵器壺蓋の破片が付着する。蓋片は二次的な被熱をしておらず、内面明灰色を呈し、石と接する外面は灰被りする。内外面の調整や天井部内面にヘラ記号も確認できる。石の表面は上面の 1 面のみ灰被りする。524 は扁平な断面三角形に作られた粘土塊の表裏に須恵器甕の体部破片と壺蓋と思しき破片が付着する。甕片の表面には一部、同心円当て具痕が残る。粘土塊および複数の須恵器の破片は割れ口を含む全面が激しく被熱し黒灰色となる。

10 号窯跡（第 49 ~ 51 図、図版 5・32 ~ 38）

2 区のほぼ中央から北西部にかけての斜面上に、7 号窯跡前庭部から北西に連続して位置する。西 3 m には 8 号窯跡、東 3 m には SX 2 があり、両者に挟まれた形となる。標高は約 39.5 m ~ 45 m 付近だが、前庭部の先端が調査区外となり、焼成部上位より上は 7 号窯跡前庭部に切られて欠損するため、本来は上下ともさらに広がる。窯体や前庭部の上層に 7 号窯跡の灰層が広く堆積していたこともあり、調査開始当初は窯跡の存在を把握していなかったが、7 号窯跡前庭部を完掘したところ、別の窯体を検出したことでその存在を認識するに至った。

窯は花崗岩バイラン土をトンネル状に掘り抜いた地下式の登窯（窑窯）で、焼成部上位から奥は、7 号窯跡前庭部の構築に伴う破壊を受け欠損する。焚口～焼成部上位の窯体残存長は最終焼成面で約 9.8 m（最終面焚口を掘り過ぎにより飛ばしているため、貼床や側壁の被熱状況から復元した推定値）、一次焼成面では 10.4 m を測る。主軸は N-25°-W で、概ね南南東～北北西となる。平面プランは中ぶくらみの胴張りタイプで、焚口と焼成部奥がやや狭くなる。天井部は、残存する焼成部の最も奥で、わずかに残るほかは、既に崩落していた。焼成部の多くは、崩落した地山とその後の堆積土で厚く埋まり、地表から床面までの深さは、深いところで 2.6 m に及ぶ。

貼床は砂質土からなり、燃焼部～残存する焼成部のほぼ全面にわたって認められ、燃焼部～焼成部下位にかけては最も厚く、最大 40 cm の厚さに計 9 面の操業面を確認した。焼成部の最終操業面では破碎した製品を多く検出したが、焼成部下位には完形の蓋坏もみられた。貼壁は 7 号窯跡前庭部に切られる焼成部上位に一部確認できるが、その他の焼成部や燃焼部付近には見られない。また焼

成部上位の左側壁には、窯構築時の掘削痕と思しき工具跡が認められた。

焚口・燃焼部 上層の7号窯跡灰原灰層（13層）と褐色系埋土（14・15層）、黄褐色粘質土（16・1層）は、8号窯跡焼成部の埋土上層（8号窯跡2～4層）と同じく、斜面上方の7号窯跡に関係する流入土と考えられる。特に黄灰褐色粘質土が遺物（須恵器）を多く含む16・1層は、上下の堆積土と質が大いに異なり、7号窯跡のメンテナンス等に関係する粘土が流れ込んだことも考えられる。その下層に炭化物・焼土塊を多く含む堆積（19・1・19・2・31・32層）があり、それを除去すると炭化物や焼土塊・遺物を多く含む黒色灰層（33層）が現れる。この灰層の下面を最終床面と想定して掘削したが、33層是非常によく似た土の細かな互層で形成されており、燃焼部において貼床に連続する土層であったため、結果的に燃焼部の貼床を一部掘り過ぎることになった。

残った貼床や壁面の状況から推定すると、最終面の燃焼部は、焚口幅1.3m、焼成部境幅1.15m、長さ2.9mで、床面の傾斜角は10°となる。貼床は8層に分層でき、厚さは22～40cmを測る。左右の壁は、焚口側の下半で酸化、焼成部側の上半で還元を受ける。貼壁は確認できない。一次操業面は最終面より下位に移動し、幅が狭まる。焚口付近で幅0.9m、焼成部境幅1.2mで、焚口より0.4mの箇所では幅が最も狭く0.8mとなる。長さは2.3mで、床面傾斜角は6°を測る。床面は全体的に酸化する。左右の側壁は床に近い下層で焼成部から伸びる還元部分が残り、焚口に向かって薄くなる。

天井部は確認できなかつたが、燃焼部には天井崩落土の堆積がほとんど見られず、側壁も直立して立ち上がる痕跡が焼成部に近い一部の土層に見られるのみであることや、左右側壁の直立する立ち上がり、そして被熱状況から、上部はオープンに造られ、焼成時には焼成部境を中心に閉塞されたと考えられる。

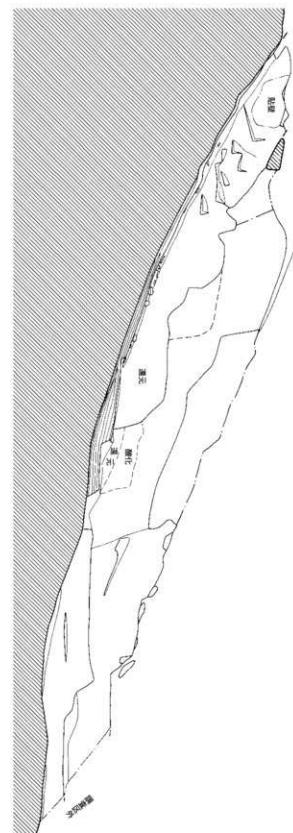
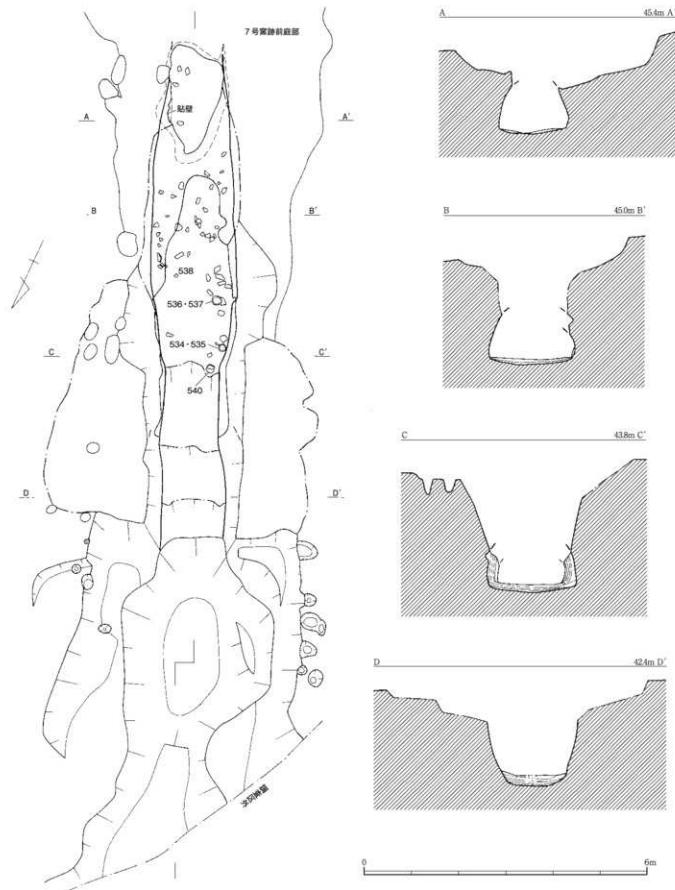
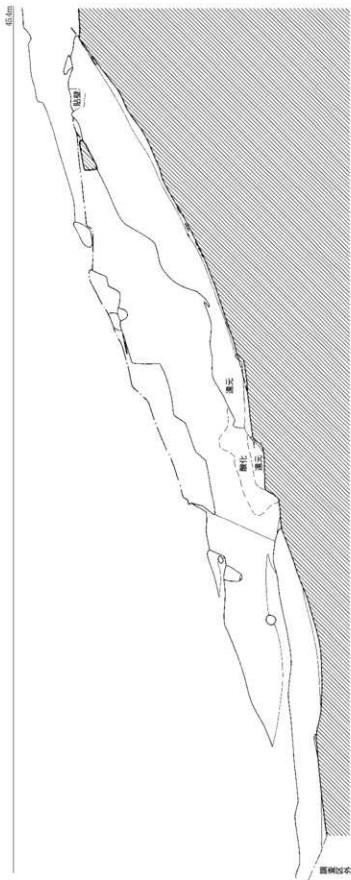
焼成部 7号窯跡前庭部から続く流入土（13～16・1・27・28層）と、10号窯跡崩壊後の堆積（17～19・1・20層など）が厚く堆積する下から、天井・地山の崩落土（21・1・22・35層）が現れた。それを除去すると、強く還元して青灰色に硬化した床面を検出した。床面には製品の破片が散在して見られたが、焼成部下位では蓋坏の完形品やセット品もある。

最終面の焼成部は中位で最大幅をとり幅1.8m、残存長約7.0mとなる。床面傾斜角は燃焼部境の19°から弓なりに上がり、残存する焼成部奥部で36°を測る。燃焼部から続く貼床は、上位に向かって薄くなりながらも、残存するほぼ全面に認められた。焼成部の窯体は、被熱によって内側から青灰色、黄灰色、赤色に変色する。また焼成部上位の側壁には、左右に貼壁による修復痕が見られたほか、左側壁には窯構築時のものと思われる工具痕が認められた。貼壁は工具痕には及んでいない。

貼床を除去した焼成部一次面は、燃焼部が下位に移動することで長くなる。最大幅は中位で1.85m、残存長8.0mを測る。床面傾斜角は燃焼部境の19°から弓なりに上がり、上位で35°となる。床面は全面が還元・硬化する。下位から中位の左右側壁には、床面に接して高さ約10～20cm、幅約10～20cmの細かな掘り込みを計16個検出した。最終面では貼床に埋没していたものである。内面は還元しており、構築に伴う何らかの痕跡であろうか。

天井部は大部分が窯体内に崩落するが、残存する最奥部の長さ0.5～0.6mを確認できた。床面からの高さは最終面1.3m、一次面1.3～1.4mである。

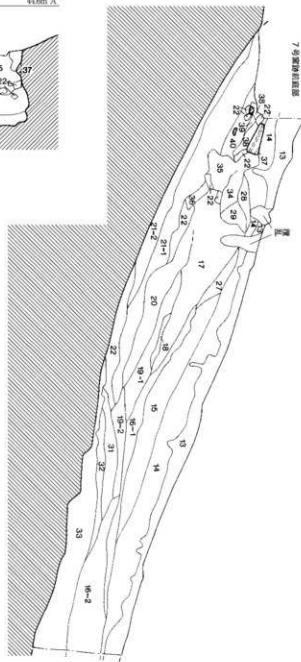
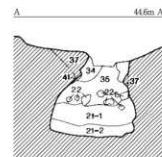
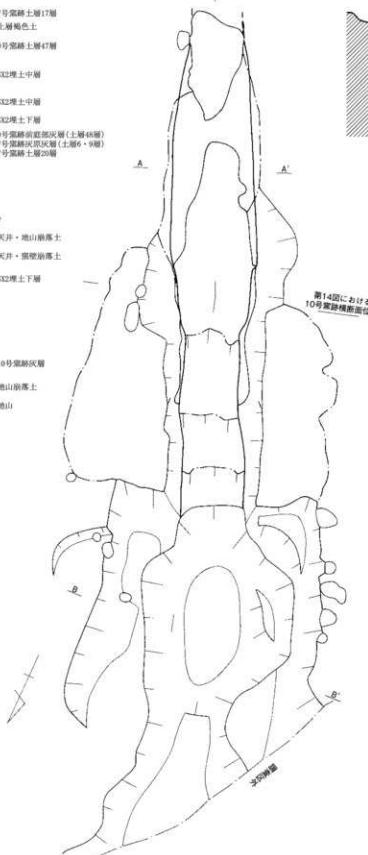
奥壁・排煙部 7号窯跡前庭部の構築により失われ、遺存しない。



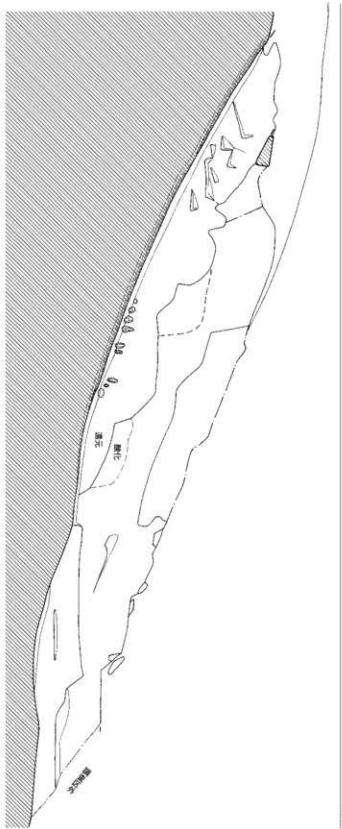
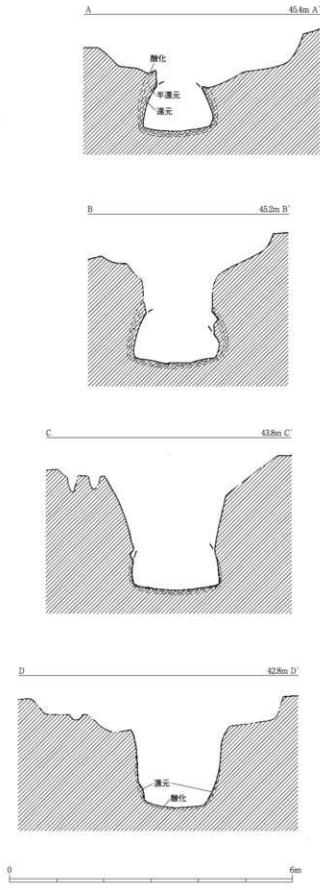
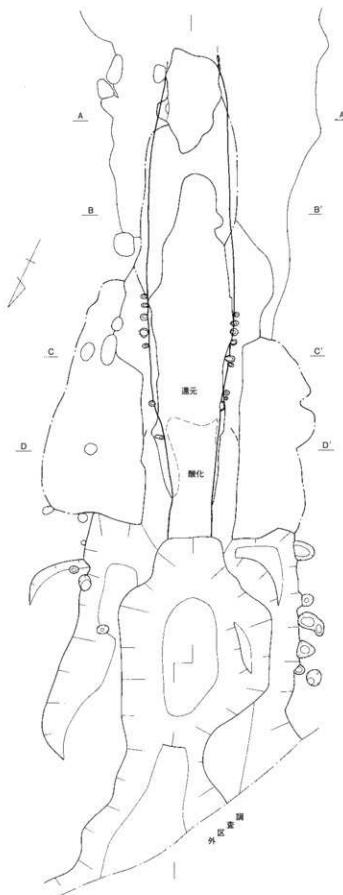
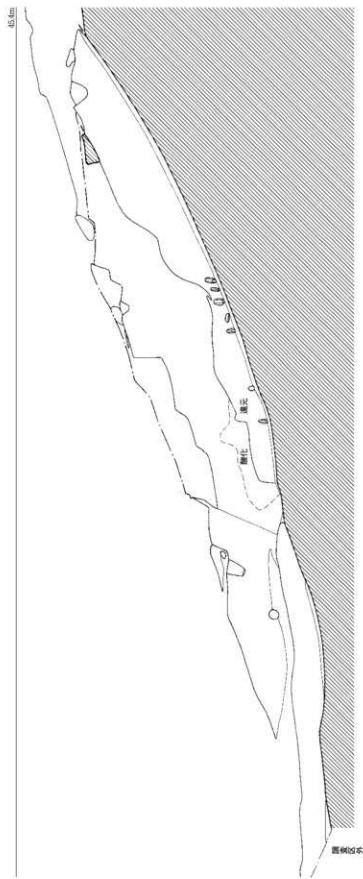
第49図 10号窓跡最終操業面実測図 (1/80)

(谷下部グリット・10号窯跡土層名)

1. 明褐色地質上、しまりあり、遺物を含む。—— 7号窯跡土層17層
2. 明褐色地質上、しまりあり、遺物を少く含む 上層褐色土
3. 明褐色地質上、しまりなく明るい、しらべりあり、灰、遺物をやや多く含む 9号窯跡土層47層
4. 明褐色地質上、しまりなし、灰、土、石、遺物をやや多く含む 9号窯跡土層47層
5. 武井、桃山、遺物をやや多く含む(中層褐色土)
6. 武井、桃山、しまなみ、軟かく、植物を少し含む(中層赤褐色土) 8号窯跡土層17層
7. 桃山褐色土上、しまなみ、灰、植物を含む S32埋土下層
8. 桃山褐色土上、しまなみ、灰、植物を含む S32埋土中層
9. 桃山褐色土上、しまなみ、灰、植物を含む S32埋土上層
10. 桃山褐色土上、しまなみ、灰、植物を含む(下層褐色土) 9号窯跡前部灰層(土層48層)
11. 桃山褐色土上、しまなみ、灰、土、石、植物を含む 9号窯跡前部灰層(土層48層)
12. 明褐色地質上、しまなみ、灰、土、石、植物を含む 9号窯跡灰層灰層(土層48層)
13. 明褐色地質上、しまなみ、灰、土、石、植物を含む 1号窯跡土層20層
14. 明褐色地質上、しまなみ、灰、土、石、植物を含む 1号窯跡土層20層
15. 明褐色地質上、しまりなし、灰、桃山、遺物をやや多く含む
16. 明褐色地質上、しまりなし、灰、桃山、遺物をやや多く含む
17. 明褐色地質上、しまりなし、灰、桃山
18. 明褐色地質上、しまりなし、灰、桃山
19. 桃山褐色土上、しまりあり、遺物をやや多く含む 1号窯跡前部灰層(土層48層)
20. 明褐色地質上、しまりなし、灰、土、石、植物を含む 1号窯跡前部灰層(土層48層)
21. 桃山褐色土上、しまりなし、灰、土、石、植物を含む 天井、地山鶴勝土
22. 桃山褐色土上、ややしまる。灰、土をやや多く含む 天井、櫻坂崩土
23. 桃山褐色土上、しまりなし
24. 桃山褐色土上、しまりあり、灰を少く含む 天井、櫻坂崩土
25. 桃山褐色土上、しまりあり、灰を少く含む 9号窯跡土層
26. 桃山褐色土上、しまりあり、灰を少く含む 9号窯跡土層
27. 桃山褐色土上、しまりなし、灰、桃山、遺物を含む 10号窯跡土層
28. 明褐色地質上、しまりなし、灰、桃山
29. 明褐色地質上、しまりなし、灰、桃山
30. 30と同上
31. 明褐色地質上、しまなみ、桃土、石をやや多く含む 地山崩土上
32. 桃山褐色土上、しまりあり、灰を少く含む 地山崩土上
33. 桃山褐色土上、しまりあり、灰を少く含む 地山褐色土上
34. 桃山褐色土上、しまりなし、灰、土を含む 地山崩土上
35. 桃山褐色地質上、しまりなし 地山崩土上
36. 桃山褐色地質上、しまりなし、灰を少く含む 地山崩土上
37. 桃山褐色地質上、しまりあり、灰を少く含む 地山
38. 桃山褐色地質上、しまなみ、軟かく、灰、土、石を含む 地山
39. 桃山褐色地質上、しまなみ、灰を少く含む 地山
40. 桃山褐色地質上、しまりなし、空洞(天井)、石を多く含む 地山
41. 桃山褐色地質上、しまりなし

0
6m

第14図 10号窯跡土層実測図



第51図 10号窓跡一次操業面実測図 (1/80)

前庭部 上層に堆積する7号窯跡からの流入土(13・14層)としまりのない褐色土(16-2)の下層に燃焼部から続く灰層が堆積する(33層)。その下面が前庭部床面である。

前庭部は焚口より方形に大きく開き、そのまま斜面下方に伸びる。内部は左右にテラスを造って、焚口直下には不整楕円形の掘り込みが付き、掘り込みは更に斜面下方、調査区外へと伸びていく。方形部分の幅は焚口付近で4.2m、最大5.5m。不整楕円形掘り込みは最大幅3.2m、深さは0.6～0.7mで、前庭部上面からの深さは最大値1.9mを測る。更に続く掘り込みは、一度幅1.6mに狭まって、再び大きく広がりながら斜面下方へ続く。また前庭部内外に径約20～50cmのピットを多数確認したが、これは木根によるものと思われる。

灰原 燃焼部より前庭部に沿って斜面を下る。燃焼部では貼床より続く細かい互層が認められたが分層は容易でない。前庭部では一層不分明となる。灰原は前庭部の掘り込みに沿って広がり、調査区境付近で幅約25mにもなる。また厚さは前庭部の楕円形部分で0.8m、調査区境でも1mを測る。しかし調査区境では、前庭部の楕円形部分で明確だった7号窯跡灰原との間層(14・16-2層)も、斜面を下るに従って次第に薄くなって消えるため、7号・10号両灰原の分層は困難である。幅25m、厚さ1mの灰原も両者を含んだ数値である。

出土遺物

貼床内出土遺物(第52図)

525～531は燃焼部へ焼成部の貼床内より出土した。いずれも須恵器である。

525～529は壺蓋。525は2/3の残存、他は1/3以下の破片である。口径は525が12.0cmと小さく、短頸壺蓋の可能性もある。次いで526が13.8cm、527～529が15.0～16.0cmを測る。全体の外形は、525が口縁部が高く深いが、他は扁平で口縁部も低い。天井・口縁部の境は明瞭に画されず、屈曲か浅い沈線による。527は境界自体が不明瞭となる。口縁端部内側の段は全て認められ、内傾もしくは段となる。530・531は壺身。いずれも1/4が残る。口径は12.0cmと12.5cm。底部は比較的深く、立ち上がりは内傾する。530は内傾が強く、531は底部が丸い。525・528の天井部内面と530の底部内面には、形状不明だがヘラ記号が残る。

最終床面出土遺物(第52図、図版49)

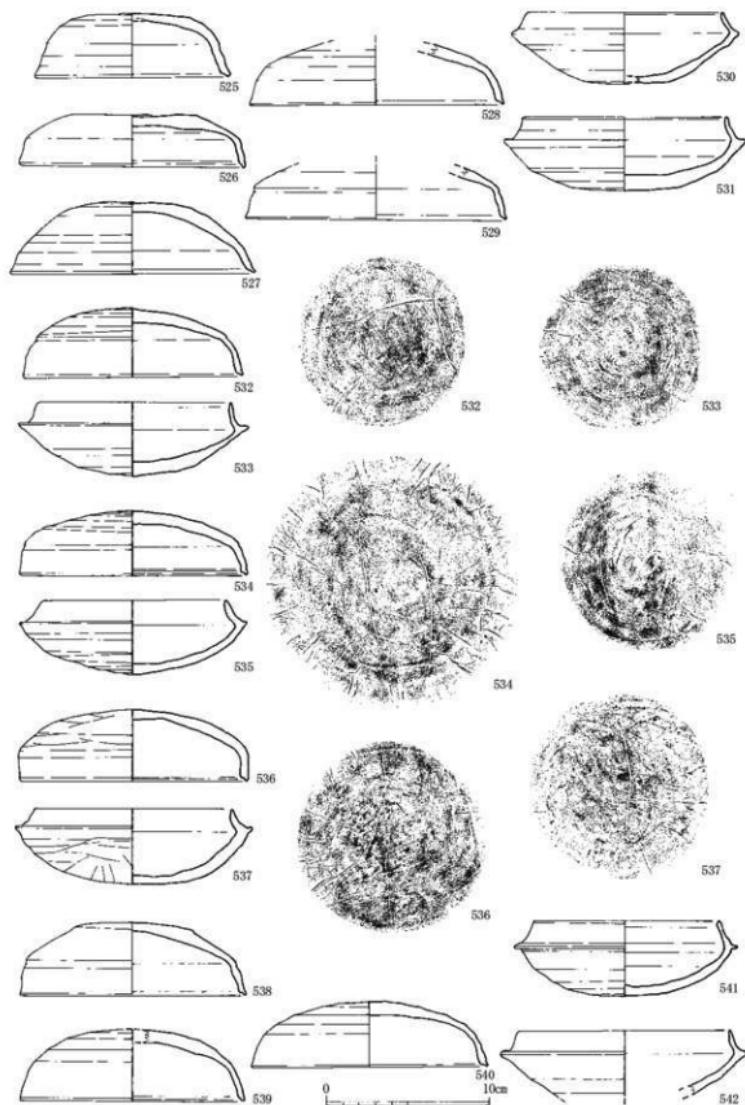
532～542は最終操業時の床面直上から出土した遺物。いずれも須恵器である。532～537は蓋・壺のセットで出土した。

532・534・536・538～540は壺蓋。532・534・536は完形品、他は1/2～1/3が残存する。口径は13.6～14.6cm。全体の外形は概ね口縁部が高く深い形状となる。天井・口縁部境は、532は明瞭な稜が付くが、他は浅い沈線か屈曲で分けられる。口縁端部内側は沈線状の段となる。ヘラ記号は532「||」、534「||」、536「|」、540「皿」と、形状不明だが538で天井部内面に認められる。

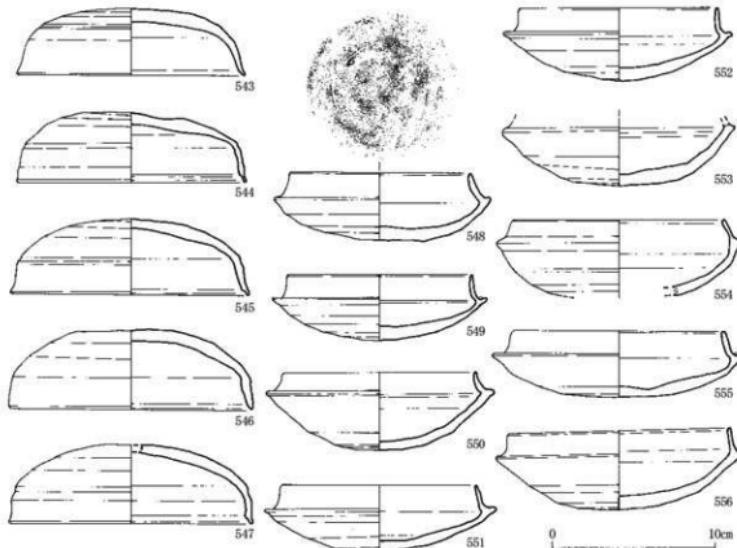
533・535・537・541・542は壺身。533・535・537・541は完形品で、542は底部を欠く1/4の破片。口径は11.2～12.2cmで、542は13.0cmを測る。全体の形状はいずれも深く、535・537・541は底部が丸く作られる。立ち上がりは概ね内傾するが、533は直立気味で高い一方、535・537は内傾が強く短い。ヘラ記号は533「||」、535「||」、537「|」が底部内面に認められる。

窯体内埋土出土遺物(第53図、図版49)

543～556は窯体内に堆積する埋土の下層から出土した。全て須恵器である。なお、中・上層出土遺物は2区下部包含層の出土遺物として別に報告する。



第 52 図 10 号窯跡貼床内・最終操業面出土遺物実測図 (1/3)



第 53 図 10 号窯跡窯体内出土遺物実測図 (1/3)

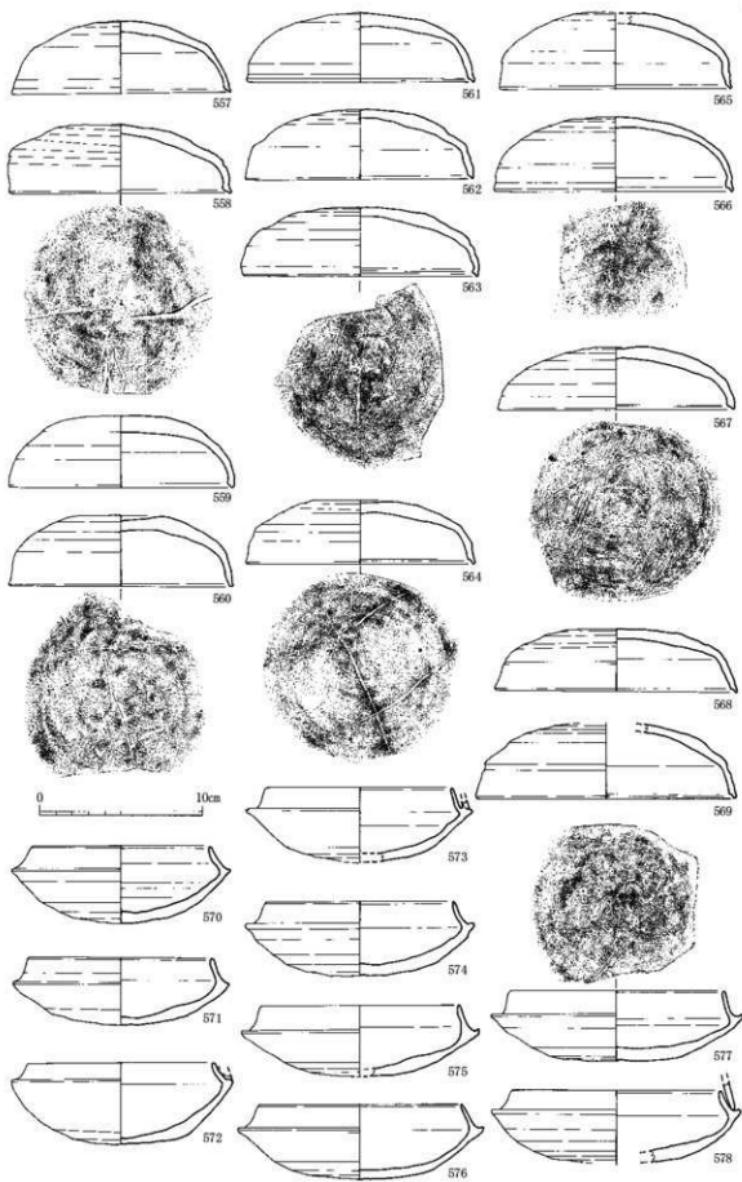
543～547 は壺蓋。543 はほぼ完形、544 は 2/3、547 は 1/2 が残存する。他は 1/5 以下の破片である。口径は 543・544 が 13.8～14.1 cm、545～547 が 14.6～15.0 cm を測る。全体の外形は概ね深い形状で、口縁部も高く作られる。天井・口縁部境は 545 で強い沈線が認められるほかは、浅い沈線もしくは屈曲による。口縁端部内側はいずれも内傾または沈線状の段となる。ヘラ記号は 544 の天井部内面に「+」が刻まれる。

548～556 は壺身。551・552 はほぼ完形で、548・550・555・556 は 2/3～1/2、他は 1/3 が残存する。553 は口縁部を欠くが、他は完存する。口径は 548～552 が 11.3～12.1 cm、554～556 が 12.8～13.6 cm で、553 も最大径から前者に含まれよう。全体の形状は 550・553・554・556 が深く、底部に丸みを持つ。548・549・551・552・555 は扁平である。立ち上がりは 550・554 が短く強めに内傾するほかは概ね高く、特に 549・552・556 は高く直立する。ヘラ記号は 548 「○」、549 「||」、555 「||」が底部内面に認められる。

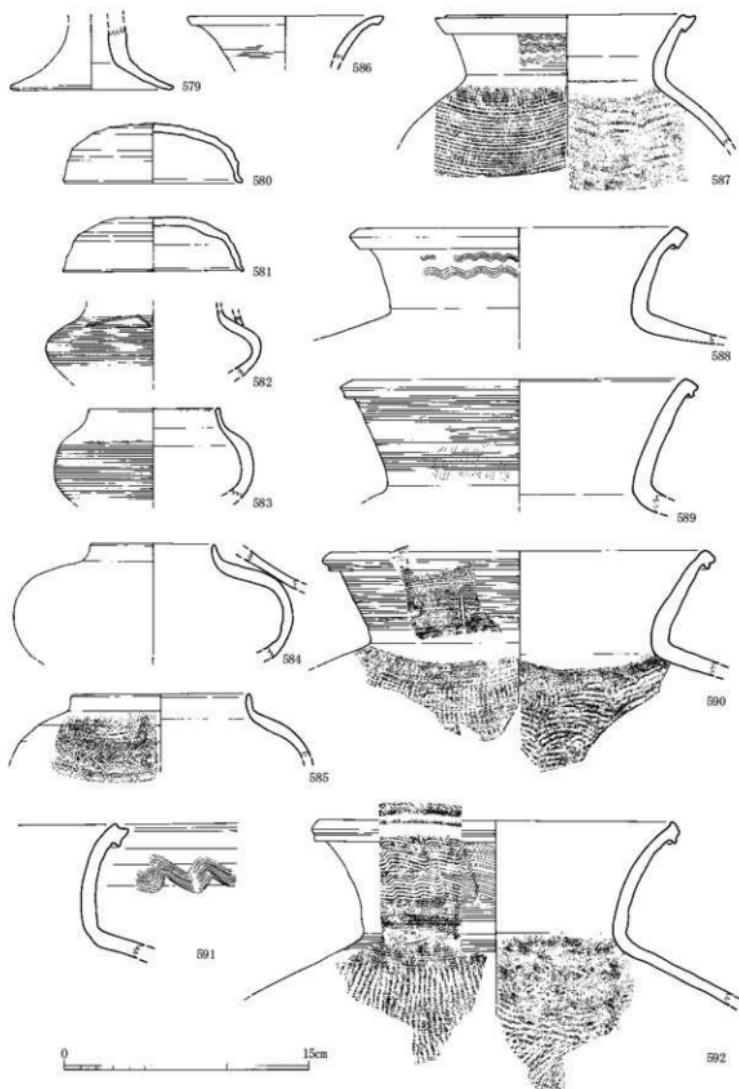
燃焼部～前庭部出土遺物 (第 54・55 図、図版 49)

557～592 は燃焼部から前庭部にかけて広がる灰層 (33 層) から出土した。全て須恵器である。

557～569 は壺蓋。561・562・565・567～569 は 1/2 以上、他は 1/3 以下の残存である。口径は 557～566 が 13.4～14.4 cm、567～568 が 14.6～14.9 cm、569 は 16.0 cm を測る。全体の外形は概ね口縁部が高く、深めの形状といえる。天井・口縁部境は、569 で強めの沈線となるほかは浅い沈線または屈曲による。口縁端部内面は 563 で明瞭に稜が作られるほかは、いずれも内傾もしくは沈線状の段となる。ヘラ記号は 557・558・563 「N」、559 は「+」と「|」の 2 つ、560・564・567 「+」、



第 54 図 10 号窯跡燃焼～前部灰層出土遺物実測図① (1/3)



第55図 10号窯跡燃焼～前庭部灰層出土遺物実測図② (1/3)

562「中」、566「卅」と、形状不明だが565で、天井部内面に認められる。564は口縁端部に身との重ね焼き痕跡が残る。

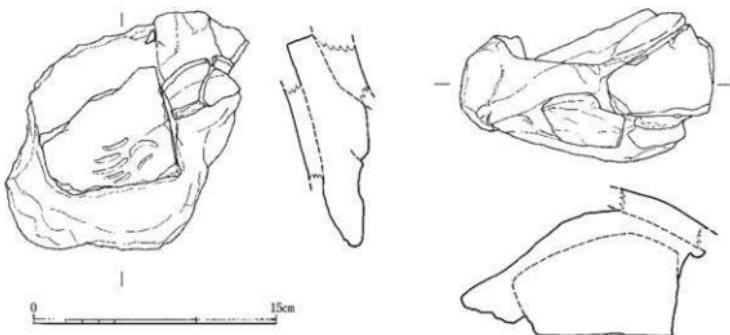
570～578は坏身。570・572・574～576は1/2、他は1/3～1/5が残存する。口径は570～575が11.2～12.0cm、576～578は12.5～13.2cm。全体の形状は底部が丸く深みがあるものが多い。577がやや扁平か。立ち上がりはいずれも内傾し、概ね高く作られる。572は短かい。ヘラ記号は570「〇」、571「×」、572「|」、575「+」、577「N」と、形状不明だが573・578で底部内面に認められる。また蓋受部の重ね焼き痕が570・572・573・575・578に、571・572と577の底部外間に別個体との重ね焼き痕が残る。572・573・577・578は破片が付着する。

579は短脚の高杯。脚部下半1/2が残る。580～585は小型短頸壺と蓋。580・581は蓋で、いずれも残存1/2、口径11.0cm。天井部と口縁部は沈線で画され、口縁端部内面に段を持つ。582は体部の破片。頭部から体部が強く広がり扁平な形状となる。肩部外面に重ね焼きによる蓋の口縁部片が付着する。583～585も肩部外面に蓋重ね焼き痕を残す。583は肩が張らず、頭部の屈曲は弱い。口縁部は内傾する。584も口縁部が内傾するが、肩は強く張る。肩部外面に蓋とは異なる別個体片が付着する。585は口縁部が直立する。肩部外面に「く」字状の刺突文が施される。586は瓶類もしくは壺の口縁部。上半部1/3の破片。587～591は甕。いずれも短く外反する口縁部を持つ。587は体部外面にカキメを密に施す。589は口縁部外面にカキメを施すが、下位にタテハケ状の調整痕を残す。590は外面にヘラ記号「|」を記す。

592は前庭部の埋土中層より出土した須恵器の甕。口縁部は外反し、端部は上下に伸びる。

最終床面出土焼台（第56図、図版50）

593は扁平な粘土塊の表裏に、須恵器甕の体部や坏蓋の破片が埋没するように付着する。甕破片の表面には一部、同心円当て具痕が残る。また甕片の1つは割れ口に被熱痕が残る。粘土塊の表面は、底部となる面は灰色、他の面は暗灰色を呈し、一部は灰を被る。594は断面方形の石に須恵器甕の破片が付着する。甕片と石の間には粘土が貼られ、粘土の表面は溶けて流れたようになる。須恵器片の表面はいずれも強く被熱し、調整は不明。割れ口も2次的な熱を受ける。石の表面は底部となる面を除いて強い熱を受け、甕片を含む被熱面は黒灰色を呈し、一部は灰被りする。



第56図 10号窯跡最終操業面出土焼台実測図(1/3)

2) その他の遺構

S X 1 (第 57 図、図版 38)

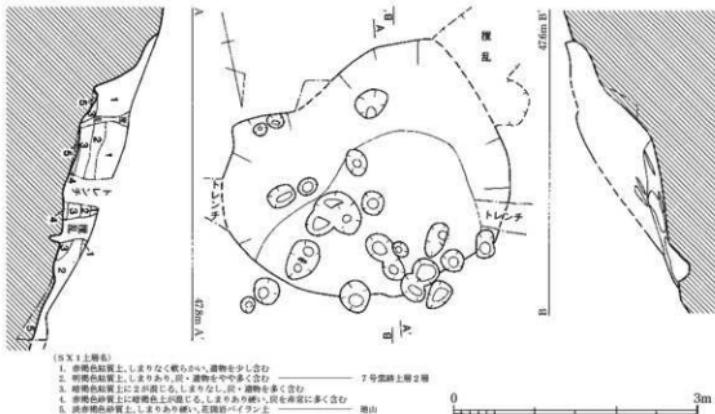
2 区の中央やや南西、7 号窓跡前部の南約 2 m、8 号窓跡排煙口の南東約 1 m に位置する。北西に下る斜面上の、標高約 46 ~ 47.5 m にあたる。東西 3.5 m、南北 3.2 m の不整円形の平面プランで、斜面を断面「L」字状にカットして築かれる。斜面上方の南側で深さは 0.9 m ある。床面は北にやや下るが概ね平坦である。遺構内外に多数のピットを検出したが、埋土より木根と考えられる。埋土最下層に炭が多く含んで硬く締まる薄い堆積土があり（4 層）、貼床とも考えられる。出土遺物より、時期は今回検出した窓跡群と並行する。7 号あるいは 8 号窓跡の操業に伴う作業スペースであろうか。

出土遺物（第 58 図、図版 50）

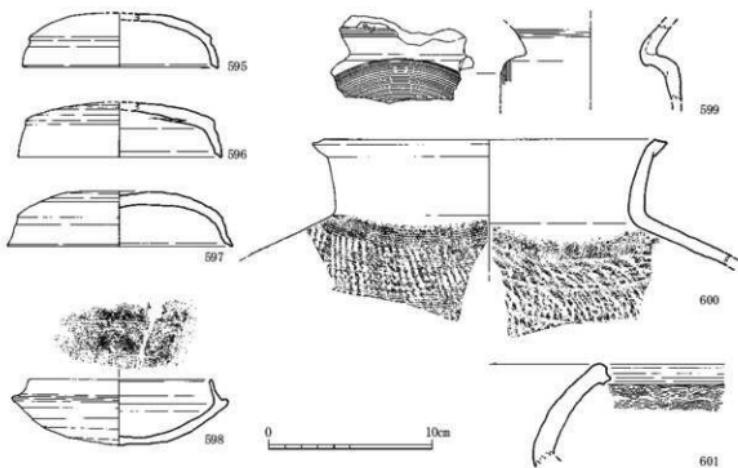
595 ~ 601 は、S X 1 の埋土より出土した。いずれも須恵器である。

595 ~ 597 は壺蓋。597 は 1/3、他の 2 点は 1/4 以下の残存である。口径は 595・596 が 12.0 cm・12.4 cm と小さく、短頸壺に付く可能性もある。597 は 13.8 cm。全体の外形は扁平で、口縁部も低い。天井部・口縁部境は 595・596 で明瞭な稜が、597 で浅い沈線による弱い稜が作られる。口縁端部内面にはいずれも内傾による段が付く。また、天井部内面にいずれもヘラ記号が確認できる。形状は 597 が「N」、他は不明である。

598 は环身。ほぼ完形で、口径は 10.9 cm。全体的に扁平で、口縁部は内傾する。底部内面にヘラ記号「||」を刻む。599 は提瓶。頸部付近 1/3 の破片。口縁部外面にカキメと波状文が一部、体部外面に回転カキメが確認できる。600・601 は甕。600 は口縁部が短くやや外傾して立ち上がり、端部は外に強い稜を作る。601 は口縁部の破片。短く外反し、外面上位に波状文を施す。



第 57 図 S X 1 実測図 (1/60)



第 58 図 SX 1 出土遺物実測図 (1/3)

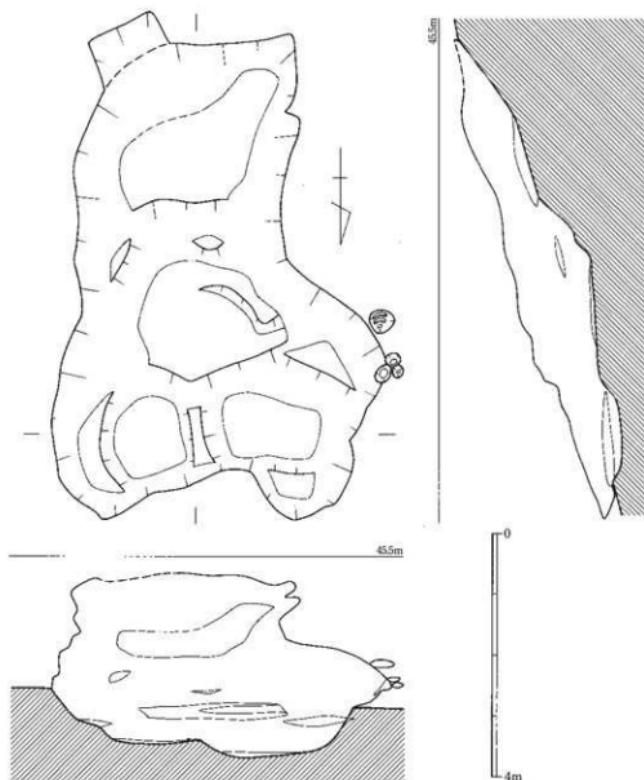
S X 2 (第 14・59 図、図版 4・5・39)

2 区の中央やや北、7 号窯跡前庭部の北東約 1 m、10 号窯跡の東約 3 m に位置する。北西に下る斜面上の、標高約 42.5 ~ 45 m にある。ほぼ南北に軸を取る不整長形の平面プランで、南北は主軸上約 7.2 m、最大値 8.0 m、東西は最大値 5.4 m を測る。斜面を断面「L」字状にカットして築かれるが、大きな造構であり、大きく 3 段に分かれ、その他にも多数のテラスが配されている。最も上段のテラスは斜面上方の南側で深さは 0.8 m。平面形は不整形で、床面は北に向かって緩やかに下る。そこから深さ 0.9 m で中段のテラスとなる。平面形は不整形で、東西側に低いテラスを持つ。床面はほぼ水平である。下段となる床面はさらに東西 2 つに分かれ、東側は中段より深さ 0.3 m で平面形はほぼ円形、西側は同じく 0.4 m で平面形は長方形。いずれも床面は平坦である。特に中段・下段部分については厚い堆積土で覆われていた。最下層の黄灰色土（第 14 図 11 層）からは炭と焼成不良の須恵器が多数出土している。操業に関わる作業場として使われたスペースとも考えられる。第 14 図の堆積状況から、9 号窯跡に先行して埋没することが分かる。出土遺物より、今回検出した窯跡群と並行する時期が想定される。7 号もしくは 10 号窯の操業に伴う作業スペースであろうか。

出土遺物 (第 60 図、図版 50)

602 ~ 617 は S X 2 の埋土より出土した。すべて須恵器である。このうち 602 ~ 604、606 ~ 609・611・613・616 が最下層の黄褐色土より出土した。

602 ~ 610 は壺蓋。609 は完形品で、602・604・607・608 は 1/2 以上が残る。他は 1/3 以下の残存である。口径は 602 ~ 605 が 12.6 ~ 13.0 cm、605 ~ 606 が 13.5 ~ 14.0 cm。全体の外形は 604・607・610 が扁平で、他は概ね深い形状となる。天井・口縁部境は 603・607 ~ 609 で明瞭な稜・沈線で画される他は、弱い稜や沈線、屈曲による。口縁端部内面には内傾もしくは沈線による段が作られるが、610 は口縁部の開きが大きく、内傾の段も不明瞭となる。ヘラ記号は 602「⊕」、605「×」、

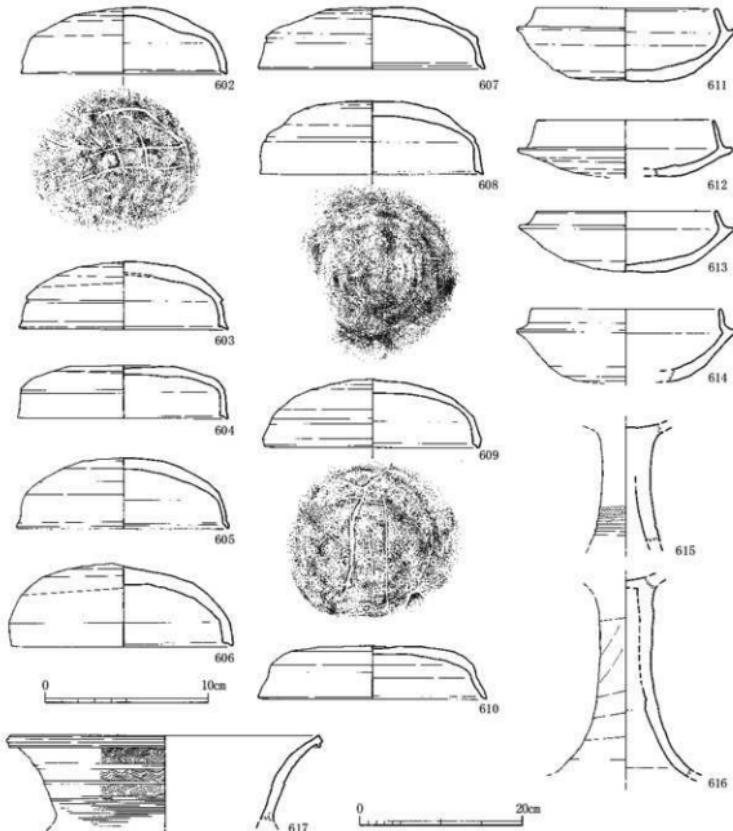


第59図 SX2実測図 (1/80)

607「|||」、608「|」、609「匁」と、形状不明だが604・610のいずれも天井部内面に認められる。また、602の天井部外面には重ね焼きによる別個体片が付着する。

611～614は坏身。611・612は1/2、他は1/4以下の残存である。口径は10.7～11.6cm。全体の外形は、611・614が底部が丸く深い形状で、612・613は扁平である。立ち上がりはいずれも内傾するが、611・612で高く、614は直立気味となる。613のみ底部内面にヘラ記号、蓋受部に重ね焼き痕を残す。615・616は長脚の高坏脚部。615は上半の残存で、中位外面に粗雑な波状文と2条の沈線を施す。616は脚端部を欠く。外面にシボリ痕が認められる。

617は大甕の口縁部。1/4が残存し、口径は39.0cmに復元される。外面にカキメ、上半には後波状文・沈線を配する。



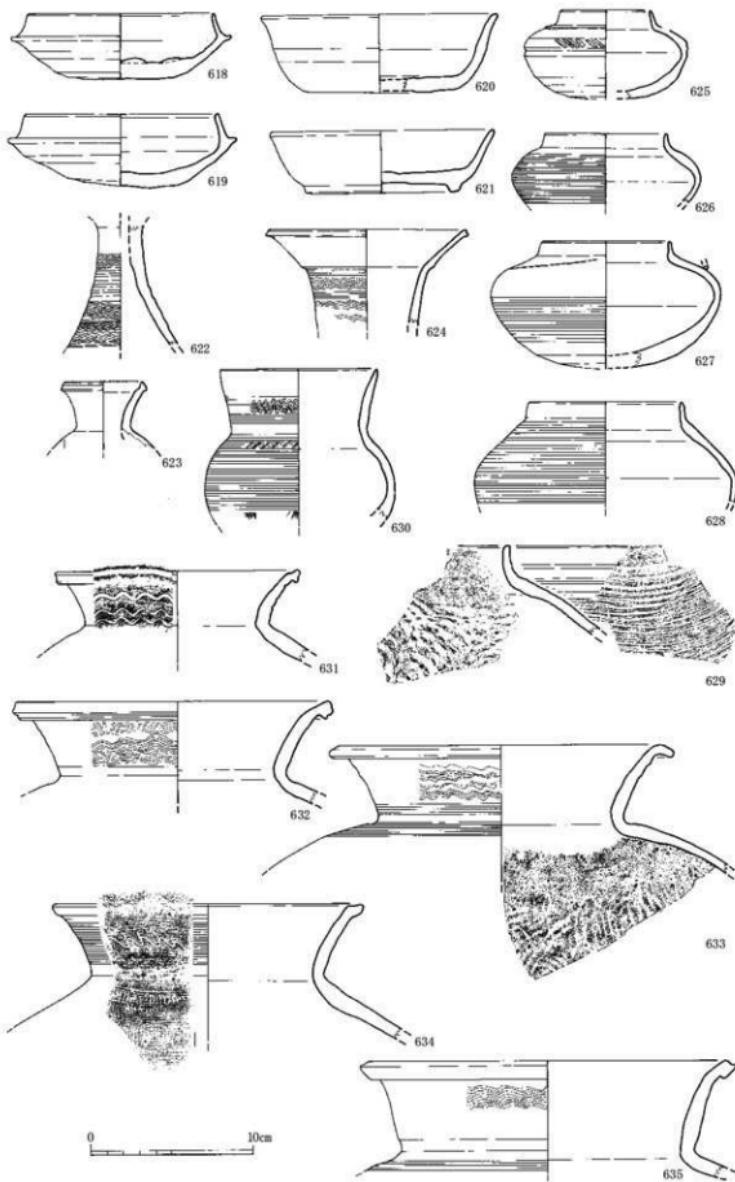
第 60 図 S X 2 出土遺物実測図 (1/3・1/6)

3) その他の出土遺物

7・9・10号窯跡灰原灰層出土遺物 (第 61 ~ 64 図、図版 50)

2 区の斜面下方に広がる灰原灰層より出土した遺物。由来する窯跡が明確な限り、各窯跡で報告したが、明らかでない物についてここで報告する。618 ~ 650 は全て須恵器。

618・619 は壺身。口径は 11.4 cm と 11.8 cm。深めの形状で、立ち上がりは内傾するが高い。底部内面にヘラ記号 618 「○」、619 「+」を持つ。620 は蓋受部・立ち上がり、及び高台を持たない壺身。平らな底部から丸く屈曲して体部が立ち上がり、口縁部はやや外反する。器壁は厚い。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整される。621 は高台を持つ壺身。底部は平らで、外面の端に断面方形の低い高台が付く。口縁部はやや外反する。620・621 は本調査で検出した窯跡とは時期を異にするもの



第61図 7・9・10号窯跡灰原灰層出土遺物実測図① (1/3)

であり、後世の混入品と思われる。

622は長脚高坏の脚部上～中位が残る。外面中位に2条の沈線と、それを挟む上下にカキメ・波状文を施す。623は提瓶の口縁～肩部片。肩部外面に一部回転カキメが残る。口縁部外面にはヘラ記号「×」を記す。624は甌の口縁～頸部。頸部外面に波状文とカキメを施し、口縁部境に稜を作る。口縁部は外傾して直線的になる。

625～629は短頸壺。625～628は小型品である。625～627は肩部が張り、体部中位やや上に最大径を持つ。逆に628は肩が張らない。口縁部は625が内傾するが、他は直立する。625は中位やや上に沈線・列点文が巡る。625～627は肩部外面に蓋の重ね焼き痕が残る。629は口縁～肩部の破片。肩は張らず、口縁部は直立する。体部外面にやや太めのカキメ、内面に同心円當て具痕を残す。

631は長頸壺。頸部は基部が太くやや外反し、口縁部がわずかに内湾する。体部は球体で、中位に最大径を持つ。頸部外面にカキメ後波状文、頸部下～体部中位の外面にカキメを施し、肩部外面はカキメ後に列点文を巡らす。また体部下位の外面に工具痕が確認できる。

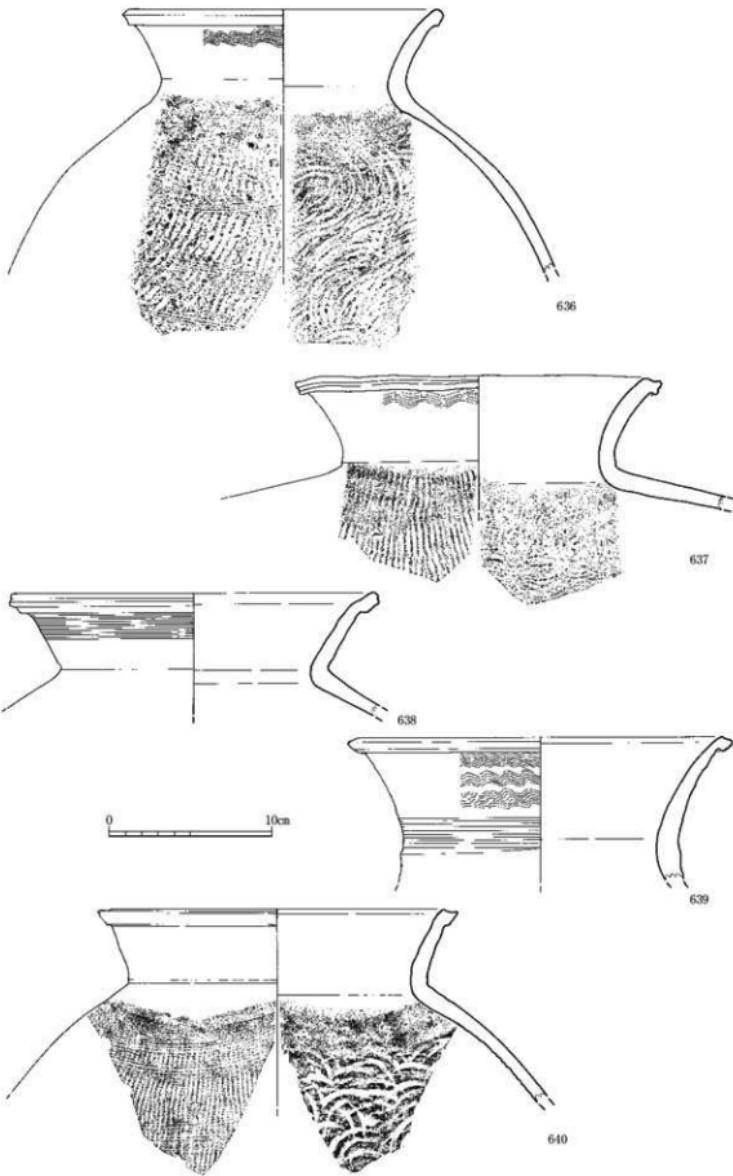
631～647は甌。631～638・640～645は短く外反または直線的に外傾する口縁部を持つ。639・646・647は口縁部が外反して伸びる。632は口縁部外面にヘラ書きの波状文が3条巡る。633は体部内面に同心円當て具痕が残る。外面もタタキ調整と思われるが、灰被りのため不明である。634は体部内面同心円當て具痕。636は口縁～体部上半が残る。637は焼け歪みが激しい。638は外面が灰被りのため調整不明、内面は同心円當て具痕。639は頸部外面回転ナデ、口縁部境にカキメ、口縁部外面は粗雑な波状文が施される。641は体部内面同心円當て具痕、外側はナデ消されているのかタタキ痕は確認できない。643は口縁部外面の一部に板状工具が接触した痕跡が認められる。644は口縁部外面にヘラ記号「×」を記す。646は口縁部内面下位に一部同心円當て具痕を残すが、回転ナデで仕上げる。端部は丸く收まる。647は口縁部外面上半に波状文と沈線、下位にカキメを施す。またカキメ上に一部板状工具痕を残す。内面には全体に同心円當て具痕が見られ、後回転ナデで整える。

648～650は大甌。648は体部の焼け歪みが大きいが残存は良く、口縁～体部上位まで残る。口径は40.0 cmを測る。649は口縁部上位の破片。外面に沈線とカキメを非常に密に施し、肥厚する端部の外方に列点文を巡らせてある。またわずかに残る中位の外面には斜線文を施すようである。650は口縁部のみ1/3が残存する。口径は49.8 cm。内面の一部に同心円當て具痕が残る。

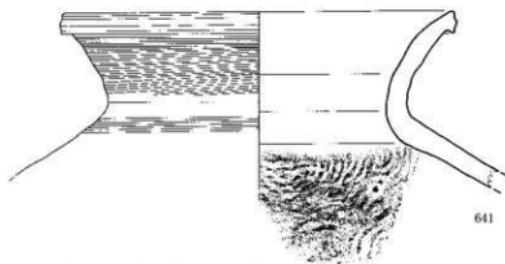
谷下部包含層出土遺物（第65～73図、図版50～54）

谷下部グリッドの掘削で出土した包含層出土遺物である。7・9・10号窯跡やSX2に属する遺物は各遺構において報告したため、それらを除いた物となる。但し10号窯跡窯体内的埋土中・上層(14～16-2・19層)出土遺物についても谷下部グリッド取り上げとして、ここで報告する。651～742は須恵器、743～747は土師器である。

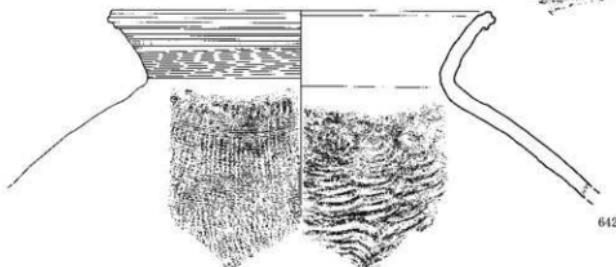
651～667は坏蓋。このうち651～664は蓋受部・立ち上がりを持つ坏身に付く、所謂坏Hタイプである。654・660は完形品。口径は651～658が11.8～13.2 cm、659～664が13.5～14.3 cm。全体の外形は651～654・656～659など扁平なものが多いが、661・662・664など口縁部が高く深い形状のものも見られる。天井・口縁部境は652～654・658が強めの沈線や粗雑な稜で分けられるが、他は浅い沈線か屈曲による。口縁端部内面はいずれも内傾か沈線状の段となる。ヘラ記号は651「C」、



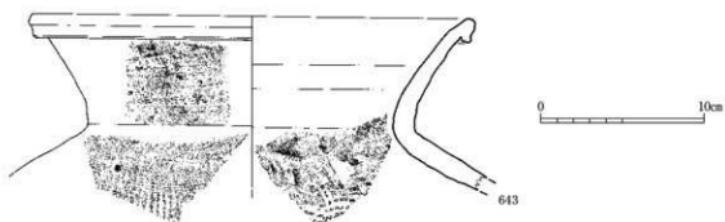
第62図 7・9・10号窯跡灰原灰層出土遺物実測図② (1/3)



641

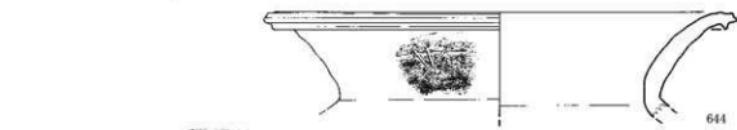


642

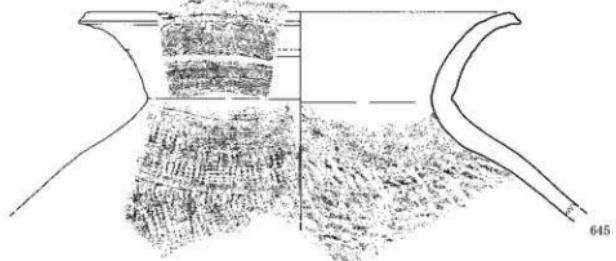


0 10cm

643

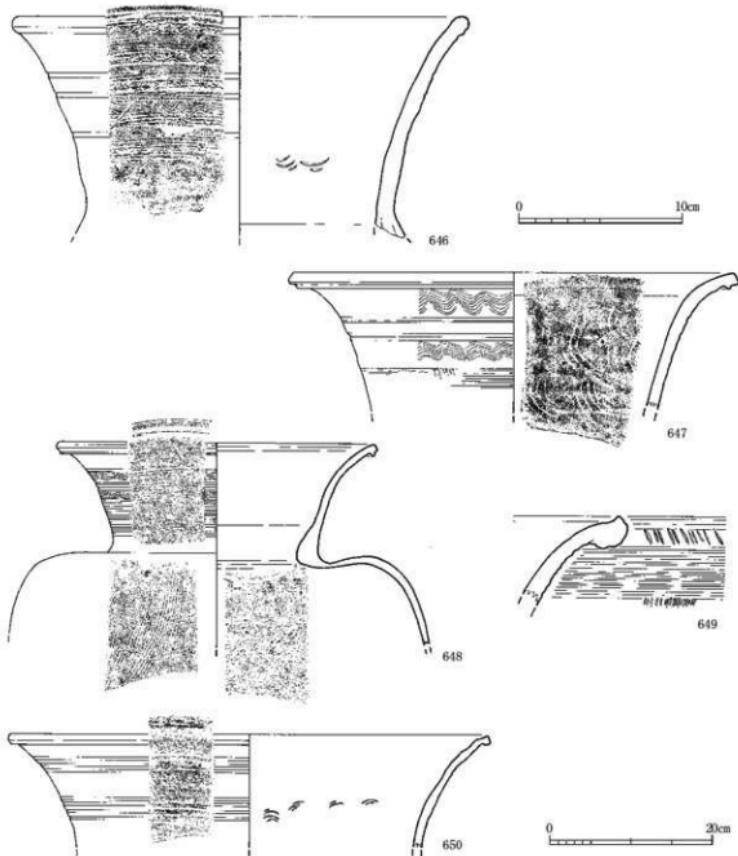


644



645

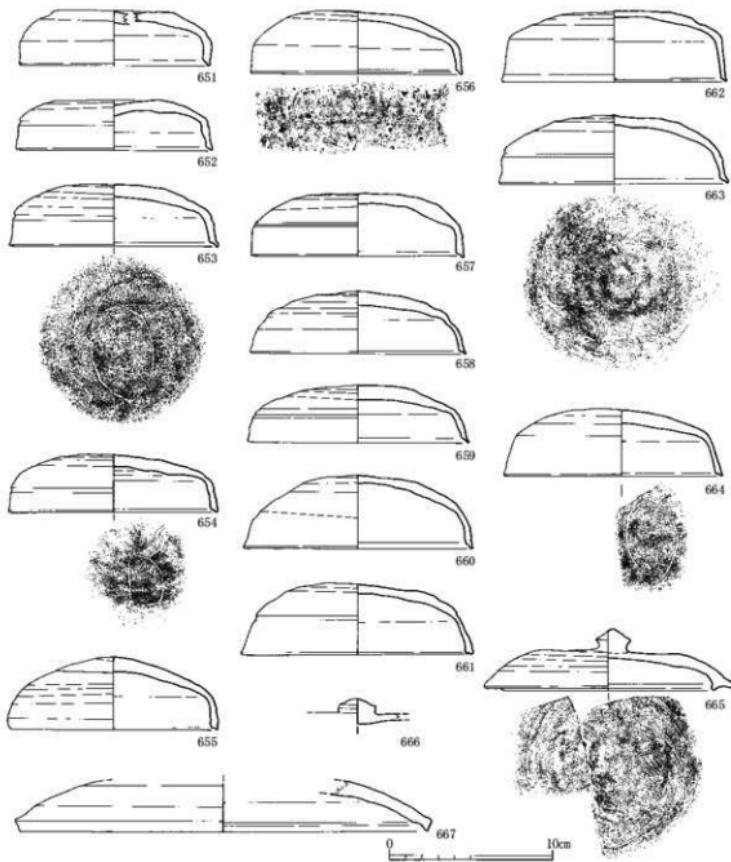
第63図 7・9・10号窯跡灰原灰層出土遺物実測図③ (1/3)



第64図 7・9・10号窯跡灰原灰層出土遺物実測図④ (1/3・1/6)

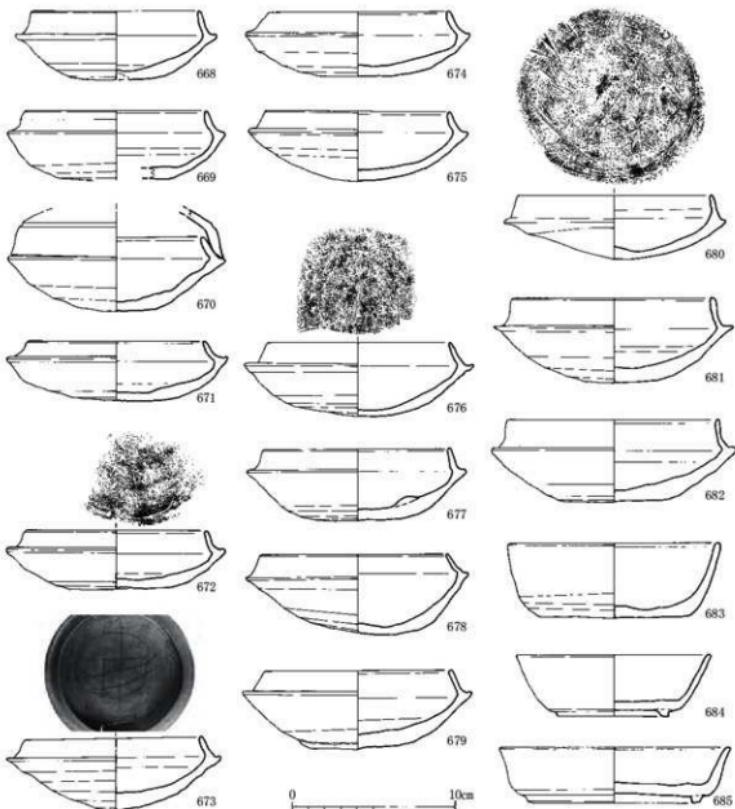
653・664「〇」、654・660「D」、655「ヰ」、656・657「|」、658「|||」、663「+」と形状不明だが659において、いずれも天井部内面に認められる。665は口縁部内面にカエリが付くタイプ。カエリは口縁端部よりも下に出る。天井部外面中央に宝珠形のつまみが付く。内面にヘラ記号「+」が大きく刻まれる。666・667は高台を持つ环身とセットになると思われる。666は天井部のつまみ付近のみ残存する。つまみは扁平なボタン状で、中央部が高くなる。667は口縁部1/6の残存。口径24.8 cmとやや大きめの製品である。天井部と口縁部の境は不明瞭で、端部は外に面を作る。

668～685は环身。このうち668～682は蓋受部・立ち上がりを持つ环Hタイプである。671～673・675・679は完形品もしくはほぼ完形。口径は668～676が10.2～11.2 cm、677～680が



第65図 2区谷下部包含層出土遺物実測図① (1/3)

11.4 ~ 12.0 cm、681・682は12.6 ~ 12.8 cm。全体の外形は669・670・676・677・679・681・682など底部が丸く深めの物が多いが、671・672・674・680は顕著な扁平となる。立ち上がりは全体的に内傾するが、681・682は高く直立気味となる。ヘラ記号は668・676「Φ」、672「D」、673「⊕」、674「卅」、678「|」、680「+」が底部内面に認められる。また670・672は蓋受部に重ね焼き痕が残る。670は蓋口縁部が付着する。683は蓋受部・立ち上がり・及び高台を持たない坏身。平らな底部から屈曲して体部が立ち上がり、口縁部はやや内湾する。器壁は厚い。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整される。684・685は高台を持つ坏身。いずれも完存する底部は平らで、外面の端よりやや内側に断面方形の低い高台が付く。口縁部は684は直線的に伸び、685は短くやや外反する。



第66図 2区谷下部包含層出土遺物実測図②(1/3)

686～695は高杯。686～692は長脚のタイプで、686・687は壺～脚基部が残る。686は内面1/2と相対する側の外面1/2が灰被りする。横倒しで焼成されたことによるものか。687は脚部外面にシボリ痕が残る。688は壺口縁部と脚部下位を欠く。686同様内面1/2と相対する側の外面1/2が灰被りする。また脚基部に別個体片が付着する。689・690は脚部のみ残存する。689は脚部下位に1条の沈線を配し、それより上位の前面にカキメを施す。端部は外に面を作る。690は基部を欠くが、以下はほぼ完存する。外面全体にカキメおよび中位に2条の沈線とそれを挟む上下に波状文を施し、上下2段の長方形透かしを3方向に配する。端部は丸く終わる。691は端部を欠く脚部下半。中位には沈線を意識したのか2条の強めのナデが見られる。692は壺部と脚端部を欠く。外面にはカキメが不規則に配される。シボリ痕が残る。693～695は短脚のタイプ。693は壺口縁部を欠き、脚部は焼け歪みで外反が強くなる。端部は外に面を作る。694は脚部下半が残る。ほぼ直立する中位から、

下位は強く屈曲して外に大きく開く。端部は丸く終わる。中位外面にカキメ、下位に沈線2条を施す。

696は鉢か。7.2 cm × 9.8 cmの破片で口縁端部が残る。体部はやや内湾し、頸部で強く屈曲して口縁部は短く外反する。外面頸部下に2条の沈線を配し、体部は格子目タタキ後ナデで仕上げる。体部内面にも一部格子目タタキが残る。697は手捏ね土器か。口径6.0 cm、器高3.6 cmを測るが、全体的に不整形で内外の調整も粗雑である。

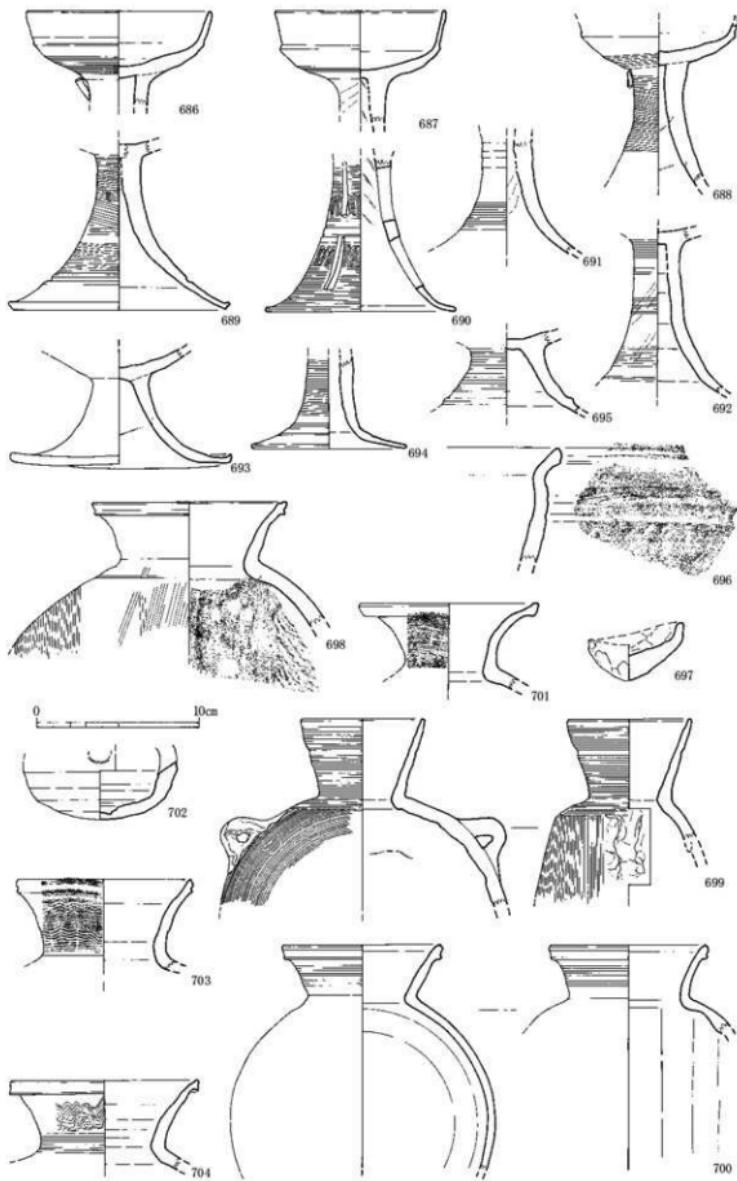
698～701は提瓶。698は体部内面に一部同心円当て具痕が残る。699は口縁～体部上半が残存する。外面には口縁から体部の全体に密にカキメが施され、肩部には輪状の把手が着く。口縁部中位には沈線が1条巡る。また風船技法に伴う被蓋部の接合部が確認できる。700では被蓋部との擬口縁が認められる。701は口縁～頸部の残存で、口縁部は完存する。口縁部外面にヘラ記号「|||」を記す。702は壺の体部下半。注口も下半が残る。底部内面の中央部に、焼成前の段階で径約1 cmの棒状の工具で複数回突かれるように施された不整形な凹みが見られる。703・704は瓶又は壺の口縁部。いずれも外面にカキメ後波状文を施す。

705～709は小型の短頸壺。705は口縁部を欠くが、他は短く内傾する口縁部となる。また708以外は肩が張り、体部上位に最大径を持つ。705は体部下位～底部外面が手持ちヘラ削り後ナデで仕上がる。口縁部を欠くが、頸部に擬口縁が露出する。706は肩部外面に波状文と沈線1条、さらにヘラ記号「|||」を施す。707は良好な残存で、体部の下半が完存し、口縁～体部上半も3/4が残る。中位以下の体部外面は工具による回転ナデで整えられ、下位の外面2ヶ所にヘラ記号「+」が刻まれる。また肩部外面に蓋の重ね焼き痕が残る。708・709は体部外面カキメ調整。709は割れ口に2次焼成痕が残る。

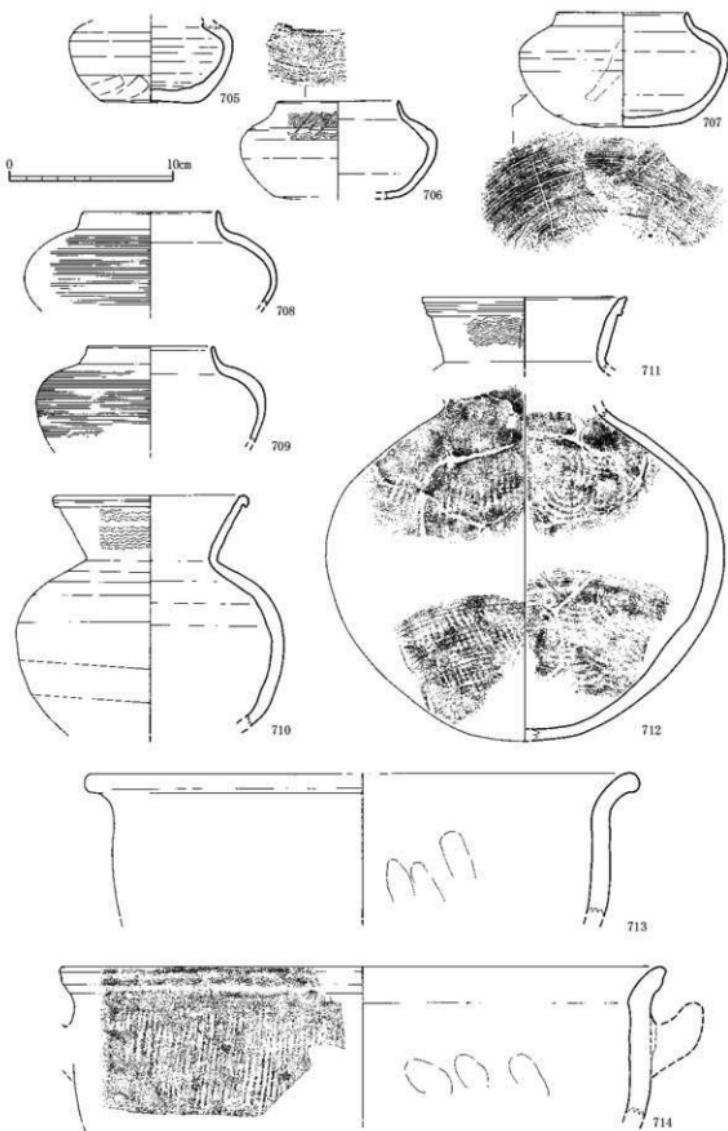
710～712は壺。710は口縁部1/4～体部下位の2/3が残る。体部は丸い球体で、頸部は強めに屈曲して口縁部は直線的に外上方に伸びる。口縁部外面波状文、体部外面は上～中位がハケ状工具による回転ナデ、下位が回転ヘラ削りで整う。711と712は直接には接合しないものの、胎土や焼成状況より同一個体と考えられる。712の体部は丸い球体、711頸部は屈曲が弱く、口縁部はわずかに外反する。711の口縁部外面に波状文とヘラ記号「|」が認められる。712の体部は、内面上位と下位に同心円当て具痕が残るが内面全体ヨコナデ、外面はやはり上位と下位にタタキ痕を残すが上～中位がカキメ、下位～底部はナデで仕上がる。

713・714は瓶か。いずれも厚手の器壁で、やや内湾気味に直立する体部から、頸部をもたず口縁部が短く外反する。714は外面口縁部下に把手の剥離痕が残る。713は体部内面タテナデ、外面は磨滅するがタタキ痕が認められる。714は体部内面タテ～斜め方向のナデ、口縁部下はヨコナデで整い、外面は格子目タタキ後ナデ調整で仕上がる。715は器台。台底部～脚部上半が残存する。但し焼け歪みが激しい。脚基部径は7.0 cmで、小型の製品である。脚部外面にはカキメと波状文が密に施され、長方形の透かしが2段に配される。また脚内部の台底部外面に、脚部接合のために施された同心円状の圧痕が残る。

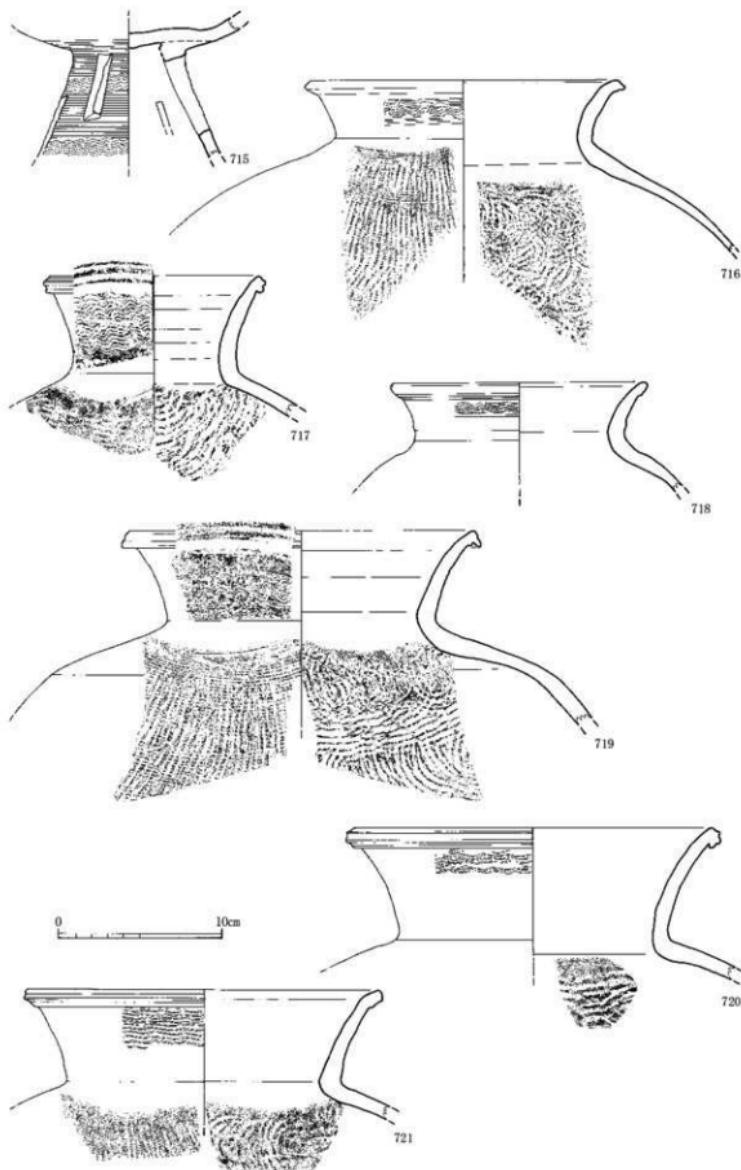
716～737は甕。716～733・735は短く外反または直線的に外傾する口縁部を持つ。716は口縁部外面カキメ後粗雑な波状文。717は口径13.6 cm。口縁部全体に波状文と頸部外面に工具の接触痕が残る。718・720・728はいずれも口縁部上位に波状文。体部外面が灰被りのため調整不明だが、内面は同心円当て具痕。719は口縁部中位に粗雑な波状文。721・722も口縁部外面に波状文を残す。723は口縁部外面カキメ後上位に波状文と、2ヶ所にヘラ記号「||」・「//」を記す。また体部外面



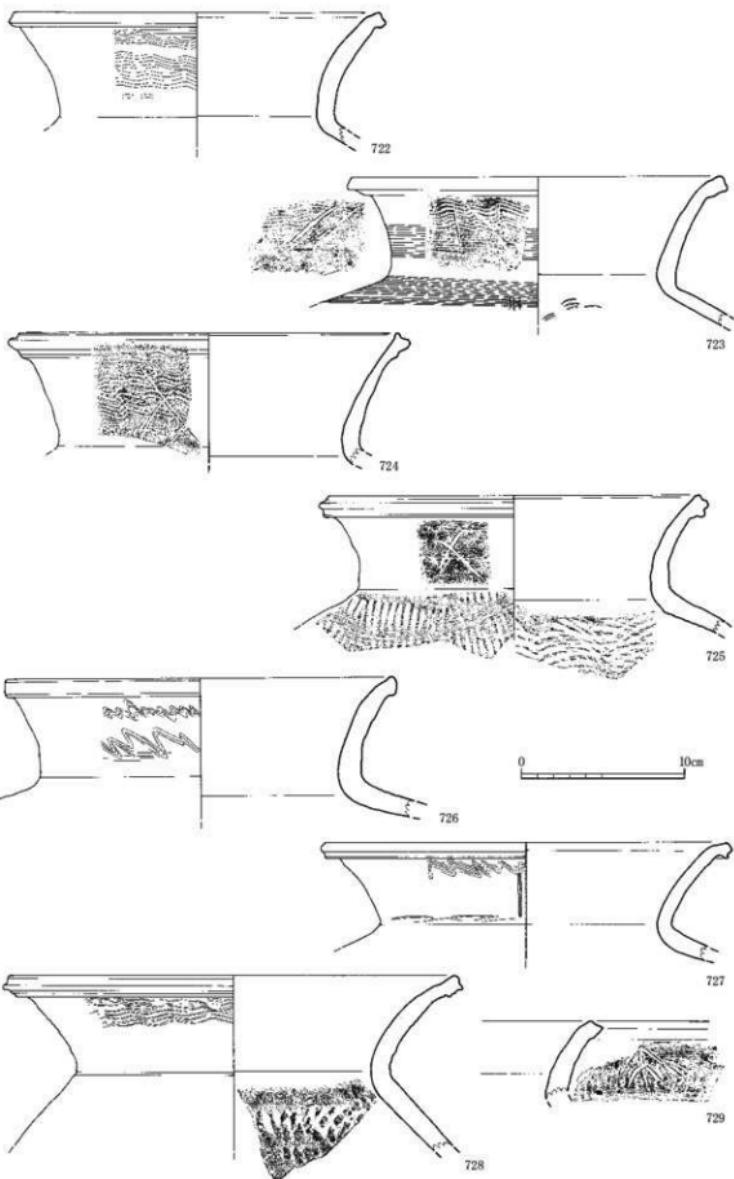
第 67 図 2 区谷下部包含層出土遺物実測図③ (1/3)



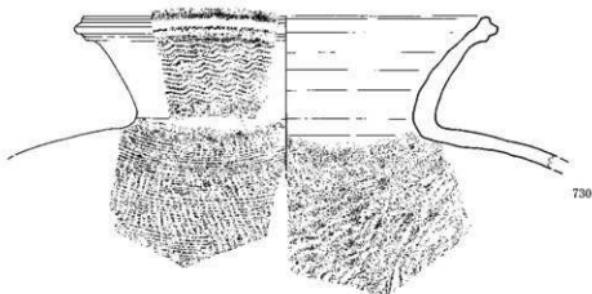
第68図 2区谷下部包含層出土遺物実測図④ (1/3)



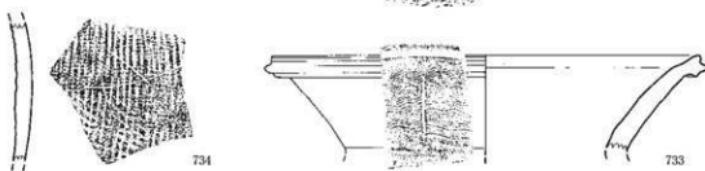
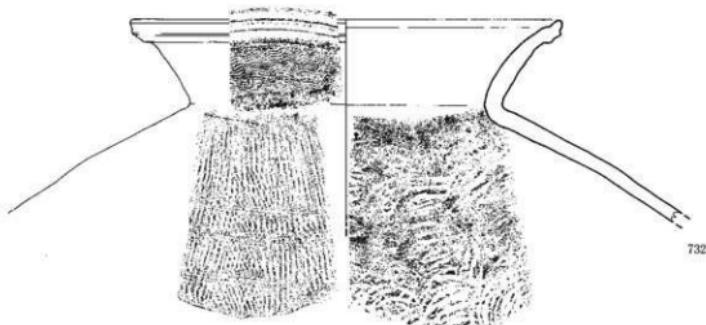
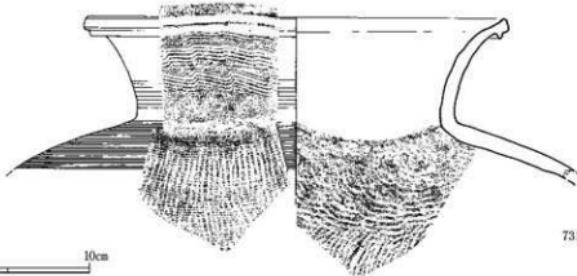
第69図 2区谷下部包含層出土遺物実測図⑤ (1/3)



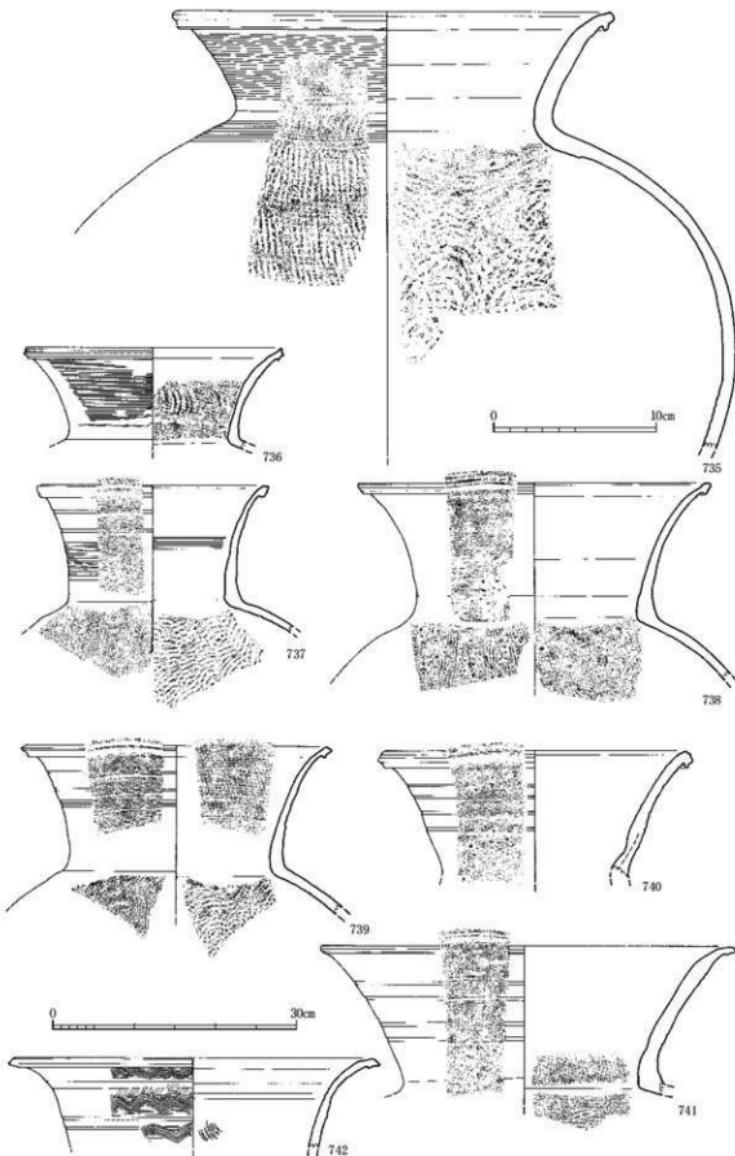
第 70 図 2 区谷下部包含層出土遺物実測図⑥ (1/3)



0 10cm



第 71 図 2 区谷下部包含層出土遺物実測図⑦ (1/3)



第72図 2区谷下部包含層出土遺物実測図⑧ (1/3・1/6)

はカキメ、内面はナデで消されるが、それぞれタタキ痕と同心円當て具痕が残る。724は口縁部外面にカキメとヘラ記号「×」、725にもヘラ記号「×」が残る。726は口縁部外面に粗雑な波状文と一部カキメ。体部外面が灰被りのため調整不明だが、内面は同心円當て具痕が確認できる。727は口縁部外面の上位に波状文とヘラ記号「|」、頸部外面にヘラ状工具の先端部によるナデ痕が残る。729は口縁部外面の端部下に樹枝状のヘラ記号を記す。730・732は口縁部外面のほぼ前面に波状文、731も波状文とカキメが密に施される。733は口縁部外面にヘラ記号「|」、734は体部の破片だが外面にヘラ記号「冂」を刻む。735は口縁部外面にカキメ、体部外面に格子目タタキ後カキメを施すが、頸部付近にタテ方向の細い線刻文を巡らす。736・737は外反して伸びる口縁部を持つ。736は口縁部外面カキメで、内面下半に同心円當て具痕を残す。737は口縁～肩部1/2が残る。口縁部内面中位の一部にカキメを施す。

738～742は大甕。738は口縁部がほぼ完存する。口径44.0cm。739は口縁部内面の広い範囲がカキメ調整される。741は口縁～頸部2/3の残存。頸部の内面に同心円當て具痕が残る。742も頸部に近い口縁部内面に同心円當て具痕が残る。また口縁部内面の中位に複数の沈線状の強いナデが確認できる。

743～747は土師器。743～745は小型の甕。743・744はやや内湾気味に直立する体部から、口縁部が短く外反する。745は体部が内湾して頸部を作り、さらに外反して口縁部に至る。743・745は器壁が薄い。743は口縁部下の外面に粘土接合痕が認められる。いずれも内外面が磨滅するが、744は体部内面にナデと口縁部にヨコナデ痕が、745は外面の一部にタテ方向の削り痕が残る。746は甕。口縁部付近1/3の残存で、全体が磨滅する。747は甕の把手部分。器壁に接合した状態である。器の内面にタテ方向の削りが確認できる。

遺構検出時出土遺物（第73図）

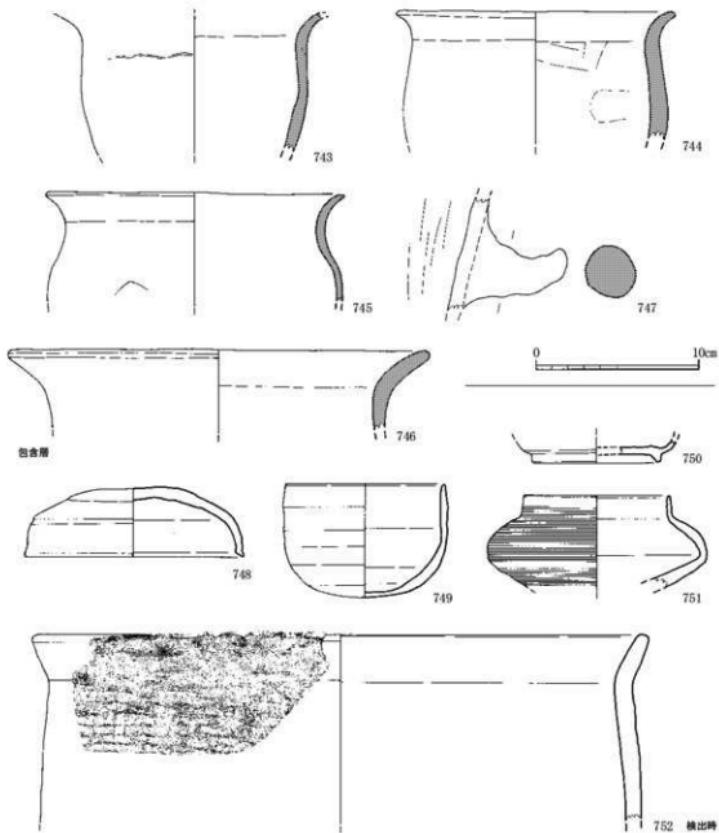
748～752は、表土剥ぎ後および遺構検出時に、露出した遺物を取り上げた物で、全て須恵器である。

748は壺蓋。焼け歪みがあり口径は13.2～13.6cm。深めの形状で口縁部は高い。天井・口縁部は浅い沈線で分けられ、口縁端部内面は内傾による段を作る。749は鉢。丸く深い底部から口縁部が直立して伸びる。750は高台を持つ壺身。口縁部を欠く。底部は平らで、外面の端よりやや内側に断面方形の低い高台が付く。751は小型の短頸壺。体部は肩が張らず、体部中位に最大径を取る。口縁部は直立する。頸部以下の体部外面にカキメを施す。752は甕か。器壁は厚く、やや内湾気味に直立する体部から、口縁部が短く外傾する。体部内面ヨコナデ、外面は格子目タタキ痕が残る。

（3）小括

以上、2区では全長10mを超える大型の須恵器窯跡4基と、同時期の遺構2基を検出した。いずれも出土遺物より、概ね古墳時代後期に属する。特に4基の窯跡については、残存状況も良好で、窯跡の構造を考える上で貴重な資料を得ることができた。この点はV章で述べたい。

遺物は、各窯跡の窯体内・灰原および包含層を中心に多量の須恵器が出土した。大半は壺の蓋と甕であり、他に主な器種としては高壺・瓶類・壺・罐・器台が見られる。碗・鉢・壺では珍しい器形も散見された。また須恵器に比べると割合は格段に少ないが、土師器も出土している。これは生産に伴うものか、消費に伴うものか、成分分析の結果が参考になろう。なお、包含層や灰原上



第73図 2区谷下部包含層⑨・遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)

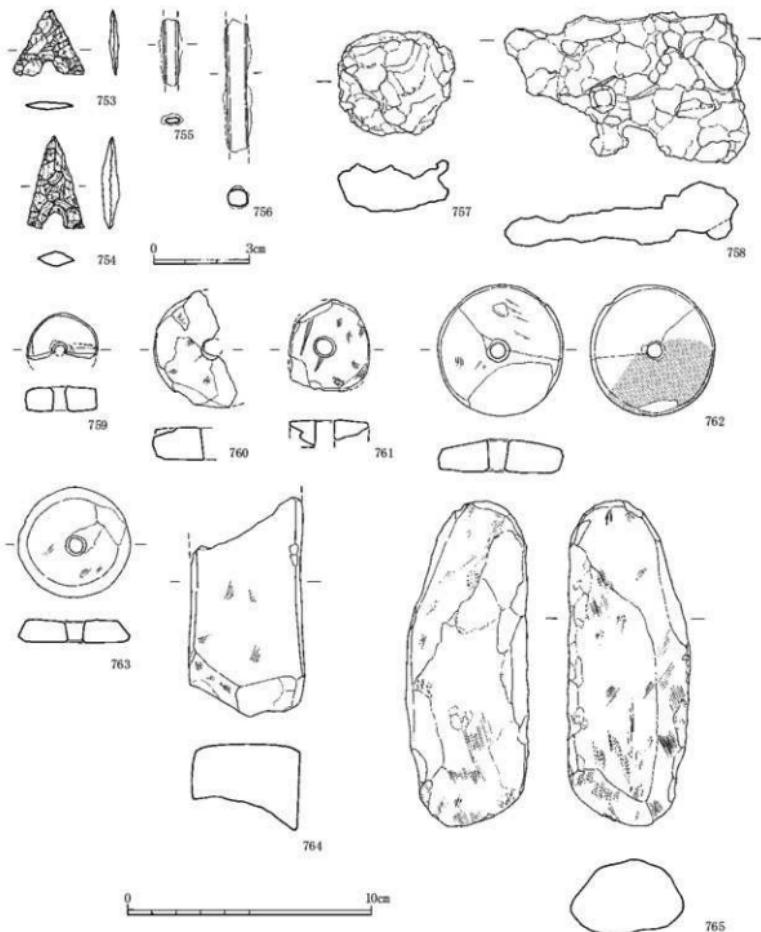
層では7~10号窯跡よりも時期が下る遺物が出土しているが、その評価についても、成分分析の結果を踏まえてV章で述べたい。

4 特殊遺物

土製品や石製品、鉄製品などの特殊遺物について報告する。4点のみが2区からの出土で他は1区から出土しているが、ここでは特殊遺物としてまとめて報告を行う。

石器・石製品(第74図、図版54)

753、754は打製石器である。753は凹基式で先端がわずかに欠損する。剥離は全体的に粗く風化が激しい。抉りは深く錐形を呈する。安山岩製。2区谷下部C-3、4層出土。754は凹基式で、側縁



第74図 その他の特殊遺物実測図① (2/3・1/2)

はやや鋸歯状を呈する。全体的な剥離はやや粗い。安山岩製。2区谷下部A-3褐色土出土。

764は砥石である。砥面は上面のみが残存しており、側面は研磨で面取りしている。頁岩質砂岩製。元の大きさは不明だが石質から仕上砥と考えられる。1-A区北東斜面C-3出土。

765は磨製石斧である。風化が多くやや不明な点があるが、表裏面共に全面研磨を施しているものと考えられる。一部敲打痕らしきものが見られることから敲打後粗い研磨を行っている可能性もある。使用痕も風化のため不明瞭だが、刃部が片減りしており、右利き用の伐採石斧と考えられる。凝灰岩製か。2区谷下部B-3出土。

鉄器・鍛冶関連遺物（第74図）

755、756は鉄鐵である。共に茎部分のみが遺存しているが、755の方は断面形が扁平で先端に近いものと考えられる。共に1-A区北東斜面C-3出土。

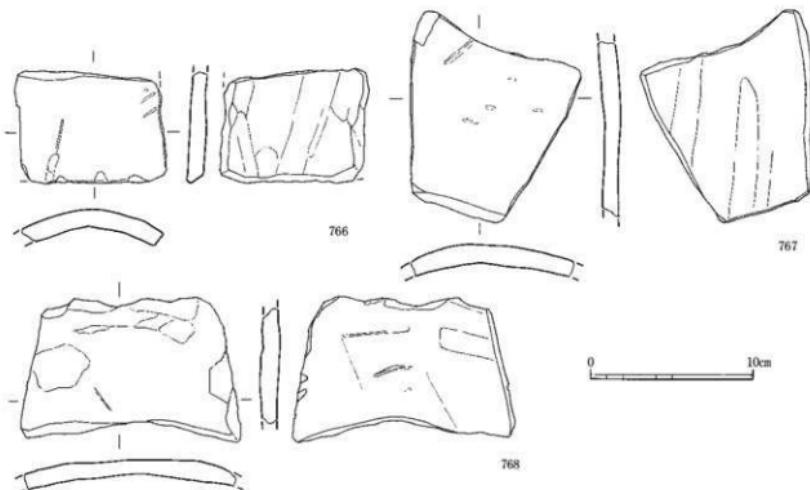
757、758は鉄滓である。ともに鍛冶滓で、わずかに鉄分が残存する。下部には炉床土と考えられる土が付着している。それぞれ1-A区北東斜面C-2、B-3出土である。

紡錘車（第74図、図版54）

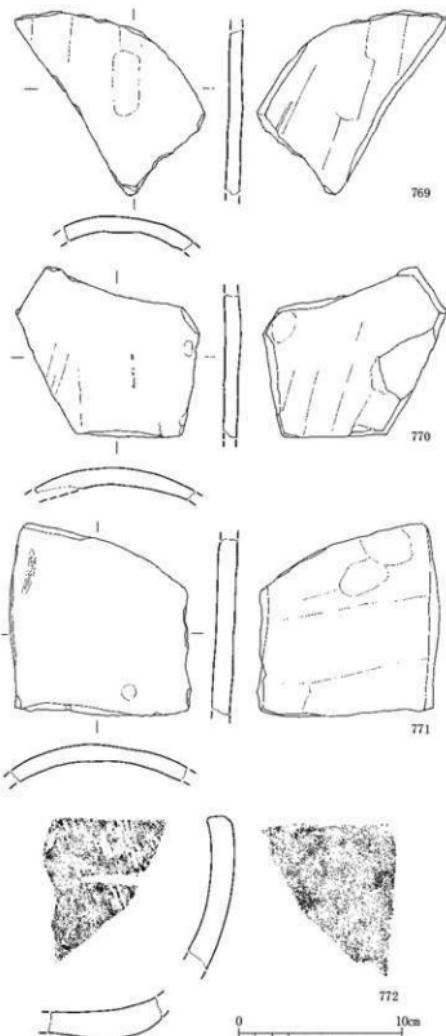
759～763は紡錘車で、760、761、763は石製、759、762は陶製である。759は小型で、4/7程度が遺存する。両面ともに擦痕が見られ、ヘラ切り等で分割した後に粗いナデで調整したか。1-A区B-3・C-3間ベルト出土。760は1/2程度が遺存するが、表面の剥落が激しい。両面ともに研磨により平坦にしており、復元すると直径5センチ程度の正円形を呈すると考えられる。他の石製紡錘車に比べて厚い。滑石製。1-A区北東斜面C-3出土。761は欠損が著しく裏面はほとんど残っていない。上面は平坦でややいびつな円形を呈する。緑色片岩製。1-A区北東斜面B-2・C-2間ベルト出土。762は表面がやや剝離するがほぼ完形である。断面形は上面および側面がややふくらむ。両面ともに擦痕が見られ、ヘラ切り等で分割した後に粗いナデで調整したか。裏面に円弧状に色調が異なる部分があり、焼成の際にほぼ同じ大きさの紡錘車を重ねて焼いたと考えられる。1区北東斜面B-2・C-2間ベルト出土。763は表面の一部がやや剥落するが、ほぼ完形である。断面形は台形を呈し、孔は小さい。滑石製。1-A区北東斜面B-2・C-2間ベルト出土。

不明土製品（第75・76図）

766～772は不明土製品である。766～771は平瓦のように横方向に緩やかな曲線を持つ。表面は摩滅しているが、内面には若干ケズリのような痕跡が見られ、厚みは薄い。772は縦横ともに緩やかな曲線を持つ。内面にはタタキの痕跡が見られる。



第75図 その他の特殊遺物実測図② (1/3)



第 76 図 その他の特殊遺物実測図③ (1/3)

土馬 (第 77 図、図版 54)

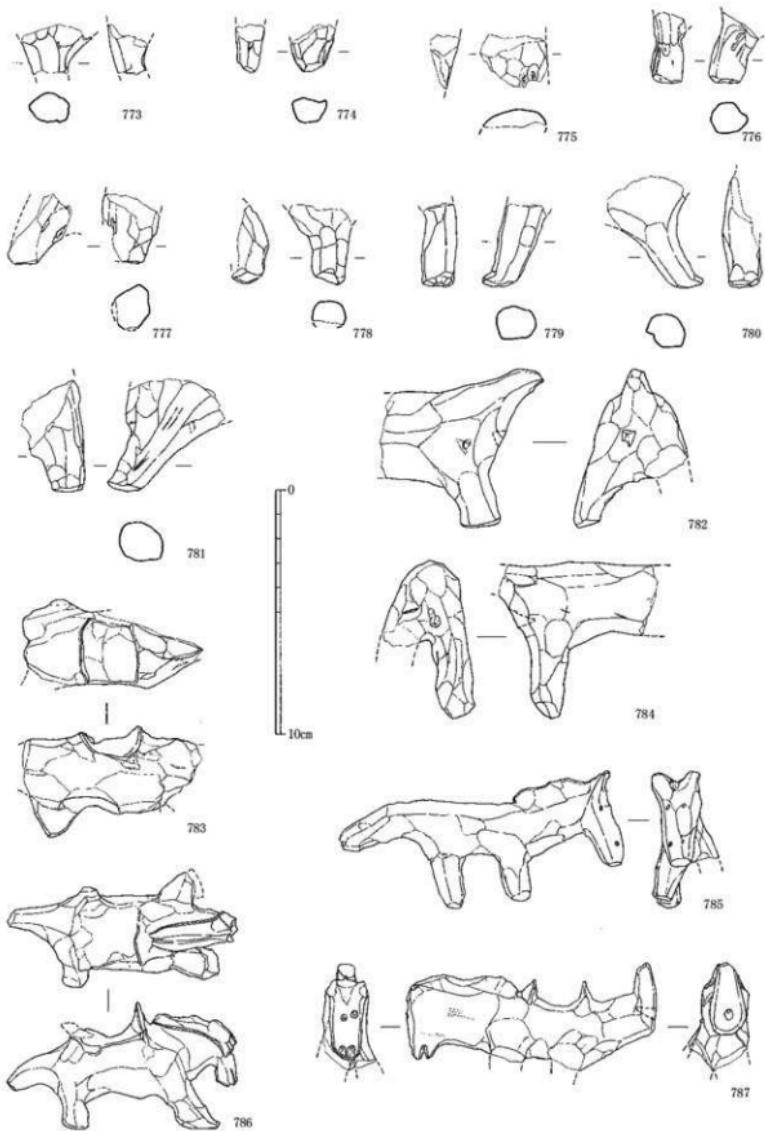
773 ~ 787 は土馬である。須恵質のものと土師質のものがあり、前者を陶馬、後者を土馬と呼称する。773 は陶馬の左前脚部分の付け根である。胴部に脚を貼り付けたと考えられる部分から剥離しており、指ナデで成形している。I-A 区北東斜面 C-3 出土。774 は陶馬の脚先である。内側に向かって指ナデした痕跡が見られ、脚先を丸く仕上げている。I-A 区北東斜面 C-3 出土。775 は土馬の脚である。大きく破損しているが、径が太いことから付け根部分と考えられる。指ナデで成形している。脚が太いタイプである。I-A 区北東斜面 B-2 出土。776 は陶馬の左前脚である。指ナデで成形しており、脚先は平坦になる。内面は脚先からおよそ 1 cm の部分で凹みをつけており、関節を表現したものか、胴部と接合する際になでつけたものと考えられる。I-A 区北東斜面 C-3 出土。777 は土馬の右前脚か。指ナデにより成形し、内面には胴部になでつけた際の痕跡が見られる。脚が短くどっしどした土馬であったものと推測される。I-A 区北東斜面 B-2 出土。778 は土馬の脚である。指ナデにより成形し、外面上には胴部になでつけた際の痕跡が見られる。脚が短くなるものと考えられる。I-A 区北東斜面 B-2 出土。779 は陶馬の左前脚である。一部不明瞭ながらも面取りしているように見える部分があり、ヘラで削った後、指ナデしたものか。脚先は平坦になり、つま先を示すように先端を指ナデで前方につきだしている。I-A 区北東斜面 C-3 出土。

780は陶馬の右前脚である。後ろ側など一部ヘラで削ったと考えられるが、そのほかは指ナデにより成形している。胴部に脚を貼り付けたと考えられる部分から剥離しており、短脚と考えられる。1-A区北東斜面C-3出土。781は陶馬の脚である。脚の外側から裏面の一部は面取りしているように見えることから、ケズリを行っているものと推測され、その他についてはユビナデで成形する。他の例に比べてやや太くしつかりした脚である。内側は胴に脚部を貼り付けたと考えられる面で剥離している。2区遺構検出時出土。782は陶馬の下半身である。右脚が欠損する。胴部は太く、脚は短い。指ナデにより成形し、脚先は平坦である。尻尾は短く上に伸び、臀部に先端の尖った棒状のもので2回以上刺突して穴を表現している。脚は別作りで貼り付けている。他例との比較から考えると、裸馬になるものと考えられる。1-A区北東斜面C-3出土。783は土馬の下半身である。右脚と左脚先、胴部の一部が欠損している。剥落が多いものの、全体を指ナデで成形しているものと考えられ、背には粘土貼り付けにより鞍が表現される。脚は別作りで貼り付けている。胴部は太く、脚が短いタイプとなるか。1-A区北東斜面B-2出土。784は陶馬の下半身である。尻尾と左脚が欠損している。胴はやや細身で、脚は長い。指ナデにより成形し、脚先は尖っている。尻尾は上に伸びると考えられ、臀部に先端の尖った棒状のもので2回以上刺突して穴を表現している。脚は別作りで貼り付けている。782と同じく他例との比較から、裸馬になるものと考えられる。北東斜面窯後付近出土。785は陶馬である。左両脚を欠損する。首の下や胴の一部などへラで削った痕跡が見られるが、基本的には指ナデで成形している。顔は目および鼻を径2mmほどの棒状工具による刺突で表現しており、口は表現されない。脚先は丸く成形され、尻尾は長くやや下にたれる。胴は細く、脚はやや短い。たてがみおよび耳、脚は別作りで貼り付けている。裸馬である。1-A区北東斜面C-3出土。786は陶馬である。左両脚先のみを欠損する。全体を指ナデにより成形している。背には粘土貼り付けにより鞍が表現され、耳の下から鞍の前面にかけて手綱が線書きにより表現される。脚先は平坦になり、尻尾は短くやや下にたれる。胴は太く、脚は短い。たてがみは粘土を指で引っ張り出すことにより表現され、脚は別作りで貼り付けている。口部分にも手綱を描いたものよりも太い工具で線が引かれる。1-A区北東斜面C-2出土。787は陶馬である。脚を欠損する。顔の横など一部へラで削った痕跡が見られるが、基本的には指ナデで成形している。背には粘土貼り付けにより鞍が表現され、他の例よりも凹みが大きい。尻尾は垂直に上方向に伸びており、平らになった臀部に径3mmほどの棒

状工具で刺突し、穴を表現する。顔は竹管状の工具で刺突し、目を表現している。鼻は径3mmほどの棒状工具で下方向から刺突し、口は同様の工具で幅4mmほど搔き取ることで表現される。胴はやや細く、首と顔の境界がはつきりしない。不明瞭ながらたてがみは貼り付けたものと考えられる。脚は別作りで貼り付けている。1-A区北東斜面C-2出土。



土馬（左より 785・786・787）



第77図 出土土馬・陶馬実測図 (1/2)

IV 自然科学分析の結果

1 各分析について

今回の井手ヶ浦窯跡第2次調査では、窯跡の熱残留磁化による年代測定、出土炭化物によるAMS年代測定、出土炭化物の樹種同定、そして出土須恵器・土師器の胎土について蛍光X線分析を実施した。

熱残留磁化測定については、岡山理科大学の鳥居雅之氏に調査を依頼した。調査終了直前の3月3日に来跡され、悪天候の中、7～10号の各窯跡から測定試料を採取していただいた。その様子は図版39に掲載している。

炭化物のAMS測定と樹種同定は（株）加速器分析研究所に調査を委託した。分析を行った試料は、AMS測定については、各窯跡に由来する可能性が高い層位より出土したもの4点をピックアップしている。また樹種同定については、先の4点、および大きめに残るものや、元々の材の形状が復元されるようなものなど、合わせて10点の同定を行った。試料の写真は図版55に掲載している。

出土須恵器・土師器の蛍光X線分析については、大阪大谷大学の三辻利一氏に依頼した。分析試料は、7～10号各窯跡より出土した蓋坏および甕のほか、包含層出土の資料も含む53点である。窯跡出土資料の分析は、井手ヶ浦窯跡群としての化学的特性を求めるものであることは言うまでもない。一方で、土師器や包含層出土資料の分析は、出土状況から得られる情報が限られる中で、窯跡出土資料の分析結果と比較から、生産地についての情報を得ようとするものである。分析試料の写真は図版56～61に掲載した。

以下に、炭化物試料の一覧を掲げる。

番号	出土遺構・層位	採取年月日	重量(g)	特徴
No.1	7号窯跡 燃焼部灰層(5層)	2008.01.17	30	長7cm×幅4.5cm×厚2.5cmの半円柱状
No.2	9号窯跡 灰原灰層(48層)	2008.03.10	140	長11cm×幅8cm×厚4.5cmの半円柱状
No.3	10号窯跡 燃焼部最下層(31・32層)	2008.02.05	10	長8cm×長径1.7cmの樹枝片
No.4	10号窯跡 焼成部、貼壁内	2008.02.08	5	長5cm×長径1.3cmの樹枝片
No.5	7号窯跡 前庭部下位、6・8・9層灰層	2007.12.10	10	長5cm×幅4cm×厚さ1cmの板状
No.6	7号窯跡 前庭部下位、6・8・9層灰層	2007.12.10	80	半径5cmの円柱材の1/6片、高さ6cm
No.7	7号窯跡 前庭部下位、6・8・9層灰層	2007.12.13	30	長8cm×幅3cm×厚2cmの角柱状
No.8	10号窯跡 焼成部、貼壁内	2008.02.08	20	長5cm×長径2cmの樹枝片
No.9	10号窯跡 前庭部、33層灰層	2008.01.24	10	長7.5cm×長径2.3cmの樹枝片
No.10	10号窯跡 前庭部、33層灰層	2008.01.24	60	長9cm×幅4cm×厚4cmの半円柱状

第1表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土炭化物（木炭）AMS年代測定・樹種同定試料リスト

2 井手ヶ浦 7 号～10 号窯跡の熱残留磁化測定結果

鳥居雅之（岡山理科大学生物地球システム学科）

畠山唯達（岡山理科大学情報処理センター）

山本友里恵（岡山理科大学生物地球システム学科）

・京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻）

（1）はじめに

福岡県飯塚市鈴田の井手ヶ浦第2次調査遺構で発掘された4基の須恵器登窯跡、7号窯跡（以下ID 7）、8号窯跡（ID 8）、9号窯跡（ID 9）および10号窯跡（ID 10）の床面から焼土試料を採取し、熱残留磁化を測定したので、その結果について報告する。この遺跡の考古学的年代は、6世紀後半を中心とし、一部は中頃まで遡る可能性があり、8号窯跡と10号窯跡の使用時期がほぼ同じで、引き続き7号窯跡、さらに9号窯跡であるが、それらの間に大きな時代差はない」とされている（現地説明会資料、2008）。

試料の採取は2008年3月3日に行った。試料は、まず窯跡の床面の焼土を大人の握り拳大程度の大きさに掘り込み、くずれないように全体を薄く溶いた石膏で補強する。続いて表面に濃い石膏とアルミ板で任意の傾きをもつ平面を作り、その面の走向と傾斜をプランクトン・コンパスと傾斜計を用いてそれぞれ計測し、方位を示すマークと試料番号を記入して定方位試料とした。その後試料を掘り出し、石膏でさらに補強して実験室に持ち帰った。全ての窯跡から12個ずつ試料を採取した。試料採取は発掘作業の最終段階で行ったため、試料はもともと下位（初期）の床面のものと考えられる。ただし、ID 7-11と-12、ID 8-5と-12、ID 9-6の5個は輸送中に破損してしまい、測定できなかった。なお、試料採取方法の詳細などは中島・夏原（1981）に詳しく述べられている。

採取地点の緯度と経度は、北緯 $33^{\circ} 39' 35''$ 、東経 $130^{\circ} 41' 41''$ である。この地点で国際標準地球磁場（IGRF: <http://swdcwww.kugi.kyoto-u.ac.jp/igrf>）にもとづき計算される地磁気偏角は -6.9° である。しかし、現地でプランクトン・コンパスと電波時計を用いて太陽の方位を観測し、その結果にもとづいて地磁気偏角を計算すると、 -7.3° という値が得られた。IGRFによる値とは 0.4° の差があるが、この差は局地的な地形や地質、あるいは周辺の人工物などに原因があると考えて、実測値から求めた -7.3° によって各定方位試料の方位を補正した。

（2）試料と測定方法

焼土試料の熱残留磁化は、現地で採取した不定形の試料を1辺34mmの立方体状に整形し、スピナーマagnetic force meter (夏原技研 SMM-85) を用いて測定した。一般に焼土試料は、その試料が最後に $\sim 600^{\circ}\text{C}$ 以下に冷却されたときに、周囲の磁場（地球磁場）の方向と強度を熱残留磁化として正確に記録する。しかし、長期間埋没している間に、常温でもわずかに粘性残留磁化と呼ばれる2次磁化を獲得する。さらに発掘時や試料採取時に用いられた鉄製の道具などが発生している強い磁場の影響を受けたり、実験室内の磁場によっても人工的な磁化を獲得してしまう可能性が常にある。そこで、最終焼成時に獲得した熱残留磁化（初成磁化）以外の2次磁化を除去し、初成磁化成分だけを取り出すために消磁という作業を行わなければならない。本報告では、段階的な交流消磁という方法を採用した。この方法は、まず消磁前に残留磁化を測定し、次に地球磁場強度の100倍程度の5mT（ミリテスラ）

の交流磁場の中に試料を置いて後、磁場をスムーズに減衰させて消磁する。試料の磁化は3次元的なので、直交するx、y、zの3方向全てについて行う（定置法）。3方向それぞれについて消磁を行ってから、磁化の方向と強度の変化をスピナー磁力計で測定し、次に10mTで再び消磁してから測定するということを段階的に繰り返し、5、10、15、20、25、30、40、50、60、80および100mT（地球磁場強度の約2000倍）までの11段階の交流消磁を行った。この消磁には夏原技研製交流消磁装置(DEM-93)を用いた。

（3）段階交流消磁結果の解析

段階交流消磁の結果は、まずザイダーベルト図を用いて解析した。試料の磁化は3次元ベクトルなので、段階的な消磁によって磁化がどのように変化したのかを2次元的に図示するのは難しい。そのためザイダーベルト図(Zijderveld, 1967)という図法が一般的に使われている。この図法は、3次元磁化ベクトルを北一東一南一西の軸を含む水平面と、上一北一下一南という垂直面に別々に投影し、さらにこの2つの図を北一南軸を共通とした1つの平面上に重ねて表記する方法である。この方法の詳しい解説は小玉(1999)を参照されたい。第78図の●と○は交流消磁の各段階での磁化方向と強度を示している。●は水平面上への投影点、○は垂直面上への投影点であり、それぞれの点と原点との間の距離が磁化強度を示している。この図上で、点が一直線に並んでいる部分が見られる時には、その消磁範囲では磁化方向が変化せず、強度だけが単調に減少していることを意味している。もしこれらの点が高い消磁レベルに対応し、図の原点に向かっているならば、それらによつて示される磁化成分は相対的に安定であり、その試料に特徴的な磁化成分で、初生磁化の可能性が高い成分であると判断できる。

第78図に各窯跡の代表的消磁結果を示した。これらの例では、15～30mTと100mTの間の消磁範囲で図の原点に向かう直線的成分がはっきりと見えている。この範囲以下では磁化方向が原点に向かって直線的に並んでいないので、初生磁化の可能性はないと考えて以下の解析の対象とはしない。

ザイダーベルト図上で抽出された直線的に並んだ点に共通な方向を求めるには、3次元空間での最小二乗法、すなわち主成分解析法を用いる必要がある。具体的な計算手続きはKirschvink(1980)によって示されており、直線性の評価法としてMAD(Maximum Angular Deviation)というパラメータを用いることが提案されている。第2表に試料毎の安定な磁化成分が得られた消磁範囲とMADを示した。MADの値は0.5°から3.3°の範囲であり、全試料についての中央値は1.2°と十分小さい。つまり、磁化成分推定の誤差は十分小さいと考えられる。

さらに、段階消磁によって消磁前の磁化強度が半分にまで減ったときの消磁レベルであるMDF(Median Destructive Field)を、第79図と第2表に試料ごとに示した。MDFの平均値と標準偏差は7号窯跡では 40 ± 14 mT、8号窯跡では 31 ± 3 mT、9号窯跡では 39 ± 13 mTおよび10号窯跡では 28 ± 6 mTとなった。MDFの値が高いほど交流消磁に対する抵抗力（保磁力）が大きい、つまり、磁化がより安定であると考えてよい。大部分の試料が30mT以上の値を示しているので、残留磁化は十分安定であると判断できる。

次に、主成分解析法によって求めた安定な残留磁化方向を、窯跡ごとに当面積投影法によって第80図に示した。いずれの窯跡についても、各試料の磁化方向はよくまとまっている。まとまりが非常に良いということは、それぞれの平均地についてのFisher(1953)によるバラツキの程度を示す

95% 信頼限界円 (α_{95}) が $1.9^\circ \sim 2.5^\circ$ と非常に小さいこと、また集中度パラメータ (k) が 337 ~ 626 と非常に大きいことによって示されている（第3表）。

（4）考察

4 基の窯跡のそれぞれの平均の残留磁化方向を等面積投影図上に投影してみると、たがいに α_{95} の範囲が重なり、4 基の平均方向の間には統計的に有意な差がないことが分かる（第81図）。発掘情報に基づけば、ID 8 と ID10 がほぼ同時期で、ID 7 から ID 9 へと新しくなるとされている。確かに平均方向は ID 8 と ID10 がほぼ重なり、ID 7 と ID 9 はやや離れているように見える。しかし、統計的には有意な差はないと考えるべきなので、4 基の窯跡の年代差については、考古地磁気学的には議論することはできない。したがって以後の議論では、4 基の方向を平均した方向（第1表）で残留磁化方向を代表させることにする。

考古地磁気学的な年代推定は以下の手順を行った。まず、比較すべき地磁気永年変化の標準曲線としては、Shibuya (1980) によってまとめられた近畿地方の標準曲線を用いることにした。本遺跡の年代は考古学的には6世紀後半を中心とするとしているので、Shibuya 曲線の AD500 ~ AD1000 の部分と比較することとした。この部分は陶邑からのデータに大きく依拠しているので、須恵器窯跡同士の比較と言う意味で好都合である。ただし、Shibuya 曲線は大阪府堺市に規格化された値なので、これを1で述べた本遺跡の位置に、地磁気双極子仮説（小玉、1999）にもとづいて変換した。第82図に点線で示したのが、本地域に変換した標準曲線（AD500 ~ AD1000）である。

第82図に ID 7 ~ ID10 の 4 基の窯跡ごとの平均方向（○）と、それぞれの偏角と伏角の 95% 信頼限界を梢円の範囲として示した。さらに、4 基の平均値（□）とその 95% 信頼限界も示した。図から分かるように、4 基の平均値は標準曲線の 575 年もしくは 775 年の点にもっとも近くプロットされている。しかし、標準曲線に完全に重なっているわけではない。ただし、ここでは表現していないが、標準曲線にも 2° 程度の信頼限界の巾があるので（Shibuya, 1980）、実際には両者の信頼限界は重なっていると考えてよい。それでも、575 年前後か 775 年前後のどちらであるかを区別することはできない。しかし、考古学的には6世紀後半とされているので、その情報と矛盾しない 575 年 ± 25 年を考古地磁気学的年代として推定するのが合理的であろう。

山本他 (2008) は、福岡県大野市の須恵器窯跡の考古地磁気学的数据を発表しており、そこではすべてのデータが Shibuya 曲線に比べて偏角は西偏、伏角は大きくなる方向にずれる傾向があることを指摘している。そのために、福岡県あるいは北九州地域で独自に地磁気永年変化の標準曲線を作る必要があると結論づけている。山本他 (2008) による大野城地域の AD675 の平均偏角は -9.3° 、平均伏角は 61.6° であり、第82図の右下の範囲外にプロットされる。それに比べれば、本遺跡のデータは Shibuya 曲線により近い傾向を示しているが、大野城地域のデータとの間に有意な差があるかどうかを議論するには、まだデータ不足である。いずれにしろ、北九州地域のデータをもっと増やし検討する必要があり、それは考古地磁気年代推定法の確度をあげるためだけでなく、地磁気永年変化そのものの性質を明らかにしていく上でも是非必要である。

謝辞

今回の試料採取にあたっては、福岡県教府総務部文化財保護課の一瀬智氏に大変お世話になった。

測定に際しては、岡山理科大学生物地球システム学科の山本真央さんに手伝っていただいた。データ処理と図化には熊本大学の渋谷秀敏教授作成の Progress と Direction というソフトウェアを用いた。以上、記して謝意とさせていただきます。

引用文献

- Fisher, R.A., Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. A, 217, 295–305, 1953.
- 福岡県教府総務部文化財保護課、井手ヶ浦窯跡2次調査の発掘調査成果（現地説明会資料）、pp. 8, 2008.
- Kirschvink, J.L., The least squares line and plane and the analysis of paleomagnetic data, Geophys. J. R. astr. Soc., 62, 699–718, 1980.
- 小玉一人、古地磁気学、東京大学出版会、pp. 248, 1999.
- 中島正志・夏原信義、考古地磁気年代推定法、ニュー・サイエンス社、pp. 95, 1981.
- Shibuya, H., Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism, 大阪大学基礎工学部修士論文, pp. 54, 1980.
- 山本友里恵・高橋卓也・児玉涼子・白井景子・鳥居雅之、牛頭本堂遺跡群・梅頭遺跡古窯の考古地磁気学の年代推定、牛頭梅頭・本堂遺跡群～自然科学研究編～、大野城市文化財調査報告書、第87集、25–34, 2008.
- Zijderveld, J.D.A. & A.C. demagnetization of rocks: analysis of results, in "Methods in Palaeomagnetism", Collinson et al. eds., pp. 254–286, Elsevier, Amsterdam, 1967.

図表の説明

第2表 安定成分を認定した消磁範囲を全試料について示した。MAD は Kirschvink (1980) によって定義された Maximum Angular Deviation で、値が小さいほど方向のバラツキが少ない。MDF (Median Deviative Field) は消磁前の残留磁化強度を 50% まで減らすのに必要な交流磁場の値であり、この値が高いほど残留磁化は消磁に対して安定である。

第3表 ID 7, ID 8, ID 9 および ID10 の平均の偏角と伏角。 α_{95} は Fisher (1954) の 95% 信頼限界円で、伏角の 95% 信頼限界に等しい。 $\Delta\theta$ は偏角の 95% 信頼限界で、 $\sin\Delta\theta = \sin\alpha_{95}/\cos I$ で定義される (小玉, 1999)。k は Fisher (1954) の集中度パラメータ。N は平均値を計算した試料の個数。

第78図 各窯跡の代表的な段階交流消磁結果をダイヤーベルト図に示した。●は (北→東→南→西) 面への各消磁レベル毎の磁化ベクトルの投影、○は (上→北→下→南) 面への投影。 0mT は消磁前の値を示し、安定方向を示すと解釈された消磁範囲は、例えば 30mT と 100mT の数値で示された範囲に対応している。div は縦軸・横軸の1目盛りの大きさ (磁化強度) を示している。

第79図 全試料の段階交流消磁による磁化強度の変化を窯跡ごとに示した。MDF の値は、縦軸が 0.5 にまで消磁されたときの横軸の値 (mT) である。

第80図 主成分解析法によって求められた試料毎の安定な磁化成分の方向を、窯跡ごとに等面積投影図で示した。平均値とその 95% 信頼限界円も示してあるが、データが重なっており識別できないほどよく集中している。

第81図 ID 7, ID 8, ID 9 および ID10 の 4 基の窯跡の平均方向 (●) とそれぞれの 95% 信頼限界円を等面積投影図に示した。4 基の平均方向がほぼ重なっていることが分かる。

第82図 ID 7 ~ ID10 の平均方向 (○)、および 4 基の平均値 (□) とその 95% 信頼限界円。点線は大阪府堺市の陶邑須恵器古窯跡群のデータを中心にして作成された地磁気永年変化曲線 (Shibuya, 1980) の AD500 ~ AD1000 の部分 (25 年ごとに ●)。横軸は偏角、縦軸は伏角である。

7号窯跡	消磁範囲(mT)	MAD(°)	MDF(mT)
ID7-1	40 ~ 100	1.6	40
ID7-2	30 ~ 100	0.7	44
ID7-3	25 ~ 80	0.9	35
ID7-4	25 ~ 100	2.3	40
ID7-5	25 ~ 100	2.5	39
ID7-6	25 ~ 100	1.8	37
ID7-7	30 ~ 100	2.9	76
ID7-8	25 ~ 100	0.8	38
ID7-9	25 ~ 100	1.5	34
ID7-10	20 ~ 100	2.2	18

8号窯跡	消磁範囲(mT)	MAD(°)	MDF(mT)
ID8-1	30 ~ 100	0.9	26
ID8-2	30 ~ 100	3.3	37
ID8-3	40 ~ 100	1.8	32
ID8-4	30 ~ 100	1.4	31
ID8-6	30 ~ 100	1.1	32
ID8-7	25 ~ 100	1.0	30
ID8-8	15 ~ 100	1.0	32
ID8-9	25 ~ 100	1.1	36
ID8-10	20 ~ 100	1.6	31
ID8-11	25 ~ 100	1.3	27

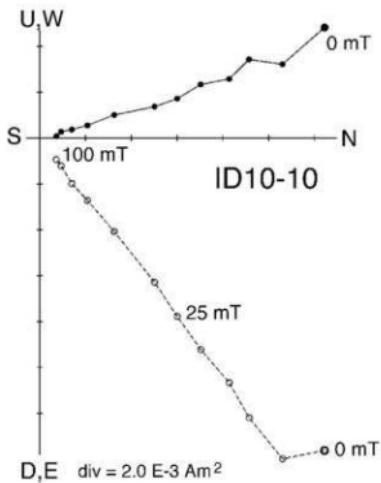
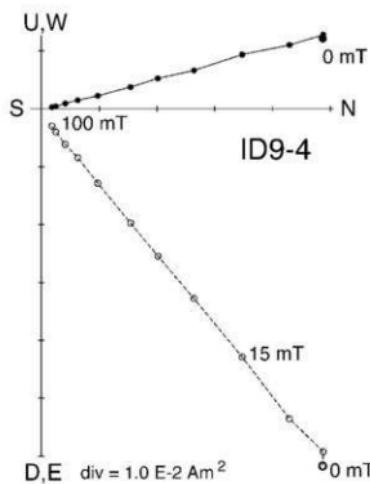
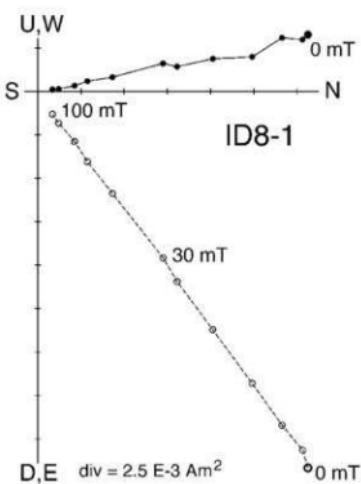
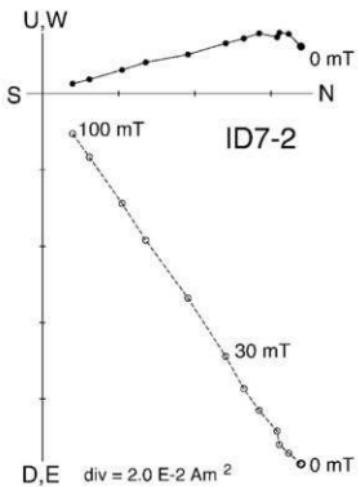
9号窯跡	消磁範囲(mT)	MAD(°)	MDF(mT)
ID9-1	50 ~ 100	1.0	46
ID9-2	25 ~ 100	1.0	25
ID9-3	40 ~ 100	1.5	59
ID9-4	15 ~ 100	0.5	21
ID9-5	25 ~ 100	0.6	29
ID9-7	30 ~ 100	2.5	56
ID9-8	20 ~ 100	1.2	24
ID9-9	20 ~ 100	1.6	40
ID9-10	30 ~ 100	1.0	46
ID9-11	20 ~ 100	1.2	44
ID9-12	30 ~ 100	1.1	35

10号窯跡	消磁範囲(mT)	MAD(°)	MDF(mT)
ID10-1	30 ~ 100	0.9	24
ID10-2	20 ~ 100	2.0	39
ID10-3	25 ~ 100	0.9	36
ID10-4	20 ~ 100	3.8	27
ID10-5	20 ~ 100	2.2	18
ID10-6	30 ~ 100	2.9	31
ID10-7	20 ~ 100	1.1	30
ID10-8	30 ~ 100	2.9	29
ID10-9	30 ~ 100	0.7	29
ID10-10	25 ~ 100	1.5	26
ID10-11	20 ~ 100	0.7	29
ID10-12	25 ~ 100	1.0	22

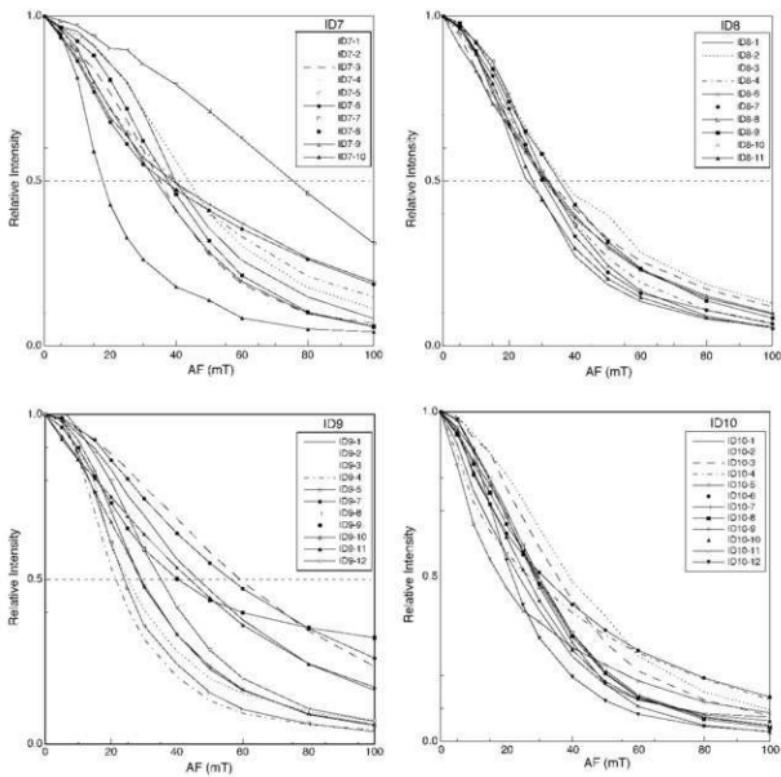
第2表 試料ごとの安定な磁化方向が抽出できた消磁範囲

窯跡	偏角(°)	伏角(°)	$\alpha_{95}(°)$	$\Delta D(°)$	k	N
ID7	-13.6	54.6	2.4	4.1	406	10
ID8	-16.7	51.4	1.9	3.0	626	10
ID9	-17.6	53.2	2.5	4.2	337	11
ID10	-16.3	52.2	1.9	3.1	550	12
平均	-16.1	52.9	1.9	3.2	2223	4

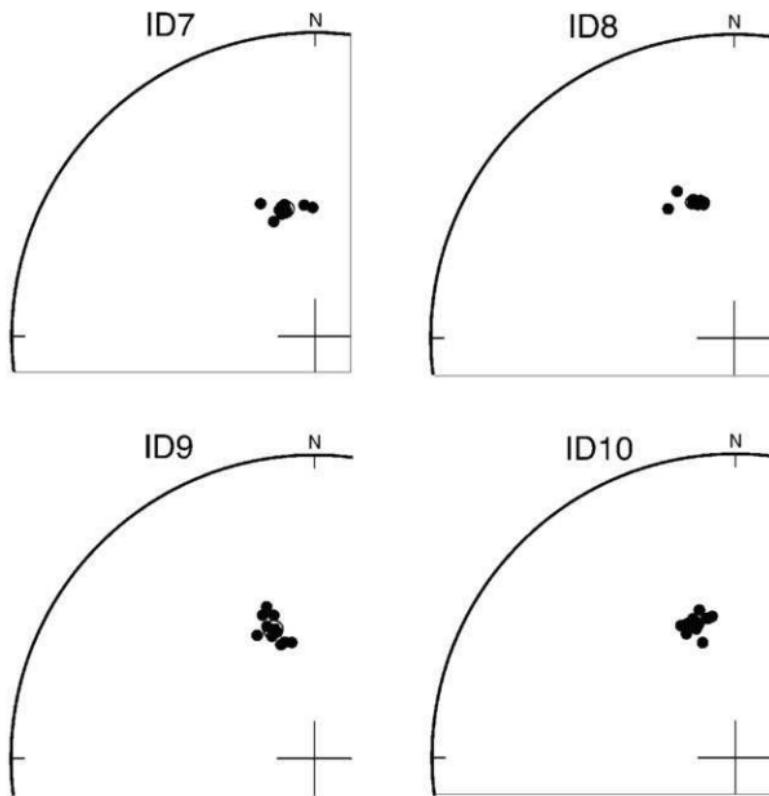
第3表 窯ごとの平均磁化方向



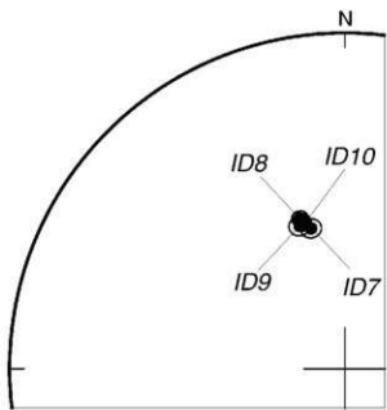
第78図 代表的な段階交流消磁の結果



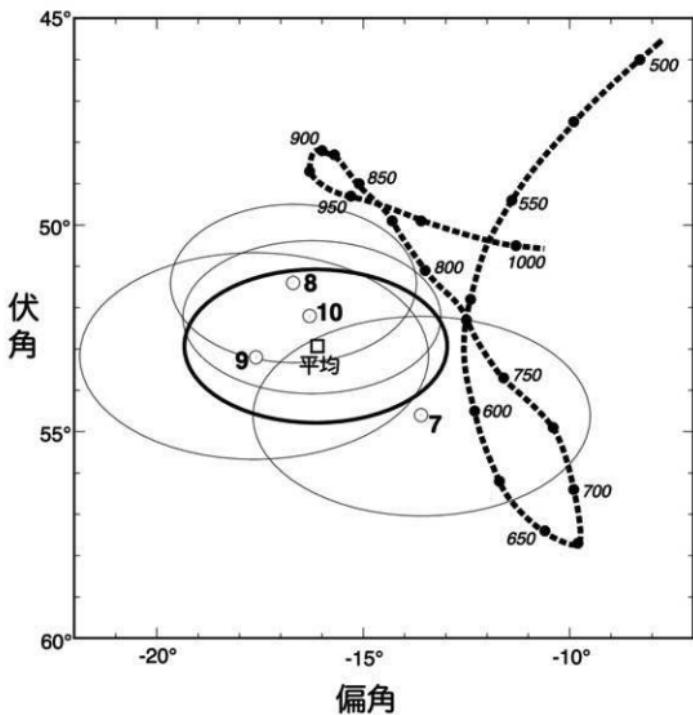
第79図 全試料の段階交流消磁による磁化強度の変化



第 80 図 各窯の全試料の安定な磁化方向とそれらの平均磁化方向



第 81 図 各窯の平均磁化方向



第 82 図 地磁気永年変化曲線と平均磁化方向

3 井手ヶ浦窯跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

井手ヶ浦窯跡は、福岡県飯塚市鶴田 2219-1(北緯 $33^{\circ} 39' 36''$ 、東経 $130^{\circ} 41' 40''$)に所在する。筑豊盆地を北流する遠賀川右岸に立地する須恵器の窯跡で、遠賀川の浸食作用により形成された、花崗岩を母岩とする低丘陵の斜面上に位置する。測定対象試料は、7 号窯跡出土木炭 (No. 1 : IAAA-90982)、9 号窯跡出土木炭 (No. 2 : IAAA-90983)、10 号窯跡出土木炭 (No. 3 : IAAA-90984, No. 4 : IAAA-90985)、合計 4 点である。

(2) 測定の意義

遺跡内で検出した複数の窯跡について、その操業時期や窯跡相互の前後関係を明らかにする。

(3) 化学処理工程

- 1) メス・ビンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA: Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く。
最初の酸処理では 1N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 1N の水酸化ナトリウム水溶液 (80°C) を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が 1N 未満の場合、表中に AaA と記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、 90°C で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、 500°C で 30 分、 850°C で 2 時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素 (CO_2) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径 1mm のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

(4) 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polash 1977)。
- 2) ^{14}C 年代 (Libby Age; yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1 枠目を四捨五入して 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に (AMS) と注記する。

4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。

5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一路を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(6) 測定結果

^{14}C 年代は、No. 1 が $1510 \pm 30\text{yrBP}$ 、No. 2 が $1610 \pm 30\text{yrBP}$ 、No. 3 が $1490 \pm 30\text{yrBP}$ 、No. 4 が $1530 \pm 30\text{yrBP}$ である。历年較正年代 (1σ) は、No. 1, 3, 4 が 6 世紀後半頃の確率が高く、No. 2 はそれよりも遡る値が示されている。

試料の木炭は、確認できる年輪最外部を採取しているが、測定された年代値が伐採年を示さない可能性を考慮する必要がある。

炭素含有率はすべて 70% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355–363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425–430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355–363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381–389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26 cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029–1058

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-90982	No.1	7号窯跡 燃焼部灰層(5層)	木炭	AAA	-24.55 ± 0.46	1,510 ± 30	82.86 ± 0.3
IAAA-90983	No.2	9号窯跡 灰原灰層(48層)	木炭	AAA	-25.09 ± 0.5	1,610 ± 30	81.89 ± 0.29
IAAA-90984	No.3	10号窯跡 燃焼部最下層(31-32層)	木炭	AAA	-26.81 ± 0.53	1,490 ± 30	83.07 ± 0.31
IAAA-90985	No.4	10号窯跡 燃焼部C区貼床内	木炭	AAA	-25.49 ± 0.7	1,530 ± 30	82.69 ± 0.34

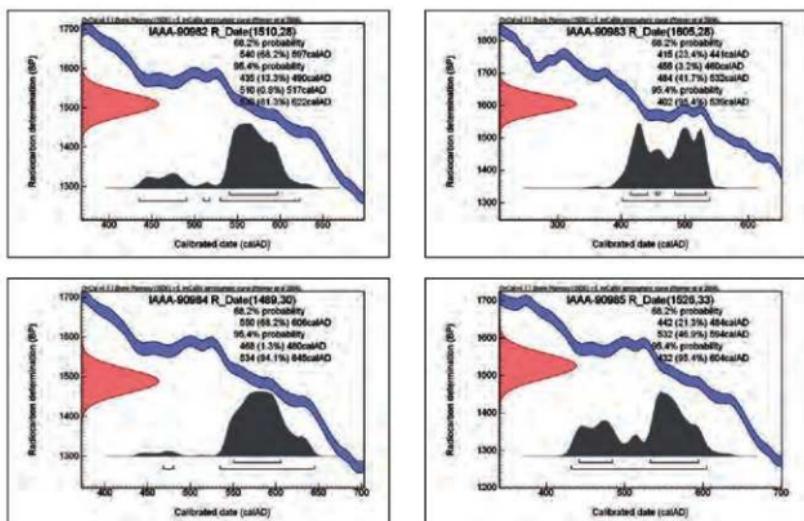
[#3083]

第4表 AMS 年代測定①

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-90982	1,500 ± 30	82.9 ± 0.3	1,510 ± 28	540AD - 597AD (68.2%)	435AD - 490AD (13.3%) 510AD - 517AD (0.8%) 530AD - 622AD (81.3%)
IAAA-90983	1,610 ± 30	81.9 ± 0.3	1,605 ± 28	415AD - 441AD (23.4%) 455AD - 460AD (3.2%) 484AD - 532AD (41.7%)	402AD - 539AD (95.4%)
IAAA-90984	1,520 ± 30	82.8 ± 0.3	1,489 ± 30	550AD - 606AD (68.2%)	468AD - 480AD (1.3%) 534AD - 645AD (94.1%)
IAAA-90985	1,530 ± 30	82.6 ± 0.3	1,526 ± 33	442AD - 484AD (21.3%) 532AD - 594AD (46.9%)	432AD - 604AD (95.4%)

[参考値]

第5表 AMS 年代測定②



第83図 曆年較正年代グラフ [参考]

4 井手ヶ浦窯跡出土炭化材の樹種

(株) 加速器分析研究所

はじめに

井手ヶ浦窯跡は、遠賀川右岸の花崗岩を母岩とする低丘陵斜面に位置し、須恵器の窯跡が検出されている。今回の分析調査では、須恵器窯から出土した炭化材を対象として、木材利用を明らかにするための樹種同定を実施する。

(1) 試料

試料は、7号、9号、10号窯跡から出土した炭化材で、合計10点（試料番号1-10）である。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）や Wheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、広葉樹3分類群（コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・リンボク）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

- スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2個幅で放射方向に配列する。孔圈部は3-4列、孔圈部で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

- リンボク (*Prunus spinulosa* Sieb. et Zucc.) バラ科サクラ属

環孔性のある散孔材で、道管は小径、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-8個が主として放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

(4) 考察

各窯跡から出土した炭化材は、窯焚きの燃料材と考えられている。これらの炭化材は、全て広葉

樹であり、7号窓跡でアカガシ亜属にスダジイが混じる組成、9号窓跡でスダジイ、10号窓跡でリンボクとアカガシ亜属が認められた。複数の炭化材について同定を実施した窓跡ではいずれも2種類が認められ、燃料材が複数種類で構成されていたことが推定される。

アカガシ亜属、スダジイ、リンボクは、暖温帯常緑広葉樹林を構成する常緑広葉樹であり、アカガシ亜属は比較的重硬で強度が高い。スダジイやリンボクも比較的重硬であるが、アカガシ亜属に比較すると強度は低い。これらの種類は、現在の本地域周辺に生育している種類であり、本遺跡周辺に生育している樹木を燃料材として利用したことが推定される。

福岡県内では、牛頭梅頭・本堂遺跡群等で須恵器窓跡から出土した炭化材について多くの樹種同定が行われているが、アカガシ属やスダジイなどの常緑広葉樹が多い結果は、今回の結果と同様である（株式会社古環境研究所、2005, 2006, 2007; 小林、2008; バリノ・サーヴェイ株式会社、2008）。

引用文献

- ・林昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- ・伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- ・伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- ・伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- ・伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- ・伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- ・株式会社古環境研究所, 2005, 大野城市野添遺跡第2～4次調査における樹種同定, 「牛頭野添遺跡群Ⅱ～第4・5次調査～」, 大野城市文化財調査報告書第66集, 大野城市教育委員会, 49-54.
- ・株式会社古環境研究所, 2006, 野添遺跡第6・7次調査における樹種同定, 「牛頭野添遺跡群Ⅳ～第7次調査～」, 大野城市文化財調査報告書第70集, 大野城市教育委員会, 95-99.
- ・株式会社古環境研究所, 2007, 梅頭遺跡第1次調査における樹種同定, 「牛頭梅頭遺跡群Ⅰ～第1次調査～」, 大野城市文化財調査報告書第60集, 大野城市教育委員会, 72-75.
- ・小林克也, 2008, 牛頭梅頭第4次調査1号窓跡から出土した木材の分析, 「牛頭梅頭・本堂遺跡群～自然科学研究編～」, 大野城市文化財調査報告書第87集, 大野城市教育委員会, 4-13.
- ・バリノ・サーヴェイ株式会社, 2008, 牛頭梅頭・本堂遺跡群における古植生および木材資源の利用状況, 「牛頭梅頭・本堂遺跡群～自然科学研究編～」, 大野城市文化財調査報告書第87集, 大野城市教育委員会, 58-114.
- ・島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- ・Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

※) 本分析は、当社協力会社・バリノ・サーヴェイ株式会社にて実施した。

番号	遺構	位置	層位	形状	大きさ	樹種
1	7号窯跡	燃焼部灰層	5層	半裁木状	直径4.5cm以上	スダジイ
2	9号窯跡	灰原灰層	48層	破片		コナラ属アカガシ亜属
3	10号窯跡	燃焼部最下層	31・32層	芯持丸木	直径1.5cm	リンボク
4	10号窯跡	焼成部C区貼床内		芯持丸木	直径1.5cm	リンボク
5	7号窯跡	前庭部下位	6・8・9層灰層	柾目板状	半径5cm以上	コナラ属アカガシ亜属
6	7号窯跡	前庭部下位	6・8・9層灰層	ミカン割状	半径6cm以上	コナラ属アカガシ亜属
7	7号窯跡	前庭部下位	6・8・9層灰層	破片		コナラ属アカガシ亜属
8	10号窯跡	焼成部貼壁		芯持丸木	直径2.5cm	コナラ属アカガシ亜属
9	10号窯跡	前庭部	33層灰層	芯持丸木	直径2.5cm	リンボク
10	10号窯跡	前庭部	33層灰層	箇部分		コナラ属アカガシ亜属

第6表 樹種同定結果

試料No.	出土遺構・層位	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	特徴・備考
No.1	7号窯跡 焼成部 最終操業面	坏蓋	0.286	0.259	1.78	0.323	0.479	0.285	口縁部
No.2	7号窯跡 焼成部 最終操業面	坏身	0.239	0.256	1.95	0.260	0.465	0.188	口縁～底部、生焼け
No.3	7号窯跡 焼成部 最終操業面	甕	0.313	0.257	2.52	0.291	0.440	0.233	体部、生焼け
No.4	7号窯跡 焼成部 最終操業面	大甕	0.433	0.228	2.27	0.438	0.460	0.328	肩部、外面灰被り
No.5	7号窯跡 焼成部 最終操業面	高坏	0.274	0.335	3.53	0.266	0.444	0.256	脚部、又は腹頭部
No.6	7号窯跡 焼成部 貼床7層	坏蓋	0.368	0.250	1.73	0.417	0.555	0.335	口縁部
No.7	7号窯跡 焼成部 貼床7層	坏身	0.334	0.283	1.91	0.322	0.479	0.265	口縁～蓋受部
No.8	7号窯跡 焼成部 貼床7層	甕	0.332	0.186	2.04	0.377	0.405	0.214	体部
No.9	7号窯跡 焼成部 貼床7層	大甕	0.392	0.246	2.13	0.403	0.505	0.303	体部
No.10	7号窯跡 焼成部 貼床7層	短頸甕	0.367	0.383	1.69	0.393	0.631	0.277	体部、又は腹体部、内面自然釉
No.11	8号窯跡 焼成部 最終操業面	坏蓋	0.282	0.209	1.83	0.335	0.485	0.172	口縁部
No.12	8号窯跡 焼成部 最終操業面	坏身	0.294	0.194	1.72	0.383	0.455	0.155	口縁部、生焼け
No.13	8号窯跡 焼成部 最終操業面	甕	0.367	0.252	2.18	0.424	0.473	0.218	体部、生焼け
No.14	8号窯跡 焼成部 最終操業面	大甕	0.391	0.317	1.96	0.411	0.573	0.379	体部、外面灰被り・破裂
No.15	8号窯跡 焼成部 最終操業面	甕	0.346	0.238	1.57	0.368	0.567	0.184	口縁部
No.16	8号窯跡 焼成部 貼床3層	坏蓋	0.326	0.217	1.66	0.408	0.502	0.237	口縁部
No.17	8号窯跡 焼成部 貼床3層	坏身	0.334	0.223	1.65	0.355	0.545	0.192	口縁～蓋受部
No.18	8号窯跡 焼成部 貼床3層	甕	0.372	0.256	2.29	0.389	0.484	0.275	体部、外面灰被り
No.19	8号窯跡 焼成部 貼床3層	大甕	0.422	0.345	2.13	0.420	0.595	0.382	体部、外面灰被り
No.20	8号窯跡 焼成部 貼床3層	高坏	0.322	0.230	1.52	0.354	0.529	0.264	坏底部、底部内面灰被り

第7表 胎土分析データ①

試料No.	出土遺構・層位	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	特徴・備考
No.21	9号窯跡 燃焼部 最終操業面	坏蓋	0.296	0.280	1.67	0.337	0.512	0.295	口縁部
No.22	9号窯跡 燃焼部 最終操業面	坏身	0.266	0.182	1.90	0.292	0.464	0.217	蓋受部、生焼け
No.23	9号窯跡 燃焼部 最終操業面	甕	0.371	0.274	1.92	0.358	0.516	0.304	口縁部、内面灰被り
No.24	9号窯跡 燃焼部 最終操業面	大甕	0.390	0.261	1.99	0.418	0.494	0.278	体部、二次被熱
No.25	9号窯跡 燃焼部 最終操業面	瓶類	0.333	0.303	1.64	0.387	0.540	0.216	口縁部、生焼け
No.26	9号窯跡 燃成部 貼床	坏蓋	0.313	0.276	1.63	0.309	0.503	0.272	口縁部
No.27	9号窯跡 燃成部 貼床	坏身	0.375	0.318	1.38	0.440	0.566	0.291	蓋受部
No.28	9号窯跡 燃成部 貼床	大甕	0.314	0.199	1.65	0.314	0.450	0.254	頸部、外面灰被り
No.29	9号窯跡 燃成部 貼床	瓶又は甌	0.343	0.278	1.68	0.356	0.501	0.281	口縁部、外面灰被り
No.30	9号窯跡 燃成部 貼床	甌	0.368	0.378	1.07	0.400	0.676	0.351	頸部、内面自然釉
No.31	9号窯跡 燃成部 貼床	短頸壺	0.403	0.281	1.64	0.506	0.522	0.245	口縁部
No.32	10号窯跡 燃成部 最終操業面	坏蓋	0.319	0.231	1.67	0.363	0.500	0.231	口縁部、生焼け
No.33	10号窯跡 燃成部 最終操業面	大甕	0.423	0.302	1.88	0.457	0.525	0.406	体部
No.34	10号窯跡 前庭部 33層(灰層)	坏身	0.292	0.216	1.69	0.409	0.542	0.173	蓋受け～底部、生焼け
No.35	10号窯跡 前庭部 33層(灰層)	甕	0.389	0.181	2.75	0.441	0.340	0.184	体部
No.36	10号窯跡 前庭部 33層(灰層)	提瓶	0.244	0.165	1.94	0.305	0.375	0.144	体部、生焼け
No.37	10号窯跡 燃焼部 貼床5層	坏蓋	0.325	0.254	2.18	0.343	0.521	0.273	口縁部
No.38	10号窯跡 燃焼部 貼床5層	坏身	0.391	0.211	1.79	0.368	0.505	0.228	口縁～底部、内面灰被り
No.39	10号窯跡 燃焼部 貼床5層	甕	0.324	0.218	2.06	0.309	0.510	0.252	体部
No.40	10号窯跡 燃焼部 貼床5層	大甕	0.417	0.350	2.21	0.431	0.599	0.434	体部
No.41	10号窯跡 燃焼部 貼床5層	甌	0.333	0.270	2.05	0.357	0.530	0.311	体部
No.42	7号窯跡 排煙部溝 23～25層	不明	0.202	0.182	2.10	0.228	0.456	0.146	生焼け又は土師器
No.43	7号窯跡 灰原灰層	甕又は甌	0.502	0.361	2.83	0.716	0.453	0.228	土師器、体部
No.44	9号窯跡 燃焼部 11層	甕又は甌	0.632	0.275	1.39	0.790	0.487	0.279	土師器、頸部
No.45	SX1 埋土	甕又は甌	0.375	0.181	1.45	0.539	0.380	0.226	土師器、頸部
No.46	I-A区 C-3・4間ベルト	坏身	0.249	0.357	3.98	0.239	0.407	0.264	坏A、又は短頸壺、底～体部
No.47	I-A区 C-3・4間ベルト	坏身	0.498	0.295	1.72	0.581	0.833	0.425	坏B、底～体部
No.48	I-A区 C-3・4間ベルト	坏蓋	0.261	0.187	3.31	0.311	0.289	0.200	坏G、身受部
No.49	I-A区 C-3・4間ベルト	坏蓋	0.289	0.228	4.78	0.276	0.327	0.146	つまみ
No.50	I-A区 C-3・4間ベルト	大甕	0.246	0.124	2.04	0.284	0.330	0.135	体部、生焼け
No.51	I-A区 C-3・4間ベルト	高坏	0.309	0.203	2.27	0.330	0.359	0.201	脚部
No.52	I-A区 C-3・4間ベルト	高坏	0.457	0.292	5.01	0.380	0.435	0.159	土師器、脚部
No.53	I-A区 C-3・4間ベルト	甌	0.300	0.228	2.86	0.287	0.371	0.169	土師器、把手

第8表 胎土分析データ②

5 井手ヶ浦窯跡群出土須恵器の化学特性

三辻利一（大阪大谷大学）

（1）はじめに

須恵器の産地問題を研究しようとすると、基礎データとして窯跡出土須恵器の分析データを集積しておかなければならない。須恵器の伝播が広域にわたることを考慮に入れると、全国各地の窯跡出土須恵器の胎土を識別する全国共通のメジャーが必要である。土器型式ではこの全国共通のメジャーが出来ていないことから、考古学的手法による須恵器の産地推定法は提示されていない。30年にわたって、全国各地の窯跡出土須恵器の分析データを集積した結果、K-Ca、Rb-Sr の両分布図上で窯跡出土須恵器の地域差を表示できることが実証された。さらに、全国各地で採取した花崗岩類も両分布図上で地域差を示すことも実証された。この結果から、地域差の原因は母岩を構成する主要造岩鉱物のなかの最も重要な鉱物である長石類が地域差を支配していることが分かった。現在では窯間の相互識別には判別分析法が適用されている。検定法を導入し、判別図をつかった須恵器産地推定法も開発されている。ただ、須恵器の生産と供給の関係を求めるようになると、生産地である窯跡と供給先である消費地遺跡の同時性が求められる。年代は通常、土器型式から得られた情報が使用される。本報告では井手ヶ浦窯跡群の7、8、9、10号窯跡出土須恵器の化学特性を求めるとともに、I-A 区から出土した須恵器の蛍光X線分析の結果についても報告する。

（2）分析法

須恵器片試料は表面を研磨して、付着物を除去したのち、タンクステンカーバイド製乳鉢の中で100 メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、電動プレッサーで高圧をかけてプレスし、内径 20mm、厚さ 5mm の鋸剤試料を作成し、蛍光X線分析用の試料とした。

蛍光X線分析には理学電機製 RIX2100（波長分散型）を使用した。この装置には TAP、Ge、LiF の 3 枚の分光結晶とガスフロー比例計数管、シンチレーションカウンターの 2 種類の検出器が使用されている。また、使用 X 線管球は Rh 管球であり、使用条件は 50kV、50mA である。この条件下で土器中の微量元素 Rb、Sr が検出できることが証明されている。

測定元素は Na、K、Ca、Fe、Rb、Sr の 6 元素である。分析値は同じ日に測定された岩石標準試料 JG-1 による標準化値で表示されている。日本地質調査所から配布された岩石標準試料をつかって、岩石標準試料 JG-1 による標準化値と分析報告値の間に比例関係があることが確認されているので、定量分析値として JG-1 による標準化値は有効である。さらに、この標準化値をつかうと、主成分元素 K、Ca と微量元素 Rb、Sr が同等にとりあつかうことが出来るという利点がある。地域差を調べる上に、この利点はきわめて重要である。また、主成分元素 Si、Al は粘土の性質からみて、地域差を示す可能性が低いと判断して、定量分析しなかった。

（3）分析結果

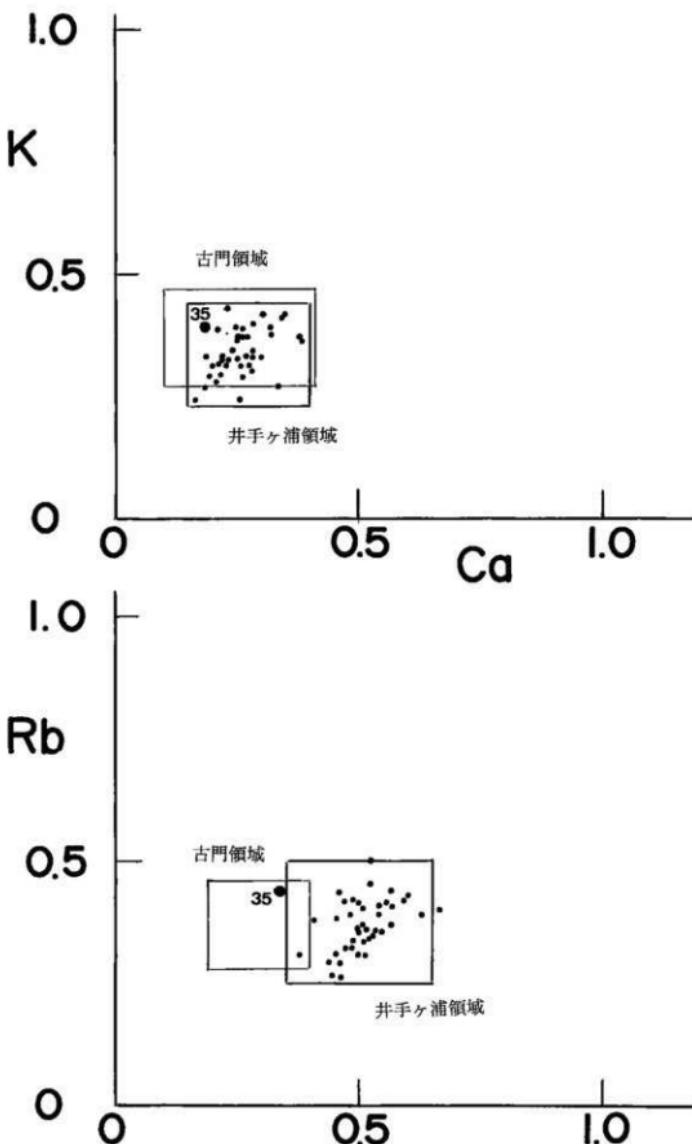
分析値は第 7・8 表にまとめられている。分析データはまず、K-Ca、Rb-Sr の両分布図上にプロットされ、化学特性が定性的に把握される。

井手ヶ浦 7～10 号窯の須恵器の両分布図を第 84 図に示す。窯間で微妙に分布位置のズレがあるが、ここでは全体をまとめて井手ヶ浦窯群の領域を示した。分析値の殆どを包含するようにして、井手ヶ

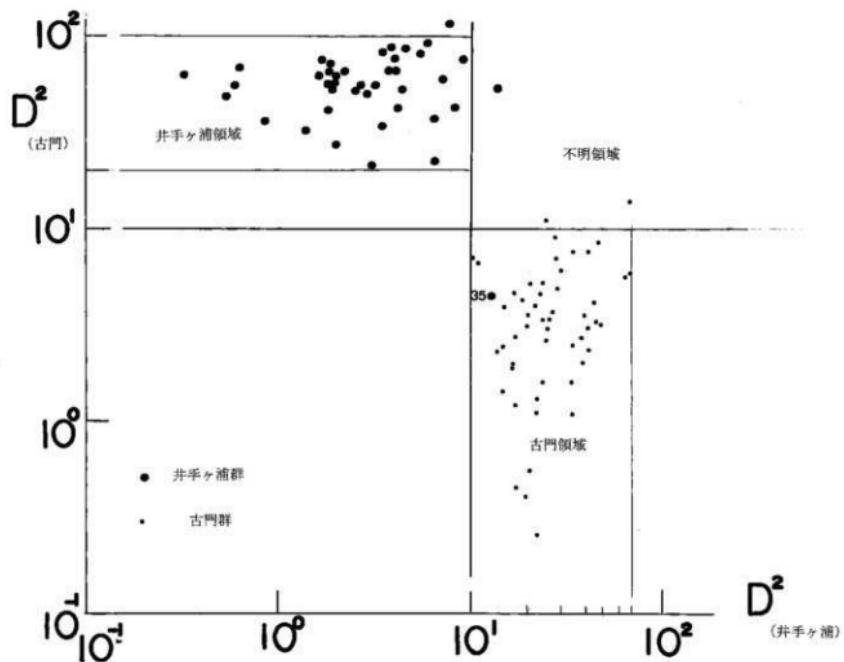
浦領域を描いてある。この領域は定性的にしか領域を示さないが、他の窯の須恵器と比較対照する上には十分役に立つ。第84図では鞍手郡の古門窯群の領域と比較してある。主成分元素では両者の区別は困難である。しかし、Rb-Sr分布図では両者の相互識別が十分可能である。ここで、井手ヶ浦窯群と古門窯群の須恵器の2群間判別分析を試みた。その結果は第85図に示してある。両軸にとったD²(古門)とD²(井手ヶ浦)はそれぞれ、古門群と井手ヶ浦群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値であり、K、Ca、Rb、Srの分析値をつかって計算された。第85図をみると、両群の試料集団は完全に分離しており、相互識別が可能であることがわかる。ただ、No.35の試料は両分布図で他の試料集団から離れて分布しており、両分布図では井手ヶ浦窯群の製品であるよりも、むしろ、鞍手窯群の須恵器胎土に近い。第85図の判別図でも鞍手領域に分布している。この理由はよくわからない。

つぎに、I-A区から出土した須恵器、土師器の両分布図を第86図に示す。ここでは比較対照の領域として、井手ヶ浦領域と九州最大の須恵器窯跡群である牛頭窯跡群の領域を示してある。第86図から、No.47の須恵器杯Bは両分布図で井手ヶ浦領域には分布せず、牛頭領域に分布することが分かる。井手ヶ浦窯群の製品ではないことは間違いない。牛頭窯群の製品である可能性が高い。須恵器型式からも再度点検することが必要である。No.52は土師器高杯である。Rb-Sr分布図では井手ヶ浦領域に分布するが、K-Ca分布図では井手ヶ浦領域をわずかに離れる。井手ヶ浦窯群の須恵器の胎土に類似する胎土であることには間違いない。井手ヶ浦窯群とほぼ同じ粘土で作られた土師器である可能性が高い。他の6点の試料(うち1点はNo.63の土師器である)はK-Ca分布図では井手ヶ浦領域に分布するが、Rb-Sr分布図では井手ヶ浦領域の左下側に偏って分布する。これら須恵器は今回分析した7~10号窯の製品ではないが、1~6号窯の製品である可能性がある。土師器(No.53)も同じ粘土で作られた土師器と推定される。第87図には7、9号窯跡とSXI埋土から出土した土師器の両分布図を示す。井手ヶ浦領域周辺に分布するNo.42、45の土師器は井手ヶ浦窯群内で作られた土師器である可能性があるが、No.43、44は井手ヶ浦窯群の須恵器胎土に比べてK、Rbが高すぎる。井手ヶ浦窯群周辺で作られた土器ではない可能性が高い。何らかの理由で外部地域(九州以外の地域の可能性がある)から供給された土師器が井手ヶ浦窯群で須恵器を焼成する際に使用された可能性がある。No.43、44の土師器とNo.42、45の土師器の土器型式に違いがあるかどうかが注目される。また、No.52の試料についても同様である。

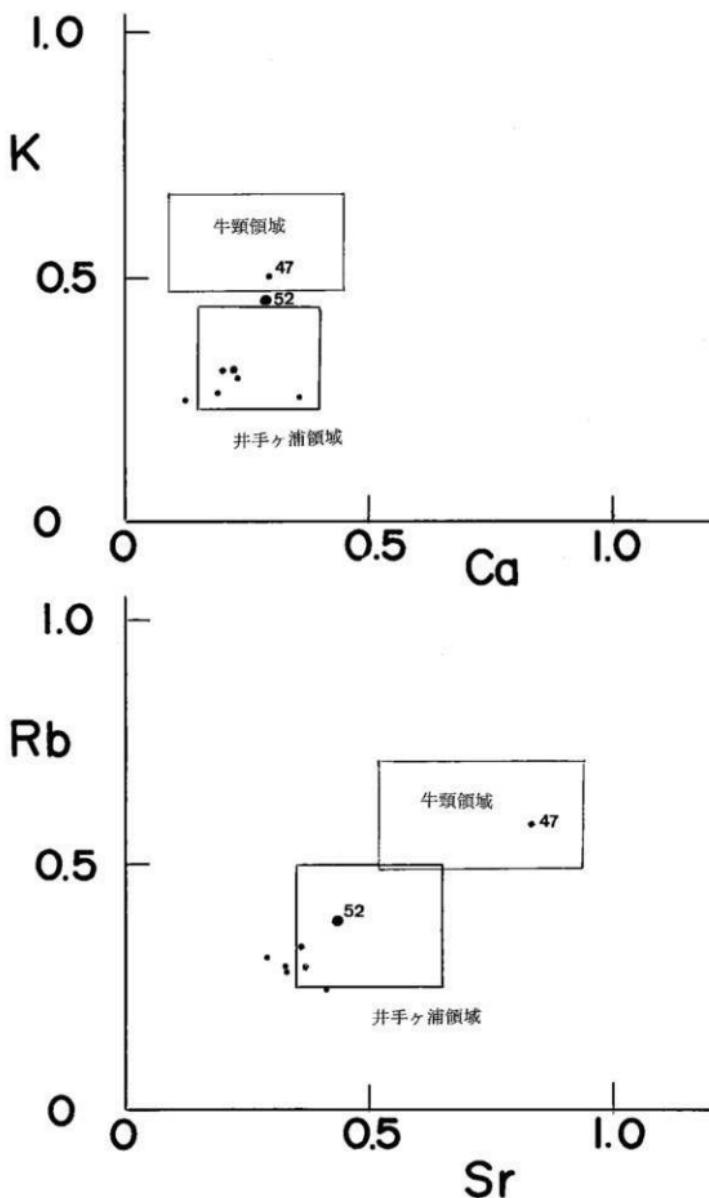
このように、土器型式などの考古学の情報があれば、胎土分析の結果の解釈は考古学的に具体性を帯びる。これまで、窯跡出土須恵器の基礎データとして、考古学の情報の少ない小破片が分析されてきたが、また、それで、窯跡群出土須恵器の化学特性を得る上には十分であったが、今後、胎土分析の結果を考古学に有効に活用するためには、考古学の情報をもった土器試料の分析が必要となる。胎土分析は考古学研究の一端として行われるものであり、行政発掘によって大量に発掘された土器の生産と供給を再現し、その結果を通して、その背後にある社会体制を考察する上に役立つであろう。これが筆者が目指す「新しい土器の考古学」である。



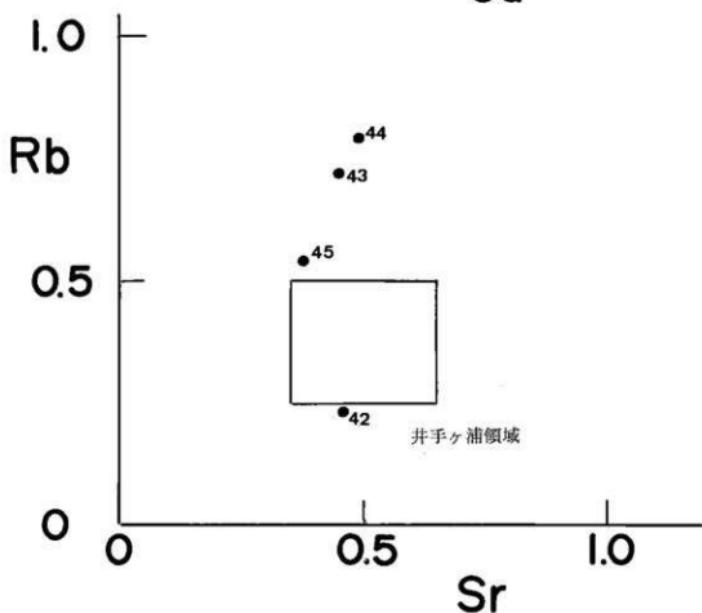
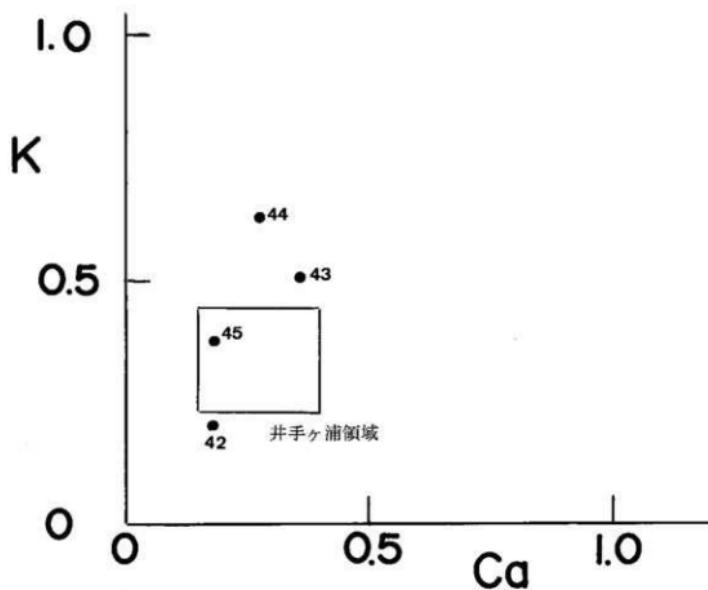
第84図 井手ヶ浦7・8・9・10号窯跡出土須恵器の両分布図



第85図 井手ヶ浦群と古門群の相互識別 (K・Ca・Rb・Sr)



第 86 図 1-A 区出土須恵器・土師器の両分布図



第 87 図 土師器の両分布図

V まとめ

1 窯跡の構造と年代について

(1) 窯跡の立地と構造について

井手ヶ浦 7～10号窯跡について

今回の調査で新たに発見した井手ヶ浦 7～10号窯跡は、立岩丘陵から北に続く低丘陵の、北西に向けて開く小谷の最奥部に集中して位置している。谷は、やや蛇行しながら北北西へと延び、2区の丘陵頂部から総延長 1.2 km 程で遠賀川に至る。このため、遠賀川を抜ける北風が流入しやすい位置にあるといえる。谷の西丘陵には鯰田古墳群・川島古墳群が所在するなど、同時期の群集墳に囲まれて立地している。丘陵の地質は花崗岩とそのバイラン土で、4基の窯跡はこの丘陵斜面を等高線と直交する方向に、トンネル状に掘り抜いて築かれている。1～6号窯跡も同じ丘陵の花崗岩バイラン土に構築される一方で、周辺に多数分布する横穴群が第三紀層に構築されることから、須恵器窯の選地の上で地質が考慮されたことが考えられる。

さて、7～10号窯跡について構造上の共通点を挙げると、まず地下式の窯室で焚口～排煙口の窯体水平長が 10 m を超える大型の窯であること、いずれも平面形が中ぶくらみの胴張りプランで、床面はわずかに傾斜する燃焼部から、焼成部では弓なりに上がることが挙げられる。次に窯体の各部を見ると、燃焼部における天井は、各窯跡における堆積状況や 8号窯跡で完存していた焼成部入口天井部などから、その大部分は天井がない状態に築造されたようである。しかし左右の側壁や 8号窯跡焼成部入口壁面の被熱（還元）状況からは、この部分に何らかの閉塞措置が取られたことが推測される。

また燃焼～焼成部の床は貼り直されて複数回の操業が行われている。9号窯跡については 2 面の床面を確認できたのみだが、これは早い段階で天井部が崩落したため、少ない回数の操業しか行い得なかつたものと思われる。他の 3 基については 7号窯跡で最大 50 cm・計 9 面、8号窯跡で最大 22 cm・計 6 面、10号窯跡で最大 40 cm・計 9 面と、多数回に及ぶ操業と補修の跡が見られた。

そして排煙部については、これは 10号窯跡では欠損するため、7～9号窯跡に共通する事項であるが、奥壁を伴って上部開口型となること、排煙部に取り付く溝を持つことが挙げられる。奥壁については、各窯跡で煙道部が認められないために一見よく分からないが、焼成部最奥部には床面傾斜が急になる転換点が認められ、それより上位が奥壁を形成していることが分かる。また排煙部に付く溝については、検出したいずれにおいても流水の痕跡や床面の硬化などは認められなかった。排煙の調整や通風の役割を想定すべきであろうか。

逆に相違点・各窯跡での特徴を挙げると、燃焼部については 7号窯跡で側壁の補強に石組みが用いられていた。9号窯跡でも貼壁による補修はあるが、石組みは認められない。8・10号窯跡になると燃焼部側壁に補修自体が行われていない。また 9号窯跡では燃焼部の床に舟底状ピットが設けられていた。焼成部では、9号窯跡で中～上位の床面に置台と思われる小ピットが配されている。側壁には 7・8号窯跡で広い範囲に貼壁による補修が見られるが、9・10号窯跡には確認できない。但し 9号窯跡については操業回数が少ないと考慮すべきであろう。なお 10号窯跡焼成部上位の側壁には工具痕が残る。そして排煙部については、7・8号窯跡において当初の掘削された排煙部の溝がある段階から埋められた状態で操業が続けられていた。

井手ヶ浦 1～6号窯跡との比較（第9表）

井手ヶ浦 1～6号窯跡は、昭和47年（1972）および昭和58・59年（1983・84）に調査が行われた⁵¹⁾。7～10号窯跡と同一丘陵上に所在するが、1～5号窯跡は尾根を挟んで東方に開く谷の斜面上に位置し、1～3号窯跡（C地点）は北東、4・5号窯跡（B地点）は南東に向けて焚口を開口する。6号窯跡は詳しい位置は不明だが1区のさらに北東の斜面上に位置したと考えられ（国道200号バイパスのために消滅）、焚口は北北東を向く。これらは東あるいは北東に開口する谷の斜面上にあり、谷に吹き込む風を意識した立地と思われる。なお、飯塚市内の年間月別の最多風向と1～6号窯跡の立地から推測しうる操業時期（季節）については『井手ヶ浦窯跡』（*1）で検討されている。参照されたい。7～10号窯跡についても北に開口する谷斜面に立地しており、検討結果と齟齬しないと考える。

1～6号窯跡の窯体については、焚口～排煙部が完存（天井部は除く）していたのは1～3号窯跡で、4・5号窯跡は焼成部下位以下、6号窯跡は焚口以下の残存であった。このうち1～5号窯跡はいずれも花崗岩パイラン土からなる土壤に掘り込まれ⁵²⁾、さらに1～3号窯跡は胴張りの平面プランを有し、床面はやや弓なりに上る。また、3号窯跡では1枚のみだが、他の窯跡では複数枚の貼床が厚さ計35～55cmにわたって確認されている。この点、7～10号窯跡の状況と基本的に同じだが、焼成部天井については粘土で構築された半地下式の窯と報告されており、大きな相違点となる。

窯体各部に注目すると、まず1～3号窯跡燃焼部には、7号窯跡のように石組みによる側壁の補強が見られる。一方で4～6号窯跡でも焚口は残存するが、側壁の補修は報告されておらず、8・10号窯跡同様に認められないものと考える。また焼成部の貼壁については、2号窯跡に残存するほかは認められない。以上については7～10号窯跡でも相違があり、現時点ではその指摘に止めておく。続いて排煙部についてだが、残存する1～3号窯跡は共通して奥壁を持たず、焼成部上位の床面は傾斜を変えずにそのまま排煙口に至っている（奥部開口型）。他方7～9号窯跡排煙部は奥壁を持つ上部開口型であり、この点も両者の大きな相違点となる。排煙口には7～9号窯跡と同じく溝が取り付く。補修痕は認められず、排水溝として報告される。その他には、4・5号窯跡燃焼～前庭部で検出された多数の小ピットのほか、床面施設や工具痕は報告されていない。

以上、7～10号窯跡と1～6号窯跡の比較から特に注目される点を抽出すると、地質・地形上の立地条件が共通しており、窯構造では胴張りの平面プランが発達する。さらに排煙部を検出したすべての窯跡で溝が確認されることや、燃焼部側壁の補強に石組みを用いる例が多いことも井手ヶ浦窯跡群における特徴と言える。

一方、両者の相違点としては、まず1～3号窯跡が半地下式とされることである。その根拠は、2・3号窯跡については「残存している天井部はすべて粘土で形成」・「天井部に残る土層は粘土」とするのみで、図版写真でも詳しい状況は窺えない。1号窯跡については、図・写真で焼成部天井に並ぶ列石の状況が示されるが⁵³⁾、構築材が認められないこと、列石が長い窯体の中で一列しか検出されていないことから、積極的には評価し難いのではないだろうか。

もう一点の排煙部構造の相違については、窯構造の変遷を考える上で重要な問題でもある。この点を含めて、井手ヶ浦窯跡群で見られる特徴が、周辺地域の同時期の須恵器窯跡と比較して、どのような位置にあるのかを次に検討したい。

	平面形	窓体 水平長	最大幅	焼成部 面積	焼成部上 位傾斜角 (排煙部形態)	奥壁傾斜角 (上部開口型)	焼成部 貼壁	焼成部 貼壁	時 期	備 考
7号窓跡	胴張り	12.0m	2.05m	15.1m ²	25°	45° (上部開口型)	石組み	○	III B	溝付窓(最終操業時には埋没)
8号窓跡	胴張り	13.7m	2.0m	16.7m ²	30°	50° (上部開口型)		○	(III A～) III B	溝付窓(最終操業時には埋没)
9号窓跡	胴張り	12.2m	2.0m	16.0m ²	35°	50～70° (上部開口型)	○		III B	溝付窓、舟底状ピット、置合
10号窓跡	胴張り	(10.4m)	1.85m	(12.6m ²)	(36°)	—			(III A～) III B	焼成部上位以上欠
1号窓跡	胴張り	9.5m	2.3m	13.9m ²	25°	なし (奥部開口型)	石組み		IV A(～B)	半地下式?、溝付窓
2号窓跡	胴張り	12.5m	2.65m	21.0m ²	23°	なし (奥部開口型)	石組み	○	IV A(～B)	半地下式?、溝付窓
3号窓跡	胴張り	12.3m	2.75m	22.0m ²	28°	なし (奥部開口型)	石組み		IV B	半地下式?、溝付窓
4-1号窓跡	胴張り?	(6m)	(2.35m)	—	—	—			IV A	焼成部中位以上欠
4-2号窓跡	不明	(4m)	(2.35m)	—	—	—			(V～) VI	焼成部中位以上欠
5号窓跡	胴張り?	(5.3m)	(2.25m)	—	—	—			(III B～) IV A	焼成部中位以上欠
6号窓跡	不明	—	—	—	—	—			III B(～IV A)	焚口・灰原のみ残

第9表 井手ヶ浦窓跡群における窓体比較

周辺地域の窓跡との比較 (第88図)

これまでに確認・調査がされている井手ヶ浦窓跡群周辺地域における古墳時代後期の須恵器窓跡としては、遠賀川流域に鞍手郡鞍手町の古門窓跡（古月窓跡群）⁴⁴と遠賀郡岡垣町の野間窓跡群⁴⁵、隣接する宗像市に宗像窓跡群⁴⁶がある。さらに遠方を見渡すと、三郡山地を挟んだ地域では、糟屋郡宇美町の岩長浦窓跡⁴⁷、大野城市・太宰府市付近には裏ノ田・雉子ヶ尾窓跡⁴⁸、そして牛頭窓跡群⁴⁹がある。その南方、筑後北部には小郡市苅又窓跡群⁵⁰があり、目を転じて豊前地域には天觀寺山窓跡群⁵¹が知られる。

これらは基本的に丘陵斜面に築かれた地下式の窓窓で、窓体長は10 m前後からそれを大きく超えるものもあるが、地形上の立地条件や大まかな窓体構造を共有する。窓体が構築された地質の点では牛頭窓跡群や苅又窓跡群、裏ノ田窓跡をはじめ、多くは井手ヶ浦窓跡群同様に花崗岩バイラン土に掘り込まれるようだが⁵²、野間窓跡群（「砂岩系第三紀層」）や天觀寺山窓跡群（「黄褐色粘質土」）では異なる。各地域における地質上の制約の中で、窓体の構築・操業に適した土質が選ばれた結果であろう。また牛頭窓跡群や苅又窓跡群、岩長浦窓跡では、窓跡と同一丘陵上に時期を同じくする群集墳が展開し、井手ヶ浦窓跡群と川島古墳群等との関係と同じ状況が認められる。

次に、窓体構造についてだが、5世紀代の須恵器窓出現期から9世紀後半の牛頭窓廃絶期までを中心に、さらに11世紀に至るまでの九州地域における須恵器窓構造の変遷を整理した石木秀啓氏は、特に排煙部に取り付く溝を持つ須恵器窓（=溝付窓）の排煙部構造に着目し、上に列挙したような窓跡の分析から、溝付窓の出現と展開について3段階の分類を提示している⁵³。それによると、九州における溝付窓は5世紀代に宗像窓跡群において出現し、6世紀代になって各地に広がり採用され、

- ① 5世紀後半～6世紀前半：奥壁が高く、排煙部は上部に開口し、溝は浅く窓の両側を巡る。
- ② 6世紀中頃～後半：奥壁はやや高く、排煙部は上部に開口し、溝は深く窓の両側または片側を巡る。
- ③ 6世紀後半～7世紀：奥壁を持たず焼成部床面が傾斜を変えず排煙口に至り、窓体奥部に開口

する。溝は片側を巡るのみとなる。

という展開を示す。この成果に依拠すると、排煙部が残存する窯跡すべてが、窯の片側を巡る溝付窯である井手ヶ浦窯跡群では、奥壁を持つ上部開口型の7～9号窯跡は②類、奥壁を持たない奥部開口型の1～3号窯跡は③類に属し、大きく前者から後者への窯跡構造の変遷が追えることになる。

また、窯体の平面プランについて、井手ヶ浦窯跡群ではプランが知り得るすべての窯跡で胴張り型を呈していた。牛頭窯跡群では③類の成立と共に多孔式煙道が導入され寸胴型の平面プランが増加するが、宗像窯跡群や菟又窯跡群など調査事例が多い窯跡群をはじめ、多くの窯跡で胴張り型が基本形のようである。但し裏ノ田・雉子ヶ尾窯跡や天觀寺山窯跡では寸胴型に近いものも見られ、地域によってバラツキがあることも考えられる。

最後に半地下式構造の窯跡についてだが、上述のように井手ヶ浦窯跡群周辺では、基本的に地下式の窯跡が地理的・時間的な広がりをみせている。但し豊前南部上毛町の照日・山田窯跡では6世紀後半（ⅢB期）に半地下式が導入されており、一方で同時期の天觀寺山窯では地下式が継続することから、7世紀代にかけて豊前の南北で様相が異なってくることが知られている¹⁴。

（2）窯跡出土須恵器と編年

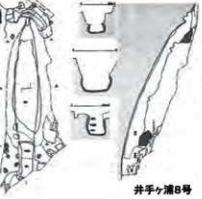
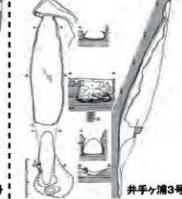
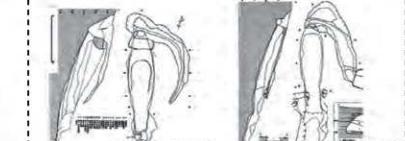
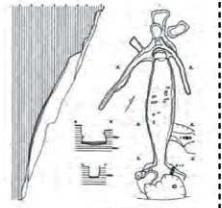
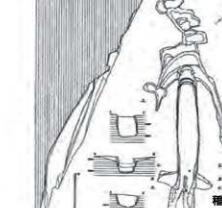
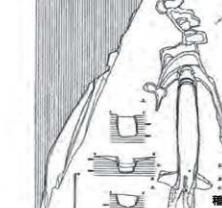
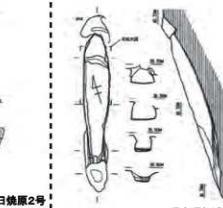
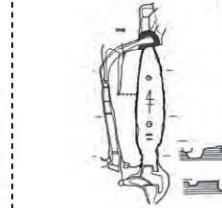
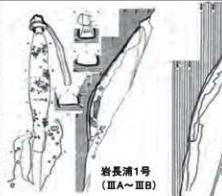
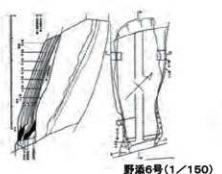
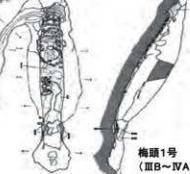
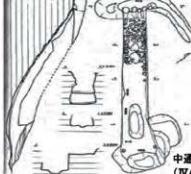
今回の調査における窯跡出土須恵器は、①貼床・貼壁内からの出土、②最終操業面直上からの出土、③燃焼部～前庭部にかけての明確に分層された灰層からの出土に分けることができる。そのほか窯体内の埋土や排煙部に取り付く溝、および灰原からの出土遺物も多いが、窯の操業を終えた後の時期に属する遺物が含まれる可能性も高いため、窯跡の年代を考える資料としては除外する¹⁵。

以上を踏まえて7～10号窯跡出土須恵器について、出土数が豊富な蓋環を中心に、他の器種についても必要に応じて取り上げながら、型式とその変遷について考察を加えたい。

蓋環の型式分類

坏蓋は、概ね口縁端部内面の段の存在と、天井部外面の回転ヘラ削り調整（一部に手持ちヘラ削りも存在）は共通するため、法量、天井部の外形、天井・口縁部境の形状を要素として、以下のように分類する。

- a : 口径13.4～14.5cm前後、器高4cm前後で、天井部が高く、天井・口縁部境が稜もしくは強い沈線により明瞭なもの。
- b : aと同じ法量・外形で、天井・口縁部境が浅い沈線や屈曲によるもの。
- c : aと同じ法量で、外形が扁平、天井・口縁部境が稜もしくは強い沈線により明瞭なもの。
- d : aと同じ法量で、外形が扁平、天井・口縁部境が浅い沈線や屈曲によるもの。
- e : dよりも器高が低い（3.4cm以下）もの。
- f : 口径12.4～13.3cm、器高4cm前後で、天井部が高く、天井・口縁部境が稜もしくは強い沈線により明瞭なもの。
- g : fと同じ法量・外形で、天井・口縁部境が浅い沈線や屈曲によるもの。
- h : fと同じ法量で、外形が扁平、天井・口縁部境が稜もしくは強い沈線により明瞭なもの。
- i : fと同じ法量で、外形が扁平、天井・口縁部境が浅い沈線や屈曲によるもの。
- j : iよりも器高が低い（3.4cm以下）もの。

	6世紀前半(Ⅱ期)	6世紀中葉(ⅢA期)	6世紀後半(ⅢB期)	6世紀末~7世紀初頭(ⅣA期)	7世紀前半(ⅣB期)
井手ヶ浦窯跡群					
古門窯跡 野間窯跡群			 		
宗像窯跡群	 				
岩長浦窯跡 裏ノ田窯跡 焼ヶ尾窯跡		  			
牛頭窯跡群				 	

第88図 周辺窯跡の構造と時間的位置 (いずれも縮尺は1/300)

坏身は、口縁端部内面の段が存在せず、底部外面が回転ヘラ削り調整（一部に手持ちヘラ削りも存在）される点は共通する。よって法量、底部の外形、立ち上がりの形状を要素として以下のように分類する。

- A : 口径 11.6 ~ 13.0 cm 前後、器高 4.0 cm 前後で、底部が深く、立ち上がりが高く直立または内傾後直立するもの。
- B : A と同じ法量・底部外形で、立ち上がりが高く内傾するもの。
- C : A と同じ法量・底部外形で、立ち上がりが低く内傾するもの。
- D : A と同じ法量で、底部が扁平、立ち上がりが高く直立または内傾後直立するもの。
- E : D と同じ法量・底部外形で、立ち上がりが高く内傾するもの。
- F : D と同じ法量・底部外形で、立ち上がりが低く内傾するもの。
- G : D よりも器高が低い (3.5 cm 前後) もの。
- H : E よりも器高が低い (3.5 cm 前後) もの。
- I : F よりも器高が低い (3.5 cm 前後) もの。
- J : 口径 10.0 ~ 11.5 cm、器高 4.0 cm 前後で、底部が深く、立ち上がりが高く直立または内傾後直立するもの。
- K : J と同じ法量・底部外形で、立ち上がりが高く内傾するもの。
- L : J と同じ法量・底部外形で、立ち上がりが低く内傾するもの。
- M : J と同じ法量で、底部が扁平、立ち上がりが高く直立または内傾後直立するもの。
- N : M と同じ法量・底部外形で、立ち上がりが高く内傾するもの。
- O : M と同じ法量・底部外形で、立ち上がりが高く内傾するもの。
- P : N よりも器高が低い (3.5 cm 前後) もの。

〈7号窯跡〉

坏蓋は h 型式を除く全ての型式が存在するが、詳細を見ると、出土層位によって資料の型式に偏りがあることが分かる。具体的には、7号窯操業期間の早い時期に属すると思われる①の貼床内出土と③の燃焼部～前庭部にかけての明確に分層された下層灰層（9層）および間層の8層出土の資料には a (95 ~ 100・220・225・227・228)・b (101・102・110 ~ 113)・f (92 ~ 94)・g (103 ~ 109・217 ~ 219) 型式といった、4.0 cm 前後の器高を持ち、天井部が深いものが多く見られる。一方で、②の最終操業面出土と③のうち上層灰層（5・6層）出土といった、操業期間の後半に属すであろう資料には、a・b・f・g 型式に加えて、新たに c (181・236)・d (174・182・234・235)・e (173・176・177・180・237)・i (165・166)・j (156・159・161・162・171) 型式の、外形が扁平な資料の出土が確認できるようになる。なお、天井部外面手持ちヘラ削りの資料としては 183 が c 型式、229 が a 型式に含まれる。

坏身も A 型式を除く全ての型式が出土しているが、やはり詳細に見ると、坏蓋ほど顕著ではないものの、出土層位による型式の偏りが存在する。具体的には、7号窯操業期間の早い時期に属すると思われる①貼床内出土と③の燃焼部～前庭部下層灰層 9 層および間層 8 層出土資料には B (125・133)・D (129・131・134)・E (127・128・132)・G (130)・H (123・124・230)・I (126) 型式といつ

た、11.6～13.0 cm前後の大きめの口径を持つものが多く見られる。一方で、操業期間の後半に属すであろう②最終操業面出土と③の上層灰層5・6層出土資料では、B・D型式も多く見られるものの、J (188)・K (152・187・189・192～194・199)・L (195・238)・M (203・204・239)・N (150・186・196・198・200)・P (185・190・191・197・201・202) 型式の、口径10.0～11.5 cmに属する資料の増加が確認できるようになる。このほか全体的な所では、底部外形は深いもの・扁平なもの双方とも多数が出土し、立ち上がりの形状は高いものが多いといえる。

なお、蓋坏のセット関係は蓋fと身N、蓋aと身K、蓋bと身Bで確認できる。

その他、①貼床内出土資料に器台、③の上層灰層6層出土資料に長脚2段透かしの高坏が含まれることを指摘しておく。

(8号窓跡)

坏蓋は一部扁平な資料もあるが (373・405)、a (380・401・402・441)・b (375・397・399・400・403・404)・f (378・390)・g (379・394～396・398) のように、ほとんどの資料が4.0 cm前後の高い器高・深い天井の型式に属する。なお、口縁端部内面に段を持たない374はg型式、天井部外面手持ちヘラ削りの376は、扁平な外形でe型式となる。

坏身はA (411)・B (382～385・407～410)・C (391)・D (412)・E (446・447)・K (406)・L (381) 型式が確認できる。ほとんどの資料が口径11.6～13.0 cm前後・器高4.0 cm前後の法量が大きいA～E型式に含まれ、また立ち上がりが高い。

(9号窓跡)

坏蓋は、資料数が少ないとあってか、特に偏りは見られず、a・b・d・e・g・h・iの各型式に1～3点の資料が確認できる。外形は深いもの・扁平なものが混在するが、器高は4.0 cm前後の高いものが多い。

坏身も資料数が少なく、F (499)・L (463)・O (496・497) 型式が確認できるのみだが、いずれも立ち上がりが低く内傾する特徴が明確に現れている。なお459はA～Cいずれかに属する。

その他、③前庭部灰層出土資料に長脚2段透かしの高坏や、低く内傾する立ち上がりを持つ有蓋壺を含む。

(10号窓跡)

坏蓋はa (532・565)・b (534・538～540・561・562・568・569)・d (528・529・567)・e (526) 型式であり、いずれも大きな口径を持つ。天井部外面手持ちヘラ削りの536もb型式に含まれる。但し天井部の外形はばらつきが見られ、深いもの・扁平なものの双方がある。天井・口縁部境は、弱い稜・沈線や屈曲による、やや明瞭さに欠けるものが多く、527のように沈線や屈曲も無く境が不明なものもある。なお、天井部外面手持ちヘラ削りの536はb型式に含まれる。

坏身はB (531・533・541・574～576) 型式が最も多く、その他C (578)・E (577)・F (530)・K (535・570・573)・L (572)・N (571) 型式が確認できる。その特徴は、底部外形が深く、立ち上がりは低く内傾するものを含むが、多くが高く内傾し、全体の器高も高く作られる点にあろう。なお、天井部外面手持ちヘラ削りの537はC型式となる。

また蓋坏のセット関係は、蓋aと身B、蓋bと身K、蓋bと身Cで確認できる。

蓋坏の型式変遷（第10表）

以上、7～10号窯跡より出土した蓋坏資料について型式分類を行い、各々の特徴について抽出を試みた。次にその変遷について考えたい。

まず、7号窯跡では、大きく古・新2段階に分かれる型式の特徴を抽出できた。操業期間の早い時期=古段階に属する坏蓋は、天井部が深く、高い器高を持つものが多い(a・b・f・g型式)。また坏身では口径が11.6～13.0cm前後を測る大きめの資料が多く含まれた(B・D・E・H型式)。一方で、操業期間の後半=新段階では、天井部の外形が深い坏蓋に加え、扁平な資料が新たに確認できるようになる(c・d・e・i・j型式)。坏身でも口径が10.0～11.5cmに属する小さめ資料の増加が確認できる(K・M・N・P型式)。また坏身の立ち上がりは、全時期を通じて高く作られている。

次に8号窯跡では、坏蓋は天井部が深く、器高が高い(a・b・f・g型式)。坏身も口径・器高とともに大きく、立ち上がりが高く作られる(A・B・D・E型式)。8号窯跡は排煙部に取り付く溝が7号窯跡前庭部に切られており、8号窯が7号窯に先行することが確認できるが、蓋坏の型式でも、大きめの法量や坏身立ち上がりの高い形状に7号窯古段階への変遷が認められる。

統いて8号窯跡と同様、切り合い関係から7号窯跡に先行する10号窯跡について見る。10号窯跡は窓体そのものが7号窯跡の前庭部で破壊されている。蓋坏の型式的特徴は、坏蓋は口径が大きく、天井・口縁部境が弱い稜・沈線や屈曲で画される(b・d型式)。但し天井部外形の形状にはばらつきがある。また坏身は、底部外形が深く、立ち上がりは高く内傾し、全体の器高も高く作られる(B・K型式)。

この8号窯跡と10号窯跡の先後関係については、切り合い関係等からは窺うことはできない。しかし近接して隣り合う立地からは、両窯が同時並行で操業していたとは考えにくい。あえて出土蓋坏の型式からこの点について触ると、全体的な法量の比較や、7・8号窯跡で多く出土する蓋g型式が10号窯跡では認められることなどから、10号窯跡が8号窯跡に先行すると考えたい。但し、10号窯跡の蓋の形状に扁平なものも多く、天井・口縁部境が明瞭さに欠けることなど課題は残る。

そして9号窯跡では、坏蓋は、口径の大小や天井部の外形にばらつきがあるが、器高は4.0cm前

坏蓋		型式									
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
10号窯跡		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
8号窯跡		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
7号窯跡(古)		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
7号窯跡(新)		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
9号窯跡		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
10号窯跡		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
8号窯跡		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
7号窯跡(古)		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
7号窯跡(新)		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
9号窯跡		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	

■ …5点以上
■ …3～4点
■ …2点
□ …1点

第10表 蓋坏の型式変遷

後の高いものが多い（a・d・g型式）。坏身は、立ち上がりが低く内傾するものが主体となる（F・L・O型式）。また蓋・身を通じて、口径が小さい資料の割合が増えることも指摘できる。特に坏身立ち上がりが低くなる点は、9号窯が他の窯よりも後出することを示す要素といえる。

なお、谷下部の堆積状況から9号窯跡に先行すると考えられるはSX 2についても、下層（10・11層）の出土に限って見てみると、坏蓋はb（605・606・608・609）・f（603）・g（602）型式など7号窯跡古段階や8号窯跡に近い状況にある。一方で、坏身は下層出土が2点と少ないが、いずれも径が小さく、613は立ち上がりも低く作られ、新しい要素が目立つ。従って9号窯跡との層位関係と矛盾ではなく、7号窯と並行する時期が考えられる。

以上、7～10号窯跡より出土した蓋坏資料について、型式の分類と変遷について検討を行った。次に、これらの資料について、井手ヶ浦窯跡群出土須恵器における位置を考えたい。

「井手ヶ浦窯跡編年」における位置付け

井手ヶ浦窯跡群の出土須恵器については、1～6号窯跡の出土資料を元に、嶋田光一氏が編年を作成している（*1）。特に古墳時代の蓋坏についてその概要を紹介すると、小田富士雄氏の編年III B期にあたるI類は、“蓋は口径13cm、器高4cm前後のものが多く、口縁部は直立に近くのび、口端部内面に段を持つ、古い様相を残す”、“身は最大径13.5cm、器高4cm前後で、立ち上がりは1～1.5cmを測る”そして“丁寧な回転ヘラ削りを施し胎土に砂粒を含む”ことを特徴とする。続くIV A期にあたるII類では、“蓋・身とも最大径12cm前後、器高3.5cm前後で小型になり、口端部は丸く仕上げる”、“身の立ち上がりは0.7～1.0cmと内傾度が強く短い”ものが主体となる。そしてI・II類を通じて、“蓋は口径13cm前後、身は最大径13.5cm前後だが、器高が3.5cm前後とやや低く扁平になる”、“身の立ち上がりが0.7～1.0cmと短く内傾度が強い”、“口端部は蓋・身とも丸く仕上げ、回転ヘラ削りはやや粗くなり、胎土に含む砂粒が少なくなる”ものが含まれる。

これらの特徴と、7～10号窯跡出土資料を比べてみると、まずI類には、大きく7号窯跡古段階出土資料や、8・10号窯跡出土資料が該当してこよう。但し8・10号窯跡出土資料は法量（径・器高とも）がI類として示された数値よりも大きくなるものが多く、I類の中でも早い段階に位置付けられる。蓋天井部・身底部外面の回転ヘラ削りについても7号窯跡古段階資料に比べて、8・10号窯跡資料に丁寧さが目立つ。しかし、身の口縁端部に段が全く見られないこと、蓋天井・口縁部境の稜や沈線が明瞭でない資料も多いことから、I類を週って小田編年III Aに位置付けるには、今後の資料数の増加と議論を待ちたい。

次にI・II類両期にまたがる型式には、7号窯跡新段階および9号窯跡出土資料が当てはまろう。全体的な形状は扁平で、径は小さくなる。しかし、器高は4cm前後の高い資料も多く、7号窯跡新段階の資料は立ち上がりも高い。またほとんどの蓋資料で口縁端部に段が認められるなど、本型式の定義よりも古い要素が多く残る。

最後にII類に属する資料は、包含層出土資料には一部認められるものの、本節冒頭に掲げた①～③の出土状況にある窯跡出土資料には確認できない。口径12cm前後の短頸蓋と考えられる蓋は出土するが、身では最大径が12.0cm前後まで小さくなる物はない。蓋口縁端部の段が無くなる資料も数点のみである。

以上、1～6号窯跡出土資料による須恵器編年を基準に、本調査出土資料の位置付けについて検

討を行った。特にこれまで、窯体を確認していない6号窯跡の灰原出土資料しか存在しなかったI類において、窯体内出土資料を多く得ることができたことは大きな成果であろう。そこでは、I類の幅に収めたが、先行する要素を持つ資料群の存在が明らかになった。実年代としては、全体的には既に提示されている年代観に従いたいが、操業の開始時期は6世紀後半でも中葉に近い時期に遡ることができよう。また、I～II類にまたがる型式についても定義の再検討が必要であろう。そして、前節と併せて考えると、I～II類に属する窯体の構造についてデータを得たことも重要な成果といえる。

2 その他出土遺物に関する検討

(1) 7・8世紀に下る出土遺物について

1区や、2区の谷下部灰原・包含層出土資料の一部には、今回検出した7～10号窯跡よりも明らかに時期が下るもののが含まれている。包含層出土遺物は言うまでもないが、灰原出土分についても後世に混入した可能性が高く、出土状況からは生産・消費いずれの遺構に由来するものか明らかではない。この点は、井手ヶ浦窯跡群の操業期間、そして丘陵で展開された人間活動の変遷を考える上で重要な問題といえる。ここでは、特に胎土分析の成果に拠ることで、その問題に迫りたい。

なお、1～6号窯跡の出土資料による編年では、小田編年V・VI期にあたる資料として、4・5号窯跡灰原上層からの出土資料をもって充てている。しかし4-1次・4-2次・5号窯跡の窯体内出土資料には、当該期の資料は出土しておらず、資料的な等級としては、今回の調査において1区や2区の谷下部灰原・包含層から出土したものと同等と評価される。このため、この時期の資料で、確実に井手ヶ浦窯跡群における生産品と言えるものは、これまで確認されていないといえる。

以上のように、井手ヶ浦窯跡群で出土した小田編年V・VI期に属する資料については、生産地に関する情報が限りなく少ない状況にある。このため、窯跡内出土資料の胎土分析を実施するのに合わせて、生産地に関する何らかの手がかりを得ることを目的に、これら時期が下る資料についても胎土分析をお願いした。その結果はIV章-5にあるとおりである。特に本項に関係するところでは、1区から出土した高台が付く須恵器壺Bタイプの环身の中には、牛頭窯跡群産の可能性が高い製品が含まれていること。そのほかの資料では、胎土が“井手ヶ浦領域”に含まれ、井手ヶ浦窯跡群で生産された可能性があることが分かった。

この成果を考慮すると、井手ヶ浦窯跡群では8世紀段階まで、須恵器の生産活動が継続した可能性が高い。一方で、この時期、筑前国内において集中的に須恵器を生産した牛頭窯跡群産と考えられる製品が流入することは、その影響が及んでいたことも示唆している。

(2) 出土土師器・“赤焼土器”について

今回の調査では、4基の窯跡や灰原などから大量の須恵器が出土したが、酸化焰焼成になる土師器や、いわゆる“赤焼土器”と称されるような資料も、遺構埋土からの出土を含め、少なからず確認している。これらについて若干の考察を加えたい。

今回の調査報告では、酸化焰焼成になる遺物資料を1区で8点(75～77・79・80・82～84)、2区で10点(250・310・474・475・477・743～747)報告した(特殊遺物を除く)。そのほか各区で数点の破片が出土しているが、図化に耐えるものではないため、報告からは除いている。報告した

資料は、いずれも甕または瓶の破片であるが、このうち 250・475 は体部外面に格子目タタキが施されており、「似非土師須恵器¹⁶」とも称されるものである。

これら酸化焰焼成になる資料については、出土地点・器種を考慮しながら図化に耐えない資料 6 点について胎土分析を実施した。その成果では、1 区出土の高坏・甕と思われる 2 点と、7 号窯跡排煙部の溝出土資料 1 点、および SX 1 埋土より出土した甕または瓶となる 1 点の 4 点は、井手ヶ浦窯跡群周辺において、同じ粘土を使って製作された可能性が高く、7 号窯跡灰原灰層出土 1 点と 9 号窯跡燃焼部埋土出土 1 点（いずれも甕または瓶）は、外部から持ち込まれた可能性が高いという結果を得た。

時期の問題や、土師器が何故に窯跡埋土やその周囲で出土するのかは明らかでないが、井手ヶ浦産須恵器と近い粘土や、タタキを使用して作られた土師器の存在は、工人またはその集落・集団内部において土師器の製作が行われたことを示していいよう。一方、外部から持ち込まれた 2 点は、出土層位から各窯の操業時期に近いものであることが考えられる。どのような人・物の流れを示すものか、興味深い。

このほか、窯体内で焼成され、色調が灰色となる還元焰焼成ながら、須恵器・土師器いずれにも認めがたい器形となる資料として、3 点の甕または瓶（713・714・752）を確認した。口縁部が短く外反または外傾し、体部の調整は内面にナデまたはヨコナデ、外面はタタキ痕が残る。78 の把手もここに含まれるかもしれない。やはり時期など不明な点が多いが、須恵器工人との関わりが想像される。

（3）土馬について

今回の調査においては、明確な飾馬が 3 例、裸馬が 3 例認められた。飾馬は、鞍のみを表現したものと鞍+手綱を表現したものとに分かれる。飯塚市教育委員会により行なわれた 1 次調査においては、手綱を持つのみの飾馬が出土しており、計 3 タイプが遺跡内で認められることになる。

製作方法は、787 を除いて胴体から下半身まで 1 つの粘土紐で作り、顔および脚は別の粘土紐を貼り付けている。鞍も別作りで貼り付けており、手綱は線書きされる。顔が残存しているのは 3 例のみであるが、全てで耳を表現している。また、目・鼻を表現する場合には刺突、口は線書きである。1 次調査では目・鼻・口の表現方法は同一ながら、耳が表現されていないものが多い。たてがみは 1 次調査と同じく粘土を引っ張り出すことで表現されているものが多い。尻尾は 787 を除いて、短くやや上ないしは下に伸びるものであり、1 次調査とも共通する。787 は尻尾の表現や首の表現など、他の土馬と比して特異な形態をしており類例が待たれる。脚の表現は、脚先を平坦にするもの、丸くするものとあり、前者の中には脚先をつきだして蹄を表現しているものも見られる。脚の長さは 1.5 cm から 3 cm のものがあり、短いものは体が太いものと、脚先の丸いものは裸馬と組み合う傾向がある。

破損の形態は、主に 4 つに分類される。脚のみ・下半身のみ・胸部のみ・脚が破損の 4 タイプである。また、1 次調査では上半身のみのものが出土しており、計 5 タイプとなる。脚のみのものが最も多く出土しているが、胸部が残っているものと接合する例はなく、全て別個体であると推測される。

時期については、本調査においては全て包含層出土であり、確定できない。1 次調査においては 6 世紀末～7 世紀初頭頃の 3 号窯の焼成部埋土中から 1 点出土しており、その時期に伴うものと推

測されている。7世紀後半～8世紀初頭に出現するとされている「大和形土馬」（小笠原1975、金子1998など）と本遺跡で出土した土馬は、鞍や手綱を表現することこそ類似するものの、形態や作りは似て非なるものであり、同じ系統のものとは考えにくい。時期を判断できる資料が1点に限られている段階でこれ以上の推定はできないが、「生馬の奉納の簡略化として後続的に発生したものではなく、六世紀後半でさかのぼって行なわれる所以のもの」（小田1979）としたい。

これらの土馬の製作地については、先に述べたように大和のものとは異なる。また、同じ福岡県で出土しているものの中でも、朝倉市宮原遺跡や小郡市上岩田遺跡出土などの筑後地域のものとは顔の作りや全体的な形態から趣が異なる。また、胎土分析で1区への搬入が示唆される大野城市牛頭窯跡群や春日市向谷南・日ノ浦遺跡出土のものは筑後地域のものよりは類似性が高いものの、顔の表現方法や足の製作方法など異なる点も多い。一方、先述された窯体構造等で影響があるとされる宗像窯跡群の稻元日焼原遺跡出土例とは、趣や制作方法の点で類似性が高い。ただし、これら他の地域の土馬よりも本遺跡出土例同士の類似性が高いこと、他遺跡では数点のみの出土なのに対し、本遺跡では出土量が多いことなどから、焼成したかどうかは別として、井手ヶ浦窯跡の特徴的な土馬としたい。

最後に本遺跡で出土している土馬が窯で焼成されたものか、それとも使用されたものなのかについて考えてみたい。先に述べたように、1次調査においては尻尾の破片1点が窯で出土しており、この資料については焼いていたものが破片のため回収されず残っていた可能性もある。しかし、今回の調査においては、そのほとんどが斜面に堆積した包含層のものである。焼成失敗品ならばそのまま灰原に捨てればよいが、灰原からの出土はみられない。また、1次調査のものも含めて、全てが欠損している資料である。これらのことから以下の2通りのパターンが考えられる。

①窯で焼成した土馬の失敗品を、わざわざ別の場所に廃棄した。

②北東斜面において、使用された（祭祀が行われた）。

①の場合、土馬という遺物の特性上、普通に捨てるのではなく、廃棄に伴う祭祀のような形で別の場所で捨てられた可能性が考えられる。773や780のように足のみの例で胴部に貼り付けた面で剥離したものが出土していることは、焼成失敗品が含まれている可能性を示唆している。ただし、破損している資料において各々接合する資料がないことから、失敗品をそのまま（破片全てを）廃棄したのではないと言える。しかし、限られた範囲の調査の為、見つかっていない可能性もある。

②の場合、窯の北東斜面側包含層で出土していることから、どのような祭祀が行われたのかが問題となる。土馬は研究史の中で水に関する祭祀に使われたと想定されており、井戸や溝などで出土している例が多い。しかし、窯の焼成において、粘土を成形する際に多少水が必要とはいえ、必ずしも雨などの水が必要ではないと考えられる。また、成形する際の水にしても粘土採掘場や製作所が見つかっているわけではなく、積極的に首肯できない。そのほか、峠の祭祀なども想定されているが、丘陵の頂部に近いといえ峠越えの道などではなく、これも積極的に首肯できない。

以上のことから、可能性としては、焼成に失敗した土馬を何らかの理由でそのままの形ではなく、破損させてから廃棄に伴う祭祀のような形で、別の場所で廃棄した可能性が考えられる。ただし、牛頭窯跡群や北九州市天觀寺山窯跡など他の窯跡ではこのような例は見られず、今後の資料の増加に期待したい。

3 おわりに

今回実施した、井手ヶ浦窯跡群の第2次調査では、小田編年ⅢB期を中心に、嘉穂盆地における須恵器および須恵器窯跡について良好な資料を得ることができた。詳細は繰り返さないが、周辺窯跡群と比較すると、溝付窯や排煙部の構造において宗像窯跡群の影響が考えられ、それは須恵器の型式にも、法量や形態、坏蓋の口縁端部に古風を残す点に表れている。また、井手ヶ浦1・2号窯跡と時期が重なると考えられる野間窯跡群とは、やはり窯構造や須恵器の型式など細部のほか、「似非土師須恵器」の出土という共通点が認められた。今回、これらを踏まえた上で、地域社会像を復元する考察にまで至らなかったことは大きな課題である。また、ここに含まれるが、川島・鯨田古墳群を始めとする同時期の周辺古墳群との関係や、胎土分析の結果を踏まえた、外部からの流入資料との型式比較など、残した検討課題が多い。

なお、本調査地2区北西の隣接地点は同じく県道整備事業対象地で、2区の北西に開く谷の南側斜面が伸び、8・10号窯跡群原の広がりが想定された。この対象地については翌平成20年度に飯塚市教育委員会が発掘調査を実施し、灰原のみならず、さらに数基の窯跡を新たに検出している。現在、整理作業中であるため詳しく述べれないが、良好な資料も多く出土しており、編年案等、今回の報告を含めた新たな成果が期待される。

註

- *1 以下1～6号窯跡の調査成果については『井手ヶ浦窯跡』(飯塚市教育委員会、1985)に掲げる。
- *2 4・5号窯跡前庭部以下の灰原は第三紀層上に位置しており、報告ではこの点でも窯体を花崗岩バイラン土上に築こうとした意図が窺われるとする。
- *3 土層図・図版写真では床面上に崩落した天井部の上に折り重なるように、更に天井・側壁の崩落土が堆積し、その上に列石を含む土層が一度に崩落（又は流れ込む）よう堆積する。この状況では天井崩落後に周囲の土砂が流入したものとも考え得る。
- *4 『古門窯跡』福岡県文化財調査報告50、福岡県教育委員会、1973。
- *5 『野間窯跡群』岡垣バイパス開閉埋蔵文化財調査報告1、福岡県教育委員会、1982。
- *6 『福元日焼原』・『三郎丸堂ノ上C』宗像市文化財調査報告書22・50、宗像市教育委員会、1989・2001など。
- *7 『宇美錦音浦』上巻、宇美町教育委員会、1981。
- *8 『九州縱貫自動車道開閉埋蔵文化財調査報告XVII』福岡県教育委員会、1977。
- *9 『牛頭窯跡群』大野城市教育委員会、2008など。
- *10 『菊又地区遺跡群』小郡市教育委員会、1994など。
- *11 『天觀寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会、1977。
- *12 宗像窯跡群や岩長浦窯跡では「地山」の地質について言及がなく、古門窯跡では「明るい褐色の層」とあり判然としない。
- *13 石木秀啓「第3章 九州『古代窯業の基礎的研究－須恵器窯の技術と系譜－』窯跡研究会編、2010、真陽社)。以下溝付窯と排煙部の構造については、この論考および石木氏のご教示に掲るところが大きい。
- *14 前掲石木論文。
- *15 この点については、石木秀啓「1. 窯跡出土資料の等級的位置付け」『牛頭野添遺跡群I』大野城市教育委員会、2004)を参考にした。
- *16 橋口達也氏による分類。『野間窯跡群』(*5)。

その他の参考文献

- ・ 小笠原好彦 1975 「土馬考」『物質文化』25, pp. 37-47, 物質文化研究会
- ・ 小田富士雄 1979 「古代祭祀における形代馬」『九州考古学研究 古墳時代篇』pp. 764-771, 学生社
- ・ 金子裕之 1998 「都をめぐるまつり」『日本の信仰遺跡』奈良国立文化財研究所学報第五七冊, pp. 187-210, 奈良国立文化財研究所
- ・ 関淳一郎 1996 『日本の美術』361, 至文堂

VI 飯塚市鯰田地区発見の石蓋土壙墓について

1 はじめに

今回報告する石蓋土壙墓は、平成 16 年 4 月 21 日に飯塚市教育委員会から同市鯰田を縦断する国道 200 号線バイパス法面整備の工事中に文化財を発見した旨の連絡があった。教育庁筑農教育事務所は、連絡を受けて現地の状況を確認し、対応について協議した。法面については、これ以上の掘削を行わない事から、現状においての簡単な記録保存をし、残りについては埋没保存を行うことにした。そこで同筑農教育事務所は、教育庁総務部文化財保護課と協力して同年 4 月 28 日に緊急の記録保存を行った。

2 石蓋土壙墓（第 89 図）

この石蓋土壙墓は、井手ヶ浦窯跡第 2 次調査地より南へ約 50 m に位置し、鯰田丘陵の標高約 52 m 上で 1 基発見された。周辺には、西に古墳時代後期の川島古墳群（装飾古墳）などがある。発見時は、バックホーによる掘削のために輪切りにされ、内部が露出した状態であった。断面幅約 2.3 m の墓壙は二段掘りで、GL から約 65 cm 下の橙色土（地山）に長さ約 100 cm 以上、幅 50 cm、深さ 40 cm の二段目を掘削し、厚さ 10 cm の板状の蓋石は黄褐色粘質土で目張りし、3 枚が残存した状態であった。墓壙内には多少の土砂が流入していたが、盜掘による搅乱は認められなかった。遺物は墓壙内および周辺からも出土しなかった。

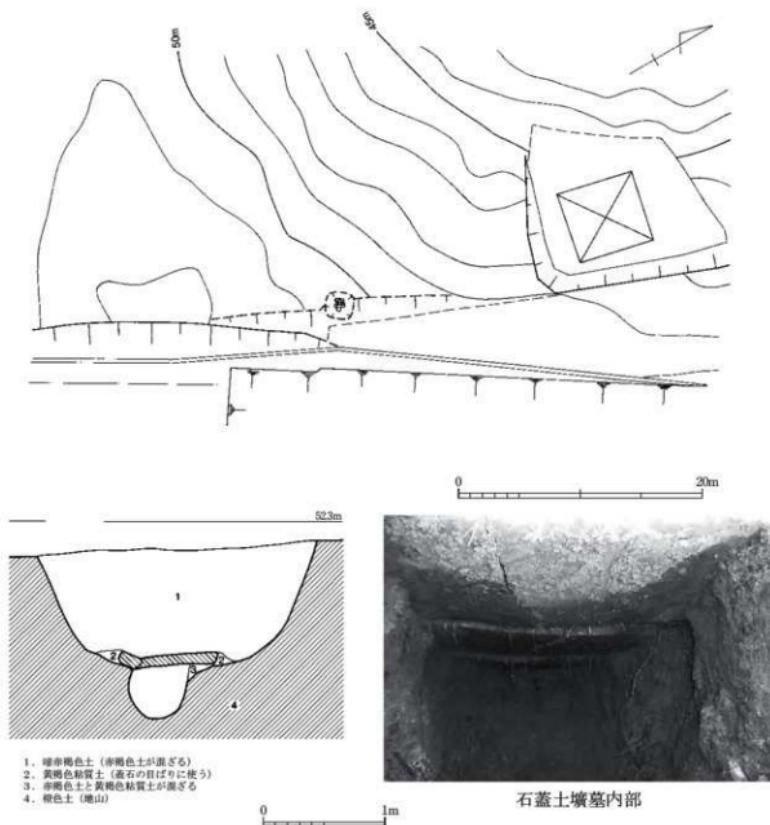
また掘削土はすでに撤出され、現状の 3 枚の他に存在していたと考えられる蓋石も持ち去られていたため、本来の蓋石の数と墓の規模については復元できない。詳細な時期については、出土遺物もなく、周辺に同様の石蓋土壙も確認されないため不明である。



石蓋土壙墓発見時の状況



石蓋土壙墓近景（南から）



第 89 図 飯塚市鰐田地区発見の石蓋土壤墓の位置図および断面図 (1/400・1/40)

3 まとめ

今回発見された石蓋土壤墓のある鰐田の丘陵上には、弥生時代中期前半の山村倒立壺棺墓や古墳時代の前方後円墳、群集墳や横穴墓群も多数存在しており、弥生～古墳時代にかけての墓域となっていたと思われる。おそらく石蓋土壤墓 1 基のみとは考えられず、周辺にはまだ他にも存在するものと思われる。今後の調査を期待したい。

※なお調査終了後、石蓋土壤墓は内部に土嚢を積め現地にて保存している。

参考文献

- ・穗波町教育委員会 1976 『スダレ遺跡』穗波町文化財調査報告書第 1 集
- ・飯塚市教育委員会 1997 『飯塚市内遺跡詳細分布調査報告書』飯塚市文化財調査報告書第 24 集

遺物 番号	回	種類	器種	出土上地點	法善寺(1) ①北東斜面 ②底面 ③底面中央に縦 帯(0)は複数枚	調査・採集の特徴	A軸上 B底成 C色調	備考
1	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 3-C-3間ベルト	①X11.0②2.25	天井部内面不定方向ナゲ、外面へラク 後ナゲ、他回転ナゲ、又井部内面へ記号	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存1/3、外曲げ被り
2	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 B-2	①X10.0②2.6	天井部外側へリケイ後ナゲ、内面不 定方向ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存1/2
3	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 3	①X12.0②3.4	天井部内面不定方向ナゲ、外面へラク 後ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存2/3、内面へ記号
4	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 B-3	①X11.0②2.3	天井部内面不定方向ナゲ、外面へラク 後ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存1/3、内面へ記号?
5	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 A- 1-B-1間ベルト1層	①X11.0②2.85	天井部内面不定方向ナゲ、外面へラク 後ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存1/4
6	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 3-間ベルト-1居	①X11.0②2.7	天井部内面不定方向ナゲ、外面へラク 後ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存1/5、外曲げ被り
7	須恵器	坪皿		I-A区 北東斜面 C- 3-間ベルト-1居	①X13.0②3.1	外面回転ナゲ	A密、織紋砂を多く含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存1/6
8	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 B-3	①X13.0②3.25	天井部内面不定方向ナゲ、外面へラク 後ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存2/9
9	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 A- 1-B-1間ベルト1層	①X10.0②2.35 ②X13.0	天井部内面不定方向ナゲ、外面へラク 後ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存1/2
10	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 3	①X12.0②2.0 ②X14.0	天井部内面不定方向ナゲ、外面へラク 後ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存1/4
11	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 B-3	①X12.0②1.9 ②X12.7	天井部外側へ不定方向ナゲ、体部外側 上部ケタゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を多く含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色、外:暗灰色、灰褐色	元形、内面へ記号
12	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 A- 1-B-1間ベルト1層	①X13.0②2.2 ②X16.1	天井部内面不定方向ナゲ、外曲げキム 他回転ナゲ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 C内:暗青色、外:暗青灰色	残存1/6
13	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 3-間ベルト-1居	①X12.7②1.9 ②X14.7	天井部内面不定方向ナゲ、外面回転へ 少ケタゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:灰青色、暗青灰色	残存1/2
14	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 3-間ベルト-1居	①X12.0②2.9 ②X14.5	天井部内面不定方向ナゲ、外面へラク 後ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を多く含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存1/4
15	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 3-間ベルト-1居	①X15.0②2.9 ②X17.0	外面上部回転へケタギ、他回転ナゲ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 C内:灰白色、外:暗青色、灰褐色	残存1/8
16	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 B-3	①X10.0②2.6 ②X12.1	天井部内外面不定方向ナゲ、体部外側 上部ケタゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青色	残存2/3、内面へ記号
17	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 B-3	①X12.0②2.4 ②X14.8②3.5 ③X18.1.0	天井部内面不定方向ナゲ、体部外側上 半部回転ヘラスク、他回転ナゲ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 C内:灰白色、外:灰褐色	残存2/3、内面へ記号
18	7	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 3-間ベルト-1居	①X12.0②2.5 ②X14.8②3.5 ③X18.1.0	天井部内外面不定方向ナゲ、体部外側 上部カタメ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存3/5、内面へ記号、 外曲げ被り
19	8	須恵器	坪	I-A区 北東斜面 C- 3-間ベルト-1居	①X0.6②2.7 ②X4.7	底面内中央不定方向ナゲ、外面へラ ケタギ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存1/3、内面へ記号
20	8	須恵器	坪	I-A区 北東斜面 C- 3	①X10.0②2.9 ②X7.6	天井部内面不定方向ナゲ、外面へラク 後ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:暗青灰色、外:暗青灰色	残存2/3、口沿若干歪む
21	8	須恵器	坪	I-A区 北東斜面 C- 3-間ベルト-1居	①X4.6②3.4	底面内面不定方向ナゲ、外面回転へ ケタギ、他回転ナゲ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	残存1/8
22	8	須恵器	坪	I-A区 北東斜面 C- 3	①X12.0②3.8	底面小の環状の眉曲点内面美に相 応すナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 C内:暗青灰色、外:灰白色、暗青灰色	残存1/2、内面被り
23	8	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 B-3	①X2.0②2.7 ②X2.0②2.7	底面内外面不定方向ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 C内:灰白色、暗青灰色	底部の1/4残存
24	8	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 3	②X2.4②0.9 ③高台1.0	底面内面不定方向ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	底部の1/2残存
25	8	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 2	②X1.9②0.9 ③高台1.0	回転ナゲ	A密、織紋砂ほとんど含まない B良好 C内:灰白色	底部の1/6残存
26	8	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 3	②X1.4②0.9 ③高台1.0	底面内外面不定方向ナゲ、他回転ナゲ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	底部の1/2残存
27	8	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 2	②X1.4②0.9 ③高台1.0	底面内面不定方向ナゲ、網部外曲げ 接、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	底部の1/4残存、自然軸
28	8	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 3-間ベルト-1居	②X1.6②0.8 ③高台1.1	外曲げ被りのため一部不明だが全て回 転ナゲ	A密、織紋砂を多く含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	底部の1/5残存
29	8	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 2	②X1.3②0.8 ③高台0.9	底面内外面不定方向ナゲ、網部外曲げ 接ナゲ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 C内:灰白色、外:暗青灰色	底部の1/4残存
30	8	須恵器	坪皿	I-A区 北東斜面 C- 2	②X1.2②0.8 ③高台0.8	底面内外面不定方向ナゲ、網部外曲げ 接ナゲ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C内:灰白色	底部の1/4残存、 後成後底部中央に穿孔

第11表 井手ヶ浦窓跡第2次調査出土遺物観察表①

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	法規(年)	調査・技法の特徴	A軸上 B軸成 C色調	備考
31	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 B-3	①12.0②25.4 ③8.8高台0.6	底面部内外不定方向ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色、外:灰白色-暗青灰色	残存4/5
32	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 B-3	①14.0②25.45 ③9.0高台1.05	底面部内外不定方向ナデ、外面被り不明、他回転ナデ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 CP1:灰白色、暗青灰色	残存2/5
33	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 C-3	①2.1②17.5③9.0 高台1.0	底面部内外不定方向ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色、外:灰白色-暗青灰色	底部のみ残存、内面へ記号
34	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 B-3	①14.0②25.2 ③10.5高台0.9	底面部内外不定方向ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色、外:灰白色-暗青灰色	残存1/2
35	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 C-3	①2.6②17.5③8.8 高台0.5	底面部内外不定方向ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 CP1:灰白色、外:灰白色-灰黑色	底部1/6残存
36	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 B-3	②2.15②10.0 高台0.75 D-C間ヘルト	底面部外側不定方向ナデ、網部外側回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色	底部1/3残存
37	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 C-3	②1.2③11.6 高台0.5	底面部内外不定方向ナデ、外側ケツリ後ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む Bやや不良 CP1:灰白色	底部1/4残存
38	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 C-3	①1.8②6.4 高台0.3	全て回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C灰白色	底部1/3残存
39	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 C-3	②3.0③7.5 高台0.5	全て回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 C灰白色	底部1/5残存
40	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 B-3 C-D間ヘルト	①15.0②2.9 ③8.8高台0.6	底面部内外不定方向ナデ、外側ヘタケズリ後ナデ、網部外下部回転ヘタケズリ後ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:暗青灰色、外:灰白色-暗青灰色	残存1/3、外側破壊
41	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 C-3	②1.9③7.5④8.0 高台0.3	底面部内外不定方向ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 CP1:灰白色、外:灰白色-暗青灰色	底部1/2残存
42	8	須恵器	坪身	I-A区 北東斜面 C-2	②3.0③7.4 高台0.7	回転ナデ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 CP1:灰白色、外:暗青灰色	底部1/4残存、焼け跡み
43	8	須恵器	円筒	I-A区北東斜面C-3	①12.0②3.05	底面部上部ヘタケズリ後突出部付近回転ナデ、外側回転ナデ、内面不対ナデ	A密、1mm以下の大粒織紋砂を含む B良好 CP1:淡青灰色、外:灰白色	残存1/5
44	8	須恵器	里	I-A区 北東斜面 C-4	①20.0②2.2 ③17.1	底面部内外不定方向ナデ、外側ヘタケズリ後ナデ、他回転ヘタケズリ後ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色、外:灰白色-暗青灰色	残存1/6
45	8	須恵器	里	I-A区 北東斜面 C-3	①21.0②2.0 ③17.4	底面部内外不定方向ナデ、外側ヘタケズリ後ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:暗青灰色、外:灰白色	残存1/10、外側一部破壊、焼け跡れ有
46	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 C-3	②2.8③8.6③3	外側面に施墨のため不明	A密、織紋砂をわずかに含む B不良 CP1:淡黄褐色、外:灰白色	底部2/3残存、土師質
47	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 B-3	②3.5③7.7 ④1.9	底面部内外不定方向ナデ、外側ヘタケズリ後ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 CP1:灰白色	底部のみ残存、外一部破壊
48	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 C-3	①15.0②26.15 ③17.1	底面部内外不定方向ナデ、外側ケツリ、網部下半キリ、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色、外:灰白色-灰黑色	残存1/3
49	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 C-3	②5.6③9.8 ④1.9	底面部内外不定方向ナデ、外側回転ヘタケズリ後ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色-暗青灰色	底部1/2残存、内面外側破壊有
50	9	須恵器	圓筒	I-A区 北東斜面 B-3	⑦.3②26.8 ③1.9	底面部内側タタキ、外側ひびき、体部下半ケツリ、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色、外:灰白色-暗灰色	残存2/3
51	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 A-1 B-C間ヘルト	①9.4②2.2	自然軸と灰被りのため不明	A密、織紋砂を多く含む B良好 CP1:灰白色	残存1/2、外側ともに灰被り、内面一部自然軸
52	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 B-3 C-D間ヘルト	①10.0②4.5	外側面回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色-暗青灰色、外:灰白色	残存1/6
53	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 A-1 B-C間ヘルト	①9.2②3.95	内側面回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色 C青灰色	残存1/4、口縁部破壊
54	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 B-3 D-C間ヘルト	①12.0②5.7	外側面回転ナデ	A密、織紋砂をわずかに含む B良好 CP1:灰白色、外:灰白色-暗青灰色	残存1/5、内面頭部に他の須恵器片付着、口縁部自然軸
55	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 B-3 C-D間ヘルト	①10.2②26.55	底面部内外不定方向ナデ、外側ヘタケズリ、他回転ナデ、底面部外側へ記号	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色-暗青灰色	残存1/3、外側一部破壊
56	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 A-1 B-C間ヘルト	①10.3②2.5 ③7.4	底面部中央付近内外不定方向ナデ、外側表面磨滅のため不明、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色、外:灰白色-暗青灰色	残存2/3
57	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 B-3	①11.6②24.9 ③6.3	外側下面回転ヘタケズリ、底面部内外不定ナデ、外側ヘタケズリ後ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:灰白色	残存2/3
58	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 B-3	①9.9②25.25	外側面回転ナデ	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:黄灰色-青灰色	残存1/3
59	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 A-1 B-C間ヘルト	①10.5②5.3 ③7.7	底面部内外不定方向ナデ、他回転ナデ	A密、織紋砂をわずかに含む B底部不良、他直角、CP1:灰白色、外:灰白色-暗青灰色 CP2:灰白色	残存5/6、外側一部自然軸、焼け跡、口縁部外側へ記号
60	9	須恵器	輪	I-A区 北東斜面 B-3	①9.8②26.8 ③10.4	自然軸と灰被りのため不明	A密、織紋砂を少し含む B良好 CP1:暗青灰色、外:灰白色-暗青灰色	残存2/8、底部外側・網部外側へ記号

第12表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表②

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	法規(cm) ①口徑×高さ ②底面外周直径 ③底面外周最大径 ④厚さ	調査・技法の特徴	A軸上 B軸側 C色調	備考
61	9	須恵器	鉢	I-A区 北東斜面 B-3	①10.0②残5.7	底部内外面不定方向ナデ、他回転ナデ	A密、細粒砂を少し含む B良好 C白灰 CP:灰白色、外:灰褐色	残存1/6、口縁部外側へテ記号
62	9	須恵器	鉢	I-A区 北東斜面 C-3-4間 \times ベルト一括	①12.4②残5.6	内外面灰被りのため不明瞭だが回転ナデ	A密、細粒砂を少し含む B良好 C灰色	残存1/10、外側へテ記号
63	10	土師器	高杯	I-A区 北東斜面 B-3	②残4.95	洋部内面にガリ、外面ナデ若しくはしがらみ、外縁内面にはナデ、外縁ケズ有	A密、細粒砂をわざかに含む B良好 C内:灰褐色、外:褐色	くびれ部のみ残存
64	10	須恵器	高杯	I-A区 北東斜面 C-3-4間 \times ベルト一括	②残5.5	洋部内面底部不定方向ナデ、他回転ナデ	A密、細粒砂を多く含む B良好 C青灰	くびれ部のみ残存
65	10	須恵器	高杯	I-A区 北東斜面 C-2	②残6.1	脚部内面シシリ、外曲カキメ、他回転ナデ	A密、細粒砂を多少含む B良好 C内:灰白色、外:灰褐色	脚部の一部のみ残存、内面へテ記号
66	10	須恵器	洗台	I-A区 北東斜面 C-7 3	②残2.55③7.2	高台部2.1 全て回転ナデ	A密、細粒砂を多少含む B良好 C内:灰白色、外:青灰	高台部のみ残存
67	10	須恵器	双耳壺	I-A区 北東斜面 C-2	-	耳部内面ナデ、外面ケズ有	A密、細粒砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:灰褐色	耳部のみ
68	10	須恵器	瓶子	I-A区 北東斜面 C-3	②残6.5③(12.1)	底部外周へタグリ、脚部外面上下回転ナデ \times 2、他回転ナデ	A密、細粒砂をわざかに含む B良好 C内:灰褐色、外:褐色	底部の1/8残存、外側一部灰被り
69	10	須恵器	壺	I-A区 北東斜面 B-3	②残9.8③(11.0) ④18.0	底部内面不定方向ナデ、脚部外側タキメ、他回転ナデ	A密、細粒砂を少し含む B良好 C内:灰褐色、外:青灰	残存1/3
70	10	須恵器	平瓶	I-A区 北東斜面 A-1-B-1間 \times ベルト一括	②残7.8③(15.8)	脚部内面回転ナデ、外面上部カキメ、ケズ有、底部外側、ケズ有	A密、細粒砂をわざかに含む B良好 C内:灰白色、外:灰褐色	残存胴～底部1/5
71	10	須恵器	桶	I-A区 北東斜面 C-3	①18.0②残5.6 ④9.4	全て回転ナデ	A密、細粒砂をわざかに含む B良好 C内:灰褐色、外:青灰	口縁の1/8残存、外側へテ記号？
72	10	須恵器	平瓶	I-A区 北東斜面 C-3-4間 \times ベルト一括	②残9.0③(19.1)	脚部外側上部タキメ後カキメ、下部カキメ \times 2回転ナデを交叉に施す。他回転ナデ	A密細粒砂をこぐわざかに含む B良好 C内:灰褐色、外:青灰	脚部の1/8残存、外側一部灰被り
73	10	須恵器	桶	I-A区 北東斜面 C-3	①18.0②残11.0 ④30.0	内面回転ナデ後ケズ \times 2や工具痕、外面タキメナデ	A密、細粒砂をわざかに含む B良好 C内:灰白色、外:灰褐色	残存1/5
74	10	須恵器	桶	I-B区 北東斜面 B-2	①36.0②残10.0 ④38.0	内面当直工具痕不定方向ナデ、口縁部回転ナデ、外身タキメ、下部の小ナメ有	A密、細粒砂を少し含む B良好 C内:灰白色、外:暗褐色	口縁～胴部の1/7残存
75	11	土師器	瓶	I-A区 北東斜面 C-3	-	指ナデ	A密、細粒砂を多少含む B良好 C褐色	把手のみ
76	11	土師器	瓶	I-A区 北東斜面 C-3	-	指ナデ	A密、細粒砂を少し含む B良好 C内:灰褐色	把手のみ
77	11	土師器	瓶	I-A区 北東斜面 C-3-4間 \times ベルト一括	-	指ナデ	A密、細粒砂を多少含む Bやや不良 C明赤褐色	把手のみ残存、先端付近に黒斑
78	11	須恵器	瓶	I-A区 北東斜面 B-3	②残4.15	口縁部ヨコナデ、脚部内面ケズ有、外側ハケメ？	A密、細粒砂を少し含む B良好 C灰白色	把手のみ、接合面で剥離
79	11	土師器	甕	I-A区 北東斜面 B-3	②残4.15	口縁部ヨコナデ、脚部内面ケズ有、外側ハケメ？	A密、白色粗砂を多少含む B良好 C暗褐色	口縁部のみ残存
80	11	土師器	甕	I-A区 北東斜面 C-3	①16.0②残4.2	表面摩耗するがハケメ	A密、1~2mm程度の白色粗砂多少含む B良好 C内:褐色、外:明赤褐色	口縁部1/7残存
81	11	須恵器	甕	I-A区 北東斜面 C-4	②残9.45	口縁部回転ナデ、脚部内面回転ナデ、外身タキメ、頭部に縱方向の短旋削痕	A密、細粒砂をわざかに含む B不良 C内:褐色	口縁部一部のみ残存
82	11	土師器	甕	I-A区 北東斜面 B-3	①23.0②残5.6	内外面共に底裁のため不明	A密、1~2mm程度の白色粗砂多少含む B良好 C褐色	口縁部1/8残存
83	11	土師器	甕	I-A区 北東斜面 B-3-C-3間 \times ベルト	①17.0②残5.4	口縁部外周ナデ、脚部内面ハケメ、内面粗裁のため不明	A密、細粒砂をわざかに含む B良好 C明赤褐色	口縁部1/8残存
84	11	土師器	甕	I-A区 北東斜面 B-3-C-3間 \times ベルト	①23.0②残4.2	内外面共に底裁のため不明	A密、細粒砂を少し含む B良好 C内:暗褐色、外:褐色	口縁部1/12残存
85	11	須恵器	甕	I-A区 北東斜面 C-3-4間 \times ベルト一括	①31.0②残9.3	全て回転ナデ	A密、細粒砂を少し含む B良好 C内:灰褐色、外:灰褐色	口縁部2/3残存
86	11	須恵器	甕	I-A区 北東斜面 B-3	①24.0②残8.6	内面當て	A密、細粒砂を少し含む B良好 C内:暗褐色、外:褐色	口縁部1/6残存
87	12	須恵器	甕	I-K 遺構検出時	①5.2②残2.55 ④7.0	外側ケズ、他回転ナデ	A密、細粒砂をわざかに含む B良好 C内:灰白色、外:青灰	残存1/8
88	12	須恵器	甕	I-K 遺構検出時	②2.0③0.9④0.8	底面内面不定方向ナデ、脚部外側回転ナデ、内面ハケメ	A密、細粒砂をわざかに含む B良好 C内:灰白色、外:灰褐色	底部1/6残存
89	12	須恵器	甕	I-K 遺構検出時	①10.0②4.8 ④6.4	底面内面中央不定方向ナデ、回転ナデ	A密、細粒砂をわざかに含む B良好 C内:灰白色	残存2/3
90	12	須恵器	甕	I-K 遺構検出時	①20.0②1.8 ④18.0	底面内面不定方向ナデ、脚部外側下回転ナデ	A密、細粒砂をわざかに含む B良好 C灰白色	残存1/10

第13表 井手ヶ浦窪塹跡第2次調査出土遺物観察表③

遺物番号	国	種類	器種	出土土地点	特徴(目)	調整・技法の特徴	A軸+B軸+C色調	備考
91	12	須恵器	黑	I区 構造検査時	①(21.25)②2.1 ③(18.6)	底面部中央不定方向ナメ、外面へナメ 切削、他回転ナメ	A密、細粒砂をわずかに含む B良好 CP1:暗灰黒色、外:灰白色	残存1/10
92	19	須恵器	灰青	2区CK 7号竪窓 焼成部 BK 脊床2層	①(13.2) ②(3.8)	天井部外3/4回転へナメ割り、口縫部端 に横断状の段	A密 B良好 C灰～灰白色	残存1/4、天井一部欠
93	19	須恵器	灰青	2区CK 7号竪窓 焼成部 BK 脊床3層	①(13.0) ②(3.7)	天井部外3/4回転へナメ割り、口縫部端 に横断状の段	A密 B良好 C灰白色	残存1/4、天井部分
94	19	須恵器	灰青	2区CK 7号竪窓 焼成部 BK 脊床3層	①(13.0) ②(3.7)	天井、口縫部端に沈縫、内面不定方向 ナメ、口縫端部に沈縫状の段	A密 B良好 C灰白色	残存1/4、天井部分
95	19	須恵器	灰青	2区CK 7号竪窓 焼成部 BK 脊床3層	①(13.4) ②(4.0)	天井部外3/4回転へナメ割り、口縫部端 に横断状の段	A細砂含む B良好 C灰褐色	残存1/4、天井部分、内面へナメ 号、ロクロ左
96	19	須恵器	灰青	2区CK 7号竪窓 焼成部 BK 脊床3層	①(13.6)②(4.0) ③(3.7)	天井部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ、口縫端部に横断状の段	A細砂含む B良好 C黒灰色	残存1/6、内面焼き隠れ・外面細 い縫縫のため凹凸なし
97	19	須恵器	灰青	2区CK 7号竪窓 焼成部 CK 脊床7層	①(13.6)②(4.0)	天井部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ、口縫端部に横断状の段	A細砂含む B良好 C黒灰色	残存1/6、内面焼き隠れ・外面細 い縫縫のため凹凸なし
98	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床3層	①(13.9) ②(3.7)	天井部外3/4回転へナメ割り、口縫部端 に横断状の段	A細砂含む B良好 C黒色	残存1/4、天井部分、内面黒色斑 点
99	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床3層	①(13.8)②(4.1)	天井部外3/4回転へナメ割り、口縫部端 に横断状の段	A密 B良好 C内:暗灰、外:灰～灰黒色	残存1/4
100	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床8層	①(14.0) ②(3.0)	天井、口縫部端に沈縫、口縫端部に沈 縫状の段	A密、細粒少々含む B良好 C灰色	残存1/4、天井部分
101	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床2層	①(13.6) ②(3.4)	天井部外3/4回転へナメ割り、口縫部端 に横断状の段	A細砂多々含む B良好 C内:暗灰、外:灰～灰黒色	残存1/3、天井一部欠、内面へナメ 号、ロクロ左
102	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床4～6層	①(14.0) ②(3.1)	天井部外3/4回転へナメ割り、口縫部端 に沈縫、内面不定方向ナメ、口縫端部 に沈縫状の段	A密、黒色少し含む B良好 C灰色	残存1/6、ロクロ右
103	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床内	①(12.4) ②(3.8)	天井部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ、口縫端部に沈縫状の段	A密 B良好 C暗灰色	残存1/3、天井一部欠、内面へナメ 号
104	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床3層	①(12.6) ②(4.0)	天井部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ、口縫端部に沈縫状の段	A密 B良好 C灰色	残存1/3、天井部分、内面へナメ 号、ロクロ左
105	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床6層	①(13.0)②(3.1)	天井部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ、口縫端部に沈縫状の段	A密、細粒少々含む B良好 C灰色	残存1/4、天井一部欠、口縫端焼け 込み
106	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床3層	①(12.8)②(4.7)	天井部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ、口縫端部に沈縫状の段	A密 B良好 C灰色	残存1/3、内面へナメ号、外面やや 暗黒
107	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床4～6層	①(13.0)②(4.5)	天井部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ、口縫端部に沈縫状の段	A細砂やや多く含む B良好 C暗灰色	残存1/4、内面へナメ号、ロクロ右
108	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床7層	①(13.0)②(4.1)	天井部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ、口縫端部に沈縫状の段	A密 B良好 C灰色	残存1/4
109	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床7層	①(13.2)②(4.6)	天井部外3/4回転へナメ割り、口縫部端 に沈縫、内面不定方向ナメ、口縫端部 に沈縫状の段	A密 B良好 C黄灰色	残存1/3、天井一部欠、ロクロ右、外 面一部灰黒
110	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床2層	①(13.6)②(3.6)	天井部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ	A粗、細粒多々含む B良好 C暗灰色	残存1/4、天井部分
111	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床7層	①(13.9)②(4.1)	天井部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ、口縫端部に沈縫状の段	A密、細粒少々含む B不良 C灰白～灰 色	残存1/6、天井一部欠
112	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床5層	①(14.0)②(3.6)	天井部外3/4回転へナメ割り、口縫部端 に沈縫、内面不定方向ナメ、口縫端部 に沈縫状の段	A細砂含む B良好 C暗褐色	残存1/6、天井部分、内面へナメ 号
113	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床7層	①(14.0)②(4.0)	天井部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ	A細砂少々含む B良好 C暗灰色	残存1/4、内面へナメ号、外面灰 黒
114	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床7層	①(10.7)②(4.2) ③(13.6)	底部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ	A密 B良好 C青灰～黒灰色	残存1/6
115	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床2層	①(10.0)②(4.8) ③(13.3)	底部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ、外面焼き隠れ・外縫縫少々 銀雲のため凹凸なし	A密 B良好 C灰～黒色	口縫端3/4焼存。大きく焼け重ね、 内面へナメ号
116	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床4～6層	①(11.2)②(4.0) ③(13.6)	底部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ	A密 Bやや不良 C灰～灰白色	残存1/4、底部欠
117	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床2層	①(10.0)②(4.6) ③(13.4)	底部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ	A粗、細粒多々含む B良好 CP1:内:白緑色、外:灰白色・緑 色	底部3/4焼存。外面全面被り
118	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床7層	①(11.0)②(4.9) ③(13.7)	底部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ	A細砂含む B良好 C内:暗灰、外:灰 色	残存1/3、底部一部欠、内面へナメ 号、ロクロ右
119	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床内	①(11.0)②(4.4) ③(13.4)	底部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ	A密 B良好 C灰～灰黑色	残存1/4、底部一部欠、ロクロ右
120	19	須恵器	灰青	2区 7号竪窓 燃焼部 BK 脊床7層	①(11.0)②(4.0) ③(14.0)	底部外3/4回転へナメ割り、内面不定 方向ナメ	A細砂含む、黒色少し含む B良好 CP1:内:灰、外:暗灰色	残存1/4、底部一部欠、内面へナメ 号

第14表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表④

遺物番号	国	種類	器種	出土土地点	法規(年)	調査・技法の特徴	A灰土 B堆成 C色調	備考
121	19	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 燃焼部 貼付4~6層	①(11.2)②4.0 ④13.6	底部外側2/3回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A密 Bやや不良 C灰~灰白色	残存1/4、底部欠
122	19	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床2層	①(11.0)②3.1 ④(13.8)	底部外側2/3回転へラ削り、底に矢字 状の跡が残る、内面不定方向ナダ	A密、繊細少し含む B良好 C灰色	残存1/6、底部欠
123	19	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床	①(11.7)②3.6 ④(14.1)	底部外側1/2を持ち、1/3回転へラ削り、 内面不定方向ナダ	A粗、砂粒多く含む B良好 C灰色	残存1/4、クロロ右、外面黒色斑点
124	19	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 燃焼部 貼付3層	①(11.6)②3.3 ④(14.4)	底部外側1/3回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A密 B不良 C灰~白色	残存1/8、底部欠
125	20	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床2層	①(11.6)②4.2 ④(14.0)	底部外側2/3回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A細砂含む B良好 C暗灰色	残存1/2、底部一部欠、クロロ左、 外面黒色斑点
126	20	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 燃焼部 貼付3層	①(11.6)②3.6 ④(14.0)	底部外側2/3回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A細砂含む B良好 C内:白色、外:暗褐色	残存1/6、底部欠
127	20	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 燃焼部 貼付内	①(12.0)②4.1 ④(14.4)	底部外側3/5回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A密 B良好 C内:灰色、外:黒灰色	残存1/4、底部一部欠、剥れ口に粘 土層付、外面一部灰被り
128	20	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 燃焼部 貼付4~6層	①(12.0)②4.3 ④(14.4)	底部外側3/4回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A粗、繊細多く含む B良好 C灰色	残存1/4、内面ヘラ記号、クロロ左
129	20	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床7層	①(12.0)②4.4 ④(14.0)	底部外側4/5回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A細砂含む Bやや不良 C灰白~灰色	残存1/4、底部一部欠、クロロ右
130	20	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床2層	①(12.0)②3.6 ④(14.0)	底部外側2/3回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A細砂やや多く含む B良好 C灰色	残存1/4、底部欠
131	20	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床6層	①(12.2)②3.9 ④(14.2)	底部外側1/2回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A粗、繊細多く含む B良好 C黒~黒灰色	残存1/8、クロロ左
132	20	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床4層	①(12.4)②3.9 ④(14.8)	底部外側3/5回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A細砂含む B良好 C灰色	残存1/2、底部、内面ヘラ記号
133	20	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床7層	①(12.6)②4.6 ④(15.6)	底部外側2/3回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A細砂含む Bやや不良 C暗灰~黄灰色	残存1/2、底部一部欠、内面ヘラ記 号、やや埋け込み
134	20	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 燃焼部 貼付3層	①(12.8)②4.3 ④(15.0)	底部外側4/5回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A密 Bやや不良 C灰色	残存1/6、底部欠
135	20	須恵器	短縫	21K 7号窯跡 燃焼部 貼付7層	①(8.8)②3.2	天井部外側3/4回転へラ削り、口縫部周 辺に沈線、内面不定方向ナダ、口縫端部に 凹痕	A細砂含む B良好 C灰色	残存1/2、内面ヘラ記号、クロロ左、 外面一部灰被り
136	20	須恵器	短縫	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床2層	①(11.0)②4.1	天井部外側3/4回転へラ削り、口縫部周 辺に沈線、内面不定方向ナダ、口縫端部に 凹痕	A密 B良好 C内:灰色、外:黒灰色	残存1/4、外一面部灰被り
137	20	須恵器	短縫	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床7層	①(11.5)②2.5	天井部外側3/4回転へラ削り、内面不定 方向ナダ、口縫端部に凹痕	A密 B良好 C暗灰	残存1/4、天井一部欠、内面ヘラ記 号、外面灰被り
138	20	須恵器	短縫	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床5層	①(11.8)②3.4	天井、口縫部端に横、内面不定方向ナ ダ、口縫端部に沈線の段	A密 Bやや不良 C内:灰白色、外:白黃灰色	残存1/8、天井部欠
139	20	須恵器	短縫	21K 7号窯跡 燃焼部 貼付3層	①(7.2)②残2.4 ④(11.6)	底部外側カキ目、他は回転ナダ	A細砂含む B良好 C灰色	口縫へ、傾斜2/3、体部上の横合面で 剥離、裏の重ね焼き直
140	20	須恵器	短縫	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床5層	①(9.2)②残4.3 ④(13.0)	外側回転ナダ、外面カキ目~底上部に 挟み、体部下位回転ナダ	Aやや粗、砂粒含む B良好 C黒灰色	残存1/4、底部欠、体部焼け込み、 全形の二三次焼成直
141	20	須恵器	短縫	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床6層	②残12.7 ④(20.8)	内面回転ナダ、外面端部灰被りのため 底付、体部(上位沈線)2~3回転文底、 体部中~下位カキ目	A密、繊細少し含む B良好 C内:灰白色、外:黒色	内面糊へ体部下位2/3、底部外一面 灰被り付、底付、底付外一面灰被り、内 面焼き直
142	20	須恵器	縫	21K 7号窯跡 燃焼部 貼付3層	①(10.4) ②残2.7	口縫・頭部端に横、全面回転ナダ	A細砂含む B良好 C内:灰色、外:灰白色	口縫1/2、外一面灰被り
143	20	須恵器	縫	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床2層	①(12.6) ②残2.3	外側頭部端に強・沈歎2条、他は回転 ナダ	A粗、繊細多く含む B良好 C内:灰色、外:黒色	口縫1/6、内面灰被り
144	20	須恵器	縫	21K 7号窯跡 燃焼部 貼付2層	①(13.6) ②残2.2	頭部外面上位波状文、口縫部端に波 状・横、他は回転ナダ	A細砂含む B良好 C内:灰色、外:灰色、黒灰色	口縫1/6
145	20	須恵器	縫	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床2層	①(14.2) ②残2.8	外側頭部端に波状文1条、他は回転ナ ダ	A密、繊細少く含む B良好 C灰色	口縫1/4
146	20	須恵器	瓶	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床7層	①(8.6)②残2.3	頭部外腹波状文、他は回転ナダ	A粗、砂粒多く含む B良好 C黒灰色	口縫上半1/4
147	20	須恵器	瓶	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床5層	②残2.6、残存幅 2.0	全体ナダ	A密 B良好 C灰~黒灰色	把手のみ残存
148	20	須恵器	筒	21K 7号窯跡 未成部 C区 貫床内 No.26	②残7.6 ④(36.0)	外面波状文・朝突文・沈歎。端部付近 カキ、外面波状文底Wコナダ、長方形ス カキ	A密、繊細少し含む B良好 C黒灰色	筒部下位1/8
149	21	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 最終床 面 No.26	①(12.8)②4.1	天井部外側3/4回転へラ削り、口縫部周 辺に沈線、内面不定方向ナダ、口縫端部 に凹痕	A細砂含む Bやや不良 C内:灰白色、外: 灰~白色、白~白色、白色	完形、内面ヘラ記号、クロロ左、150 セット
150	21	須恵器	坪身	21K 7号窯跡 最終床 面 No.26	①(10.5)②4.3 ④(13.5)	底部外側1/2回転へラ削り、内面不定方 向ナダ	A粗、繊細多く含む B良好 C灰白~灰 色	完形、内面ヘラ記号、クロロ左、149 セット

第15表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表⑤

遺物番号	国	種類	器種	出土土地点	性状(cm)	調査・技法の特徴	A軸土 B椎成 C色調	備考
151	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 最終床面 No.18	①13.2②4.1	天井部外2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、口縁端部に段	A相、砂多く含む B不良 C灰白色	HED完形、内面ヘラ記号、152とセツル、全体的に黒味
152	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 最終床面 No.18	①13.2②4.5 ④14.0	底盤外側2/5回転へ7割り、内面不対方向ナデ	A細砂含む B不良 C白色	完形、内面ヘラ記号、ロクロ左、151とセツル
153	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼部 最終床面 No.28	①14.0②4.4	天井部外側2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、口縁端部に段	A密 B不良 C白～灰白色	完形、154とセツル、内面ヘラ記号、ロクロ左
154	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼部 最終床面 No.28	①11.6②4.8 ④14.6	底盤外側3/4回転へ7割り、内面不対方向ナデ	A密 Bや不良 C灰白色	完形、153とセツル、内面ヘラ記号、ロクロ右
155	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(12.0)②4.0	天井部外側2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡	A相、砂多く含む B良好 C灰色	残存1/4、天井一部欠、ロクロ左
156	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(12.8)②3.3	天井部外側2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、口縁端部に段	A相、細砂、黑色粒や多く含む B良好 C灰色	残存1/2、内面ヘラ記号、ロクロ左
157	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(12.6)②3.7	天井部外側3/4回転へ7割り、内面不対方向ナデ、口縁端部に段	A細砂含む B良好 C灰～暗灰色	残存1/2、内面ヘラ記号、ロクロ右
158	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 最終床面 No.25	①(12.0)②3.5	天井部外側3/4回転へ7割り、口縁部端に沈跡	A密 B良好 C灰～灰白色	残存1/4、内面ヘラ記号、ロクロ左
159	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(12.8)②3.2	天井部外側3/4回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ	A密 B良好 C灰色	残存1/2、内面ヘラ記号
160	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(12.0)②4.3	天井部外側2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、口縁端部に段	A密 B良好 C灰～灰白色	残存1/4、天井一部欠、内面ヘラ記号
161	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.0)②3.3	天井部外側3/4回転へ7割り、内面不対方向ナデ、口縁端部に段	A密、砂多く含む B良好 C灰～暗灰色	残存1/3、内面ヘラ記号、ロクロ右
162	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.0)②3.6	天井部外側回転へ7割り、内面不対方向ナデ、口縁端部に段	A密、砂多く含む Bや不良 C灰～灰白色	残存1/3、天井一部欠、内面ヘラ記号、ロクロ左
163	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.0)②4.2	天井部外側3/4回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、口縁端部に段	A相、細砂多く含む B良好 C灰色	残存1/4、天井一部欠、内面ヘラ記号、ロクロ右
164	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.1)②3.1	天井部外側回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面に段	A細砂含む B良好 C灰～青灰色	HED完形、天井一部欠、ロクロ左、内面一部反覆
165	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 最終床面 No.7	①(13.1)②3.7	天井部外側2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、口縁端部に段	A密 B良好 C灰色	残存1/2、内面ヘラ記号
166	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 最終床面 No.13	①(13.2)②3.7	天井部外側2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、口縁端部に段	A密 C灰～青灰色	残存5/6、内面ヘラ記号、ロクロ左
167	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.2)②3.9	天井部外側1/2回転へ7割り、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A密、砂多く含む B良好 C暗灰色	残存2/3、ロクロ左、内面黒斑点、外一面反覆で、飛き跡
168	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.3)②4.1	天井部外側2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A相、細砂や多く含む B良好 C灰～暗灰色	HED完形、天井一部欠、ロクロ左
169	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.2)②3.8	天井部外側回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A密、砂多く含む B良好 C灰～灰黑色	残存1/3、内面ヘラ記号、ロクロ右
170	21	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.3)②4.0	天井部外側2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A密 B良好 C灰色	残存1/2、内面ヘラ記号、ロクロ左
171	22	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.2)②3.0	天井部外側回転へ7割り、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A相、砂多く含む B良好 C灰色	残存2/3、内面ヘラ記号、ロクロ右、燒き跡
172	22	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.4)②3.9	天井部外側3/4回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A相、細砂多く含む Bや不良 C灰色	残存1/4、ロクロ左
173	22	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 最終床面 No.21	①(13.0)②3.3	天井部外側3/4回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A密 B良好 C灰色	残存2/3、内面ヘラ記号、ロクロ左、天井一部剥離で、外一面灰被り
174	22	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.6)②3.7	天井部外側3/4回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A密 B良好 C灰～灰黑色	残存1/4、ロクロ左、内面ヘラ記号、外一面灰被り、内面黒化
175	22	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.6)②4.3	天井部外側2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	B相 Bや不良 C灰～灰黑色	残存1/4、ロクロ右
176	22	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(13.8)②3.2	天井部外側4/5回転へ7割り、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A細砂含む Bや不良 C灰～灰黑色	残存1/4、内面ヘラ記号、ロクロ右
177	22	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 最終床面	①(14.0)②3.4	天井部外側2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A密 B良好 C灰～灰黑色	残存1/4、端幅は3cm、天井一部欠
178	22	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 最終床面 No.29	①(13.7)②4.5	天井部外側2/3回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面に段	A密 Bや不良 C白色	完形、内面ヘラ記号、205とセツル
179	22	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(14.0)②3.9	天井部外側3/4回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A細砂含む B良好 C灰～灰黑色	残存1/3、ロクロ左
180	22	須恵器	坪面	21K 7号窯跡 最終床面 No.31	①(14.2)②3.3	天井部外側5/6回転へ7割り、口縁部端に沈跡、内面不対方向ナデ、ロクロ左、内面沈跡状	A密、砂少少含む B良好 C青灰色	残存1/3、天井一部欠、ロクロ左

第16表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表⑥

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	注意(註)	調査・技法の特徴	A鉄土 B鉄成 C色調	備考
181	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(14.0) ②(3.6)	天井部外曲3/4回転へ削り、口縁部端に沈痕。内面不対称ナデ、口縁端部に沈痕状段	A密 磨砂少し含む B良好 C灰白色	残存1/6、天井一部欠、内面へテ記号
182	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.15	①(14.2) ②(3.8)	天井部外曲3/4回転へ削り、内面不対称ナデ、口縁端部に沈痕状段	A密 B良好 C灰白色	残存1/8、天井一部欠、内面へテ記号、外面一部灰被り
183	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(14.2)②(3.8)	天井部外曲4/5回転へ削り、内面不対称ナデ、口縁端部に沈痕状段	A粗、砂粒少々多く含む Bやや不良 C黄灰～灰色	残存1/2、天井一部欠
184	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(14.0) ②(4.5)	天井部外曲3/4回転へ削り、口縁部端に沈痕。内面不対称ナデ、口縁端部に沈痕状段	A密 磨砂少し含む B良好 C灰白色	残存1/3、内面へテ記号、ロクロ左、天井部外曲磨痕
185	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(10.0)②(3.2) ③(12.2)	底盤外曲3/5回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 磨砂少し含む B良好 C灰白色	残存1/4、内面へテ記号、ロクロ左
186	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.12	①(10.7)②(2.2) ③(3.6)	底盤外曲3/5回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 B良好 C内～口縁外：灰色、外：青灰～暗灰色	完形、内面へテ記号、ロクロ左
187	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.6	①(10.7)②(4.2) ③(3.3)	底盤外曲2/3回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 磨砂少し含む B良好 C灰白色	IIIE完形、底部中央破損、ロクロ右
188	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(10.8)②(3.9) ③(12.8)	底盤外曲3/5回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 磨砂少し含む B良好 C灰白色	残存1/4、内面へテ記号、ロクロ左
189	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(10.8)②(4.1) ③(13.4)	底盤外曲3/5回転へ削り、内面不対称ナデ	A粗、砂粒少々多く含む B良好 C黒灰色～灰色	残存3/4、底部一端欠、全体的に二焼成、灰被り、焼き流れ、焼け歪み
190	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.8	①(11.8)②(3.4) ③(3.5)	底盤外曲回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 Bやや不良 C灰白色	底盤一部欠、内面へテ記号、ロクロ左、底部焼け歪み
191	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼部 最終床面	①(11.0)②(3.7) ③(14.0)	底盤外曲3/4回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 B良好 C灰～灰白色	残存1/2、内面へテ記号、斜れ口に粘土被り、底部焼け歪み
192	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.3	①(11.0)②(4.4) ③(3.9)	底盤外曲1/2回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 Bやや不良 C黄灰色	底盤一部欠、内面へテ記号、ロクロ左
193	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.9	①(11.0)②(4.1) ③(3.6)	底盤外曲3/5回転へ削り、内面不対称ナデ	A粗、砂粒少々多く含む B良好 C灰白色	残存1/2、内面へテ記号、ロクロ左
194	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(11.1)②(4.4) ③(3.8)	底盤外曲3/5回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 B良好 C内～口縁外：明青灰色、外：青灰～明青灰色	IIIE完形、底部被覆部一部欠、内面へテ記号
195	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.5	①(11.1)②(1.1) ③(3.8)	底盤外曲2/3回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 Bやや不良 C灰白色	底盤一部欠、内面へテ記号
196	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.27	①(11.2)②(4.2) ③(3.5)	底盤外曲2/3回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 B不良 C白色	残存3/4、内面へテ記号、ロクロ左、全焼部に断滅
197	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(11.2)②(3.4) ③(3.2)	底盤外曲2/3回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 磨砂少し含む B良好 C灰白色	残存1/2、内面へテ記号、ロクロ左
198	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(11.2)②(4.0) ③(3.9)	底盤外曲2/3回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 磨砂少し含む B良好 C内：灰白色、外：暗灰色	残存3/4、内面へテ記号、やや焼け歪み
199	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(11.2)②(4.3) ③(4.2)	底盤外曲2/3回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 B良好 C灰白色	残存1/2、内面へテ記号
200	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.10	①(11.3)②(3.9) ③(3.8)	底盤外曲1/2回転へ削り、内面不対称ナデ	A粗、磨砂少し含む B不良 C灰～灰白色	完形、内面へテ記号、ロクロ右
201	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.20	①(11.4)②(2.5) ③(4.0)	底盤外曲1/2回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 Bやや不良 C灰白色	残存5/6、内面へテ記号、底部焼け歪み大
202	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(11.4)②(3.7) ③(3.6)	底盤外曲3/4回転へ削り、内面不対称ナデ	A粗、磨砂少し含む B良好 C内：灰色、外：暗灰色	残存1/6、底部一部欠、ロクロ右
203	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(11.5)②(3.9) ③(4.1)	底盤外曲2/3回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 磨砂少し含む Bやや不良 C灰～灰白色	IIIE完形、内面へテ記号、ロクロ左、やや焼け歪み
204	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.46	①(11.5)②(4.2) ③(4.0)	底盤外曲3/4回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 B不良 C白色	IIIE完形、内面へテ記号、ロクロ左
205	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.29	①(11.6)②(6.1) ③(4.4)	底盤外曲2/3回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 B不良 C白色	完形、内面へテ記号、ロクロ左 178セント
206	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.4	①(11.7)②(4.2) ③(4.0)	底盤外曲2/3回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 B良好 C内：灰～灰白色	残存1/4、内面へテ記号
207	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面	①(11.8)②(4.8) ③(4.5)	底盤外曲3/5回転へ削り、内面不対称ナデ	A密 Bやや不良 C白黄灰色～白色	IIIE完形、口縁端1/3欠、ロクロ左
208	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 最終床面 No.32	①(12.0)②(4.3) ③(4.8)	底盤外曲3/4回転へ削り、内面不対称ナデ	A粗、磨砂少々含む B良好 C内：淡青灰色、外：暗褐色	残存1/4、ロクロ左
209	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(12.0)②(4.0) ③(4.0)	底盤外曲2/3回転へ削り、内面不対称ナデ	A粗、磨砂多々含む Bやや不良 C内：灰色、外：暗褐色	残存1/4、ロクロ左
210	22	須恵器	坪直面	21区 7号窯跡 燃焼～焼成部 最終床面	①(12.0)②(4.2) ③(4.2)	底盤外曲2/3回転へ削り、内面不対称ナデ	A密、磨砂少し含む B良好 C灰白色	残存1/3、底部一部欠、内面へテ記号

第 17 表 井手ヶ浦窯跡第 2 次調査出土遺物観察表(7)

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	特徴(cm)	調査・技法の特徴	A軸上 B軸底 C軸側	備考
211	23	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 最終床面	①(12.0)②4.7 ④(14.8)	底部外周2/3回転へク削り、内面不定方向ナダ	A密 B不均 CP:白色、外:黄褐色・白色	残存1/4、内面へク記号、全体擦減
212	23	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 最終床面	①(13.0)②4.8 ④(15.6)	底部内面摩減いため調整不明。他は回転ナダ	A密 B不良 C自～灰白色	残存1/6
213	23	須恵器	組紐	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 最終床面	①(11.8) ②2.9	天井部外周回転へク削り、内面不定方向ナダ	A密 B良好 C灰色	残存1/4、内面へク記号、ロクロ左
214	23	須恵器	組紐	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 最終床面	①(12.0) ②2.9	天井部外周2/3回転へク削り、内面不定方向ナダ、口縁端部に沈黙伏状	A密 Bやや不良 C灰～灰白色	天井部1/2～ロ縁端部1cm、内面へク記号、ロクロ左、底付歪み
215	23	須恵器	甕	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 最終床面	②4.5 ④有6.3	外側カキメ、他は回転ナダ	A細砂含む B良好 C灰褐色	ロ縁端破片
216	24	須恵器	甕	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 最終床面 No.1、焼成部 最終床面 前庭部 5層	①22.4 ②2.1	口縁部外周カキメ・後継状、体部外周 梯子目字形カキメ、内面同心円貝、他は回転ナダ	A密、砂少し含む B不良 C内:白褐色、外:白褐褐～灰褐色	ロ縁～体部上位完存、体部中位 1/2
217	24	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 下縁(下縁火候)	①(12.6) ②4.0	天井部外周2/3回転へク削り、ロ縁端部に沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に沈黙状	A密 B良好 C灰色	天井一部、内面へク記号
218	24	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 下縁(下縁火候)	①(12.0)②4.1	天井部外周2/3回転へク削り、ロ縁端部に沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に沈黙状	A細砂含む B良好 C内:灰色、外:灰色・黒褐色	残存1/4、外側一部灰被り
219	24	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 下縁(下縁火候)	①(12.8)②5.5	天井部外周4/5回転へク削り、ロ縁端部に沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に沈黙状	A細砂含む C灰色	残存1/4、ロクロ右
220	24	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 5層(下縁火候)	①(13.4) ②4.0	天井部外周回転へク削り、ロ縁端部に沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に沈黙状	A密 B良好 C淡褐色灰色	残存1/3、天井部中央マサカニ灰、ロクロ左
221	24	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 5層(下縁火候)	①(12.0)②3.9	ロ縁部外周擦状工具によるナダ、落部 外側カキメ、内面不定方向ナダ	A相、砂少々含む B良好 C暗灰色	坪部1/8、脚部欠損
222	24	須恵器	横軸	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 7層(下縁火候)	①(12.8)②5.5	ロ縁部外周カキメ後継状、体部内面 回転同心円貝、他は回転ナダ	A密、砂少し含む B良好 C灰～灰褐色	残存ロ縁～横軸、ロ縁部外周へク記号、外側一部灰被り
223	24	須恵器	甕	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 9層(下縁火候)	①(12.6) ②4.9	外側カキメ、他は回転ナダ	A密 B良好 C灰～灰褐色	ロ縁部1/4、内面灰被り
224	24	須恵器	甕	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 9層(下縁火候)	①(15.6) ②7.2	外側波状紋、他は回転ナダ	A細砂含む B良好 C内:灰色、外:黒褐色	ロ縁部1/4、外側へク記号、内面～ロ縁部波状紋
225	24	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 8層(回転)	①(13.6)②4.2	天井部外周回転へク削り、ロ縁端部に 沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に 沈黙状	A密、砂少し含む Bやや不良 C灰褐色	残存1/2、ロ縁端部外側に擦状工具による擦減痕、ロクロ左
226	24	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 5層(前庭部)	①(13.6)②3.5	天井部外周4/5回転へク削り、ロ縁端部に 沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に 沈黙状	A密 B良好 C淡褐色	残存1/3、天井一部欠、内面へク記号、ロクロ右
227	24	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 前庭部 8層(下縁火候)	①(14.0)②4.0	天井部外周4/5回転へク削り、ロ縁端部に 沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に 沈黙状	A密 B良好 C灰～灰褐色	残存1/3、次輪内ロ縁端部外側に 擦状工具による擦減痕、ロクロ右
228	24	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 8層(回転)	①(14.0)②4.0	天井部外周3/4回転へク削り、ロ縁端部に 沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に 沈黙状	A密 B良好 C褐色	残存1/4、ロクロ左
229	24	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 8層(回転)	①(13.8)②4.0	天井部外周手持型へク削り、ロ縁端部に 沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に 沈黙状	A密 B良好 C内:黄褐色、外:暗褐色	残存1/4、内面へク記号
230	24	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 前庭部 8層(回転)	①(11.9)②3.7 ④14.0	底部外周3/5回転へク削り、内面不定方向ナダ	A密 B良好 C黄褐色	残存1/2、ロクロ左
231	25	須恵器	甕又 12瓶	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 前庭部 8層(回転)	①(17.0) ②9.2	外側波状紋、他は回転ナダ	A細砂含む B良好 C灰色	ロ縁部上半1/4
232	25	須恵器	甕	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 8層(回転)	①(17.5) ②8.7	體～体部外周カキメ、他は回転ナダ	A密、砂少し含む B良好 C内:灰色、外:灰褐色・黒褐色	ロ縁～瓶部1/4、ロ縁部外周へク記号、内面一部灰被り
233	25	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 8層(回転)	①(12.0)②4.2	天井部外周2/3回転へク削り、ロ縁端部に 沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に 沈黙状	A密 B良好 CP:白色、外:白褐色	残存1/3、内面へク記号、ロクロ左、外側灰被り、内面黑色斑点・擦き跡
234	25	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 8層(回転)	①(13.4)②4.1	天井部外周3/5回転へク削り、ロ縁端部に 沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に 沈黙状	A密 B良好 CP:白色	残存1/3、内面へク記号、ロクロ左、外側灰被り、内面黑色斑点・擦き跡
235	25	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 5層(回転)	①(13.6)②3.9	天井部外周回転へク削り、ロ縁端部に 沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に 沈黙状	A密 Bやや不良 C淡褐色	残存1/4、ロクロ左
236	25	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 5層(回転)	①(13.8)②3.8	天井部外周2/3回転へク削り、ロ縁端部に 沈黙、内面不定方向ナダ、ロ縁端部に 沈黙状	A密 B良好 CP:白色、外:青褐色・灰色	残存1/3、内面へク記号
237	25	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 5層(回転)	①(13.8)②3.0	天井部外周3/4回転へク削り、内面不定 方向ナダ、ロ縁端部に沈黙状の段	A密、細緻・褐色少しある B良好 C灰色	残存1/4
238	25	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 5層(回転)	①(10.6)②4.3 ④13.0	底部外周2/3回転へク削り、内面不定方向ナダ	A相、砂少々含む B良好 CP:灰色、外灰～灰褐色	残存1/4、内面へク記号、ロクロ左、需生部～外側灰被り
239	25	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 5層(回転)	①(11.4)②4.0 ④13.2	底部外周2/3回転へク削り、内面不定方向ナダ	A相、砂少々含む B良好 CP:白色、外灰～灰褐色	光面、ロクロ左、需生部～外側灰被り
240	25	須恵器	坪身	21K、7号竪窓 滲焼～焼成部 5層(回転)	①(12.6)②4.5 ④15.0	底部外周摩減、内面不定方向ナダ	A密 B不良 C灰白色	残存1/3、底部中央欠、全体摩減

第18表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表⑧

遺物番号	国	種類	器種	出土土地点	法規(年)	調査・技法の特徴	A軸上 B軸成 C色調	備考	
241	25	須恵器	高杯	2IC、7号窯跡 前庭部 6層(灰層)	①(2.0) ②(2.0) ③底付高さ16mm ④底付高さ16mm ⑤底付高さ16mm ⑥底付高さ16mm	⑦直7.4 ⑧(14.0)	縁端部外側カキメ、3方向に三角形の 2段入カシ	A相、砂粒やや多く含む B良好 C黒灰～黒色・黄灰色	脚部下平西、脚端部13/4、内外 面灰被り・釉垂れ
242	25	須恵器	短角鋸	2IC、7号窯跡 前庭部 6層(灰層)	⑨.1 ⑩.3.1	天井部表面凹面へ削り、口縁端部に 灰被り、内面不定方向ナガ、ロ縁端部に 灰被り	A相 B良好 C内:青灰色、外:灰～黒色	残存3/4、天井部内面へ削り記号、外 面全体灰被り	
243	25	須恵器	短角鋸	2IC、7号窯跡 前庭部 5層(灰層)	①(7.0) ②(6.3) ③(7.4) ④(11.9)	底端外側凹面削り削り、中央へ切り抜 ナガ、内面ナガ、他は削りナガ	砂粒含む B良好 C内:明灰色、外:青灰色	残存1/2、外表面端部重ね焼き痕	
244	25	須恵器	短角鋸	2IC、7号窯跡 前庭部 5層(灰層)	①(9.6) ②(6.2)	体端外側中位カキメ下位削り削 りナガ、他は削りナガ	A相 B良好 C内:暗灰色、外:灰～黒灰色	口縫(幅1cm)～体端下位1/6残 存、外表面端部重ね焼き痕、灰被 り、内面黑色斑点	
245	25	須恵器	慢板	2IC、7号窯跡 前庭部 5層(灰層)	①(9.4) ②(4.3)	口縫部表面灰被りのため不均、削り 付かず、内面ナガ、ロ縫部表面削 りの削りナガ	A相 B良好 C内:黑色、外:黒～黄灰色	口縫～脚部1/4、外表面被り	
246	25	須恵器	慢板	2IC、7号窯跡 前庭部 5層(灰層) 既存6層0.6	⑦直11.8 ⑧(6.0)	外表面全カキメ、体端内面削りナガ、底 端内面不定方向ナガ	A相 B良好 C内:黄灰色、外:灰～暗灰色・淡褐色	剥れ口に粘土繕ぎ日	
247	25	須恵器	慢板	2IC、7号窯跡 前庭部 5層(灰層)	①(18.0) ②(5.8)	外表面～脚部カキメ、他は削りナガ	A相 B良好 C灰色、黒色	口縫～脚部1/4既存、口縫部外側 へ削り記号	
248	25	須恵器	慢板	2IC、7号窯跡 前庭部 6層(灰層)	①(22.0) ②(7.8)	口縫部外表面状況、他は削りナガ	A相砂粒含む B良好 C顔部:暗灰色、他は灰色	残存口縫～脚部1/6	
249	25	須恵器	慢板	2IC、7号窯跡 前庭部 6層(灰層)	⑦直7.6 ⑧(6.0)	口縫部外表面状況、体端内面同心円削 り、他は削りナガ	A相、砂粒少々含む B良好 C内:暗灰色、外:灰～黒色	口縫～脚部外側、口縫部外側へ削 り記号、ロ縫部内面～端部外側灰被 り	
250	25	上面鏡	慢板	2IC、7号窯跡 前庭部 5層(灰層)	①(11.0) ②(12.0)	外表面格子目タタキ、内面(へ削り削 り)ナガ	A相 B良好 C内:明褐色、外:黒～明褐色・暗灰色	体端下位破片、“赤旋土器”	
254	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(13.8) ②(4.6)	天井部表面2/3削り削り、ロ縫部 表面凹面削り定方向ナガ、ロ縫端部に 灰被り	A相、砂粒少々含む B良好 C内:暗灰色、外:黒灰色	残存1/2、天井一部、内面黒色灰被 り、ロコロ左	
251	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(12.6) ②(5.0)	天井部表面2/3削り削り、ロ縫部 表面凹面削り定方向ナガ、ロ縫端部に 灰被り	A相 B良好 C灰色	残存1/4、内面へ削り記号、ロコロ左	
252	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(13.0) ②(3.7)	天井部表面凹面削り削り、ロ縫部 表面凹面削り定方向ナガ、ロ縫端部に 灰被り	A相 B良好 C内:暗灰色、外:暗～黒色	残存1/3、内面へ削り記号、外表面灰被 り	
253	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(13.6) ②(3.7)	天井部表面2/3削り削り、ロ縫部 表面凹面削り定方向ナガ、ロ縫端部に 灰被り	A相、砂粒多々含む B良好 C外一面暗灰色、他は灰白色	残存1/3、内面へ削り記号、ロコロ左	
255	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(13.8) ②(3.7)	天井部表面2/3削り削り、ロ縫部 表面凹面削り定方向ナガ、ロ縫端部に 灰被り	A相 B良好 C灰色	残存1/2、内面へ削り記号、ロ縫端 部削み	
256	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(14.0) ②(2.7)	天井部表面凹面削り削り、ロ縫部 表面凹面削り定方向ナガ、ロ縫端部に 灰被り	A相 B良好 C内:暗灰色、外:灰色	残存1/6、天井一帯灰、内面へ削 り記号、ロコロ左、天井焼け跡み	
257	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 灰層	①(14.4) ②(3.8)	天井部表面凹面削り削り、内面凹面 削りナガ	A相砂粒含む B不良 C内:暗褐色、外:明褐色	残存1/5、天井一部欠、ロコロ右	
258	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(14.4) ②(5.5)	天井部表面凹面削り削り、ロ縫部 表面凹面削り定方向ナガ、ロ縫端部に 灰被り	A相砂粒・黒色含む B良好 C内:暗灰色、外:青灰色	残存1/2、内面へ削り記号、ロコロ左	
259	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(10.6) ②(4.0) ③(13.1)	天井部表面2/3削り削り、内面不定方 向ナガ	A相 Bやや不良 C灰白色	残存3/4、内面へ削り記号	
260	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(10.8) ②(4.2) ③(13.4)	天井部表面1/2削り削り、内面不定方 向ナガ	A相砂粒多々含む B良好 C内:暗灰色、外:暗灰色	残存1/4、善歎部に焼けき痕、外 面灰被り	
261	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(11.2) ②(4.2) ③(13.4)	底端外表面2/3削り削り、内面不定方 向ナガ	A相砂粒含む B良好 C内:暗灰色、外:灰色	残存1/3、ロコロ左	
262	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(11.2) ②(4.0) ③(14.0)	底端外表面凹面削り削り、内面不定方 向ナガ	A相 B良好 C暗白色	底部中央灰、内面へ削り記号	
263	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(11.6) ②(3.8) ③(14.0)	底端外表面3/4削り削り、内面不定方 向ナガ	A相砂粒多々含む B良好 C内:暗、外:灰～黒色	残存1/4、内面へ削り記号、ロコロ左	
264	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(11.4) ②(3.8) ③(14.0)	底端外表面凹面削り削り、内面不定方 向ナガ	A相砂粒含む B良好 C内:暗灰、外:暗～暗灰色	残存1/4、剥れ口に粘土繕ぎ日、ロ コロ左、外側一部灰被り	
265	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(11.6) ②(3.7) ③(14.0)	底端外表面2/3削り削り、内面不定方 向ナガ	A相砂粒多々含む B良好 C内:青灰色、外:青灰色・黒色	残存1/4、底端中央灰、内面へ削 り記号、外表面重ね焼き痕、一部灰被 り、内面黑色斑点	
266	26	須恵器	坪板	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	①(12.0) ②(3.5) ③(14.0)	底端外表面3/4削り削り、内面灰被 りのため不均	A相砂粒多々含む B良好 C内:黄灰、外:黒灰色	残存1/4、ロコロ左、内面灰被り	
267	26	須恵器	高杯	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	②(10.5) ③(13.0)	脚部中央外表面削り、波状紋・沈澱2条、 3方向に良質骨の2段スル	A相、砂粒多々含む B良好 C内:暗灰、外:灰色	脚部1/3、脚部上の縫合線露出、外 面灰被り、波状紋・沈澱は骨	
268	26	須恵器	高杯	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	②直1.2 ③(13.6)	脚部上外表面にカキメ・螺旋状に細 い沈澱2条、3方向に2段スルを観た縫 方向の削み日	A相 B良好 C暗灰色	脚部上半部底一部既存、下段 の削み日上端まで残存	
269	26	須恵器	高杯	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	②(5.7)	外表面灰被り、下位カキメ、内外表面シボリ	A相砂粒含む B良好 C内:暗灰、外:明灰～黒色	残存脚部中央、内面へ削り記号、内 外面既存	
270	26	須恵器	高杯	2IC、7号窯跡 前庭部 6・8・9層	②(5.2)	内外表面削りナガ、中位に削りナガ、3 方に長方形スジ(1段2)	A相砂粒含む B良好 C内:暗灰、外:明灰～黒色	脚部中位1/2	

第19表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表⑨

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	法規(cm)	調整・技法の特徴	A動土 B焼成 C色調	備考
271	国	須恵器	高杯	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	①(1.6)×2.5×高 ②(1.6)×4.5×長径 2層(12cm厚)	坪底部内面不定方向ナガ、外面同前ナガ 脚部底面(5.6) ②(4.7)×11.0 2条	A砂炒含む B良好 C内:灰白色、外:暗灰色	坪底部=脚部底存、ロクロ右
272	国	須恵器	高杯	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	脚部内面同前ナガ、外面下位に横縞 2条	A砂炒含む B良好 C内:暗灰~黄灰色、外:暗灰~灰色	脚部改存、端部21/4、内面灰被り	
273	国	須恵器	高杯	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	脚部外縁端部内面灰被り、中位横縞 文ナガ、下位横縞による縦、内面同前ナ ナガ、3方に長方形スカン	A密 B良好 C黄灰~暗灰色、黒灰色	脚部下半1/4、外面~端部内面灰 被り	
274	国	須恵器	短盃	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	①(10.0)×2.9	天井部分内面灰被りのため不明、口縫部 に横縞、内面不定方向ナガ	A砂炒含む B良好 C内:灰白色、外:黄灰~黒灰色	残存1/2、内面ヘラ記号
275	国	須恵器	短盃	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	①(10.0)×3.5	天井部分内面(3.0mm厚)アラメ、口縫部 に横縞、内面不定方向ナガ、ロ鐘底部 底存幅6.6	A密 B良好 C黒色含む B良好 C黒色	天井部完全、ロ鐘底部底存幅1cm、内 外各2mm厚、外面~端部内面灰 被り
276	国	須恵器	短盃	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	①(12.0)×3.3	天井部分内面5.0mm厚アラメ、内面不定 方向ナガ、ロ鐘底部底存幅6.6	A密 B良好 C内:灰白色、外:暗灰色	残存1/6
277	国	須恵器	短盃	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	②(6.0) ③(11.4)	羅底部外縁タカラ後カキメ、その下位に横 縞、2条生目接合上位に斜縞文、内面同前 ナガ	A密 B良好 C内:灰~黒灰色、外:青灰色	脚部底存
278	国	須恵器	短盃	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	①(12.4) ②(6.6)	ロ鐘底部外縁状文カキメ、体部外縁ナ ガ、脚部内面斜縞文ナガ	A密 B良好 C内:黄褐色、外:暗灰色	ロ鐘=脚部1/6
279	国	須恵器	甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	①(24.6) ②(6.3)	ロ鐘底部外縁カキメ後斜縞文、施はる ナガ	A密 B良好 C内:青褐色	ロ鐘1/6
280	国	須恵器	甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	①(26.0) ②(6.6)	ロ鐘底部外縁カキメ後斜縞文、施はる ナガ	A砂炒含む B良好 C内:灰~暗灰色、 外:灰白色、黒灰色、黄灰色	ロ鐘~脚部1/2、ロ鐘底部外縁ヘラ記 号
281	国	須恵器	甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	①(26.0) ②(7.3)	ロ鐘底部外縁波状文、体部外縁カキメ、 脚部内面斜縞文ナガ	A砂炒含む B良好 C内:灰~黒灰色	ロ鐘~脚部1/6、ロ鐘底部外縁ヘラ記 号
282	国	須恵器	甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	①(28.4) ②(6.8)	内外出縞ナガ、内面~端部灰被りの ため不明	A密 B良好 C内:暗灰~黑色、外:黑色	ロ鐘1/6、ロ鐘底部外縁ヘラ記号、 内面~端部灰被り
283	国	須恵器	甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	②(6.6) ③(2.5)	ロ鐘底部外縁カキメ後旋状文、体部外縁 タカラ後カキメ内面同心円凹当て具	A砂炒含む B良好 C内:灰~黑色、外:青灰~暗灰色	ロ鐘~脚部底存
284	国	須恵器	大甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	①(37.0) ②(9.3)	ロ鐘底部外縁タカラ後回転アラメ後斜 縞文ナガ、内面2条生目接合、内面工具による カキメゴマナガ	A密 Bやや不良 C内:灰~灰白色	ロ鐘上半1/10
285	国	須恵器	大甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層(明褐色)	①(12.8)×3.3	天井部分内面5.0mm厚アラメ、ロ鐘底部 底存、内面不定方向ナガ、ロ鐘底部 内面沈縞文	A密 B良好 C内:灰白色	残存1/3、天井~部欠、内面ヘラ記 号、ロクロ左
286	国	須恵器	大甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層(明褐色)	①(13.3)×2.7	天井部分内面2.0mm厚アラメ、ロ鐘底部 底存、内面不定方向ナガ、ロ鐘底部 内面沈縞文	A密 B良好 C内:青褐色	天井部完全、内面ヘラ記号、ロクロ左、 丸井底焼17番
287	国	須恵器	甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	①(12.2)×2.0 ②(14.0)	底部外縁3.5mm厚ヘラ削り、内面不定方 向ナガ	A砂炒-黑色含む B良好 C灰色	残存2/3、内面ヘラ記号、ロクロ左、 蓋受部に黒焼き痕
288	国	須恵器	甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層(明褐色)	③(15.0)	底部外縁2.0mm厚ヘラ削り、内面不定方 向ナガ	A粗、細炒少く含む B不良 C内:灰白色	1/6残存、内面ヘラ記号、ロクロ左
289	国	須恵器	甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	④(12.1)×3.8	底部内面不定方向ナガ、外縁2.0mm厚 ヘラ削り、施はるナガ	A密 B良好 C内:暗灰色	高台部内外面に灰被り
290	国	須恵器	甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	⑤(13.8)×2.3	ロ鐘底部外縁内面ナガ、底部内外面 底誠	A密 B良好 C内:灰~白	残存1/5、天井部中央欠、坪A
291	国	須恵器	甕	21K-7号窯跡 前庭部 5・8・9層	⑥(14.6)×3.6	全体回転ナガ、上曲回り、腰縫口に同 心凹円接合板	A砂炒含む B良好 C暗灰色	つまみのみ残存、有蓋高臺盤、 外縁灰被り
292	国	須恵器	高杯	21K-7号窯跡 前庭部 1・2・5・9層	⑦(9.7) ⑧(11.2)	脚部下一下位外縁にカキメ、3方向に長 方形2段スカン	A密 B良好 C内:暗灰色	脚部中位以下1/5、外面一部灰被り
293	国	須恵器	短盃	21K-7号窯跡 前庭部 1・2・5・9層(明褐色)	⑨(9.4)×2.8	天井部分内面灰被りのため不明、体部内面 内面不定方向ナガ、ロ鐘底部 内面沈縞文	A密 B良好 C内:灰白色、外:黄褐色	性存1/2、内面ヘラ記号、黒焼
294	12・ 10	須恵器	甕	21K-7号窯跡 前庭部 2・5・9層(明褐色)	⑩(13.2)×15.8 ⑪(22.0)	底部内面不定方向ナガ、体部内面 内面不定方向ナガ、ロ鐘底部 内面沈縞文	A密 B良好 C内:灰白色、外:黄褐色	体~底部底存、体部21/2、外面に 粘土経済、底部端に粗糲な高台
295	国	須恵器	瓶	21K-7号窯跡 燐燒~ 脚部5層	⑫(6.3)×4.5	外縁カキメ上位に直角工具、内面ナガ、 腰縫ヘラ工具によるナガ	A密 B良好 C黒灰色	ロ鐘1/2
296	国	須恵器	把手	21K-7号窯跡 前庭部 2・5・17層	⑬(9.0)	外縁ナガ、左右側面はケヌリで面を 作る	A密 B良好 C青褐色	把手のみ残存
297	国	須恵器	把手	21K-7号窯跡 滋津部 下層	⑭(13.0)×3.3	天井部分外1.0mm厚ヘラ削り、内面不定 方向ナガ、ロ鐘底部1段	A粗、細炒少く含む Bやや不良 C内:灰白色、外:暗白色	残存1/3、内面ヘラ記号
298	国	須恵器	把手	21K-7号窯跡 滋津部 中層	⑮(14.8) ⑯(3.6)	天井部分外2.0mm厚ヘラ削り、ロ鐘底部 内面沈縞文	A密 B良好 C深灰色	残存1/4
299	国	須恵器	把手	21K-7号窯跡 滋津部 上層	⑰(10.7)×3.3 ⑱(13.2)	底部内面不定方向ナガ、外縫技術・削 溝のため不明	A密 B不良 C内:黄褐色、外:灰白色	性存1/3、底層、全体的に磨滅
300	国	須恵器	把手	21K-7号窯跡 滋津部 中層	⑲(11.0)×2.6 ⑳(13.8)	底部外縁2.0mm厚ヘラ削り、内面不定方 向ナガ	A密 B良好 C内:灰白色、外:暗灰色	残存1/2、底層

第20表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表⑩

遺物番号	図	種類	器種	出土地点	法線(s)	①(1)棒状部 ②(2)横幅 ③(3)高さ ④(4)長さ ⑤(5)厚さ ⑥(6)重さ	調整・技法の特徴	A歯土 B焼成 C色調			
								A歯土	B焼成	C色調	
301	28	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 掘縫部	T(1.1.0)②(2.3.4) ③(1.3.3)	底部外表面へ削り、内面不定方向ナダ	A黒砂多く含む Bやや不良 C淡灰～灰白色	残存1/4、内面ヘラ記号、ロクロ左、 内面剥離多い			
302	28	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 掘縫部 底 下層	T(1.8.0)②(3.0) ③(4.4)	底部外表面1/2削り、内面不定方向ナダ	A黒砂多く含む B良好 C内～口縁部:灰白色、外:灰～灰白色	残存2/3、大きめ削け跡有り、内面ヘラ 記号、内面剥離多く、外縁黒色点々-後側面			
303	28	須恵器	高井	2区 7号墓跡 掘縫部	T(2.6.8)②(3.9.4)	脚部外表面中央カキメ下位に施土1条、 他2箇所ナダ	A細砂・黒砂多く含む B良好 C:灰白色、外:灰白～灰色	脚部中央～脚部、脚縫部は幅1.2 cm			
304	28	須恵器	板根	2区 7号墓跡 掘縫部 第 23～25層	T(3.9.5)②(4.7)	外面部カキメ、他は同軸ナダ	A緻 B良好 C黄灰色	口縫部2/3、外面部カキメヘラ記号			
305	28	須恵器	提手	2区 7号墓跡 掘縫部 底 下層	T(2.8.0)②(3.5.5) 残存13.5	外面部原形一部カキメ、内面ナダ	A緻 B不良 C:黄白色、外:白～灰白色	体部破片、外面部輪状把手付く			
306	28	須恵器	板根	2区 7号墓跡 掘縫部 第 23～25層	T(2.6.14)②(4.6.6)	体部外表面全体カキメ、一部削り、輪状 技法で施土、被覆部の一部脚部縫に横 目子タケナダ	A緻 B良好 C:灰白色、外:灰～黒灰色・黒灰色	口縫部、被覆部へ底部の一端 外縁黒、被覆部へ外縁2/3記号、一部剥れ 口に二端成痕			
307	28	須恵器	板根	2区 7号墓跡 掘縫部 第 23～25層	T(2.6.14.0)②(4.9.4)	体部外表面全体カキメ、一部削り、輪状 技法で施土	A緻 Bやや不良 C灰～灰白色	口縫部2/3、体部下位、底部の一端 外縁黒、体部下位、底部の一端 外縁黒、被覆部へ外縫記号			
308	28	須恵器	便	2区 7号墓跡 掘縫部 底	T(2.4.2)②(5.4)	口縫部外表面波状文、他は同軸ナダ	A細砂含む B良好 C:灰白色、外:黑色	口縫部1/6			
309	28	須恵器	子持 片付(裏体外)	2区 7号墓跡 掘縫口	T(1.7.4)②(3.2)	内外面部ナダ、底部外表面中央ナダ	A緻 B良好 C灰～灰白色	残存1/2、内外面部黒色付着、子持 片付(裏体外)子?			
310	28	土師器	甕	2区 7号墓跡 掘縫口 付近(裏体外)	T(2.6.3.8) 残存4.5	内外面部ヨコナダ	A緻 Bやや不良 C:明褐色、外:灰褐色	口縫部破片			
325	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 原	T(1.4.8)②(4.0)	天井部外表面2/3削りへ削り、内面不定 方向ナダ、口縫部端に段	A緻、雲母含む Bやや不良 C灰色	残存1/2			
311	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部C-1 13層)	T(1.12.2)②(3.6.5)	天井部外表面削りヘラ記号、内面不定 方向ナダ、口縫部端に段	A黒砂やや多く含む B良好 C:灰灰色	残存1/2、外面部全焼成			
312	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部A-1-B-1 13層)	T(1.12.2) ②(3.4)	天井部外表面2/3削りへ削り、口縫部端 に施土沈黙、内面不定方向ナダ、口縫 端に段	A緻 B良好 C:灰灰色	残存1/2、内面ヘラ記号、口縫部端 面一端成痕			
313	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部A-1-B-1 13層)	T(1.12.6)②(3.9.7)	天井部外表面1/2削りへ削り、内面不定 方向ナダ、口縫部端に段	A緻、黒砂多く含む B良好 C:灰白色、外:暗灰白色	残存1/4、内面ヘラ記号、ロクロ左			
314	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部A-1-B-1 13層)	T(1.12.9)②(3.5.5)	天井部外表面2/3削りへ削り、口縫部端 に施土、内面不定方向ナダ、口縫部端 に段	A緻 B良好 C:暗灰白色、外:暗灰白色	残存1/2、内面ヘラ記号、後側面 多く			
315	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部A-1-B-1 13層)	T(1.13.0) ②(4.6)	天井部外表面2/3削りへ削り、口縫部端 に施土、内面不定方向ナダ、口縫部端に 段	A砂、砂利やや多く含む B良好 C灰色	残存1/3、ロクロ左			
316	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部A-1-B-1 13層)	T(1.13.0)②(4.3)	天井部外表面削りヘラ記号、口縫部端 に施土成痕、内面不定方向ナダ、口縫部端 に段	A緻、砂利少々含む B良好 C:灰白色、外:灰色	残存1/3、内面ヘラ記号、口縫部端 面左側成痕、外縁黒色剥離、内 縁黒色点々-後側面			
317	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部A-1-B-1 13層)	T(1.13.0) ②(3.5)	天井部外表面削りヘラ記号、内面不定方 向ナダ	A緻、砂利少々含む B良好 C:灰白色、外:灰～灰白色	残存1/2、内面ヘラ記号、ロクロ左			
318	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部B-2 13層)	T(1.13.0)②(2.7)	天井部外表面削りヘラ記号、内面不定方 向ナダ、口縫部端に段	A緻 B不良 C灰～灰白色	残存1/4、内面ヘラ記号、外縁ヘラ 成痕			
319	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部B-2 13層)	T(1.13.2)②(4.1)	天井部外表面1/2削りへ削り、口縫部端 に施土、内面不定方向ナダ、口縫部端に 段	A緻、砂利少々含む B良好 C:灰白色、外:灰～灰白色	残存1/3、内面ヘラ記号、ロクロ左、 外縁一部成痕			
320	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部B-2 13層)	T(1.13.4)②(3.2.2)	天井部外表面1/2削りへ削り、口縫部端 に施土成痕、内面不定方向ナダ、 口縫部端に段	A緻 B良好 C:黄褐色、外:青～灰褐色、 内:暗褐色	残存1/3、内面ヘラ記号			
321	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部B-2 13層)	T(1.13.6)②(4.0)	天井部外表面1/2削りへ削り、口縫部端 に施土、内面不定方向ナダ、口縫部端に 段	A緻 B良好 C:灰褐色	残存1/2、ロ縫部焼け歪み			
322	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部B-2 13層)	T(1.13.6)②(3.9)	天井部外表面1/2削りへ削り、内面不定 方向ナダ、口縫部端に段	A砂利・黒砂多く含む B良好 C:灰白色、外:灰褐色	天縫部1/4、外面部に黒色斑点 多数			
323	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部B-2 13層)	T(1.13.6)②(3.6)	天井部外表面1/2削りへ削り、内面不定 方向ナダ、口縫部端に段	A緻、黑色粒含む B良好 C:黄褐色 内:灰褐色	残存1/4、内面ヘラ記号、外縁成 痕			
324	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部B-2 13層)	T(1.13.7)②(4.3)	天井部外表面1/2削りへ削り、内面不定 方向ナダ	A緻砂利含む B良好 C灰色	残存1/4、内面ヘラ記号、ロクロ右			
326	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部C-1 13層)	T(1.14.0)②(4.4)	天井部外表面1/2削りへ削り、内面不定 方向ナダ、口縫部端に段	A砂利含む B良好 C:暗褐色。	残存1/4、内面ヘラ記号			
327	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部C-1 13層)	T(1.14.2)②(4.2)	天井部外表面2/3削りへ削り、内面不定 方向ナダ、口縫部端に段	A緻、砂利やや多く含む B良好 C:灰褐色	残存1/2、外縁重ね燒成、内面 白砂利記号			
328	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部A-1-B-1 13層)	T(1.14.6) ②(3.8)	天井部外表面2/3削りへ削り、内面不定 方向ナダ、口縫部端に段	A緻、砂利やや多く含む B良好 C灰色	残存1/4、ロクロ左			
329	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部B-2 13層)	T(1.16.7)②(4.6) ③(3.6)	天井部外表面1/2削りへ削り、内面不定 方向ナダ、口縫部端に段	A緻砂利含む B良好 C:黄褐色、 内:灰褐色	残存1/2、ロクロ右			
330	29	須恵器	坪身	2区 7号墓跡 灰原灰 (谷下部C-1 13層)	T(1.17.2)②(6.6) ③(3.6)	天井部外表面(不定)方向ナダか、内面 不定方向ナダ	A砂利含む B良好 C:灰褐色～灰色	残存1/2、内面ヘラ記号、黒帶付 口縫部片剥着			

第 21 表 井手ヶ浦窪塚跡第2次調査出土遺物観察表⑩

遺物番号	国	種類	器種	出土土地点	性状(cm)	調査・技法の特徴	A軸上 B軸側 C色調	備考
331	29	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 曲輪部1層)	①(11.2)②4.2 ④(13.8)	底部外面1/2手持らへ彎削り、内面不対称 方向ナガ	A細少し。黒色多く含む B良好 C内:緑灰色、外:青灰~暗灰色	残存1/2、外面一部灰被り、内面~口縫部外に黒色底点
332	29	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 曲輪部1層)	①(11.5)②4.2 ④(13.7)	底部外面2/3彎削らへ彎削り、内面不対称 向ナガ	A砂少・黒色含む Bやや不良 C内:灰、外:黄灰色	残存1/4、クロロ右、外面灰被り、外表面黒色底点
333	29	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底A-1・B-1 1層)	①(11.2)②4.6 ④(14.0)	底部外面3/5彎削らへ彎削り、内面不対称 向ナガ	A砂少、砂やや多く含む Bやや不良 C内:灰、外:灰色・白色	残存1/2、クロロ左
334	29	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底B-1 1層)	①(11.5)②4.6 ④(15.6)	底部外表面被りのため不明、内面不対称 方向ナガ	A砂少含む B良好 C灰色・黒色	残存1/6、外面・受け部に重ね焼き痕、外表面灰被り、内面焼き離れ・破損
335	29	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 曲輪部1層)	①(11.6)②3.8 ④(14.0)	底部外面2/3彎削らへ彎削り、内面不対称 向ナガ	A細少含む Bやや不良 C灰黒灰色	残存1/4、クロロ左
336	29	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底C-1 1層)	①(11.6)②3.3 ④(14.0)	底部外面3/4彎削らへ彎削り、内面不対称 向ナガ	A縮 B良好 C灰色	残存1/4、クロロ右
337	29	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 曲輪部1層)	①(11.8)②4.4 ④(14.0)	底部外面1/2彎削らへ彎削り、内面不対称 向ナガ	A砂少・黒色含む B良好 C白黒灰色	口縫部1/4~底部1/2、内面~テ記号、クロロ右
338	29	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 曲輪部1層)	①(11.9)②4.0 ④(14.9)	底部外面2/3彎削らへ彎削り、内面不対称 向ナガ	A黒色少含む B良好 C暗灰色 外:灰~黒灰色、口縫部外:青灰色	残存1/4、内面~テ記号、クロロ右、底部に重ね焼き痕
339	30	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底A-1・B-1 1層)	①(12.5)②4.5 ④(15.4)	底部外面3/5彎削らへ彎削り、内面不対称 向ナガ	A細少含む B良好 C黒色	残存1/6、内面~テ記号、外面重ね焼き痕、一部灰被り
340	30	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底A-1・B-1 1層)	①(12.6)②4.6 ④(15.5)	底部外面3/5彎削らへ彎削り、内面不対称 向ナガ	A細少含む B良好 C口~黒外:灰 外:青灰色・黒灰色・暗灰色	ほぼ完形、内面~テ記号、クロロ右
341	30	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底A-1・B-1 1層)	①(10.8)②4.3 ④(13.8)	底部外面曲輪で2明、外面カタメ、内面不対称1条、口縫部に凹凸有 其の横に凹	A細少やや多く含む B良好 C内:灰、外:黒灰色	残存耳部1/8、脚部との口縫部露出
342	30	須恵器	高杯	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底A-1・B-1 1層)	②(9.8)	外面耳部~脚部上位にカキメ、耳身は彎削 脚部底端3.6	A細少含む、雲灰やや多く含む B良好 C灰色	耳底部~脚部中位
343	30	須恵器	高杯	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底A-1・B-1 1層)	③(9.1) ④(12.6)	脚部中位に沈み2条、2方向に長方形2段スカリ、内面シボ付	A細少含む B良好 C灰~黒灰色	脚部中位以Y1/8、外面灰被り
344	30	須恵器	耳杯	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底B-2 1層)	⑥(9.2)	外面カタメ、内面凹削ナグ、3方向に三 角形2段スカリ	A縮 B良好 C黒灰色・黄灰色	脚部上半残存、外面1/2灰被り
345	30	須恵器	高杯	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底B-2 1層)	⑦(9.5) ⑧(11.2)	外面凹削ナグ、脚部下位3方向に長 方形スカリ	A細少やや多く含む B良好 C黒色	脚部下半1/4、外面灰被り
346	30	須恵器	高杯	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底A-1・B-1 1層)	⑨(9.4) ⑩(18.8)	外外面凹削ナグ	A細少含む B良好 C内:暗灰~黒灰色、外:灰	脚部1/2、耳部との脚部口縫部露出、接合痕あり
347	30	須恵器	耳杯	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底B-2 1層)	⑪(9.4) ⑫(11.8)	外外面凹削ナグ	A縮、細少やや多く含む B良好 C黒色・黒灰色	脚部1/4、耳部との脚部口縫部露出
348	30	須恵器	耳身	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底B-2 1層)	⑬(9.1) ⑭(9.6)	底部外面凹削へり後ナグ・体縫境 凹削へり削り、内面不対称向ナグ	A縮 B不良 C黄灰黒色	1/4残存、口縫部・底部中央欠
349	30	須恵器	短筒	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 曲輪部1層)	⑮(9.0)⑯(9.8) ⑭(14.1)	外外面体上位削文後左肩1~2条、 中位以下へり削りナグナグ	A縮やや不良 C黒褐色	口縫部1/10~体縫中位
350	30	須恵器	短筒	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 曲輪部1層)	⑰(12.0)⑱(12.5) ④(13.2)	体縫外側カキメ、他は凹削ナグ	A縮 B良好 C内:灰、外:灰~黒灰色	口~体部中位1/3、内面~底灰 被り
351	30	須恵器	壺	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 曲輪部1層)	⑲(10.0) ⑳(4.1)	外外面状文、内面~口縫部凹削ナグ	A縮 B良好 C内:灰~青灰、外:暗灰色	口縫部1/4、内面~口縫部・脚部 外表面灰被り
352	30	須恵器	壺	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底B-1 1層)	㉑(10.8)㉒(5.7)	外外面凹削ナグ	A縮、黒色少含む B良好 C灰~黒灰色	脚部のY1/2、外表面灰被り、内面 焼き離れ
353	30	須恵器	壺又	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 曲輪部1層)	㉓(10.6)㉔(4.1)	脚部外側カキメ、口縫・脚部焼に焼、他 は凹削ナグ	A縮少やや多く含む B良好 C内:黒灰色、外:灰~暗灰色	口~脚部上位1/4、内外一面 焼跡
354	30	須恵器	壺又	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底A-1 1層)	㉕(8.8) ㉖(9.5)	外側カキメ、内面~口縫部凹削ナグ	A縮、細少少や含む B良好 C黒灰色	口縫部1/6、外面~テ記号
355	30	須恵器	壺	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 曲輪部1層)	㉗(12.7)㉘(4.0)	脚部外側カキメ後状皮、他は凹削 ナグ	A縮 B良好 C灰色・暗灰色	口縫部上半1/6、内外一面一 脚部灰被り、外表面焼れ
356	30	須恵器	平底壺	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 曲輪部1層)	㉙(4.9) ㉚(5.2)	脚部外側凹削ナグ、体縫境に焼、他 は凹削ナグ	A縮少やや多く含む B良好 C体縫内: 灰褐色、口縫内~体縫外:灰~暗灰色	口縫部完存、被離一部残存
357	30	須恵器	壺又	2区、7号窯跡 灰原灰層(8号室跡 上解型 1層)	㉛(10.2) ㉜(6.3)	脚部外側上位カキメ後凹削ナグア、下位 カキメ、底近外表面子目タカキナグナ グ、他は凹削ナグ	A縮、細少少や含む B良好 C灰オーライ色	口縫~体縫破片、底部欠
358	30	須恵器	壺	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底B-2 1層)	㉝(7.7) ㉞(16.0)	外表面2條の網状き裂孔・文、間に沈み3 条、下位にカキメ、他は凹削ナグ	A砂少多く含む B良好 C内:灰~暗灰色、外:暗灰色	口縫部破片、外に窓型付着
359	30	須恵器	壺	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底B-1 1層)	㉟(10.0)㉟(4.6)	外側カキメ、他は凹削ナグ	A細少含む B良好 C灰色	口縫部のみY1/2、外面~テ記号
360	30	須恵器	壺	2区、7号窯跡 灰原灰層(谷下底C-1 1層)	㉟(12.6) ㉟(6.5)	体縫内面同心円凹て具、外側楊子目タ カキメ、脚部外側カキメ	A細少含む B良好 C内:灰~暗灰色、外:灰~黒色	口縫部~体縫上位1/3

第22表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表⑫

遺物番号	国	種類	器種	出土土地点	法徴(年)	調査・技法の特徴	A動土・B機成・C色調			備考
							①直径×高さ ②口径×最大径 ③直徑×高さ ④直徑×深さ			
361	30	須恵器	甕	2区、7号窯跡・灰原灰層(谷下部A-2・13層)	①(22.2) ②(6.7)	外面カキメ・波状文、他は同軸ナダ	A密、砂緻多く含む B良好 C内:暗灰~黒色、外:黒色	口跡印/4、外面へ記号、内面灰被り焼け跡		
362	30	須恵器	甕	2区、7号窯跡・灰原灰層(谷下部A-2・13層)	①(26.0) ②(6.5)	口縁部外面カキメ・波状文、内面同軸ナダ、口縁部外面平行タキナダ、内面同心円内当て具	A緻少し、黒色多く含む B良好 C内:暗灰~黒灰色、外:灰白色	口跡印~頸部1/2、口縁部外面へ記号、口縁部内面へ記号、口縫部外面灰被り		
363	31	須恵器	甕	2区、7号窯跡・灰原灰層(谷下部A-1・B-1・13層)	①(24.0) ②(6.7)	体縁部外面平行タキナダ後軸ナダ	A密、砂緻やや多く含む B良好 C灰色	口跡印~頸部1/4、口縫部外面へ記号		
364	31	須恵器	甕	2区、7号窯跡・灰原灰層(谷下部C-1・13層)	①(20.0) ②(6.0)	体縁部内面同心円内当て具、外面平行タキナダ後軸ナダ	A密、砂緻少し含む B良好 C灰色	口縫部~体縁部2/5、口縫部外面へ記号		
365	31	須恵器	甕	2区、7号窯跡・灰原灰層(谷下部C-1・13層)	①(20.0) ②(7.3)	体縁部内面同心円内当て具、外面平行タキナダ後軸ナダ	A緻少し含む B良好 C灰色	口縫部~体縁部1/5		
366	31	須恵器	甕	2区、7号窯跡・灰原灰層(谷下部B-1・2・13層)	①(21.0) ②(5.0)	口縁部外面粗いカキメ、他は同軸ナダ	A密、砂緻少し含む B良好 C灰色、黒色	口縫部~頸部1/4、口縫部内面灰被り		
367	31	須恵器	甕	2区、7号窯跡・灰原灰層(谷下部A-1・B-1・13層)	①(27.0) ②(5.7)	体縁部外面格子目タキナダ後軸ナダ	A緻少し含む B良好 C灰色	口縫部~体縁部1/6		
368	31	須恵器	甕	2区、7号窯跡・灰原灰層(谷下部B-2・13層)	①(14.0) ②(5.0)	口縁部外面カキメ、他は同軸ナダ	A緻少し含む B良好 C灰色	口縫部~頸部1/2		
369	31	須恵器	大甕	2区、7号窯跡・灰原灰層(谷下部A-2・13層)	②(12.1) ④(20.9)	外面波状文・沈底、下位にカキメ、他は同軸ナダ	A砂粒含む B良好 C内:黄灰色、外:黒灰色	口縫部破片、内面灰被り		
370	31	須恵器	大甕	2区、7号窯跡・灰原灰層(谷下部A-2・13層)	①(46.0) ②(8.5)	外面カキメ後軸ナダ・沈底、下位にカキメ、他は同軸ナダ	A砂粒含む B良好 C内:灰青~青灰色	口縫部~頸部1/6、内面・縫縁外面灰被り		
371	32	甕	甕	2区、7号窯跡・燃焼・燒成・最終床面	最大16.8 最小9.7			石製、須恵器焼成片1枚着、重量700g		
372	32	甕	甕	2区、7号窯跡・燃焼・燒成・最終床面	最大13.0 最小9.6			粘土製、須恵器焼成片1枚着片付着、重量650g		
373	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・貼足3層	①(13.0) ②(3.2)	天井部外面凹輪へ~削り、内面不定方 向ナダ、口縫部端に段	A密、砂緻少し含む B良好 C黒灰色	残存1/4、内面へ記号、クロロ右		
374	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・貼足1-2層	①(3.2) ②(3.8)	天井部外面凹輪へ~削り、内面不定方 向ナダ	A緻少し含む B良好 C黒灰色	残存1/2、クロロ左、口縫部外面へ記号		
375	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・貼足6層	①(14.0) ②(3.5)	天井部外面凹輪へ~削り、内面不定方 向ナダ、口縫部端に沈底状段	A密、砂緻少し含む B良好 C暗灰~黒灰色	残存1/5、天井一部欠、内面へ記号		
376	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・貼足1-2層	①(14.2) ②(3.4)	天井部外面手縫ひへ~削り、内面不定 方向ナダ、口縫部端に沈底状段	A密 Bやや不良 C内:白黄灰色、外:灰~灰白色	残存1/4、天井一部欠		
377	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・貼足1層	②(3.5)	天井部外面凹輪へ~削り、口縫部端に 沈底、内面へ記号	A密、砂緻多し含む Bやや不良 C内:白黄灰色、外:灰~灰白色	天井部のみ残存、クロロ右		
378	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・左壁貼足内	①(12.8) ②(3.7)	天井部外面凹輪へ~削り、口縫部端に 沈底、内面不定方向ナダ、口縫部端に 沈底状段	A密 Bやや不良 C内:白黄灰色	残存1/4、天井一部欠		
379	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・左壁貼足内	①(13.2)②(3.9)	天井部外面凹輪へ~削り、内面不定方 向ナダ、口縫部端に沈底状段	A密 Bやや不良 C内:白黄灰色、外:灰~灰白色	残存1/3、クロロ右		
380	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・左壁貼足内	①(14.0)②(5.1)	天井部外曲面3/4回転へ~削り、口縫部端に 沈底、内面不定方向ナダ、口縫部端に 沈底状段	A砂粒含む B良好 C灰~灰白色	残存1/3、クロロ左、焼け迹		
381	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・貼足3層	①(10.0)②(4.0) ④(12.2)	天井部外曲面3/4回転へ~削り、内面不定方 向ナダ	A密 B良好 C灰色	残存1/2、底部一部欠		
382	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・貼足2層	①(12.0)②(4.9) ④(14.2)	天井部外曲面3/4回転へ~削り、内面不定方 向ナダ	A密、砂緻少し含む Bやや不良 C白色	残存1/4、底部一部欠、内面へ記号		
383	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・貼足1-2層	①(12.4)②(4.8) ④(14.9)	天井部外曲面3/4回転へ~削り、内面不定方 向ナダ	A密砂粒含む Bやや不良 C白色	善受部以下4/4、縫縫部埋め付け に残存、内面へ記号、クロロ右		
384	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・貼足3層	①(12.6)②(5.0) ④(15.2)	天井部外曲面3/4回転へ~削り、内面不定方 向ナダ	A密 B良好 C白色	完形、クロロ左		
385	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・左壁貼足内	①(13.0)②(4.7) ④(15.5)	天井部外曲面1/2回転へ~削り、内面不定方 向ナダ	A密 B良好 C内:灰青~灰白色	残存1/5、内面へ記号		
386	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・貼足1-2層	①(8.4)	坪底部外曲面例文、内面不定方向ナダ、 他は同軸ナダ	A密、砂緻少し含む B良好 C灰~灰白色	坪底1/3残存		
387	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・左壁貼足内	②(13.0)	外曲部内面中位カキメ、下位平行タキナ ダナダ、内曲部下位同軸内当て具	A密、砂緻少し含む Bやや不良 C白黄灰色	体縁中~下位1/6		
388	36	須恵器	甕	2区、8号窯跡・未成部C区・左壁貼足内	①(18.8) ②(7.8)	口縫部・体縁外面平行タキナダ後カキメ、 体縁内面同心円内当て具ナダ、他は同軸 ナダ	A密 B良好 C内:白黄灰色、外:黄灰色	口縫部~頸部1/2		
389	36	須恵器	大甕	2区、8号窯跡・未成部C区・最終床面	①(42.6) ②(18.0)	口縫部外曲面カキメ・波状文、内面不 定方向ナダ、口縫部端に段	A砂粒含む B良好 C内:暗灰~緑灰色、外:黑色	口縫部~頸部1/4、口縫部内面上半 部外面灰被り、焼け跡		
390	36	須恵器	片口	2区、8号窯跡・未成部C区・最終床面	①(12.6) ②(3.5)	天井部外曲面3/4回転へ~削り、口縫部端に 沈底状段	A砂粒含む B良好 C内:暗灰~焼成褐色、外:褐色	残存1/4、天井一部、内面へ記号		

第23表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表⑬

遺物番号	図	種類	器種	出土地点	特徴(cm)	調整・技法の特徴	A歯士 B模造 C色調			備考
							①:複数部高 ②:複数部 ③:複数部 ④:複数部 ⑤:複数部			
391	36	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 織成部 最終床面	①(11.6)②(4.2) ②(4.0)	底部外縁/3回転へア削り、内面不定方 向ナダ	A密 Bやや不良 C内:灰白色。外:明褐色～白黄灰色	残存1/3、底部一部欠、ロクロ右		
392	36	須恵器	腰	21C 8号竪窓 織成部 最終床面	①(12.6) ②(3.8)	外面頭部端に沈擦、他の同軸ナダ	A密 砂炒含む B良好 C内:灰白色。外:暗灰色	口縁部1/6のみ残存		
393	36	須恵器	大腰	21C 8号竪窓 織成部 最終床面	①(49.0) ②(12.7)	口縁部外側沈擦・露状文、外面頭部付 近ナダ、他の口縁ナダ	A密 砂炒少し含む B良好 C内:暗灰色～黒灰色。外:黒灰～褐色	口縁部1/8		
394	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(12.0)②(4.3)	天井部外縁/3回転へア削り、内面不定 方向ナダ。口縁端部に沈擦状段	A密、砂炒少し含む B良好 C暗灰色	ほぼ完形、焼け歪み大、ロクロ左		
395	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(13.2)②(4.0)	天井部外縁/3回転へア削り、内面不定方 向ナダ	A細砂含む B良好 C内:暗灰色。外:灰白色	残存1/2、内面ヘア記号、ロクロ左、 内面に褐色付着物		
396	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(13.4) ②(3.8)	天井部外縁/4回転へア削り、内面不定方 向ナダ。口縁端部に沈擦	A密 B良好 C灰白色	残存1/4、内面ヘア記号		
397	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(13.6)②(4.0)	天井部外縁/4回転へア削り、内面不定方 向ナダ。口縁端部に段	A密、砂炒少し含む B良好 C暗灰色	残存1/2、内面ヘア記号、ロクロ右、 焼け歪み		
398	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(13.4)②(4.0)	天井部外縁/2回転へア削り、口縁端部 に沈擦、内面不定方向ナダ。口縁端部に 段	A密 Bやや不良 C暗灰色	残存1/5、内面ヘア記号		
399	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(13.5)②(3.8)	天井部外縁/2回転へア削り、口縁端部 に沈擦、内面不定方向ナダ	A密 Bやや不良 C暗灰色	残存1/4、内面ヘア記号		
400	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(13.6)②(4.1)	天井部外縁/3回転へア削り、内面不定 方向ナダ	A細砂含む B良好 C暗灰色	残存1/2、内面ヘア記号。ロクロ左		
401	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(13.6)②(4.3)	天井部外縁/2回転へア削り、ロ縁端部 に段、内面歪曲のため不明、ロ縁端部に 段	A密 B良好 C暗灰色～黒灰色、灰 色、外:青灰色、黒色	残存5/6、内面全体灰被り		
402	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(13.9)②(3.8)	天井部外縁/3回転へア削り、ロ縁端部 に段、内面不定方向ナダ。ロ縁端部に 段	A密 B不良 C白黄色	残存1/4、内面ヘア記号		
403	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(14.0)②(4.0)	天井部外縁/3回転へア削り、ロ縁端部 に沈擦、内面不定方向ナダ。ロ縁端部に 段	A密 B良好 C暗灰色	残存1/2、内面ヘア記号、ロクロ左、 外一部に灰被り		
404	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(14.2)②(3.9)	天井部外縁/2回転へア削り、ロ縁端部 に沈擦、内面不定方向ナダ。ロ縁端部に 段	A密 Bやや不良 C白黄色～黒灰色	残存1/4		
405	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(14.2)②(2.8)	天井部外縁/3回転へア削り、内面不定 方向ナダ。ロ縁端部に段	A密 B良好 C暗灰色	残存1/4、内面ヘア記号		
406	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(11.4)②(4.6) ②(4.0)	底部外縁/3回転へア削り、内面不定 方向ナダ	A密 Bやや不良 C暗灰色	残存1/2、内面ヘア記号		
407	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(11.8)②(4.7) ②(4.5)	底部外縁/2回転へア削り、内面不定方 向ナダ	A密 Bやや不良 C暗白色	残存1/2、内面ヘア記号		
408	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(12.2)②(4.4)	底部外縫回転へア削り。内面不定方向 ナダ	A密、砂炒少し含む B良好 C内:黒灰色。外:青褐色	残存1/2、ロクロ左		
409	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(12.4)②(4.3) ②(4.8)	底部外縫回転へア削り(断滅)、内面不 定方向ナダ	A密 B不良 C白黄色	残存1/4		
410	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(12.6)②(4.7) ②(4.4)	底部外縁/2回転へア削り、内面不定方 向ナダ	A密 Bやや不良 C暗色	残存1/2、内面ヘア記号		
411	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(12.6)②(5.5) ②(4.5)	底部外縁/2回転へア削り、内面不定方 向ナダ	A密 B良好 C灰白色	残存1/4、内面ヘア記号。ロクロ左		
412	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃焼部 20層(火層)	①(13.1)②(4.3) ②(5.0)	底部外縫消滅のため不明、内面不定 方向ナダ	A密 B不良 C暗～灰白色	残存1/3、内面ヘア記号		
413	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 織成部 5～14層	①(13.0) ②(4.2)	天井部外縁/2回転へア削り、ロ縁端部 に段、内面不定方向ナダ。ロ縁端部に 段	A黑色含む B良好 C内:灰白色。外:黒色～橙色	残存1/3、内面ヘア記号。ロクロ左、 内面焼き跡		
414	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 織成部 5～14層	①(13.3) ②(4.1)	天井部外縁/3回転へア削り、ロ縁端部 に段、内面不定方向ナダ。ロ縁端部に 段	A細砂、黑色含む B良好 C内:灰白色。外:黒色～暗灰色	残存1/3、内面ヘア記号。ロクロ左、 内面焼き跡		
415	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃道部	①(13.6) ②(4.5)	天井部外縁/3回転へア削り、ロ縁端部 に段、内面不定方向ナダ。ロ縁端部に 段	A砂炒含む Bやや不良 C内:黄灰色。外:黒～黄褐色～黃白色	残存1/2、内面ヘア記号。ロクロ左		
416	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃道部	①(14.0) ②(4.0)	天井部外縁/2回転へア削り、ロ縁端部 に段、内面不定方向ナダ。ロ縁端部に 段	A細砂、細砂多く含む B良好 C内:黑灰色。外:黑	残存1/3、天井一部分、内面ヘア記 号。ロクロ左、内面黑色斑点、外面 褐色(二重焼成痕)		
417	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 織成部 5～14層	①(11.8)②(4.5) ②(13.6)	底部外縫/2回転へア削り、内面不定 方向ナダ	A細砂、細砂多く含む B良好 C内:灰白色。外:灰～暗灰色	残存1/3、ロクロ左。ロ縁端部外縫 斑点、外一部に黒褐色斑点		
418	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 織成部 11層	脚基盤3.8 ②(9.4)	脚部基盤上～中央カキメ、下位内面 凹部ナダ	A黑色含む B良好 C内:黑色。外:黑色～紫褐色～黑色	脚部基盤上、底部弧、脚部外縫 斑点、外一部に黒褐色斑点		
419	37	須恵器	耳舟	21C 8号竪窓 燃道部	②(4.2) ③(9.4)	脚部内外面凹輪ナダ	A細砂含む B良好 C内:黑色。外:黑色～紫褐色～黑色	脚部中位以下残存、底部2/14、内 面焼成斑点、外一部1/12焼成痕		

第24表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表⑩

遺物番号	国	種類	器種	出土土地点	法規(sai) (1)・(2)・(3)高 度、(4)・(5)中高 度、(6)・(7)低 度	調整・技法の特徴	A動土 B焼成 C色調	備考
420	38	須恵器	短周 盃	2IK 8号窯跡 燃道部	(7.2)②(5.9) (4.3)8.0	体部外側カキム、底部外側手彫りへア 前90°、内面不定方向ナゲ、他は凹彫りナ ゲ	A密、砂紋少し含む B良好 C内:暗灰色、外:暗灰～黄灰色	残存2/3、底部中央欠、底部外側 底部内側へア記号、脚部蓋重ね組 合
421	38	須恵器	短周 盃	2IK 8号窯跡 燃道部 5~14層	(7.6.8)②8.4 (4.3)13.6	体部外側カキム、底部外側凹彫りへア 前90°、内面不定方向ナゲ、他は凹彫りナ ゲ	A密、砂紋少し含む B良好 C灰～暗灰色、白黃褐色	残存1/2、ロクロ左、底部中央欠、3 段落記号、外面部黒褐色/灰褐色、内 面部暗褐色
422	38	須恵器	広口 盃	2IK 8号窯跡 燃道部	器部端(7.4) (11.8)②(10.1) (4.3)13.8	外側凹彫り～体部中位カキム、下位へア 前90°、内面凹彫りナゲ	A密 B良好 C灰色、白色	残存以降、下位4/4右、底部中央欠、3 クロ左、外面部上位、内面部底灰 褐色
423	38	須恵器	広口 盃	2IK 8号窯跡 燃道部 18~21層	(11.8)②(10.1) (4.3)13.8	外側凹彫り底面へア、底面丸形文、体部 中位カキム、他は凹彫りナゲ	A細砂含む B良好 C灰色	体部1/4～口縁部幅1.5cm残存、底 部中央欠
424	38	須恵器	蓋又 は便 器	2IK 8号窯跡 燃道部 5~14層	(1)20.0 (4.2)4.6	口縁部外側波状文、他是凹彫りナ ゲ	A細砂含む B良好 C灰色	口縁部1/6のみ残存
425	38	須恵器	大侈 蓋	2IK 8号窯跡 燃道部	(1)54.0 (4.2)7.4	口縁部外側波状文、底面へア 前90°、他は凹彫りナゲ	A粗、砂紋多く含む B良好 C内～暗灰色	口縁部上半1/8
426	39	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 燃道部 3~4層	(1)12.3 (3.5)3.5	天井部外側1/2凹彫りへア割り、ロ縁部端 に波彫、内面不定方向ナゲ、ロ縁部端に 波彫	A粗、B良好 C内:灰白色、外:暗灰～灰褐色	残存1/4、天井部1/2波彫、内面へ ア記号、ロクロ左、外面部重ね組合 合、内面部暗褐色
427	39	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 燃道部 3~4層	(1)12.8 (3.5)3.7	天井部外側1/2凹彫りへア割り、ロ縁部端 に波彫、内面不定方向ナゲ、ロ縁部端に 波彫	A粗、砂紋少く含む B良好 C内:青灰色、外:灰～暗灰色	残存2/3、ロクロ右、内面部黑色斑点
428	39	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 燃道部 3~4層	(1)13.9 (3.5)4.5	天井部外側1/2凹彫りへア割り、内面不 定向ナゲ、ロ縁部端に波彫	A粗、砂紋、黑色少く含む B良好 C内:灰白色、外:青灰～黄灰色	ほぼ完形、内面へア記号、ロクロ左 外面部
429	39	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 燃道部 3~4層	(1)13.2 (3.5)3.7	天井部外側1/2凹彫りへア割り、ロ縁部端 に波彫、内面不定方向ナゲ、ロ縁部端に 波彫	A粗、砂紋少く含む Bやや不良 C灰白色	残存1/3、内面へア記号、ロクロ左
430	39	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 燃道部 2層	(1)13.0 (3.5)4.2	天井部外側1/2凹彫りへア割り、ロ縁部端 に波彫、内面不定方向ナゲ、ロ縁部端に 波彫	A細砂含む B良好 C内:灰白色	残存1/4、天井一部欠、内面へア記 号
431	39	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 燃道部 3~4層	(1)10.5 (3.5)3.7	天井部外側1/2凹彫りへア割り、内面不 定向ナゲ	A粗、黑色少く含む B良好 C内:灰白色	完形、ロクロ右、外面部黑色斑点
432	39	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 燃道部 2層	(1)11.0②(4.5) (4.3)13.8	天井部外側凹彫へア割り、内面不定方向 ナゲ	A粗、砂紋少く含む B良好 C内～口縁部:灰褐色、外:灰褐色	残存1/4、内面へア記号、ロクロ左
433	39	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 3~4層	(1)11.4②(4.5) (4.3)12.1	底部外側1/2凹彫へア割り、内面不定方 向ナゲ	A粗、砂紋多く含む B良好 C内:青灰色、外:灰～暗灰色	残存1/4、天井一部欠、ロクロ左、 内面部波彫、外面部灰褐色
434	39	須恵器	短周 盃	2IK 8号窯跡 燃道部 3~4層	(7.8.2~9.5)2段 8.8 (4.3)14.9	体部上位外側波突要、下位外側凹彫 へア割り、他は凹彫りナゲ	A粗、砂紋少く含む Bやや不良 C灰～灰褐色	口部～体部1/4位、底部外側重 ね組合せ、外:暗灰色
435	39	須恵器	短周 盃	2IK 8号窯跡 燃道部 3~4層	(1)11.6 (2)6.0	体部外側上位カキム・浅刻文要、波 状文、中位波彫1条、他は凹彫りナ ゲ	A粗、B良好 C内:灰褐色、外:暗灰色	口部～体部1位1/4、外面部 灰褐色
436	39	須恵器	盃	2IK 8号窯跡 成部成 3~4層	(1)4.8~9.2段 15.5 (26.0)	天井部外側波突要文、内面波彫、根 部波彫、中位波彫1条、他は凹彫りナ ゲ	A粗、砂紋少く含む B良好 C内:灰褐色、暗褐色、暗灰色、灰褐色 外:灰褐色	口部～体部1/4位1/2、天井内 部外側自然波、灰褐色、体部中～ 下位内面へア記号、底部蓋重ね組 合
437	39	須恵器	甕	2IK 8号窯跡 燃道部 3~4層	(1)5.8②(4.5) (26.8)	口縁部外側カキム波状文、体部外側 年久、内面凹心門で直	A粗、B良好 C内:黑色、黃褐色、暗綠 色、外:黑色、綠褐色	口部1/2～体部1位1/3、内面部 自然波、灰褐色
438	40	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 燃道部	(1)12.8②(2.6)	天井部外側1/2凹彫へア割り、内面不 定向ナゲ、ロ縁部端に波彫の段	A粗 B良好 C内:灰褐色	残存1/5、内面へア記号
439	40	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 前庭部	(1)13.0②(3.7)	天井部外側2/3凹彫へア割り、ロ縁部端 に波彫の段	A粗、砂紋多く含む B良好 C内:灰褐色	残存1/4、ロクロ左、内面部灰 褐色、やや焼け茶
440	40	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 前庭部 17~19層	(1)13.2②(3.8)	天井部外側2/3凹彫へア割り、ロ縁部端 に波彫、内面不定方向ナゲ、ロ縁部端に 波彫の段	A粗、黑色含む B良好 C内:灰褐色、外:深灰褐色	残存1/2、内面へア記号、外面部 灰褐色
441	40	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 前庭部 20層(火腹)	(1)13.8②(3.8)	天井部外側3/4凹彫へア割り、ロ縁部端 に波彫、内面不定方向ナゲ、ロ縁部端に 波彫	A粗 B不良 C灰褐色	残存1/4
442	40	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 前庭部	(1)14.0②(4.0)	天井部外側3/4凹彫へア割り、内面不 定向ナゲ、ロ縁部端に波彫の段	A粗、砂紋少く含む B良好 C内:灰褐色、外:深灰褐色	残存1/2、外面部重ね燒痕、灰褐色
443	40	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 前庭部 17~19層	(1)14.0②(3.8)	天井部外側2/3凹彫へア割り、ロ縁部端 に波彫、内面不定方向ナゲ、ロ縁部端に 波彫	A粗 B不良 C灰褐色	残存1/4
444	40	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 前庭部 17~19層	(1)11.5②(4.5) (4.3)13.6	底部外側3/4凹彫へア割り、内面不 定向ナゲ	A粗、黑色多く含む B良好 C内:灰褐色、外:深～黒灰色	残存1/3、内面へア記号、蓋部に 重ね燒痕、外面部灰褐色、内面部 燒痕
445	40	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 前庭部 17~19層	(1)11.5②(4.5) (4.3)13.6	底部外側3/4凹彫へア割り、内面不 定向ナゲ	A粗、黑色多く含む B良好 C内:灰褐色、外:深～黒灰色	残存1/2、外面部重ね燒痕、内面部 燒痕
446	40	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 前庭部 20層(火腹)	(1)11.7②(4.5) (4.3)13.7	底部外側2/3凹彫へア割り、内面不 定向ナゲ	A粗 B良好 C灰褐色	残存1/2、ロクロ左、身部受へ口縁 部外側に灰褐色
447	40	須恵器	坪盃	2IK 8号窯跡 前庭部 20層(火腹)	(1)12.2②(4.2) (4.3)14.7	底部外側2/3凹彫へア割り、内面不 定向ナゲ	A粗 B良好 C暗褐色	残存1/6、内面へア記号、外面部 灰褐色
448	40	須恵器	高井	2IK 8号窯跡 前庭部	(2)4.7	天井部外側カキム、内面不定方向ナ ゲ	A粗、砂紋少く含む B良好 C内:暗灰色、外:灰褐色	口縁部欠損、内面部黑色斑点
449	40	須恵器	高井	2IK 8号窯跡 前庭部	(2)9.5②(10.2)	脚部外側カキム、内面凹彫ナ ゲ	A粗、砂紋少く含む B良好 C内:黑色、灰褐色、外:深褐色、黄褐色	脚部中部位下残存、縫合2/3、外面部 灰褐色、焼け茶

第25表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表⑩

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	性質(年)	調査・技法の特徴	A軸上 B軸底 C色調	備考
450	40	須恵器	高杯	2IC 8号竪窓 痕窓部 17~19層	①底面5.5cm高 ②底面6.5cm高 ③底面6.5cm高 ④底面6.5cm高	縫部外表面へ下花カキメ、他12回輪ナ ダ	A密 B良好 C灰~黄灰色、暗灰色	脚部中位以下残存、上半~縫部欠
451	40	須恵器	甕	2IC 8号竪窓 痕窓部 17~19層	①30.0 ②26.3	内外面回転ナダ	A密 黒色地少々含む、B良好 C灰: 黄褐色~一部黒灰色、外:黒灰色	口縫部1/6、外縫へ2記号、内面~ 口縫部底面破壊
452	40	須恵器	甕	2IC 8号竪窓 痕窓部 下層	②24.5 ③残存幅9.5	外面回転ナダ~波状文、内面~口縫部 波状回転ナダ	A密 B良好 C灰	口縫部破片、外縫へ2記号、内面 内縫欠
453	40	須恵器	甕	2IC 8号竪窓 痕窓部 下層	①13.5~②4.3	天井部外表面回転へ2割り、口縫部端に 縫、内面不定方向ナダ、口縫部端に段	A粗、砂粒多く含む B良好 C内:青灰色、外:黒灰色	残存1/2、ロクロ右
454	40	須恵器	甕身	2IC 8号竪窓 痕窓部 下層	①11.2~②4.8 ②13.7	底部外曲3/5回転へ2削り、内面不定方 向ナダ	A細砂含む B良好 C内~口縫外:青灰色、外:黒灰色	口縫部2/3、底面は完存、ロク 右、黄受蓋ねじ巻き底
455	40	須恵器	甕身	2IC 8号竪窓 燐燒部 付近上層(全体体)	①11.0~②4.6 ②14.3	底部外曲3/5回転へ2削り、内面不定方 向ナダ	A砂粒含む B良好 C内:灰白色、外:黄灰~黒灰色	残存3/4、ロクロ右、外縫底破
456	40	鏡台		2IC 8号竪窓 燐燒部 最鉄床面~灰層	最大径15.2 最大幅12.5	石と須恵器とに間に粘土貼り付け		石製、須恵器側縫片付着、重量 388kg
457	40	鏡台		2IC 8号竪窓 燐燒部 最鉄床面~灰層	最大径16.6 最大幅10.4			石製、須恵器側縫片付着、重量 1000g
458	44	須恵器	甕西	2IC 9号竪窓 残成部 點RCK15	①(15.0)②3.5	天井部外曲3/5回転へ2削り、内面不定 方向ナダ、口縫部端に段	A密 B不良 C灰黄褐色	残存1/8、ロクロ右
459	44	須恵器	甕身	2IC 9号竪窓 残成部 点RCK15	②24.0 ④(14.7)	底部外曲3/5回転へ2削り、内面不定方 向ナダ	A密 Bやや不良 C内:灰白色、外:灰	底部1/4、口縫部欠
460	44	須恵器	甕	2IC 9号竪窓 残成部 最鉄床面	①(14.0) ②3.4	天井部外表面不定方向ナダ、他12回輪ナ ダ	A密 B良好 C内:明灰褐色、外:暗褐色	残存1/4、天井部欠
461	44	須恵器	甕西	2IC 9号竪窓 燐燒部 最鉄床面 RCK16.6	①(14.2)②4.3	天井部外曲3/5回転へ2削り、口縫部端 に段、内面不定方向ナダ、口縫部端に 段	A密 B良好 C灰	口縫部残存幅3.8cm、天井部完存、 ロクロ右
462	44	須恵器	甕西	2IC 9号竪窓 燐燒部 最鉄床面 AEN-No.1	①(14.6)②4.8	天井部外曲3/5回転へ2削り、口縫部端 に段、内面不定方向ナダ、口縫部端に 段	A密 B良好 C灰~黒 C内:灰、黒灰~暗灰色	残存1/4、ロクロ右、外縫底破
463	44	須恵器	甕	2IC 9号竪窓 燐燒部 最鉄床面 14層	①(11.3)②4.8 ②13.9	天井部外曲3/5回転へ2削り、口縫部端 に段、内面不定方向ナダ	A粗、砂粒多く含む B良好 C内:灰~黄褐色、外:暗褐色	残存1/2、黒部一部欠、ロクロ右
464	44	須恵器	甕	2IC 9号竪窓 残成部 最鉄床面	②残3.5	細部外曲波状文、口縫部端に縫、口縫 部外曲カキメは回転ナダ	A砂粒含む Bやや不良 C灰白色	口縫部下至~縫部上位1/6
465	44	須恵器	甕	2IC 9号竪窓 燐燒部 最鉄床面A層	①(13.0)②残2.5	外外面回転ナダ	A砂粒含む B良好 C内:灰~黄褐色、外:暗灰~黒灰色	口縫部1/4のみ、内面底破
466	44	須恵器	甕	2IC 9号竪窓 燐燒部 最鉄床面R層	①(13.0)②4.3	天井部外曲3/5回転へ2削り、口縫部端 に段、内面不定方向ナダ	A密 B良好 C灰	口縫部1/6、天井部1/3、ロクロ右
467	44	須恵器	甕西	2IC 9号竪窓 燐燒部 最鉄床面(灰層)	①13.8②4.6	天井部外曲3/5回転へ2削り、内面不定 方向ナダ	A黑色地や多く含む Bやや不良 C灰~灰褐色	ほぼ完形、内面へ2記号、ロクロ右
468	44	須恵器	甕西	2IC 9号竪窓 燐燒部 11層	①(13.0)②3.4	天井部外表面へ2削り、口縫部端に 段、内面不定方向ナダ	A砂粒含む B良好 C内:灰白色、外:灰~灰白色	残存1/4、ロクロ右、天井部焼け垂 れ
469	44	須恵器	甕	2IC 9号竪窓 残成部 18層	①13.5~②6.9 ②10.2	底部外表面へ2削り後ナタツリ持手、 ヘラクリ、内面不定方向ナダ	A密 B良好 C灰~黒灰色	口~底部1/4、底部完存、体部外 曲へ2記号
470	44	須恵器	高杯	2IC 9号竪窓 燐燒部 11層	②24.9.8	縫部外カキメは中位に口縫部2層、所成 部外底面外底ナタツリ、縫部内面灰被りのため不 明、他12回輪ナダ	A密 B良好 C灰~黒灰色	無縫高杯、底縫部~脚部中位残 存、内部ナタツリ、縫部外底面灰被り
471	44	須恵器	高杯	2IC 9号竪窓 燐燒部 66層	②24.5.3 ③(8.7)	縫部外外面回転ナダ、縫部内面ナタツ リ	A砂粒含む B良好 C暗灰色~黒灰色	脚部中央~縫部残存、縫部端部1 /8、外縫1/2破壊
472	44	須恵器	甕	2IC 9号竪窓 燐燒部 66層	②24.0~③0.7	底部外表面回転へ2削り後ナタツリ持手、 ヘラクリ、内面不定方向ナダ	A砂粒含む B良好 C暗灰色~黒灰色 外:暗灰褐色~灰褐色	体部下至~底縫部残存
473	44	須恵器	甕	2IC 9号竪窓 燐燒部 66層	①(21.2) ②24.0	体部外表面格子日々タキ、内面同心円 切出、口縫部外表面格子日々タキ後輪ナ ダ、他12回輪ナダ	A密、砂粒多く含む Bやや不良 C灰白色	口~脚部1/6
474	44	須恵器	上部器	2IC 9号竪窓 燐燒部 66層	②24.7.0	口縫部内外面コナダ、体部内外面削 除	A粗、砂粒多く含む B良好 C内:明褐色~暗褐色、外:暗褐色	口縫部破片
475	44	須恵器	甕	2IC 9号竪窓 燐燒部 66層	②24.5.8	外面格子日々タキ、内面へ2削り	A粗、砂粒多く含む Bやや不良 C内:暗褐色、外:暗灰褐色	底部1/3破片、"歩き土器"
476	44	須恵器	甕西	2IC 9号竪窓 燐燒部 66層	①15.3~②5.2	天井部外曲3/5回転へ2削り、口縫部端 に段、内面不定方向ナダ	A黑色地や多く含む B良好 C内:明青灰色、外:灰~明青灰色	ほぼ完形、天井部1/2欠、内面へ 2記号、ロクロ右
477	44	須恵器	上部器	2IC 9号竪窓 燐燒部 66層	①(20.4) ②残1.1	口縫部内外面コナダ、体部内外面削 除後ナタツリ外縫(タタキ後)ナタツ	A砂粒少し含む B良好 C明褐色~暗褐色	上半破片、脚部1/4残存
478	44	須恵器	甕西	2IC 9号竪窓 疲窓部 灰層	①(12.0)②0.8	天井部外曲被りのため調査不明、口 縫部端に段、内面不定方向ナダ、口縫 部端部2層	A密 B良好 C暗褐色	残存1/4、天井部1/2底縫部、内面へ 2記号、外縫全体灰被り、能く離れ
479	45	須恵器	甕西	2IC 9号竪窓 疲窓部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(12.4)②3.2	天井部外曲3/5回転へ2削り、口縫部端 に段、内面不定方向ナダ、口縫部端部2 層	A密 B良好 C灰	残存1/4、内面へ2記号、ロクロ右

第26表 井手ヶ浦窓跡第2次調査出土遺物観察表⑯

遺物番号	国	種類	器種	出土土地点	状況(cm) ①口径×底面周長 ②底面直径×底面 積③底面積×径 寸(=底面周長)	調整・技術の特徴	A動土・B機械 C色調	備考
							A組、細砂やや多く含む B良好 C内:暗灰色、外:灰黑色	
480	45	須恵器	升壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(12.4)②3.5	天井部外表面/内側面へ~削り、内面不定方 向ナダ、口縁端部に沈黙状段	A組、細砂やや多く含む B良好 C内:暗灰色、外:灰黑色	残存1/3、ロクロ右、外側全体灰被り、内面黒色斑点
481	45	須恵器	坪壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(12.4)②4.3	天井部外表面/内側面へ~削り、内面不定方 向ナダ、口縁端部に沈黙状段	A組、細砂少し含む B良好 C内:暗灰色、外:黄褐色	残存1/4、外側全体灰被り
482	45	須恵器	升壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(12.8)②4.0	天井部外表面/内側面へ~削り、口縫端部 に沈黙、内面不定方向ナダ、口縫端部 に段	A組、細砂含む B良好 C内:灰褐色	残存1/4、内面へラ記号、ロクロ右
483	45	須恵器	坪壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 C-3 12 層)	①(12.8)②3.5	天井部外表面/内側面へ~削り、口縫端部 にわざなり模、内面不定方向ナダ、口 縫端部に段	A組、黑色含む B良好 C灰色	残存1/4、天井部中央欠、内面へラ 記号、ロクロ右
484	45	須恵器	坪壺	21区 9号窯跡 灰層灰 層	①(12.9)②4.6	天井部外表面/内側面へ~削り、口縫端部 に沈黙、内面不定方向ナダ、口縫端部 に段	A組細砂含む B良好 C内:黑色	残存1/2、天井部延完全、内面へ ラ記号、ロクロ左
485	45	須恵器	升壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 C-3 12 層)	①(13.0)②3.0	天井部外表面/内側面へ~削り、口縫端部 に沈黙、内面不定方向ナダ	A組砂 黑色含む B良好 C内:暗灰色、外:灰褐色	残存1/2、天井部中央欠、内面へラ 記号、ロクロ左(化粧成痕)
486	45	須恵器	升壺	21区 9号窯跡 灰層灰 層	①(13.0)②3.8	天井部外表面/内側面へ~削り、内面不定 方向ナダ、口縫端部に沈黙状段	A組黒色含む B良好 C内:灰褐色	残存1/4、天井部中央欠、内面へラ 記号
487	45	須恵器	坪壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(13.2)②4.1	天井部外表面/内側面へ~削り、口縫端部 に沈黙、内面不定方向ナダ、口縫端部 に段	A組細砂含む B良好 C内:灰色	残存1/2、外側全体灰被り
488	45	須恵器	升壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 C-3 12 層)	①(13.2)②3.6	天井部外表面/内側面へ~削り、口縫端部 に沈黙、内面不定方向ナダ、口縫端部 に段	A組、細砂含む B良好 C内:灰褐色	残存1/2、天井部中央欠、ロクロ左
489	45	須恵器	升壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 C-3 12 層)	①(13.4)②4.4	天井部外表面/内側面へ~削り、口縫端部 に沈黙、内面不定方向ナダ、口縫端部 に段	A組砂少 黑色含む B良好 C内:暗灰色	残存1/2、外側全体灰被り
490	45	須恵器	坪壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(13.5)②3.2	天井部外表面/内側面へ~削り、内面不定 方向ナダ、口縫端部に沈黙	A組、細砂やや多く含む B良好 C内:灰色	残存1/2、内面へラ記号、ロクロ右、 外側一部灰被り
491	45	須恵器	升壺	21区 9号窯跡 灰層灰 層	①(13.6)②3.3	天井部外表面へ~削り、口縫端部に 沈黙、内面不定方向ナダ、口縫端部 に沈黙	A組黒色含む B良好 C内:灰色	残存1/8、天井部中央欠、内面へラ 記号、外側黒面付着
492	45	須恵器	坪壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(13.6)②3.4	天井部外表面へ~削り、口縫端部に 沈黙、内面不定方向ナダ、口縫端部 に段	A組、細砂少し含む B良好 C黄色	残存1/4、内面へラ記号、ロクロ右、 外側黒色斑点
493	45	須恵器	坪壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(13.6)②4.3	天井部外表面/内側面へ~削り、内面不定 方向ナダ、口縫端部に沈黙	A組 B良好 C内:黄色	残存1/4、内面へラ記号、ロクロ右、 外側一部自然軸被り
494	45	須恵器	升壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(13.6)②4.1	天井部外表面/内側面へ~削り、内面不定 方向ナダ、口縫端部に沈黙	A組、砂粒多く含む やや不良 C暗褐色	残存1/4、ロクロ右
495	45	須恵器	坪壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 C-3 12 層)	①(13.8)②3.4	天井部外表面/内側面へ~削り、口縫端部 に沈黙、内面不定方向ナダ、口縫端部 に段	A組、細砂少々含む B良好 C内:暗灰色	残存1/6、天井部中央欠、ロクロ右
496	45	須恵器	坪壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(11.0)②3.9	天井部外表面/内側面へ~削り、内面不定方 向ナダ	A組 黑色多く含む B良好 C黃褐色	残存1/4、内面へラ記号、ロクロ右、 外側全面灰被り
497	45	須恵器	升壺	21区 9号窯跡 灰層灰 層(谷下部 B-3 12 層)	①(11.2)②3.9	天井部外表面/内側面へ~削り、内面不定方 向ナダ	A組 B良好 C灰色	残存1/2、内面へラ記号、ロクロ右
498	45	須恵器	坪壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 C-3 12 層)	①(11.4)②4.0	天井部外表面/内側面へ~削り、内面不定方 向ナダ	A組砂含む Bやや不良 C内:暗灰色	残存1/2、内面へラ記号、ロクロ左
499	45	須恵器	坪壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(12.1)②3.1	天井部外表面/内側面へ~削り、黒味のため 不明、内面不定方向ナダ	A組 B良好 C内:灰色	残存1/4、内面へラ記号、ロクロ右、 黒味付着
500	45	須恵器	高杯	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	②(12.2)②2.2	つまみ縫3.4 ②(12.2)	A組 B不良 C内:黃白色	天井部中央へつまみ残存
501	45	須恵器	高杯	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(10.2)②5.0	口縫部外表面カキメ沈継1条、底部外表面 端部へ~削り	A組砂含む B良好 C内:暗灰色	坪原1/6、底部欠、底部内面・口縫 ～修復外表面被りのため調整不鮮明
502	45	須恵器	高杯	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	②(10.8)②5.1	脚部外表面へ~カキメ、中位斜方切 込み、口縫端部へ~削り	A組、細砂少々含む B良好 C内:黑色	脚部下半球形、外面へ~位低内面灰 被り
503	45	須恵器	高杯	21区 9号窯跡 灰層灰 層(谷下部 B-3 12 層)	①(9.7)②4.1 ④(14.0)	底部外表面へ~削り、内面不定方向 ナダ、他は内面ナダ	A組砂含む B良好 C内:黃白色 外:灰色	口縫部上2.0cm～体幅1/6、ロクロ 右、肩部外表面被りきずれ、内面擦 り、焼け跡、外面灰被り
504	45	須恵器	高杯	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(9.8)②4.2 ④(14.0)	体縫外表面カキメ、他は内面ナダ	A組、細砂少々含む B良好 C内:青灰 色、黒灰色、外:灰色	口縫へ~肩幅1/4、外面へ~位低自然 輪
505	45	須恵器	有蓋 壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 C-3 12 層)	②(17.0) ②(13.6)	口縫部外表面カキメ後状況、他は内面ナ ダ	A組砂含む B良好 C内:淡灰色	口縫へ頸部1/2
506	45	須恵器	壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(11.2) ②(14.3)	体縫外表面カキメ、他は内面ナダ	A組 B良好 C内:灰白色	口縫へ肩幅1/5、外面灰被り
507	46	須恵器	壺	21区 9号窯跡 前庭部 灰層(谷下部 B-3 12 層)	①(11.0) ②(14.2)	口縫部外表面力込み、体部外表面平行タ タキ後力込み、内面同心円当具後ナダ	A組、細砂少々含む B良好 C内:暗 灰色	口縫へ肩幅1/4、端幅1/4、口縫 部内面・体部外表面被り
508	46	須恵器	壺	21区 9号窯跡 灰層灰 層	①(16.0) ②(16.5)	口縫部外表面灰被り、体部外表面日夕 タタキ後力込み、内面同心円當具	A砂含む Bやや不良 C灰色	口縫へ体部上位1/4
509	46	須恵器	壺	21区 9号窯跡 灰層灰 層	①(20.6) ②(16.7)	口縫部外表面状況、他は内面ナダ	A組、細砂少々含む B良好 C内:灰色、黃褐色、外:黑褐色	口縫部1/2、口縫部内面被り

第 27 表 井手ヶ浦窯跡第 2 次調査出土遺物観察表⑯

遺物番号	図	種類	器種	出土地点	法長(cm) ①: 横径高 ②: 垂直径 ③: 斜径 ④: 幅(厚)	調整・技法の特徴	A歯部 B続成 C色調			備考
							A歯	B良好	C灰褐色	
510	46	須恵器	便	2区 9号墓跡 灰原灰層	①(19.4) ②11.4	口縁部外面タタキ後回転ナメ、体部外面施子目タタキ、内面同心円当て具	A歯	B良好	C灰褐色	口縁～体部上位1/6
511	46	須恵器	便	2区 9号墓跡 灰原灰層	①(21.0) ②10.0	口縁部外面カヌメ、体部外面タタキ後回転ナメ、内面同心円当て具	A歯	砂紋少し含む B良好 C内:灰色、黃褐色、外:灰色、黒褐色	口縁～腹部1/2、口縁部内面灰褐色	
512	46	須恵器	便	2区 9号墓跡 前庭部 灰原灰層(谷下部 B-3 12号)	①(23.8) ②8.7	口縁部外面丸背後腹状文、頭部外面カヌメナガ、体部外面カヌメ、他は回転ナメ	A歯	砂紋少し含む Bやや不良 C灰褐色	口縁～頭部1/4	
513	47	須恵器	便	2区 9号墓跡 灰原灰層	①(23.0) ②9.3	体部外面カヌメ、内面同心円当て具、他は回転ナメ	A歯	砂紋多し含む B良好 C灰褐色、黒色	口縁～体部上位1/4、口縁部内・体部外面灰褐色のため調整不鮮明	
514	47	須恵器	便	2区 9号墓跡 灰原灰層	①(24.2) ②9.6	口縁部外面タタキ後回転ナメ、体部外面タタキ後カヌメ、内面同心円当て具	A歯	B良好 C灰褐色	口縁～脚部1/4、口縁部内面灰褐色	
515	47	須恵器	便	2区 9号墓跡 灰原灰層	①(24.0) ②12.0	口縁部外面波状文、体部外面カヌメ、内面同心円当て具	A歯	砂紋少々多く含む B良好 C灰褐色、黒色	口縁～体部上位1/3、口縁部内・体部外面灰褐色の鑑定片付着	
516	47	須恵器	便	2区 9号墓跡 灰原灰層	①(24.8) ②7.8	口縁部外面波状文、頭部外面カヌメ、体部外面タタキ後ナメ、他は回転ナメ	A歯	砂紋少含む B良好 C内:灰～黒褐色、外:灰褐色	口縁～頭部1/4	
517	47	須恵器	便	2区 9号墓跡 灰原灰層	①(26.4) ②6.8	口縁部外面波状文、体部内面同心円当て具、他は回転ナメ	A歯	砂紋少含む B良好 C内:灰～黒褐色、外:灰褐色	口縁～脚部1/4、口縁部外ヘア記号、口縁部内ヘア記号の鑑定が不明	
518	48	須恵器	耳舟	2区 9号墓跡 灰原灰層 下部陶土色	①(11.4) ②4.3 ③4.8	底部外面2/3持ちヘア削り、内面不定方向ナメ	A歯	B良好 C内:灰～黒褐色	口縁～底部1/2、口縁部外灰褐色のため鑑定不鮮明	
519	48	須恵器	耳舟	2区 9号墓跡 灰原灰層 下部陶土色	①(12.6) ②4.8	天井部外面2/3回転ヘア削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に凹	A歯	砂紋少含む B良好 C内:白～灰褐色	口縁～底部1/4、内面ヘア記号、ロクロ右、内面細白～淡き黒色	
520	48	須恵器	耳舟	2区 9号墓跡 灰原灰層 下部陶土色	①(12.9) ②9.4	脚部内面カヌメ、内面同心円ナメ、底部端部	A歯	砂紋少含む B良好 C灰～黒褐色	耳舟底部～脚部下位埋存	
521	48	須恵器	便	2区 9号墓跡 灰原灰層 下部陶土色	①(22.0) ②10.5	口縁部外面カヌメ後腹状文、体部外面タタキ後カヌメ、内面同心円当て具	A歯	B良好 C内:灰～黒褐色	口縁～脚部1/4、端部埋存は幅5cm、口縁部外ヘア記号	
522	48	須恵器	便	2区 9号墓跡 灰原灰層 下部陶土色	①(23.2) ②13.8	口縁部外面カヌメ後腹状文、頭部外面平行タタキ後カヌメ、内面同心円当て具	A歯	砂紋少含む B良好 C内:灰～灰褐色、外:灰褐色	口縁～体部上位、端部埋存は幅6.5cm	
523	48	陶丸		2区 9号墓跡 燐焼部 大	最大長10.0 最大幅8.4					石製、須恵器耳舟1付着、重量500g
524	48	陶丸		2区 9号墓跡 燐焼部 大	最大長14.2 最大幅12.5					粘土製、須恵器雙耳部片3-不明1付着、重量980g
525	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 未成 SE-BIKI 脊柱1層	①(12.0) ②3.9	天井部外面2/3回転ヘア削り、口縁端部に凹、内面不定方向ナメ、口縁端部に凹	A歯	砂紋少含む Bやや不良 C内:黄褐色、外:灰白～灰褐色	残存2/3、内面ヘア記号、ロクロ左、内面細白	
526	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 未成 SE-BIKI 脊柱1-4+1層	①(13.8) ②3.2	天井部外面2/3回転ヘア削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に沈痕状の段	A歯	B良好 C灰褐色	残存1/3	
527	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 燐焼	①(15.0) ②4.4	天井部外面2/3回転ヘア削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に凹	A歯	砂紋少含む B良好 C内:灰～灰褐色、外:灰～黒褐色	残存1/4、ロクロ左、やや焼け歪み	
528	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 未成 SE-BIKI 脊柱1層	①(15.6) ②3.7	天井部外面回転ヘア削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に凹	A歯	砂紋少含む B不良 C灰～灰褐色、黒褐色	残存1/5、天井一部欠、内面ヘア記号、ロクロ左	
529	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 未成 SE-BIKI 脊柱2層	①(16.0) ②3.2	天井部外面2/3回転ヘア削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に凹	A歯	砂紋少含む B良好 C灰色	残存1/3、天井一部欠、ロクロ右	
530	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 燐焼 SE-BIKI 脊柱3層	①(12.0) ②4.5 ③14.0	天井部外面2/3回転ヘア削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に凹	A歯	砂紋少含む B良好 C内:灰～灰褐色、外:灰～黄褐色	残存1/4、底部一部欠、内面ヘア記号	
531	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 未成 SE-BIKI 脊柱1-4+5層	①(12.5) ②4.5 ④14.5	底部外面2/3回転ヘア削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に凹	A歯	砂紋少含む Bやや不良 C内:暗褐色、外:黄褐色～白黄褐色	残存1/4、ロクロ右	
532	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 燐焼 最終床面	①(13.6) ②4.3	天井部外面2/3回転ヘア削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に凹	A歯	B良好 C内:灰褐色、外:灰～暗褐色	定期、相10セッタ、内面ヘア記号、ロクロ左、やや焼け歪み	
533	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 燐焼 最最終床面	①(13.9) ②4.6 ④4.3	底部外面3/4回転ヘア削り、内面不定方向ナメ	A歯	B良好 C内:灰褐色、外:灰～暗褐色	定期、相9セッタ、内面ヘア記号、ロクロ右	
534	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 未成 SE-BIKI 最終床面 No.2	①(13.9) ②4.0	天井部外面2/3回転ヘア削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に凹	A歯	砂紋少含む B不良 C内:灰褐色、外:灰～暗褐色	定期、相6セッタ、内面ヘア記号、ロクロ右	
535	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 未成 SE-BIKI 最終床面 No.2	①(12.2) ②4.6 ④4.1	底部外面3/4回転ヘア削り、内面不定方向ナメ	A歯	砂紋少含む Bやや不良 C内:灰色、外:灰～暗褐色、灰白色	定期、相5.5セッタ、内面ヘア記号、ロクロ右	
536	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 未成 SE-BIKI 最終床面 No.10	①(14.0) ②4.4	天井部外面全面に手持ちヘア削りのうちナメ、口縁端部に凹、内面不定方向ナメ、口縁端部に凹	A歯	砂紋少含む B不良 C内:灰褐色、外:灰～暗褐色	定期、相6セッタ、内面ヘア記号、外面沈痕はヘア削けナメのため不明	
537	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 未成 SE-BIKI 最終床面 No.6	①(12.2) ②4.7 ④14.7	底部外面2/3手持ちヘア削りのうちナメ、内面不定方向ナメ	A歯	砂紋少含む B不良 C白色	定期、相7セッタ、内面ヘア記号	
538	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 未成 SE-BIKI 最終床面 No.3	①(13.8) ②4.3	天井部外面回転ヘア削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に沈痕状の段	A歯	砂紋少含む B良好 C内:灰褐色	定期、相1/2、内面ヘア記号、ロクロ左	
539	52	須恵器	耳舟	2区 10号墓跡 未成 SE-BIKI 最終床面 No.3	①(13.8) ②4.3	天井部外面回転ヘア削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に沈痕状の段	A歯	砂紋少含む B良好 C内:灰褐色	残存1/3、天井部中央欠、ロクロ右	

第28表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表⑯

遺物番号	図	種類	器種	出土地点	法面(era) ①口径×高さ ②口径×高さ×深さ ③口径×高さ×深さ ④口径×高さ×深さ ⑤口径×高さ×深さ	調整・技法の特徴	A灰土	B焼土	C色調	備考
							Bやや不良	C灰色		
540	52	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 塚成部 最終床函No.1	①(14.6)②4.0	天井部外側2/3回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	Bやや不良	C灰色	残存1/2、内面ヘア記号。ロクロ左
541	52	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 最終床函	①(14.6)②4.6 ②(13.9)	底部外側4/5回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	Bやや不良	C灰~灰白色	完形、ロクロ右
542	52	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 塚成部 最終床函No.4	①(13.0)②4.0 ④(15.0)	底部外側1/2回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	Bやや不良	C白黄灰色	残存1/4、底部中央欠
543	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 塚成部 燃焼部 21-22層	①(13.8)②1.1	天井部外側回転へア削り、口縁部端に沈澱状の凹	A密	B不良	C白黄色~褐色~黒色	ほぼ完形、ロクロ左
544	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 下層	①(14.1)②4.2	天井部外側2/3回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	Bやや少く含む	B良好 C内:灰~灰白色、外:灰白色	残存2/3、端部は1/2、内面ヘア記号。ロクロ左
545	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 塚成部 ~燃焼部 21-22層	①(14.6)②4.6	天井部外側4/5回転へア削り、口縁部端に沈澱状の凹	A密	B不良	C内:灰白色、外:黄褐色~黒色	残存1/5、ロクロ左
546	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 塚成部 ~燃焼部 21-22層	①(14.8)②4.9	天井部外側6/7回転へア削り、内面暗調	A密	B不良	C内:灰白色、外:黄褐色~黒色	残存1/6、ロクロ右
547	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 21-22層	②(15.0)②4.8	天井部外側表面研磨のため不明、口縁部端に沈澱状の凹	A密	Bやや少く含む	C内:灰~灰白色	残存1/2
548	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 塚成部 暫記整理上	①(11.3)②4.2	底部外側2/3回転へア削り、内面不定方向ナデ	A密	Bやや不良	C灰色	残存1/2、内面ヘア記号
549	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 下層	①(11.4)②4.0 ④(13.2)	底部外側2/3回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	B不良	C内:灰白色、外:灰白色	残存1/3、内面ヘア記号。ロクロ右
550	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 塚成部 ~燃焼部 19-21-1層	①(13.8)②4.9	底部外側3/5回転へア削り、内面不定方向ナデ	A密	B黑色多く含む	B良好 C内:灰白色、外:暗紅色	残存1/2、ロクロ左、外側黒色斑点
551	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 下層	①(11.8)②4.1 ④(14.2)	底部外側3/5回転へア削り、内面不定方向ナデ	A密	Bやや少く含む	B良好 C内:灰白色、外:暗紅色	ほぼ完形、口縁部1/4欠、ロクロ右
552	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 下層	①(12.1)②4.5 ④(14.0)	底部外側1/2回転へア削り、内面不定方向ナデ	A密	Bやや不良	C内:灰白色	ほぼ完形、口縁部1/4欠、ロクロ右
553	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 ~燃焼部 21-22層	②(13.9)②14.1	底部外側3/4回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端にカキマチ状の凹	A密	B不良	C内:暗紅色、外:白黄灰色	口縁部欠、盤面剥落以下は完存、ロクロ左
554	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 31-32層	①(12.8)②4.7 ④(15.0)	底部外側3/5回転へア削り、内面不定方向ナデ	A密	B不良	C黄白色	残存1/3、底部一部欠、ロクロ左、やや焼け込み
555	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 31-32層	①(13.0)②4.0 ④(15.4)	底部外側3/5回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	Bやや不良	C白色、灰	残存2/3、内面ヘア記号
556	53	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 下層	①(13.8)②4.8 ④(15.1)	底部外側2/3回転へア削り、内面不定方向ナデ	A密	Bやや少く含む	Bやや含む C内:灰白色、外:灰白色	残存2/3、ロクロ左、やや焼け込み
557	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 崩落部 33層(火葬)	①(13.4)②4.4	天井部外側回転へア削り、内面不定方向ナデ	A密	Bやや少く含む	B良好 C内:灰白色、外:灰~灰白色	残存1/4、内面ヘア記号、黑色斑点
558	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 ~崩落部 33層(火葬)	①(13.2)②4.2	天井部外側2/3回転へア削り、口縁部端に沈澱状の凹	A密	B良好	C白色、灰	残存1/4、内面ヘア記号、ロクロ左
559	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 崩落部 33層(火葬)	①(13.8)②4.5	天井部外側2/3回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	B良好	C内:灰白色、外:灰白色	残存1/3、内面ヘア記号、外側全斜破壊
560	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 崩落部 33層(火葬)	①(13.8)②4.4 ④(15.0)	天井部外側5/6回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	B黑色多く含む	B良好 C内:灰白色、外:黑~暗紅色	残存1/3、内面ヘア記号、ロクロ右
561	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 ~崩落部 33層(火葬)	①(13.9)②4.2	天井部外側回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	Bやや少く含む	B良好 C内:灰~灰褐色~黒色	残存3/5、ロクロ右
562	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 ~崩落部 33層(火葬)	①(14.6)②4.3	天井部外側3/4回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	Bやや少く含む	B良好 C内:灰白色、外:灰~灰白色	残存1/2、内面ヘア記号、ロクロ右
563	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 ~崩落部 33層(火葬)	①(14.2)②4.2	天井部外側回転へア削り、口縁部端に沈澱状の凹	A密	Bやや少く含む	B良好 C内:灰白色、外:青白色	残存1/4、内面ヘア記号、ロクロ左、外側一部灰被り
564	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 崩落部 33層(火葬)	①(14.2)②4.0	天井部外側4/5回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	B黑色多く含む	B良好 C内:灰白色、外:黑~暗紅色	残存1/3、内面ヘア記号、ロクロ左、外側一部灰被り、口縁部端に黒化を認める
565	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 崩落部 33層(火葬)	①(14.2)②4.6	天井部外側2/3回転へア削り、内面不定方向ナデ	A密	Bやや少く含む	B良好 C内:灰白色、外:灰~灰白色	残存1/2、内面ヘア記号、ロクロ左
566	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 燃焼部 ~崩落部 33層(火葬)	①(14.4)②4.6	天井部外側2/3回転へア削り、口縁部端に沈澱状の凹	A密	B黑色多く含む	B良好 C内:灰白色、外:青~青白色	残存1/8、内面ヘア記号、ロクロ右
567	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 崩落部 33層(火葬)	①(14.6)②3.9	天井部外側2/3回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	Bやや少く含む	B良好 C内:灰白色、外:灰~黒色	残存1/2、内面ヘア記号、ロクロ右
568	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 崩落部 33層(火葬)	①(14.9)②4.5	天井部外側回転へア削り、内面不定方向ナデ。口縁部端に沈澱状の凹	A密	B黑色多く含む	B良好 C内:灰白色、外:灰~灰白色	残存1/2、天井部中央欠、内面黒色斑点、外側部灰被り
569	54	須恵器	坪直	2区K 10号墓室 崩落部 33層(火葬)	①(16.0)②4.5	天井部外側回転へア削り、内面不定方向ナデ	A密	B黑色多く含む	B良好 C内:灰白色、外:灰~暗紅色	残存1/2、天井部中央欠、外側部灰被り

第29表 井手ヶ浦窪塚跡第2次調査出土遺物観察表⑯

遺物 番号	国	種類	器種	出土地点	注意(註)	調整・技法の特徴	A軸上 B軸成 C色調	備考
570	54	須恵器	坪身	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑩.2②4.8 ④13.6	底部外表面2/3回転へラ削り、内面不対称 向ナデ	A磨 B良好 C内→口縁部分:灰色、外:青灰色	残存1/2、内面へラ記号、需受部に 黒石焼け板
571	54	須恵器	坪身	2区K 10号窯跡 燃焼 部 33層(火灰)	①⑪.2②4.2 ④13.2	底部外表面2/3回転へラ削り、内面不対称 向ナデ	A磨 B良好 C内:灰色、外:灰~黒灰色、緑灰色	残存1/3、底部1/4、内面へラ記号、外表面被り、裏と焼き窓
572	54	須恵器	坪身	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑪.3②5.0 ④13.5	底部外表面1/2回転へラ削り、内面不対称 向ナデ	A磨、細砂少々含む B良好 C内:灰~黄褐色、外:灰白色、黑色	残存1/2、内面へラ記号、需受部に 黒石焼け板、外表面側片軸着、 1/2自然剥離
573	54	須恵器	坪身	2区K 10号窯跡 燃焼 部 33層(火灰)	①⑪.4②4.5 ④13.8	底部外表面1/2回転へラ削り、内面不対称 向ナデ	A磨 B良好 C内:灰色、外:黑色	残存1/4、内面へラ記号、ロクロ右、 需受部に黒ね焼け窓
574	54	須恵器	坪身	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑪.6②4.5 ④14.2	底部外表面3/5回転へラ削り、内面不対称 向ナデ	A磨 B良好 C内→口縁部分:黄色、外:灰白色	残存1/2、外全体灰被り
575	54	須恵器	坪身	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑫.0②4.3 ④14.6	底部外表面3/5回転へラ削り、内面不対称 向ナデ	A磨 B良好 C内→口縁部分:灰黄褐色、外:灰色	残存1/2、内面へラ記号、重ね焼窓、外系灰 被り
576	54	須恵器	坪身	2区K 10号窯跡 燃焼 部 33層(火灰)	①⑫.5②4.6 ④15.0	底部外表面3/5回転へラ削り、内面不対称 向ナデ	A黑色多く含む B良好 C内:灰~黄褐色、外:灰色、黑色	残存1/2、ロクロ右、底部焼け込み
577	54	須恵器	坪身	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑬.2②4.3 ④15.6	底部外表面3/5回転へラ削り、内面不対称 向ナデ	A磨 B良好 C内:灰色、外:灰黑色	需受部1/2、口縁部分1cm、内面へ ラ記号、外表面被り、外系灰被り、別 個体片付着
578	54	須恵器	坪身	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑭.0②4.4 ④15.2	底部外表面3/5回転へラ削り、内面不対称 向ナデ	A磨 B良好 C灰色	残存1/2、底部中央、内面へラ記 号、ロクロ右、需受部に黒ね焼 窓、外系黑色底
579	55	須恵器	高杯	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	②⑭.0②39.9	外外面向回ナデ	A磨、細砂多く含む Bやや不良 C黃色、灰色	脚部1/2、坪部欠
580	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑮.0②3.6	天井部分外表面2/3回転へラ削り、口縁部分 に沈附、内面不対称向ナデ	A磨、黑色多く含む B良好 C内:黄色、外:灰色	残存1/2、ロクロ右
581	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑮.0②3.7	天井部分外表面2/3回転へラ削り、口縁部分 に沈附、内面不対称向ナデ、口縁端部に 沈附状態	A磨、細砂、黑色少し含む B良好 C内:黄色、外:灰色	残存1/2、口縁部外表面被り
582	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	②⑮.2 ④13.2	体部外表面へ~中からキメ、他12回転ナ デ	A磨 B良好 C内:暗褐色、外:灰~黑色	残存1/5、口縁端、底部、肩部外 面に黒口縁部分軸着、外系黑色底点
583	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑯.0②4.6 ④12.2	体部外表面中位カキメ、他12回転ナ デ	A磨 B良好 C内:暗褐色、外口縁部~ 底部:灰色、以下黑色	残存1/6、底部欠、脚部外表面に直 書き被り
584	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑯.1②4.7 ④17.0	体部外表面下位灰焼けのため不明、他12 回転ナデ	A磨 B良好 C内:灰白色、黒褐色、外:黑色	残存1/3、底部欠、脚部外表面重 ね焼窓、別個体片軸着、体部中位以 下焼け
585	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	②⑯.0 ④13.0	体部外表面中位カキメ後突変、他12回 転ナデ	A磨 B良好 C黑色	脚部~体部上位1/6、脚部外表面 に直書き底
586	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑰.0 ④12.0	外表面カキメ、他12回転ナデ	A磨 B良好 C内:暗褐色、外:灰~黑色	ロクロ右/直書き/残存、口縁端部~外 面灰被り
587	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 燃焼 部 33層(火灰)	①⑰.1 ④12.2	体部内面同心円凹て長ナデ、外口縁 部日々付きカキメ、口縁部外カキメ 後灰被り	A磨 B良好 C内:灰色、外:暗~灰色	ロクロ右/脚部1/4、脚部内面に 直書き
588	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑰.2 ④13.2	体部内面同心円凹て、外由内被りの ため不明、口縁部外口縁被り、他12回 転ナデ	A磨、細砂少々含む B良好 C内:暗褐色	ロクロ~直書き/ロクロ右/脚部内面 に直書き被り、ロクロ端
589	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑰.8 ④13.2	ロ縁部外表面タカハク後カキメ、他12回 転ナデ	A磨、細砂多く含む B良好 C内:青灰色	ロクロ~脚部1/3、ロクロタケハクは 下段のみ
590	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	①⑳.0 ④17.7	体部内面同心円凹て其、外由内被り 日々付きカキメ、口縁部外カキメ	A磨、細砂少々含む B良好 C内:暗褐色、外:灰色	ロクロ~脚部1/4、ロクロ外表面へラ記 号
591	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 33層(火灰)	②⑳.2 ④18.0	体部内面同心円凹て其、外由内被り 日々付きカキメ、ロ縁部外表面被状、他12回 転ナデ	A磨、細砂少々含む B良好 C内:暗褐色	ロクロ~脚部破片、ロ縁部7cm残存
592	55	須恵器	短紐	2区K 10号窯跡 前庭 部 中層(16~2層)	①㉑.6 ④11.2	体部内面同心円凹て其、外由内被り 日々付きカキメ、ロ縁部外表面後被状、 脚部内面口目	A磨、細砂少々含む B良好 C内:暗褐色、外:灰色	ロクロ~脚部1/6
593	56	燒台	坪身	2区K 10号窯跡 最終 床面	最大16.4 最大13.4			粘土製、須恵器焼体2部2/片断口 縁部2片付着、重量500g
594	56	燒台	坪身	2区K 10号窯跡 最終 床面	最大11.7 最大10.0	石と須恵器との間に粘土貼り付け		石製、須恵器焼体2部2/不明焼片 1付着、重量1140g
595	56	須恵器	坪蓋	2区K SX1 3層(焼 褐色)	①⑳.0②3.5	天井部分外表面被りのため不明、ロ縁部 内面不対称ナデ、ロ縁部端	A磨砂含む B良好 C内:灰色、外:黑色、明褐色	残存1/4、天井一部、内面へラ記 号、内系黑色斑点多致、焼痕
596	56	須恵器	坪蓋	2区K SX1 3層(焼 褐色)	①㉑.4②3.5	天井部分外表面2/3回転へラ削り、ロ縁部 内面、内面不対称ナデ、ロ縁部端	A磨、黑色多く含む B良好 C内:暗褐色	残存1/6、天井~底、内面へラ記 号、ロクロ左、内面~底側、短幅 直書き
597	56	須恵器	坪蓋	2区K SX1	①㉑.8②3.4	天井部分外表面3/4回転へラ削り、ロ縁部 端に沈附、内面不対称ナデ、ロ縁部端	A磨、細砂少々含む B良好 C内:暗褐色	残存1/3、内面へラ記号、ロクロ右、 全周焼け込み、内系黑色底点
598	56	須恵器	坪蓋	2区K SX1 3層(焼 褐色)	①㉑.9②4.0 ④13.2	底部外表面向回ナデ、内面不対称 ナデ	A磨砂含む Bやや不良 C内:灰色、外:白灰色	ほぼ丸形、内面へラ記号、ロクロ右
599	56	須恵器	提板	2区K SX1	頭部埋(8.0) ②㉔.8	ロ縁部外表面放状・カキメ、体部外表面 心円状カキメ、他12回転ナデ	A磨砂含む B良好 C内:暗褐色	頭~体部上位1/3、斜れ口に粘土 詰目

第30表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表②

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	法規(年)	調査・技法の特徴	A軸上 B軸底 C色調	備考
600	韓	須恵器	甕	21K-SX1	①(20.2) ②底2.7	体外外面施子口タク後矢小内、内面円心内凹当直具、他は回転ナメ	A粗、砂粒多く含む B良好 C淡青灰	口縁～体部上位1/4、口縁部後1/4歪み
601	韓	須恵器	甕	21K-SX1 下層(右側)	②(86.4) 既存幅7.7	口縫部外一部波状文、他は回転ナメ	A底、細砂少々含む B良好 C内:灰色、黒色、外:灰色、黒色	口縫部破片、内外面灰被り
602	韓	須恵器	甕	21K-SX2 下層(右谷F層 C-2-10-11層)	①(12.6)②4.0	天井部表面2/3回転へテ割り、内面不規 方向ナメ、口縫部端に波状	A底、細砂少々含む B良好 C内:灰色、黒色、外:灰色、黒色	背面2/3、内面～テ割記号、内外面 灰被り波状文、他は無れ。
603	韓	須恵器	甕	21K-SX2 B-3最下層黄灰色 (土)	①(12.8)②4.1	天井部表面2/3回転へテ割り、口縫部端 に波状、内面不定方ナメ、口縫部端 に波状の段	A細砂、黑色較含む Bやや不良 C灰	既存1/4、天井部内面側縫、ロクロ 左
604	韓	須恵器	甕	21K-SX2 下層(右谷F層 B-3最下層黄灰色 (土))	①(13.0)②3.3	天井部表面2/3回転へテ割り、内面不規 方向ナメ、口縫部端に波状の段	A底、細砂少々含む B良好 C内:白色、外:黒～暗灰色	残存1/2、内面～テ割記号、内外面 灰被り波状文、他は無れ。
605	韓	須恵器	甕	21K-SX2 中-下層(右谷F層 7-9-24+25 層)	①(13.0)②4.3	天井部表面4/5回転へテ割り、内面不規 方向ナメ、口縫部端に波状の段	A底、黒色較含む B良好 C内:白色、外:灰～暗灰色	天井部1/2、口縫部2/3.2cm残 存、内面～テ割
606	韓	須恵器	甕	21K-SX2 下層(右谷F層 B-3最下層黄灰色 (土))	①(13.9)②5.1	天井部表面3/4回転へテ割り、内面不規 方向ナメ、口縫部端に波状の段	A底、黒色多く含む B良好 C内:灰白色、外:灰	既存1/3、内面波状文、外曲全形 灰被り、自然輪、堅松付番
607	韓	須恵器	甕	21K-SX2 下層(右谷F層 B-3最下層黄灰色 (土))	①(13.8)②3.9	天井部表面2/3回転へテ割り、口縫部端 に波状の段	A底 B不良 C白黄色	残存1/2、内面～テ割記号
608	韓	須恵器	甕	21K-SX2 下層(右谷F層 B-2-10-11層)	①(13.4)②4.4	天井部表面1/2回転へテ割り、中央後ナ メ、口縫部端に波状、内面不定方ナメ、 口縫部端に波状の段	A底 Bやや不良 C内:白色、外:褐～灰色	残存1/2、内面～テ割記号、ロクロ右
609	韓	須恵器	甕	21K-SX2 下層(右谷F層 B-2-10-11層)	①(13.6)②4.2	天井部表面3/4回転へテ割り、口縫部端 に波状、内面不規方向ナメ、口縫部端に 波状の段	A底、細砂少々含む B良好 C内:白色、外:灰～暗灰色	完形、焼成量多、内面～テ割記号、 ロクロ右
610	韓	須恵器	甕	21K-SX2 中-下層(右谷F層 7-9-24+25 層)	①(14.0)②3.2	天井部外表面崩壊のため不明、内面不定 方向ナメ	A底 B不良 C灰白色	残存1/5、内面～テ割記号、全体的に 崩壊
611	韓	須恵器	甕	21K-SX2 下層(右谷F層 C-3-10-11層)	①(10.7)②4.5 ①(13.2)	底縫部外表面1/2回転へテ割り、内面不定方 ナメ	A砂、黑色較含むやや多く含む B良好 C灰	残存1/2、ロクロ右、外曲一部自然 輪
612	韓	須恵器	甕	21K-SX2 中層(右谷F層 B-2-3-間-6-7-8-9 層)	①(11.0)②3.5 ①(13.4)	底縫部外表面3/4回転へテ割り、口縫部端 に波状、内面不規方向ナメ、口縫部端に 波状の段	A底、細砂少々含む B良好 C内:白色、外:灰～暗灰色	残存1/2、底部欠
613	韓	須恵器	甕	21K-SX2 下層(右谷F層 B-3最下層黄灰色 (土))	①(12.5)②3.5 ①(13.4)	底縫部外表面1/2回転へテ割り、内面不定方 ナメ	A砂、藍色含む B良好 C灰	残存1/4、内面～テ割記号、裏受部 外曲波状文、外曲、内面～テ割記号、外曲 全形に波状文、自然輪
614	韓	須恵器	甕	21K-SX2 中-下層(右谷F層 7-9-24+25 層)	①(11.6)②4.5 ①(13.4)	底縫部外表面3/4回転へテ割り、内面不定方 ナメ	A底 B不良 C内:黄灰色、外:灰色	口縫部1/6、口縫部内～外一面 灰被り
615	韓	須恵器	高杯	21K-SX2 中-下層(右谷F層 7-9-24+25 層)	①(9.2)	外面部内面波状文・沈鉢2条	A細砂含む B良好 C黒灰色、黄灰色	脚部上平残存、外曲・口縫部内面 灰被り
616	韓	須恵器	高杯	21K-SX2 下層(右谷F層 B-2-10-11層)	②(9.2)	脚部外表面回転ナメ、底縫部外表面波状文 脚部底縫3.4	A細砂含む B良好 C内:白色、外:灰～黒灰色	脚部外表面自然輪
617	韓	須恵器	大甕	21K-SX2 中層(右谷F層 B-3-6-7-9層)	①(39.0) ②(9.2)	口縫部外表面カキメ既存波状波紋状文、他 は回転ナメ	A砂粒含む B良好 C内:灰白色、外:灰～黒灰色	口縫部1/4、口縫部内～外一面 灰被り
618	韓	須恵器	甕	21K-7-9号窯跡 底灰層(底下13-14 層)	①(11.4)②4.0 ①(13.4)	底縫部外表面1/2回転へテ割り、内面不定方 ナメ	A細砂含む B良好 C内:灰白色、外:青～暗灰色	既存1/4、内面～テ割記号、底部外曲 一部灰被り、内面波状文
619	韓	須恵器	甕	21K-7-9号窯跡 底灰層	①(12.5)②4.5 ①(14.2)	底縫部外表面4/5回転へテ割り、内面不定方 ナメ	A底、細砂少々含む B良好 C灰	既存1/2、内面～テ割記号、ロクロ右
620	韓	須恵器	甕	21K-7-9号窯跡 底灰層	①(14.2)②4.8 ①(9.4)	底縫部外表面回転へテ割り後ナメ(窯跡) 内面不定方ナメ	A粗、砂粒多く含む B良好 C暗灰色	既存1/4、既A
621	韓	須恵器	甕	21K-7-9号窯跡 底灰層	①(13.8)②3.9 ①(8.5)	底縫部外表面1/2回転へテ割りナメ、内面不定 方ナメ、他は回転ナメ	A底、砂粒少々含む B良好 C灰	既存1/2、既B
622	韓	須恵器	高杯	21K-7-9号窯跡 底灰層	②(9.7)	外面部カキメ後波状文・沈鉢2条。他12回 縫底2.8	A底 B良好 C灰～黄灰色	脚部上～上位残存
623	韓	須恵器	楕瓶	21K-7-9号窯跡 底灰層	①(4.6) ②(6.1)	口縫部外表面回転ナメ、体外外面カキメ	A底 B良好 C暗灰色	口縫部～脚部1/3、脚部内面、口縫 部外表面～テ割記号
624	韓	須恵器	甕	21K-7-9-10号窯跡 底灰層	①(12.2) ②(6.2)	脚部外表面波状文・カキメ、内面～口縫部 外表面回転ナメ、外面部、口縫部端に 波状	A細砂多く、黒色と、黃色含む B良好 C内:灰色、外:灰～黒色	口縫部～脚部4cm既存
625	韓	須恵器	甕	21K-7-9号窯跡 底灰層(底下12-13 層)	①(5.0)②2.5 ①(10.0)	底縫部外表面回転ナメ、内面不定方 ナメ、他は回転ナメ	A底 B良好 C白黄色	既存1/4、底部～深、外曲・脚部外表面 波状文・波状波紋、外曲自然輪、堅松付 番
626	韓	須恵器	甕	21K-7-9号窯跡 底灰層(底下12-13 層)	①(7.6)②3.3 ①(11.6)	体外外面カキメ、他は回転ナメ	A底、細砂少々含む B良好 C暗灰色	既存1/6、底部～深、外曲・脚部外表面 波状文・波状波紋重ね 燒成量多き現れ、外曲自然輪、堅松付 番
627	韓	須恵器	甕	21K-7-9号窯跡 底灰層	①(7.7)②3.7 ①(14.0)	底縫部外表面回転へテ割り、内面不定方 ナメ、体外外面カキメ、他は回転ナメ	A底、細砂少々含む B良好 C黄灰色	口縫部～体部中位1/6、外曲灰被り、 自然輪、内面波状文
628	韓	須恵器	短甕	21K-7-9号窯跡 底灰層	②(9.2) ②(6.3)	体外外面カキメ、内面同心凹当直具、他 は回転ナメ	A砂粒含む Bやや不良 C黄灰色	口縫部～脚部破片
629	韓	須恵器	短甕	21K-7-9号窯跡 底灰層	②(6.5) 既存9.0	体外外面カキメ、内面同心凹当直具、他 は回転ナメ	A砂粒含む Bやや不良 C黄灰色	口縫部～脚部破片

第31表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表②

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	特徴(主)	調整・技法の特徴	A始ヒ・B機成ヒ C色調	備考
630	61	須恵器	瓦	2区 7-9号窯跡 灰原灰層	①(9.6)②(9.3) ③(11.8)	縦部外曲カキ後波状。灰~体調中位外曲カキ、脣部円点文。他は同軸ナダ	A密 B良好 C褐色	頭部1/4、口縫部1/8、体調下位均面に丁字机
631	61	須恵器	甕	2区 7-9号窯跡 灰原灰層	①(14.8) ②(5.5)	体部外曲格子目タタキ(重ね)、口縫部表面波状文。他は同軸ナダ	A細砂含む Bやや不良 C灰~黄灰色	口縫~脣部1/6
632	61	須恵器	甕	2区 7-9号窯跡 灰原灰層	①(19.2) ②(6.4)	体部内面同心円用て具、口縫部外曲面波状文。他は同軸ナダ	A密 黑色较少含む B良好 C灰~黄灰色	口縫~頭部1/2、口縫部内面~端部に破れ
633	61	須恵器	甕	2区 7-9号窯跡 灰原灰層	①(19.6) ②(6.0)	体部外曲カキ後波状のため不明。内面同心円当て具。口縫部外曲カキ波状文。他は同軸ナダ	A粗、細砂多少含む B良好 C内:暗灰~研磨灰色、外:黄灰~灰黑色	頭部~脣部1/4、口縫部内面~体調外曲波状
634	61	須恵器	甕	2区 7-9-10号窯跡 灰原灰層	①(19.0) ②(8.3)	体部外曲平行タタキ後カキ入、内面同心円当て具。口縫部外曲面波状文・同軸ナダ	A粗、細砂多少含む B良好 C白灰~灰黑色	口縫部~脣部1/5、体調内面被破
635	61	須恵器	甕	2区 7-9-10号窯跡 灰原灰層	①(21.8) ②(7.2)	体部外曲平行タタキ後カキ入、口縫部曲面波状文。他は同軸ナダ	A細砂やや多含む B不良 C灰~白色	口縫部1/4、内面口縫部まで同心円当て具、外面上に直机、内面灰被破
636	62	須恵器	甕	2区 7-9-10号窯跡 灰原灰層	①(19.1) ②(6.4)	体部外曲平行タタキ後カキ入、内面同心円当て具。口縫部外曲面波状文・同軸ナダ、内面波状ナダ	A粗、細砂少含む B良好 C黑灰色、外:黄灰~灰黑色	頭部~脣部上位1/4、口縫部内面~体調外曲波状
637	62	須恵器	甕	2区 7-9-10号窯跡 灰原灰層	①(22.6) ②(8.5)	体部外曲平行タタキ、内面同心円当て具。口縫部外曲波状文・同軸ナダ、内面波状ナダ	A細砂多く含む B良好 C体部:暗灰、他:白灰色	口縫部~脣部1/2、焼け並み
638	62	須恵器	甕	2区 7-9号窯跡 灰原灰層	①(22.0) ②(5.5)	体部外曲灰波状のため不明。内面同心円当て具、口縫部外曲カキ入、他は同軸ナダ	A密、細砂少含む B良好 C灰~黄灰色	口縫~脣部1/4、口縫部内面~端部・体調外曲波状
639	62	須恵器	甕	2区 7-9-10号窯跡 灰原灰層	①(22.6) ②(6.9)	外曲カキ後回転タタキ・波状文、内面~口縫部外曲波状ナダ	A砂粒、黑色含む B良好 C灰色	頭部~脣部1/3、全体的に縮痕
640	62	須恵器	甕	2区 7-9号窯跡 灰原灰層	①(20.2) ②(11.8)	体部外曲格子目タタキ後カキ入、内面同心円当て具、他は同軸ナダ	A粗、砂粒やや多含む B良好 C青灰色	口縫~体部上位1/4
641	63	須恵器	甕	2区 7-9-10号窯跡 灰原灰層	①(24.2) ②(10.0)	体部外曲ナダ+カキ、内面同心円当て具、口縫部外曲カキ入、他は同軸ナダ	A黑色少し含む B良好 C内:灰~灰白色、外:黑灰色	口縫部3/5、口縫部内面~体調外曲波状、焼き並み・繊れ
642	63	須恵器	甕	2区 7-9号窯跡 灰原灰層	①(23.7) ②(11.5)	体部外曲格子目タタキ後カキ入、内面同心円当て具、口縫部外曲カキ入	A砂粒含む B良好 C内:灰~黄灰色、外:灰~灰黑色	口縫~脣部1位1/2
643	63	須恵器	甕	2区 7-9号窯跡 灰原灰層	①(27.3) ②(16.7)	体部外曲平行タタキ後カキ入、内面同心円当て具、他は同軸ナダ	A砂粒含む B良好 C内:灰~灰黑色、外:灰~灰黑色	口縫~脣部1位1/5、体部外曲波状、焼け並み、口縫部外工具痕
644	63	須恵器	甕	2区 7-9-10号窯跡 灰原灰層	①(29.0) ②(9.6)	口縫部外曲面、縦部外曲波状のため調整不明。他は同軸ナダ	A密、細砂少含む B良好 C灰~黑色	口縫部~脣部1/4、口縫部外曲面記号、内面~体調外曲波状
645	63	須恵器	甕	2区 7-9号窯跡 灰原灰層	①(27.1) ②(12.6)	体部外曲格子目タタキ後カキ入、内面同心円当て具後波状、口縫部外曲カキ入	A密、細砂少含む B良好 C黄灰色	口縫~脣部1位1/5
646	64	須恵器	甕	2区 7-9-10号窯跡 灰原灰層	①(28.0) ②(13.6)	口縫部外曲カキ後波状文沈漏、他12回転ナダ	A粗、砂粒多く含む B良好 C青灰色	口縫部1/2、内面一部同心円当て具
647	64	須恵器	甕	2区 7-9-10号窯跡 灰原灰層	①(27.2) ②(9.7)	外曲カキ後波状文、縦部2条、内面回転ナダ後波状同心円当て具、口縫部外曲波状ナダ	A細砂含む B良好 C褐色、暗灰色	口縫部1/4、内面口縫部まで同心円当て具、外面上に直机、内面灰被破
648	64	須恵器 大甕	甕	2区 7-9-10号窯跡 灰原灰層	①(40.0) ②(25.0)	口縫部外曲カキ後波状文・次回波状、体部外曲平行タタキ、内面同心円当て具、他は同軸ナダ	A粗、砂粒やや多含む B良好 C口縫部内面~端部に黒斑、体調波状け込み、縦部以下内面灰斑、体部:灰	口縫部~頭部1/4、口縫部外曲波状、全休き並れ
649	64	須恵器 大甕	甕	2区 7-9号窯跡 灰原灰層	①(26.5) ②(15.9)	外面上にカキ後波状7条、下斜斜波状文、端部に列文	A粗、砂粒やや多含む B良好 C内:灰~灰黑色	口縫部上半破片、外内面黑色底点
650	64	須恵器 大甕	甕	2区 7-9-10号窯跡 灰原灰層	①(49.8) ②(14.3)	口縫部外曲面、焼透後波状文、内面同心円当て具後波状	A粗、砂粒少含む B良好 C内:灰~灰黑色	口縫部1/3、外内面焼透れ、内面黑色底点
651	65	須恵器 斧背	斧	2区 谷下部 A-1-B-1 14~16層	①(18.2)②(4.4)	天井部外曲/2ナダ+L状工具ナダ、中央部不完全方舟ナダ、中央部へ形状工具ナダ、口縫部横二段	A密 B良好 C内:灰~灰黑色、外:灰~黑色	残存4/5、天井一部委みによる割れ、内面へ記号
652	65	須恵器 斧背	斧	2区 谷下部 B-3 上層褐色土	①(12.1)②(3.1)	天井部外曲/2/2ナダ+L状工具ナダ、内面不完全方舟ナダ、口縫部横二段	A密 B良好 C内:暗灰色、外:暗灰~黑色	残存1/2
653	65	須恵器 斧背	斧	2区 谷下部 C-3 4層	①(12.6)②(3.8)	天井部外曲/2/2ナダ+L状工具ナダ、内面不完全方舟ナダ、口縫部横二段	A粗、砂粒多く含む B良好 C暗灰~灰黑色	残存2/3、内面へ記号、クロ左、やや焼け並み
654	65	須恵器 斧背	斧	2区 谷下部 A-3 上層褐色土	①(12.6)②(3.1)	天井部外曲/3/3回転へ形状波状、口縫部横二段	A密 Bやや不良 C褐色	定形、内面へ記号、クロ左
655	65	須恵器 斧背	斧	2区 谷下部 B-2 非褐色土	①(12.8)②(4.5)	天井部外曲/2/3回転へ形状波状、内面不完全方舟ナダ、口縫部横二段波状の段	A密 B良好 C内:灰~灰黑色	残存2/3、内面へ記号、クロ右
656	65	須恵器 斧背	斧	2区 谷下部 A-2 14層	①(13.8) ②(3.8)	天井部外曲/2/3回転へ形状波状、内面不完全方舟ナダ、口縫部横二段波状の段	A密 B良好 C内:灰~灰黑色	残存3/4、内面へ記号、外一部灰被
657	65	須恵器 斧背	斧	2区 谷下部 A-1-B-1 14~16-2層	①(13.1) ②(3.8)	天井部外曲/2/3回転へ形状波状、内面不完全方舟ナダ、口縫部横二段波状の段	A密 Bやや不良 C褐色	残存3/4、内面へ記号
658	65	須恵器 斧背	斧	2区 谷下部 A-2 14層	①(13.2) ②(3.8)	天井部外曲/2/3回転へ形状波状、内面不完全方舟ナダ、口縫部横二段波状の段	A粗砂含む Bやや不良 C内:灰~青灰色	残存1/2、内面へ記号、クロ左
659	65	須恵器 斧背	斧	2区 谷下部 C-3 4層	①(13.5)②(3.5)	天井部外曲/2/3回転へ形状波状、内面不完全方舟ナダ、口縫部横二段波状の段	A密 B良好 C内:灰~灰黑色	残存1/2、内面へ記号、クロ右

第32表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表②

遺物番号	国	種類	器形	出土地点	状態(個)	測定値(高さ・幅等の寸法)	調整・技法の特徴		A歯白 B後成 C色調	備考
							天井部外側/3回転へ削り、内面不定方向ナメ、口縁端部に沈継状の痕	A歯含む B良好 CN灰~黒		
660	65	須恵器	坪壠	25K 谷下部 A-3 上 埋褐色土	①(13.0)②4.6					完形、焼け跡のみ、内面へ記号、ロクロ左、内面一部反復無
661	65	須恵器	坪壠	25K 谷下部 B-2 14 層	①(14.0)②4.3					残存1/2、ロクロ左、外表面全体的に銀誠
662	65	須恵器	坪壠	25K 谷下部 A-1 14 ~16-2層	①(14.0)②4.4					残存1/3、ロクロ右
663	65	須恵器	坪壠	25K 谷下部 A-1+B- 1 14~16-2層	①(14.1)②4.2					残存2/3、内面へ記号、ロクロ左
664	65	須恵器	坪壠	25K 谷下部 B-1 14-19層	①(14.3)②4.1					残存2/3、内面へ記号、ロクロ左
665	65	須恵器	坪壠	25K 谷下部 B-3 上 埋褐色土	①(12.9)②3.8					1/3残存、内面へ記号、外面部被覆無し、焼け跡並み
666	65	須恵器	坪壠	25K 谷下部 B-3 1層 ~16-2層	②(2.5)②1.5					1/3残存、内面へ記号、外面部被覆無し、焼け跡並み
667	65	須恵器	坪壠	25K 谷下部 上層	①(24.8) ②(2.3)					つまみと天井の一端残存
668	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 B-3	①(10.2)②4.2					1/2残存、天井部中央欠、ロクロ右、坪壠面
669	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 A-1 14 ~16-2層	①(11.9)②4.3 ②(3.5)					残存2/1、底部中央欠、内面へ記号、焼け跡並み
670	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 A-1+B- 1 14~16-2層	①(16.4)②4.5 ②(3.3)					残存2/3、裏面に墨跡留神書き、焼け跡・隙れ
671	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 A-3 上 埋褐色土	①(10.6)②3.7 ②(3.5)					1/2完形、全体的に磨誠
672	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 A-3 上 埋褐色土	①(11.9)②3.6 ②(3.4)					底部外側/3回転へ削り、内面不定方向ナメ
673	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 B-2 上 埋褐色土	①(11.9)②5.6 ②(3.2)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
674	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 A-1+B- 1 14~16-2層	①(11.1)②3.9 ②(3.8)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
675	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 B-2 14 層	①(11.2)②4.3 ②(3.5)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
676	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 A-2 14 層	①(11.2)②4.6 ②(3.3)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
677	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 C-3 6 ~8層	①(11.0)②4.4 ②(3.0)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
678	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 A-1+B- 1 16-12層	①(11.2)②4.9 ②(3.7)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
679	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 B-3	①(11.0)②4.8 ②(4.0)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
680	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 B-3	①(12.0)②4.3 ②(3.4)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
681	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 B-3	①(15.6)②5.2 ②(4.6)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
682	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 A-2 14 層	①(12.8)②5.0 ②(4.9)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
683	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 C-3 3- 4層	①(13.0)②4.6 ②(3.2)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
684	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 B-3	①(11.7)②3.8 ②(2.5)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
685	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 B-3	①(14.2)②3.4 ②(3.8)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
686	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 A-1+B- 1 14~16-2層	①(11.3) ②(2.5)					底部外側/2回転へ削り、内面不定方向ナメ
687	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 A-3 上 埋褐色土	①(10.2)②6.9					坪壠外側/内カキメ、内面に剥離で調節不良、焼け跡無し
688	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 A-1+B- 1 14~16-2層	②(10.3) ②(3.5)					坪壠外側/内カキメ、内面に剥離で調節不良、焼け跡無し
689	66	須恵器	身舟	25K 谷下部 B-2	②(10.3) ②(3.1)					脚部外側/上・中内カキメ、内面に剥離で調節不良、焼け跡無し

第33表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表(23)

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	特徴(cm)	調査・技法の特徴	A動土 B機成 C色調			備考
							①口径×底面 径×高さ	②口径×最大径 ×高さ	③口径×最大径 ×高さ	
690	67	須恵器	高杯 縁	2IK 谷下部 B-3 上 縁褐色上	①20.5 ②11.4	脚部外側カキメ、中位に波状文、沈み 3、3方向異方形の長脚2段スカリ、内 面シボリ痕	A砂 細かむ B良好 C内: 黄灰~黑色、外: 黄灰~暗灰色	B良好	C灰色	杯底欠、脚部は既完存、内外面一 部灰被り
691	67	須恵器	高杯 縁	2IK 谷下部 C-2 14 縁	②7.1	脚部外側カキメ、内面回転ナデ、下位カキ メ、内面シボリ痕	A密 B良好 C内: 黑色含む B良好 C灰色	B良好	C灰色	椎形脚部下平、端縁欠
692	67	須恵器	高杯	2IK 谷下部 C-3 3- 4層	②10.0 脚基盤径3.2	脚部外側カキメ、内面回転ナデ、坪底部 内面不均方向ナデ	A密 B良好 C内: 黄灰~黑色	B良好	C灰色	脚部残存、端縁欠、脚部外側シボリ 痕
693	67	須恵器	高杯	2IK 谷下部 A-1+B- 1 14~16-2層	②7.5 ③13.5	脚部内面回転ナデ、坪底部外側面回転 ヘラ割れ、内面灰斑?	A密、細少し含む B良好 C灰色	B良好	C灰色	坪底部~脚部残存、底部1/3、脚部 内面~底部内面一部灰被り
694	67	須恵器	高杯	2IK 谷下部 C-3 6 縁	②9.5 ③9.5	外側面カキメ、下位沈み2条、内面回 転ナデ	A密 B良好 C内: 黄灰~黑色	B良好	C灰色	椎形脚部下平1/4、外面一部灰被り
695	67	須恵器	高杯	2IK 谷下部 C-3 6 縁	②7.2	脚部外側基部~中位カキメ、下位に横 脚基盤径4.0	A密 B良好 C内: 黄灰~黑色	B良好	C灰色	坪底部~脚部中位、杯底繋がり、復 合繋れ
696	67	須恵器	縁?	2IK 谷下部 B-3 中 縁褐色上	②7.2	体底外側格子子口タタキ模ナデ、他に同 軸ナデ、体底内面~底格子子口タタキ、 外面頂部沈み2条	A砂粒や多く含む B良好 C暗灰色	B良好	C暗灰色	口縫~体底上位破片
697	67	須恵器	手縫 縁	2IK 谷下部 C-3 3 縁	③0.0~3.6	内外面ナデ	A密 Bやや不良 C灰色	B良好	C灰色	完形
698	67	須恵器	提板	2IK 谷下部 B-3	①(11.8) ②7.0~10.1	体底外側カキメ、体底内面回転ナデ、 横同心円切出当て、他に2段スカリ	A砂粒含む B良好 C暗灰~黑色	B良好	C暗灰色	口縫~肩部1/4、口縫底部内面~体 底内面灰被り
699	67	須恵器	提板	2IK 谷下部 B-3	②7.1	口縫部外側カキメ沈没1条、体底外 面カキメ含む、内面回転ナデ、瓶底技术	A密、砂粒や多く含む B良好 C内: 黄灰~黑色、外: 黄灰~黑色	B良好	C暗灰色	口縫底部~体底1/4、背面に輪状把 手、外: 一部灰被り
700	67	須恵器	提板	2IK 谷下部 B-3	②9.5 ③14.0	口縫部外側カキメ、口縫~体底内面回 転ナデ、体底黒漆技術	A密 B良好 C暗灰~黑色	B良好	C暗灰色	口縫1/2~体底下位1/4、外面自然 輪~灰被りのため調査不明
701	67	須恵器	提板	2IK 谷下部 A-1+B- 1 14~16-2層	①11.8 ②7.0~3.3	口縫部外側カキメ後波状文、脚部内面 ナデ、他に内面ナデ	A密、細少や多く含む B良好 C内: 黄灰~黑色、外: 黄灰~黑色	B良好	C暗灰色	口縫部完存、体底2、口縫部外 面ハゲ記号
702	67	須恵器	縁	2IK 谷下部 A-2 14 縁	②7.4 ④9.4	体底外側回転~2割りナデ、底縫外 面回転~2割り、内面回転ナデ	A砂粒含む B良好 C暗灰色	B良好	C暗灰色	体底1/半腰有、口縫下平残存、底 部内面に不整形凹凸
703	67	須恵器	縁又 は直	2IK 谷下部 A-1+B- 1 14~16-2層	①(10.6) ②9.5	外側カキメ後波状文、他に回転ナデ	A密 B良好 C内: 暗灰色、外: 灰色	B良好	C暗灰色	口縫部1/2残存、縁部21/8
704	67	須恵器	縁又 は直	2IK 谷下部 A-1 14 縁	①11.7 ②9.5	口縫部外側カキメ波状文、他に回転ナ デ	A密、細少や多く含む B良好 C内: 黄灰~黑色、外: 黄灰~黑色	B良好	C暗灰色	縁~口縫部3/4、外: 一部灰被り
705	68	須恵器	短縁	2IK 谷下部 B-3 上 縁褐色上	②18.0~20.0 ④10.0	脚部下位~底縫外側手すり割れ後ナ デ、他に2段スカリ	A密 B良好 C灰色	B良好	C灰色	体底1/4~底部3/4残存、口縫部欠、 口縫部脱落
706	68	須恵器	短縁	2IK 谷下部 B-2 上 縁褐色上	①(7.6)~22.5 ④12.0	脚部外側波状文、沈没1条、底縫外 側手すり割れ9条、他に内面ナデ	A密、砂粒少く含む B良好 C内: 黄灰~黑色、外: 黄灰~黑色	B良好	C暗灰色	口縫~体底下位1/4、底縫欠、脚部 内面~ハゲ
707	68	須恵器	短縁	2IK 谷下部 B-2 14 縁	②7.9~7.0 ④5.0~12.7	外側脚部底被り、口縫下部外側工具に よじらかれたナデ、底縫外側手すり割 れ9条、他に内面ナデ	A密 B良好 C内: 斜部外; 黄灰~ 黄灰~黑色、外: 黄灰~黑色	B良好	C暗灰色	口縫~体底下位1/4、下位~斜部外; 黄 灰~黑色、内: 黄灰~黑色、外: 黄灰~黑色
708	68	須恵器	短縁	2IK 谷下部 B-2	①(8.2)~25.7 ④13.5	体底外側カキメ、他に回転ナデは回 転ナデ	A砂粒含む B良好 C内: 黄灰~黑色、外: 黄灰~黑色	B良好	C暗灰色	口縫~体底下位1/4、内面側底 部、外: 黄灰~黑色
709	68	須恵器	短縁	2IK 谷下部 B-2	①(7.6)~25.9 ④12.0	体底外側カキメ、他に回転ナデは回 転ナデ	A密 B良好 C内: 黄灰~黑色、外: 黄灰~ 黄灰~黑色	B良好	C暗灰色	口縫~体底1/4、外: 一部灰被り、 内面側内面~ハゲ
710	68	須恵器	縁	2IK 谷下部 A-1+B- 1 14~16-2層	①12.0~24.3 ④16.4	口縫部外側波状文、体底外側上位~中位 ハケナメ工具による回転ナデ、下位回転 ナデ9条、他に回転ナデ	A密 B良好 C内: 黄灰~灰白 C内: 黄灰~淡褐色	B良好	C暗灰色	口縫部1/4~体底下位2/3、底部欠
711	68	須恵器	縁	2IK 谷下部 A-1+B- 1 13~14-2層	②12.5 ④12.6	口縫部外側カキメ後波状文、他に回 転ナデ	A砂粒含む B良好 C内: 黄白灰~淡褐色	B良好	C暗灰色	口縫~傾斜1/4、外: 一部灰被り 712~14同一個体
712	68	須恵器	直	2IK 谷下部 A-1+B- 1 13~16-2層	②20.5 ④24.4	錐孔化瓦形行き跡模ナデ、内面回 転ナデと直角ナデ、内面カキメ、外 面カキメナデ、内面心内切馬鹿脚ナ デ	A密、黑色含む B不良 C内: 黄灰~明褐色、外: 黄白灰~白黃褐色	B良好	C暗灰色	体底1/2、TII11同一個体
713	68	須恵器	直	2IK 谷下部 B-3 中 縁褐色上	①(33.2)~26.8 ④28.6	体底外側タキナダ(底被)、内面タ キナダ、他に回転ナデ	A砂粒含む B良好 C内: 黄灰~黑色	B良好	C暗灰色	口縫~体底上位1/6、口縫部内外 灰被り
714	68	須恵器	縁	2IK 谷下部 B-3 上 縁褐色上	①(36.6) ④29.4	体底外側内格子子口タタキ後ナデ、内面中 位タタキ~斜カキメ、他は回転ナデ	A密 B良好 C灰色~黒灰色	B良好	C暗灰色	口縫部完存、体底上位1/4、脚部下 位に手すり痕
715	69	須恵器	鋸合	2IK 谷下部 B-1 16-1層	②脚基盤径7.0 ④26.8	脚部カキメら2条の沈み~波状文、3 回2段の長い方舟スカリ	A砂粒、黑色含むや多く含む B良好 C内: 黄灰~黑色、外: 黄灰~黑色	B良好	C暗灰色	残存台底座~脚上半、焼け菓子置 ル
716	69	須恵器	縁	2IK 谷下部 A-1+B- 1 14~16-2層	②19.6 ④28.6	体底内面回転心内切馬鹿脚、外面平 タキナデ9条、口縫部外側カキメ後波状 文、他に回転ナデ	A密、砂粒や多く含む B良好 C内: 黄灰~灰白色、外: 黄灰~黑色	B良好	C暗灰色	口縫~体底上位1/2、焼け菓子
717	69	須恵器	縁	2IK 谷下部 B-3	①(33.6) ④28.6	口縫部外側カキメ後波状文、体底外側 内面心内切馬鹿脚、外面平タキナデ、内面 心内切馬鹿脚	A密 B良好 C暗灰~灰色	B良好	C暗灰色	口縫~脚部3/4、脚部外側に工具 痕
718	69	須恵器	縁	2IK 谷下部 B-2 14 縁	①(15.4) ②6.7	口縫部外側カキメ後波状文、体底内面 心内切馬鹿脚、口縫部内面、体底外 面灰被りのため不明	A砂粒含む B良好 C灰色	B良好	C暗灰色	口縫~体底上位1/3、口縫内~体 部外側灰被り、粒状の付着物

第34表 井手ヶ浦窪塹跡第2次調査出土遺物観察表②

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	出典(sai) ①(1)種別大 ②(2)種別中 ③(3)度元種	調査・技法の特徴	A歯土 B焼成 C色調	備考
719	69	須恵器	甕	2区 谷下部 B-3	①(21.0) ②西12.1	口縁部外面波状文、体部外面平行タキ 今後カキメ、内面同心円当て具	A砂粒含む B良好 C明青灰色・暗緑灰色	口縁～肩部1/3、焼け歪み
720	69	須恵器	甕	2区 谷下部 B-3	①(21.8) ②西9.4	口縁部外面波状文、体部外面平行タキ 今後カキメ、内面同心円当て具	A暗・細砂少々含む B良好 C灰・黒色、外・灰白～灰色、黑色	口縁～肩部1/3、口縁部内・体部外 面被りのため調査不鮮明
721	69	須恵器	甕	2区 谷下部 B-3	①(21.6) ②西8.0	口縁部外面波状文、体部外面平行タキ 今後カキメ、内面同心円当て具	A砂粒含む B良好 C灰・黄・黄褐色、外・暗灰～灰色、黑色	口縁～肩部1/6、口縁部内・体部外 面被りのため調査不鮮明
722	70	須恵器	甕	2区 谷下部 B-2	①(22.2) ②西8.2	外面波状文、他の回転ナデ	A暗・細砂少々含む B良好 C内・黄灰～黒灰色、外・灰色・黒色	口縁部1/4、外面部灰被り
723	70	須恵器	甕	2区 谷下部 A-1-B- 1 16-1-2層	①(22.7) ②西9.2	体部内面同心円当て具後回転ナデ、外 面波状文、他の回転ナデ、口縁部外面波状文、 今後カキメ、他の回転ナデ	A砂粒含む B不良 C黄褐～褐褐色	口縁～肩部1/2、口縁部内・体部外 面被りのため記号
724	70	須恵器	甕	2区 谷下部 B-2	①(23.0) ②西8.0	外面波状文、他の回転ナデ	A砂粒含む B良好 C内・灰色、外・灰色・黑色	口縁部1/4、外面部記号、外面部 一端灰被り
725	70	須恵器	甕	2区 谷下部 B-3	①(22.6) ②西8.5	体部外面平行タキ先後カキメ、内面同心 円当て具、他の回転ナデ	A暗・細砂少々含む B良好 C内・黄灰～暗灰色、外・暗灰褐色	口縁～肩部1/4、口縁部外面部記 号、内面部灰被り
726	70	須恵器	甕	2区 谷下部 A-1-B- 1 14-16-2層	①(23.4) ②西8.6	体部内面同心円当て具後回転ナデ、 口縁部外面波状文、回転ナデ、他の回 転ナデのため不可	A砂粒含む B良好 C内・灰色、外・灰被り	口縁～肩部1/4、口縁部内面・体部 外面部灰被り
727	70	須恵器	甕	2区 谷下部 A-2-3 上層褐色土	①(24.4) ②西7.2	外面波状文、他の回転ナデ	A暗・砂粒少々多く含む B良好 C暗褐色、外・灰・黑色	口縁～肩部1/4、外面部記号、内 面部被り・焼け跡
728	70	須恵器	甕	2区 谷下部 B-3	①(27.2) ②西10.7	口縁部外面波状文、体部外面タキ後 カキメ、内面同心円当て具	A砂粒含む B良好 C内・灰～暗灰色、外・明青灰色	口縁～肩部1/6、体部外面灰被りの ため調査不鮮明
729	70	須恵器	甕	2区 谷下部 A-1 14 ~16-2層	①(29.3) ②西4.8	内面同心円回転ナデ	A暗・砂粒少々含む B良好 C内・灰色、黑色、外・黑色	口縁部小片、外面部記号
730	71	須恵器	甕	2区 谷下部 B-3	①(26.0) ②西9.4	口縁部外面波状文、体部外面平行タキ 今後カキメ、内面同心円当て具	A砂粒含む B良好 C灰～暗灰色	口縁～肩部1/2、口縁部内・体部外 面被り、体部焼け跡
731	71	須恵器	甕	2区 谷下部 A-2 14	①(25.6) ②西9.8	口縁部外面カキメ後波状文、体部外面 平行タキ先後カキメ、内面同心円当て具、 頭部内面に白帯	A砂粒少々含む B良好 C青褐色	口縁～肩部1/4、外面部被り
732	71	須恵器	甕	2区 谷下部 B-3	①(26.6) ②西12.5	口縁部外面波状文、体部外面平行タキ 今後カキメ、内面同心円当て具、他の回 転ナデ	A暗・良好 B内・黒～灰色、黄灰 色、口縁部外・黑色、体外・暗灰色	口縁2/3・体部上段1/4、口縁部内 面被り
733	71	須恵器	甕	2区 谷下部 B-2	①(26.0)②西5.9	外面波状文、他の回転ナデ	A砂粒含む B良好 C内・暗褐色、外・暗灰褐色	口縁部1/4、外面部記号
734	71	須恵器	甕	2区 谷下部 A-1 14 ~16-2層	①(26.8) ②西9.8	外面格子目タキキ、内面同心円当て具	A暗 B良好 C灰色	体部小片、外面部記号
735	72	須恵器	甕	2区 谷下部 B-3	①(27.1) ②西26.8	口縁・一部体部外面タキ後カキメ、内面同心 円回転ナデ、内面同心円当て具	A砂粒含む B良好 C内・青褐色、外・暗褐色	口縁江戸時代～室町時代上段1/4～半 周・口縁部内・体部外面部被り、 外面部灰被り
736	72	須恵器	甕	2区 谷下部 A-2-3 上層褐色土	①(31.0) ②西12.5	外面部カキメ、内面同心円当て具、他の回 転ナデ	A砂粒含む B良好 C内・黄色、外・黑色	口縁～頭部1/6、内面部被り
737	72	須恵器	甕	2区 谷下部 B-3 上 層褐色土	①(27.4) ②西18.4	口縁部外面カキメ後波状文・沈面、 内面同心円当て具、口縁部外・暗褐色	A暗・砂粒少々含む B良好 C内・黄褐色、外・暗褐色	口縁～肩部2/2、口縁部深部、口 縁内・体部外面部被り、焼け跡
738	72	須恵器	大甕	2区 谷下部 B-2	①(44.6) ②西24.2	口縁部外面カキメ後波状文、体部外 面平行タキ後カキメ、内面同心円当て具	A暗・砂粒多々含む B良好 C暗灰～暗灰色	口縁部外壁完存～肩部2/3、焼け跡 のみ、口縁部内・体部外面部被り
739	72	須恵器	大甕	2区 谷下部 B-3 上	①(38.8) ②西20.8	口縁部外面カキメ後波状文・沈面、 内面同心円当て具、口縁部外・暗褐色	A暗・砂粒少々含む B良好 C内・黑色、外・暗褐色	口縁部4/5～肩部2/3、焼け跡、外 面部一端灰被り、外面部黑色斑点・燒 け跡
740	72	須恵器	大甕	2区 谷下部 B-3 上 層褐色土	①(39.5) ②西15.7	口縁部外面カキメ後波状文皮被り、他 の回転ナデ	A暗・砂粒少々含む B良好 C内・黑色、外・黑色	口縁部1/4、内面部被り、内面 黑色斑点
741	72	須恵器	大甕	2区 谷下部 A-2 14	①(37.6)~⑤(51.6) ②西26.4	口縁部外面カキメ後波状文・沈面、 内面同心円当て具、他の回転ナデ	A暗・砂粒少々含む B良好 C暗灰～暗灰色、外・黄褐色	口縁部2/3、焼け跡少々、焼け跡
742	72	須恵器	大甕	2区 谷下部 B-2 14	①(43.6) ②西9.9	外面部目タキキ後カキメ・波状文、 内面同心円当て具付近に内面同心タキ後波状 文、他の回転ナデ	A砂粒・黒色多々含む B良好 C内・黑色、外・黑色	口縁部1/3、外面部黑色斑点
743	73	土師器	甕	2区 谷下部 B-3 中 層褐色土上	①(29.5) ②西6.5	内面同心円当て具のため不明	A暗・砂粒多々含む B不良 C内・褐・黒褐色、外・黒褐色	残存1/4、口縁部内・体部下半段、 颈部外接合痕
744	73	土師器	甕	2区 谷下部 B-3 中 層褐色土上	①(16.8) ②西6.6	口縁部外面カキメ後波状文・沈面、 内面同心円当て具付近に内面同心タキ後波状 文、他の回転ナデ	A暗・良好 B明青褐色 C内・灰褐色～黒褐色、外・明青褐色	口縁部2/3、焼け跡少々、焼け跡
745	73	土師器	甕	2区 谷下部 B-3 中 層褐色土上	①(18.0) ②西6.6	体部外面タキ方向削り、他の回転のため 不明	A暗・砂粒多々含む B不良 C内・褐・黄褐色	口縁～体部上位1/3
746	73	土師器	甕	2区 谷下部 C-3 3- 4層	①(25.6) ②西5.8	内面同心円当て具のため不明	A暗・砂粒多々含む B良好 C明青褐色	口縁部1/3残存、全体的に縮減
747	73	土師器	甕	2区 谷下部 C-3 3- 4層	①(13.2)~⑤(13.6) ②L3	体部内面同心方削り、把手ナデ	A暗・砂粒多々含む B良好 C内・明青褐色、外・灰褐色	把手～接合部残存
748	73	須恵器	坪壠	2区 土手剥がれ 売	天井部分外側1/2工具によるナデ、口縁部 面に比較、内面不定方向ナデ、口縁部 面に凹	A砂粒含む B良好 C内・灰褐色 外・灰褐色	残存4/5、やや焼け歪み、外面部 焼け跡	

第35表 井手ヶ浦窪跡第2次調査出土遺物観察表②

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	法面(cm) ①口縁②底高 ③底面④高さ ⑤口縁面積	調整・技法の特徴	A軸主 B機能 C色調	備考
749	73	須恵器	鉢	2IK 遺構検査時	①(9.8)②6.6 ③底面④高さ ⑤口縁面積	底部内面ナデ、外面灰被りのため不 明、他は凹輪ナデ	A粗、細砂・黒色粒多く含む B良好 C内: 黄灰色、外: 深褐色～黄灰色	残存1/8、底部外面灰被り
750	73	須恵器	坪舟	2IK 遺構検査時	②底高.5 ③(7.4)	底部高台内面斜へ凹輪ナデ、底面 内面ナデ、他は凹輪ナデ	A密、細砂少し含む B良好 C灰色	残存1/8、口縁部欠、坪舟
751	73	須恵器	組皿 盆	2IK 遺構検査時	①(9.6)②底5.6 ③(13.5)	体～脚部外面カキメ、他は凹輪ナデ	A細砂含む B良好 C灰色	残存1/5、底部欠
752	73	須恵器	瓶又 は壺	2IK 表土剥離後 表	①(6.4) ②底11.3	体部外面施子日々タタキ、内面～口縁部 内外口ナデ	A粗、細砂少し含む Bやや不良 C灰色	口縫～底部上位1/4

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	法面(cm) ①長径②短径 ③底面④高さ ⑤口縁面積	調整・技法の特徴	A軸主 B機能 C色調	備考
753	74	石製品	打製石器	2IK 岩下部C-3 4層	①(1.9)②0.28 ③0.2	細面状を呈する		先端欠、重量0.78g 安山岩製、弦90.45cm
754	74	石製品	打製石器	2IK 岩下部A-3 楔形 土上	②(2.8)②0.53③1.7	やや斜面無し、細面状を呈する		完存、重量1.67g 安山岩製、弦90.45cm
755	74	鉄製品	鉄錐	I-A区 北東斜面C-3	①(2.0)②(0.2) ③0.45			葉のみ、重量0.7g 先端に近い
756	74	鉄製品	鉄錐	I-A区 北東斜面C-3	①(4.0)②0.5 ③0.7			葉のみ、重量4.05g
757	74	鉄製品	鉄津	I-A区 北東斜面B-3	①(6.15)②2.7 ③10			完存、重量141.43g 底土付
758	74	鉄製品	鉄津	I-A区 北東斜面C-2	①(4.25)②2.15 ③4.75			完存、重量61.81g
759	74	陶製品	粘土車	I-A区 北東斜面B-2- C-2間～ベルト	②(2.9)②1.0	全面ナデ、一部擦過状の痕跡	A密、1mm以下白色粗砂僅かに含む B良好 C灰色～灰白色	残存4.7、孔径0.98cm 重量6.59g
760	74	石製品	粘土車	I-A区 北東斜面C-3	①(4.70)②1.3	全面研磨		残存2.5、孔径0.7cm 重量6.0kg 底土附
761	74	石製品	粘土車	I-A区 北東斜面B-2- C-2間～ベルト	①(3.75)②1.15	全面研磨		残存2.5、孔径0.75cm 重量6.61g 底土附
762	74	陶製品	粘土車	I-A区 北東斜面C-2- B-2	①(5.35)②1.35	全面ナデ、一部擦過状の痕跡	A密、1mm以下白色粗砂僅かに含む B良好 C灰色～灰白色	1日2回完存、孔径0.65cm 重量43.93g 底土附
763	74	石製品	粘土車	I-A区 北東斜面B-2- C-2間～ベルト	①(4.55)②0.95	全面研磨		1日2回完存、孔径0.65cm 重量4.96g 底土附
764	74	石製品	砾石	I-A区 北東斜面C-3	①(9.89)②(0.55) ③4.8	底面が前面残る、側面に研磨による成形		残存1/2、重量(135.50g) 底土附砂岩製 土上破損、剥離
765	74	石製品	磨削石	2IK 岩下部B-3	①(13.35)②3.1 ③5.65	全面研磨		1日2回完存、重量300g 底土附岩板?
766	75	土製品	不明 土質品	I-A区 北東斜面C-3	①(6.9)②(0.1) ③(0.2)	内面ケズリ?摩滅激しい	Aやや粗、1mm程の白色粗砂・赤色粒子 少し含む B不良 C内: 灰黃色、外: 灰白色	破片
767	75	土製品	不明 土質品	I-A区 北東斜面B-3	①(12.95)②(0.2) ③(0.4)	内面ケズリ?摩滅激しい	Aやや粗、1mm程の白色粗砂少し含む B不良 C内: 灰白色	破片
768	75	土製品	不明 土質品	I-A区 北東斜面B-3	①(8.9)②(0.2) ③(13.5)	内面ケズリ?摩滅激しい	Aやや粗、1mm以下の白色粗砂少し含む B不良 C内: 灰白色、外: 灰白色～ 灰黄色	破片
769	76	土製品	不明 土質品	I-A区 北東斜面B-3	①(11.25)②(0.8) ③(0.65)	画面ともケズリ?摩滅激しい	Aやや粗、1mm程の白色粗砂少し含む B不良 C灰白色	破片
770	76	土製品	不明 土質品	I-A区 北東斜面B-3- C-2間～ベルト	①(10.45)②(0.8) ③(0.12)	画面ともケズリ?摩滅激しい	Aやや粗、1～2mmの白色粗砂多少含む B不良 C内: 灰白色、外: 灰白色	破片
771	76	土製品	不明 土質品	I-A区 北東斜面B-3	①(11.85)②(1.05) ③(0.11)	摩滅激しく不明	Aやや粗、1mm程の白色粗砂少しあ B不良 C内: 灰白色、外: 淡黄色	破片
772	76	土製品	不明 土質品	2IK 7-9号窓盤 底層	①(0.9)②残7.0 ③(0.7)	画面タキを後ナデ	Aやや粗、1～2mmの白色粗砂多少含む B不良 C内: 灰白色	破片
773	77	陶製品	陶馬	I-A区 北東斜面C-3	①(2.8)②(2.95) ③(1.6)	指による成形	A密、1mm以下の白色粗砂少し含む B良好 C灰色	脚のみ
774	77	陶製品	陶馬	I-A区 北東斜面C-3	①(2.0)②(2.8) ③(1.2)	指による成形	A密、1mm以下の白色粗砂少し含む B良好 C灰色	脚先のみ
775	77	土製品	土馬	I-A区 北東斜面B-2	①(2.5)②(2.2) ③(1.5)	指による成形	A密、1mm以下の白色粗砂少し含む B不良 C内: 黄褐色	脚のみ
776	77	陶製品	陶馬	I-A区 北東斜面C-3	①(2.1)②(2.8) ③(1.0)	指による成形	A密、1mm以下の白色粗砂少し含む B良好 C灰色	脚のみ

第36表 井手ヶ浦窪塚跡第2次調査出土遺物観察表②

遺物番号	国	種類	器種	出土地点	法面(cm) ①長さ②厚さ ③幅 ④高さ ⑤縦 ⑥横 ⑦深さ	調査・技法の特徴	A端上 B端底 C色調	備考
777	77	土製品	土器	I-A区 北東斜面B-2	(Y)2.40(?)G.85 (X)2.35	指による成形	A底, 1mm以下 の白色粗砂少し含む B不良 Cにぶつ・褐色	脚のみ
778	77	土製品	土器	I-A区 北東斜面B-2	(Y)2.5(?)G.3 (X)1.6	指による成形	A底, 1mm以下 の白色粗砂少し含む B不良 C褐色	脚のみ
779	77	陶製品	陶器	I-A区 北東斜面C-3	(Y)2.69(?)G.4 (X)1.6	指による成形	A底, 1mm以下 の白色粗砂少し含む B良好 C褐色	脚のみ
780	77	陶製品	陶器	I-A区 北東斜面C-3	(Y)2.32(?)A.50 (X)1.6	指による成形	A底, 1mm以下 の白色粗砂少し含む B良好 C褐色	脚のみ
781	77	陶製品	陶器	IJK 遷拂柱正面	(Y)4.72(?)A.50 (X)2.65	ケヅリと指による成形	A底, 1mm以下 の白色粗砂僅かに含む B良好 C褐色	脚のみ
782	77	陶製品	陶器	I-A区 北東斜面C-3	(Y)6.65(?)D.5 (X)4.55	指による成形、尻は網突	A底, 2~3mmの白色粗砂少し含む B良好 C褐色~灰白色	残存1/2
783	77	土製品	土器	I-A区 北東斜面B-2	(Y)7.35(?)G.45 (X)3.65	指による成形	A底, 1mm以下 の白色粗砂少し含む B不良 C浅黄褐色、褐色	残存2/3
784	77	陶製品	陶器	IJK 試掘時表鉢	(Y)6.52(?)D.35 (X)3.75	指による成形、尻は網突	A底, 1mm以下 の白色粗砂少し含む B良好 C褐色	残存1/2
785	77	陶製品	陶器	I-A区 北東斜面C-3	(Y)11.65(?)G.6 (X)2.80	指による成形	A底, 1mm以下 の白色粗砂少し含む B良好 C褐色	脚2本欠
786	77	陶製品	陶器	I-A区 北東斜面C-2	(Y)4.45(?)D.2 (X)4.75	指による成形、手側部分は沈編	A底, 1mm以下 の白色粗砂少し含む B良好 C灰色~暗灰色	脚先のみ欠
787	77	陶製品	陶器	I-A区 北東斜面C-2	(Y)10.32(?)A.40 (X)2.25	指による成形、口・鼻は網突	A底, 1mm以下 の白色粗砂少し含む B良好 C褐色~灰白色、明オリーブ褐色	脚大

第37表 井手ヶ浦窯跡第2次調査出土遺物観察表⑰

図 版



1 1-A区全景（南西から）



2 1-A区全景（北東から）



3 1-B区全景（北東から）



1 1-A区堆積状況① (C-C'間上半、南西から)



2 1-A区堆積状況②
(B-B'間下半、南から)



3 1-A区堆積状況③
(A-A'間下半、南から)



1 2区全景
(空中写真、上が南東)



2 2区上空から北を臨む（空中写真、1区部分は工事済）



3 2区遭構検出後全景（北から）



1 谷下部グリッドC-2・3間土層
(SX2縦断南半、北東から)



2 谷下部グリッドB-2・3間土層
(SX2縦断北半、北東から)



3 谷下部グリッドB-2・C-2
間東半土層 (SX2西半、北西
から)

1 谷下部グリッドB-3・C-3
間西半土層 (SX2東半、北西
から)



2 谷下部グリッドB-3・C-3
間東半土層 (9号窯跡前庭部横
断、西から)



3 谷下部グリッドB-2・C-2
間西半土層 (10号窯跡焼成部横
断①左半、北西から)





1 7号窯跡最終面全景
(北西から)



2 7号窯跡石組み構築面全景
(北西から)



3 7号窯跡最終操業面 燃焼部
石組み検出状況 (北から)



1 7号窯跡焼成部 横断土層
(北西から)



2 7号窯跡焼成部 横断土層①
(北西から)



3 7号窯跡焼成部 横断土層②
(北西から)



1 7号窯跡燃焼部 縦断土層
(北東から)



2 7号窯跡焼成部 天井部残存
状況 (北西から)



3 7号窯跡焼成部下位 縦断土層
(北東から)



1 7号窯跡焼成部中位 縦断土層①(北東から)



2 7号窯跡焼成部中位 縦断土層②(北東から)



3 7号窯跡排煙部 縦断土層(北から)

図版10



1 7号窯跡最終操業面 前庭部
縦断土層（西から）



2 7号窯跡焼成部下位 右側壁
貼壁残存状況（北から）



3 7号窯跡焼成部下位 左側壁
貼壁残存状況（西から）



1 7号窯跡焼成部上位 右側壁
貼壁残存状況（北から）



2 7号窯跡焼成部上位 左側壁
貼壁残存状況（西から）



3 7号窯跡最終操業面 遺物出土状況①（北西から）



1 7号窯跡最終操業面 遺物出土状況②（北から）



2 7号窯跡最終操業面 窯体内完掘状況（北西から）



3 7号窯跡最終操業面 排煙口検出状況①（西から）



1 7号窯跡最終操業面 排煙口
検出状況②（東から）



2 7号窯跡排煙部溝検出状況（南
東から）



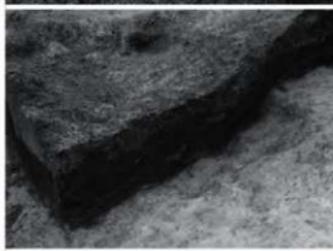
3 7号窯跡排煙部溝土層①（南
から）



1 7号窯跡排煙部溝土層②（北から）



2 7号窯跡最終操業面 断ち割り状況（北西から）



3 7号窯跡前部 断ち割り状況（縦断、西から）



4 7号窯跡燃焼部下位 断ち割り状況（縦断、西から）



5 7号窯跡燃焼部 断ち割り状況（横断左、北西から）



6 7号窯跡燃焼部上位 断ち割り状況（縦断、西から）

1 7号窯跡焼成部下位 断ち割り状況（縦断、西から）



2 7号窯跡焼成部下位 断ち割り状況（横断左、北西から）



3 7号窯跡焼成部下位 断ち割り状況（横断右、北西から）



4 7号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（縦断、西から）



5 7号窯跡焼成部中～上位 断ち割り状況（縦断、西から）



6 7号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（横断左、北西から）

7 7号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（横断右、北西から）

8 7号窯跡焼成部上位 断ち割り状況（縦断、西から）

9 7号窯跡最終操業面 排煙口付近断ち割り状況（南西から）

図版16



1 7号窯跡一次操業面 排煙口
検出状況（南から）



2 7号窯跡石組み構築面検出状況
（北西から）



3 7号窯跡燃焼部 右側壁石組
み検出状況（北から）



1 7号窯跡燃焼部 左側壁石組み検出状況（西から）



2 7号窯跡石組み構築・一次操業面 断ち割り状況（北西から）



3 7号窯跡右側壁石組み 断ち割り状況（北西から）



1 7号窯跡一次操業面 燃焼部
右側壁検出状況（石組み除去後、北から）



2 7号窯跡前庭部西半 横断土
層（北西から）



3 7号窯跡前庭部東半 横断土
層（北西から）



1 7号窯跡前底部下半 縦断土層（南西から）



2 8号窯跡最終面全景（北西から）



3 8号窯跡一次操業面全景（北西から）



1 8号窯跡燃焼部 縦断土層上層（北から）



2 8号窯跡燃焼部 縦断土層下層（西から）



3 8号窯跡焼成部口 天井部残存状況（北西から）



1 8号窯跡焼成部口付近 縦断
土層（北から）



2 8号窯跡焼成部 横断土層①
(北西から)



3 8号窯跡焼成部 横断土層②
(北西から)



1 8号窯跡焼成部 縦断土層下層（北から）



2 8号窯跡焼成部上位 縦断土層（北から）



3 8号窯跡排煙部 縦断土層①（北から）



1 8号窯跡排煙部 縦断土層②
(東から)



2 8号窯跡最終操業面 排煙口
検出状況 (南から)



3 8号窯跡最終操業面 排煙部
右貼壁 (北東から)



1 8号窯跡最終操業面 排煙部
左貼壁（南西から）



2 8号窯跡排煙部溝土層（東から）



3 8号窯跡最終操業面 断ち割り状況（北西から）

1 8号窯跡燃焼部 断ち割り状況（縦断、南から）



2 8号窯跡燃焼部 断ち割り状況（横断、北西から）



3 8号窯跡焼成部下位
断ち割り状況（縦断、
南から）



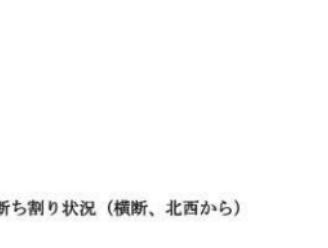
4 8号窯跡焼成部中位
断ち割り状況（縦断、
西から）



5 8号窯跡焼成部 断ち
割り状況（横断左、北
西から）



6 8号窯跡焼成部 断ち
割り状況（横断右、北
西から）



7 8号窯跡焼成部中～上
位 断ち割り状況（縦
断、北から）

8 8号窯跡焼成部上位
断ち割り状況（縦断、
北から）

9 8号窯跡焼成部上位 断ち割り状況（横断、北西から）



1 8号窓跡最終操業面 排煙口付近断ち割り状況（南西から）



2 8号窓跡一次操業面 排煙口付近検出状況（南西から）



3 8号窓跡一次操業面 断ち割り状況（北西から）



1 9号窯跡最終操業面全景（北西から）



2 9号窯跡燃焼部下位 縦断土層（南西から）



3 9号窯跡燃焼部上位 縦断土層（南西から）



1 9号窯跡焼成部中位 縦断土層（北から）



2 9号窯跡焼成部 天井部残存状況（北西から）



3 9号窯跡焼成部上位～排煙部縦断土層（南西から）



1 9号窯跡焼成部 横断土層①
(北西から)



2 9号窯跡焼成部 横断土層②
(北西から)



3 9号窯跡最終操業面 遺物出土状況① (北西から)



1 9号窯跡最終操業面 遺物出土状況②（北西から）



2 9号窯跡排煙部溝土層（北西から）



3 9号窯跡最終操業面 断ち割り状況（北西から）

1 9号窯跡燃焼部 断ち割り状況（縦断、西から）



2 9号窯跡燃焼部 断ち割り状況（横断左、西から）



3 9号窯跡燃焼部 断ち割り状況（横断右、北西から）



4 9号窯跡燃焼部～焼成部下位 断ち割り状況（縦断、西から）



5 9号窯跡焼成部下～中位 断ち割り状況（縦断、西から）



6 9号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（横断左、北西から）



7 9号窯跡焼成部中位 断ち割り状況（横断右、北西から）



8 9号窯跡燃焼部中位 断ち割り状況（縦断、西から）



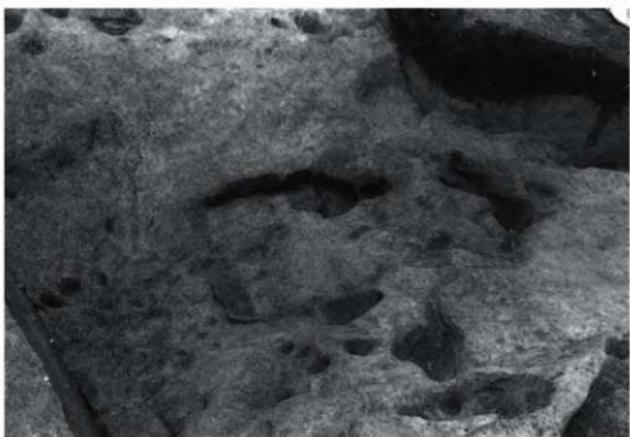
1 9号窓跡燃焼部 舟底状ピット検出状況（北西から）



2 10号窓跡最終面全景（北西から）



3 10号窓跡一次操業面全景（北西から）



1 10号窯跡窯体検出状況①（7号窯跡前庭部床面、右奥は7号窯跡灰原灰層、東から）



2 10号窯跡窯体検出状況②（同上、右奥は7号窯跡前庭部灰層、西から）



3 10号窯跡燃焼部～焼成部下位
縦断土層上層（谷下部グリット
ドB-1・2間、北東から）



1 10号窯跡焼成部～焼成部下位
縦断土層下層（西から）



2 10号窯跡焼成部中位 縦断土層上層（北東から）



3 10号窯跡焼成部中位 縦断土層下層（窯体内、北から）



1 10号窯跡焼成部中～上位 縦
断土層下層（窯体内、北から）



2 10号窯跡前底部 縦断土層
(南西から)



3 10号窯跡焼成部 横断土層①
(谷下部グリッドB-1・C
- 1間、北西から)



1 10号窯跡焼成部 横断土層②
(北西から)



2 10号窯跡前庭部 横断土層
(南東から)



3 10号窯跡最終操業面 断ち割
り状況 (北西から)

1 10号窯跡焼成部 断ち割り状況（横断、北西から）



2 10号窯跡焼成部下位
断ち割り状況（縦断、
北から）



3 10号窯跡焼成部上位
断ち割り状況（縦断、
北から）



4 10号窯跡焼成部下位
断ち割り状況（横断左、
西から）



5 10号窯跡焼成部下位
断ち割り状況（横断右、
北から）



6 10号窯跡焼成部下位
断ち割り状況（縦断、
北から）

7 10号窯跡焼成部中位
断ち割り状況①（縦断、
北から）

8 10号窯跡焼成部中位
断ち割り状況（横断、
北西から）

9 10号窯跡焼成部中位
断ち割り状況②（縦断、
北から）

10 10号窯跡焼成部上位
断ち割り状況（縦横断、
北西から）



1 10号窓跡一次操業面 断ち割
り状況（北西から）



2 SX 1 全景（北東から）



3 SX 1 土層（東から）



1 SX2 全景（北東から）



2 热残留磁化測定サンプリング
状況①（9号窓跡、北から）



3 热残留磁化測定サンプリング
状況②（9号窓跡、北から）

图版40



11



34



50



56

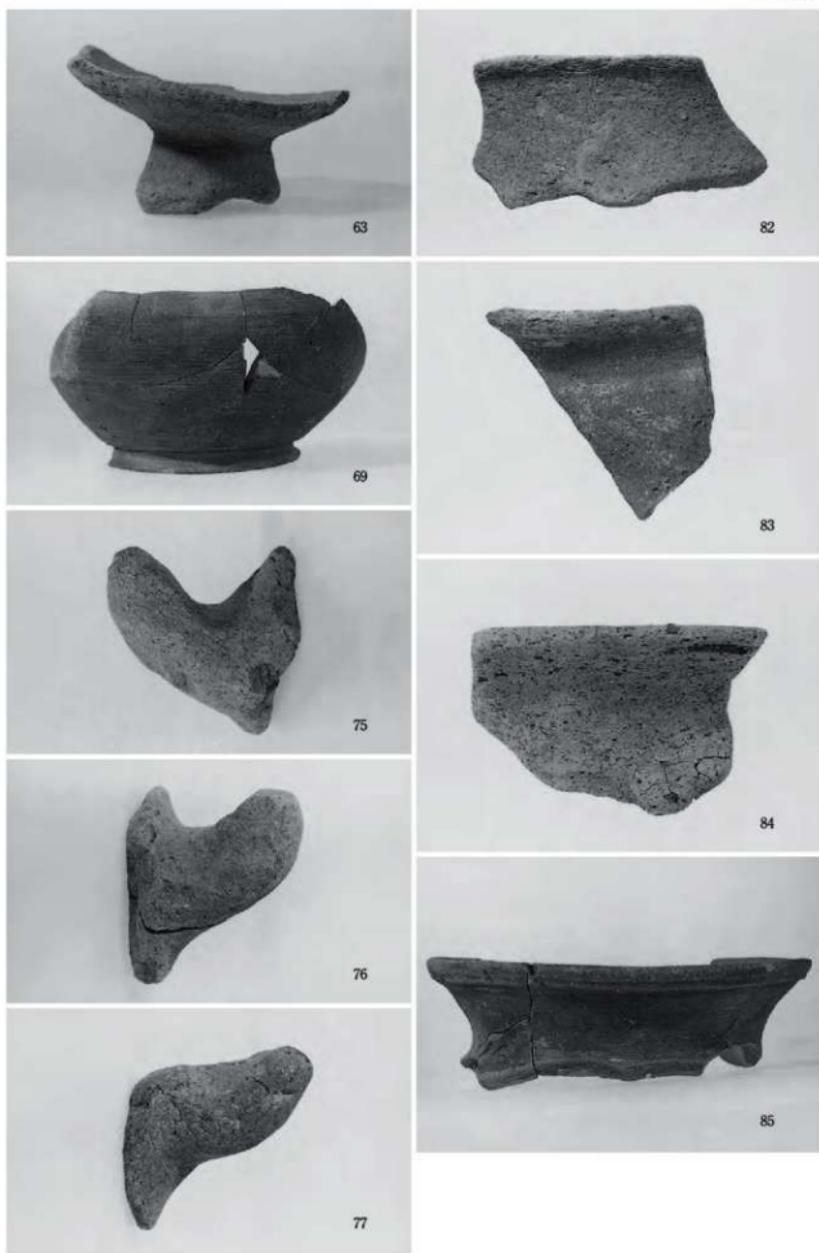


59

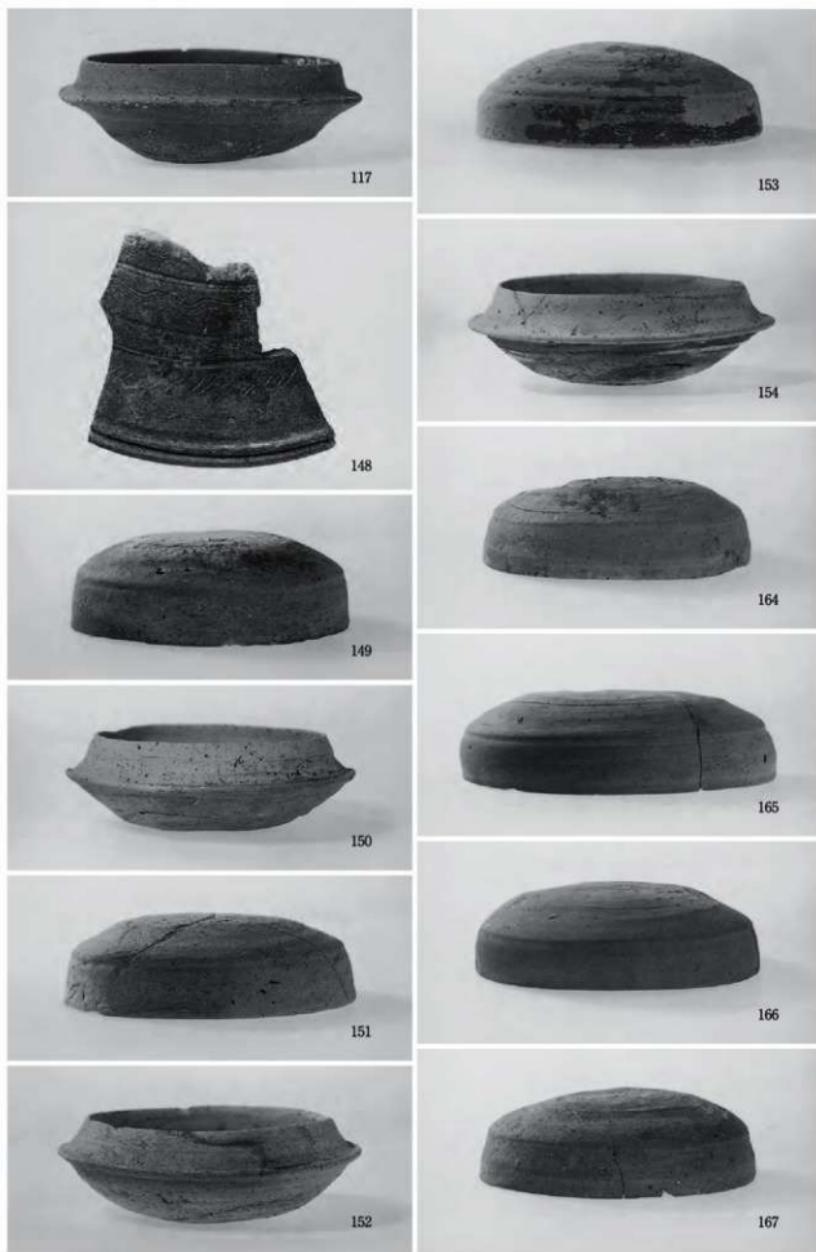


60

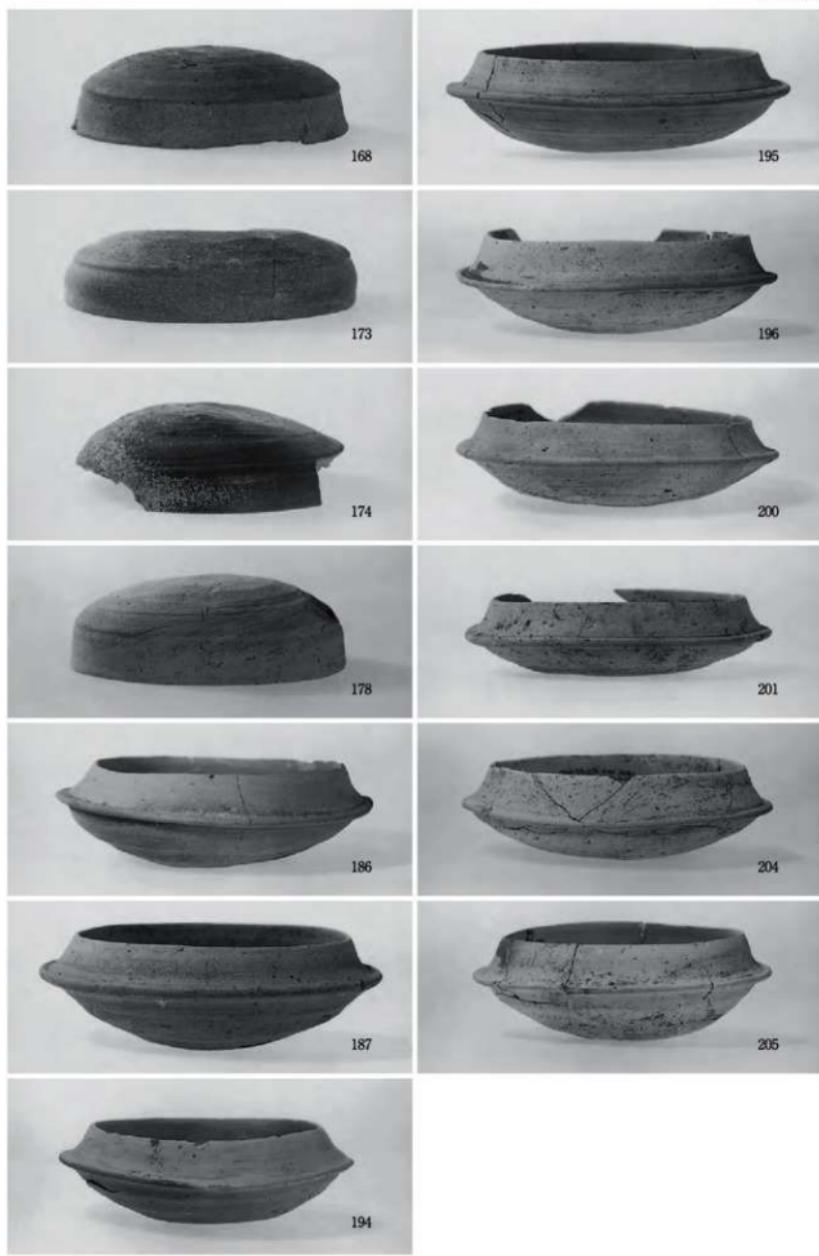
1区出土遗物①



1区出土遗物②

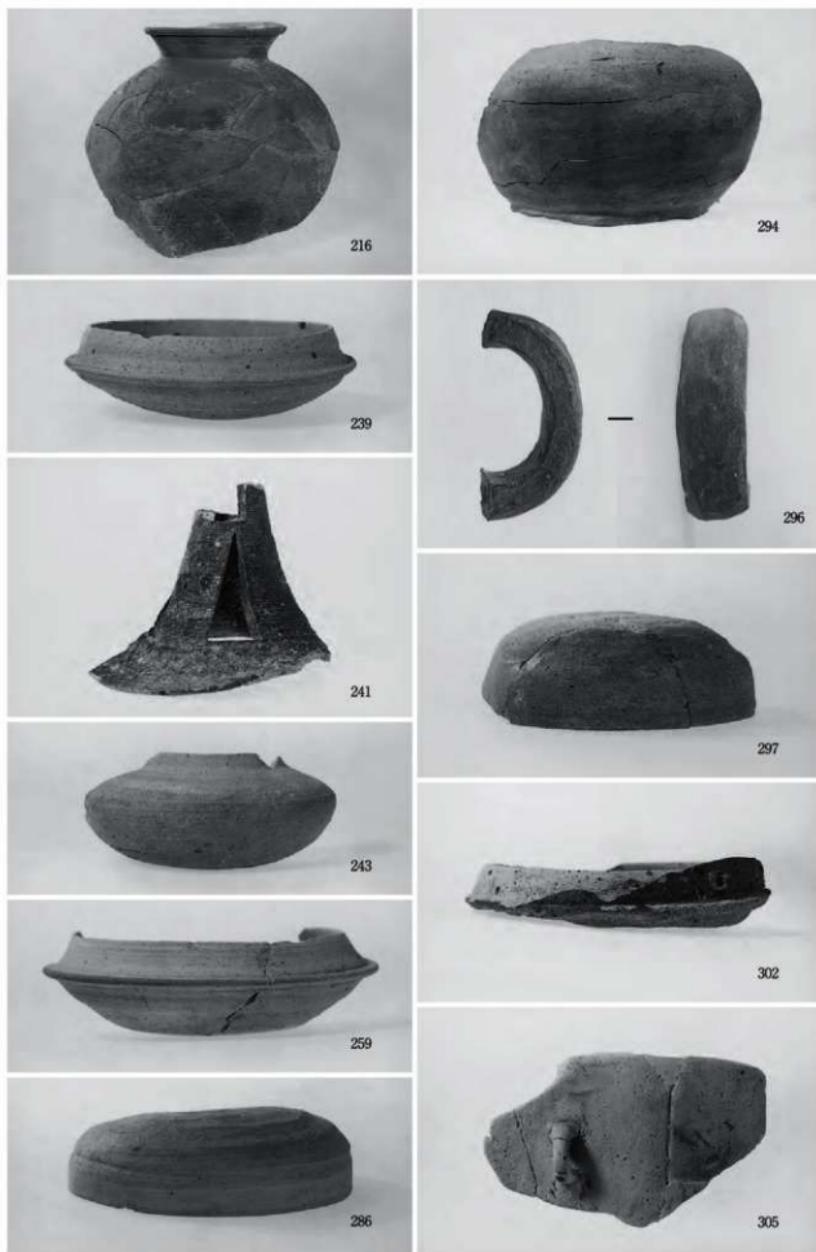


7号窯跡出土遺物①

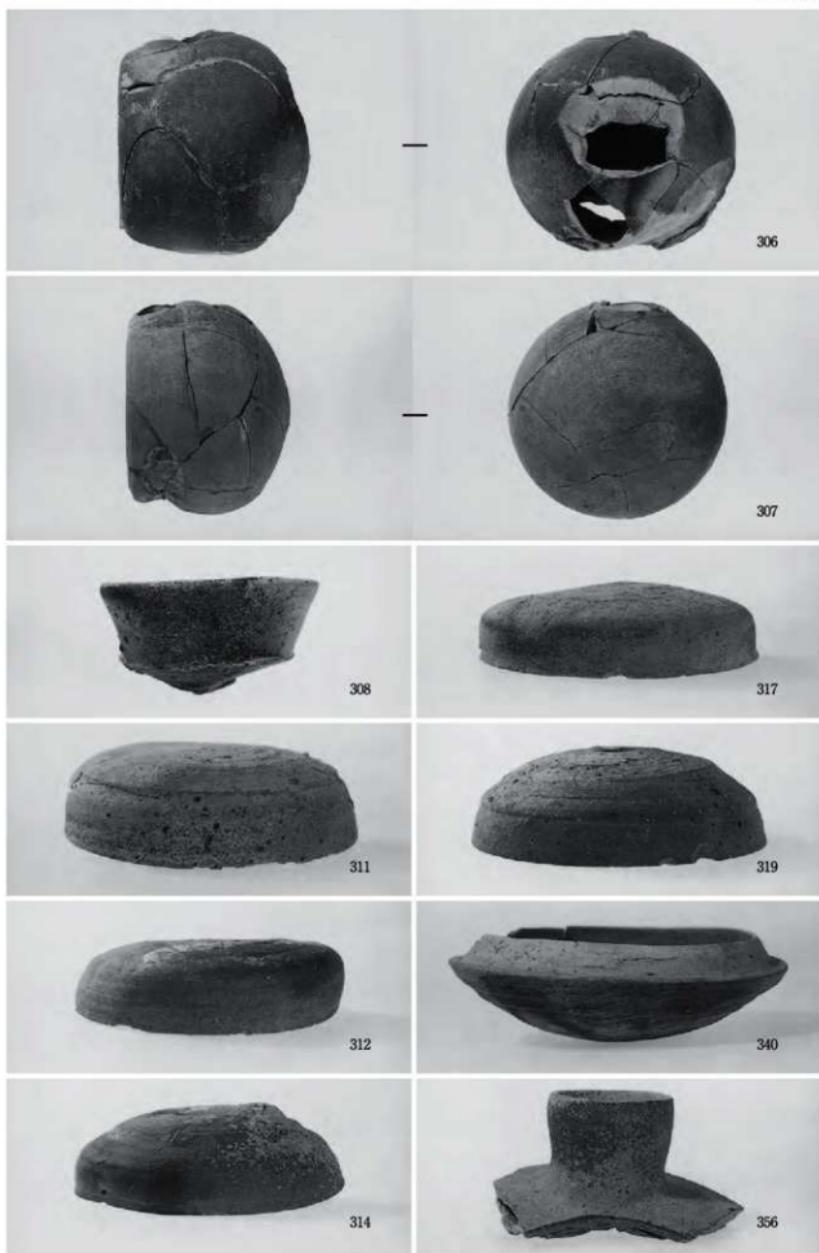


7号窑址出土遗物②

図版44

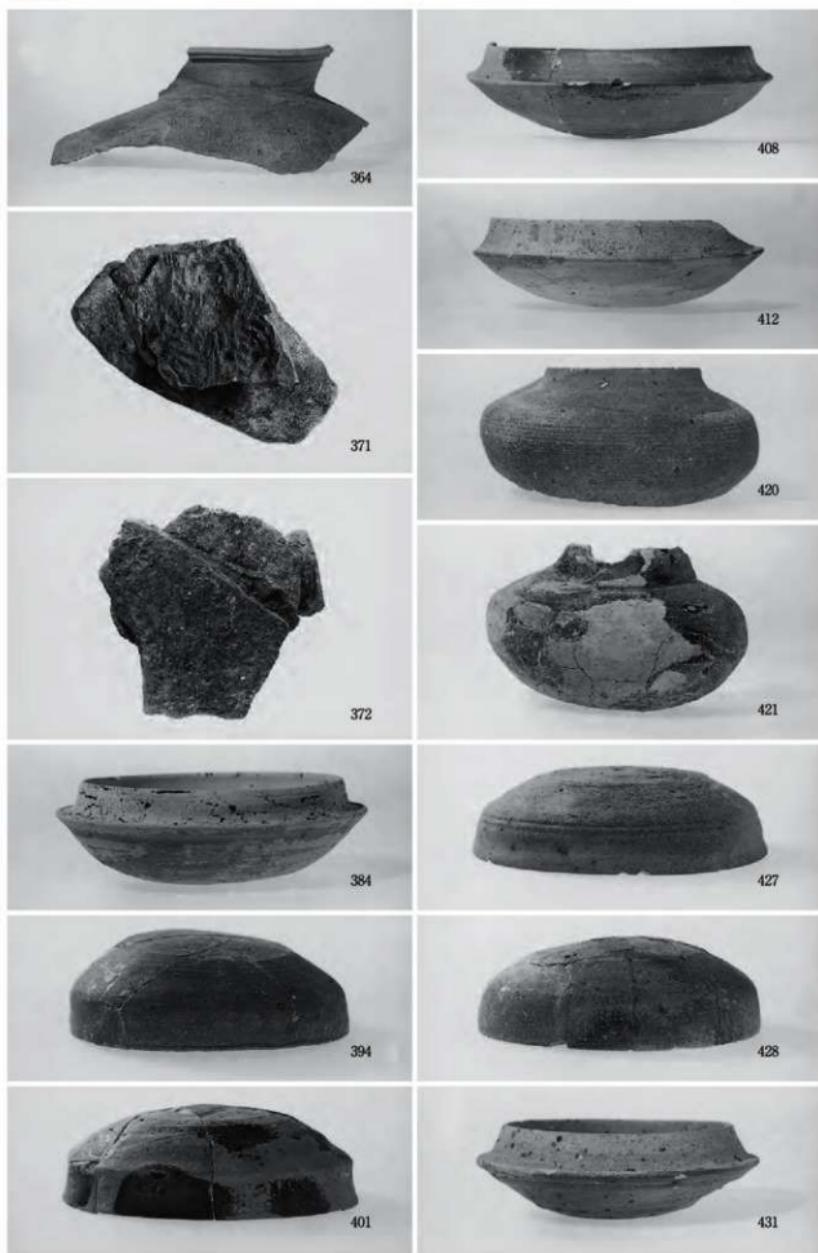


7号窯跡出土遺物③

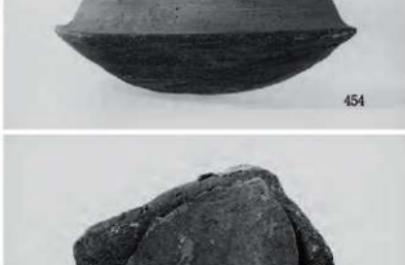


7号窑址出土遗物④

图版46



7·8号窑跡出土遺物



8号窑址出土遗物



467



505



469



518



472



476



523

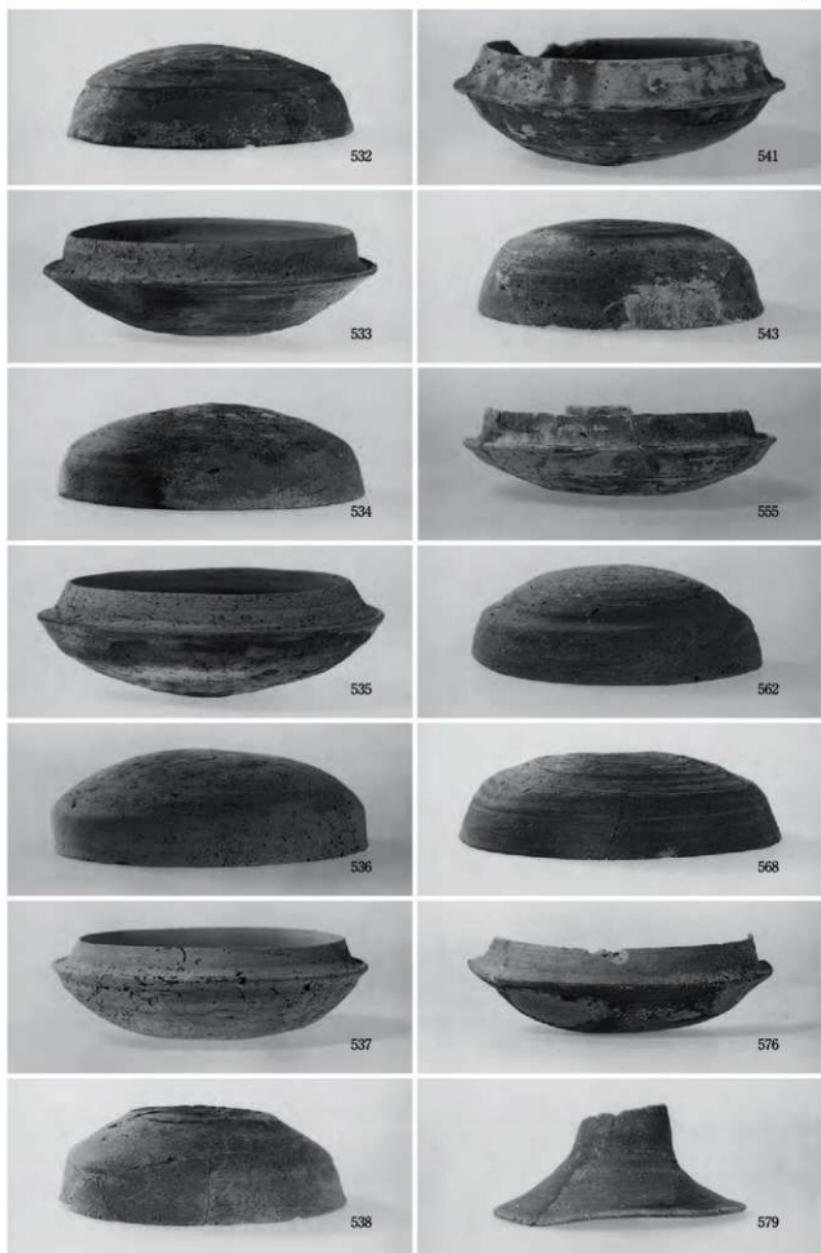


524

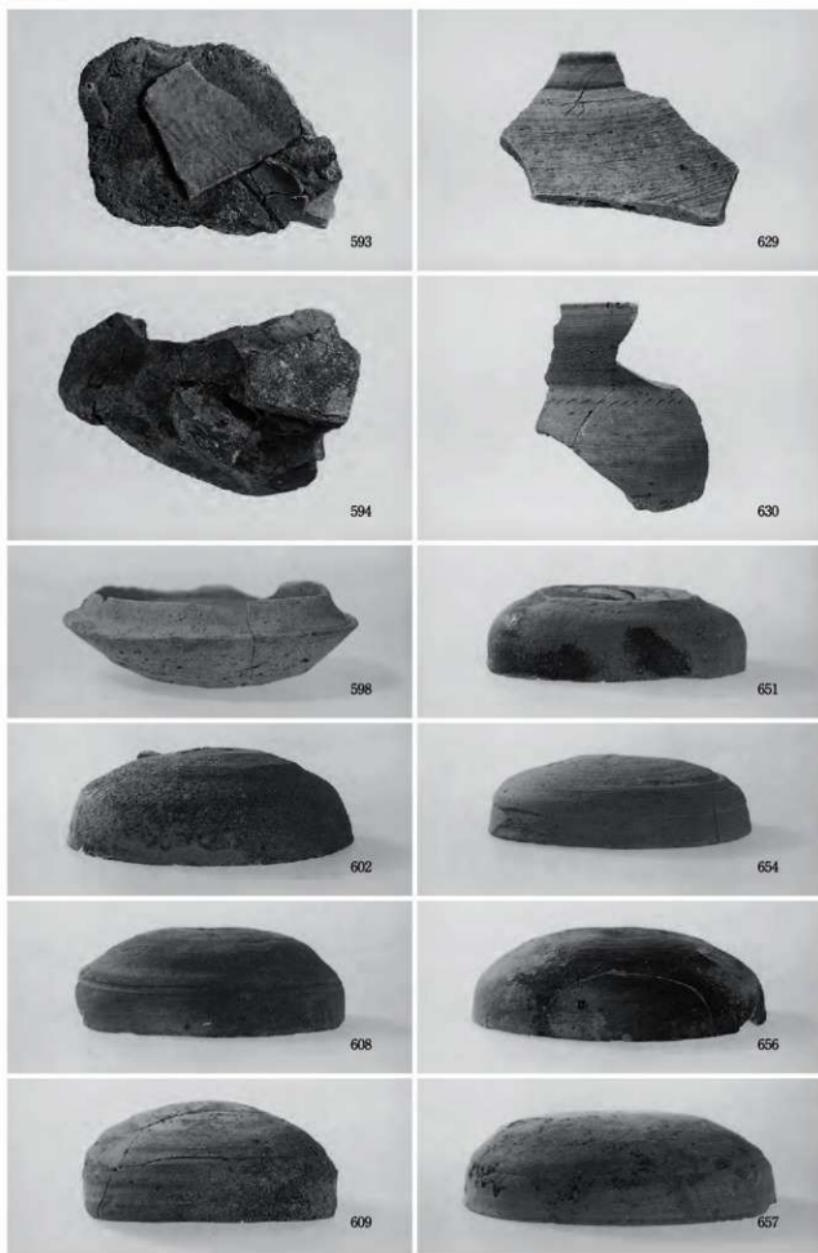


502

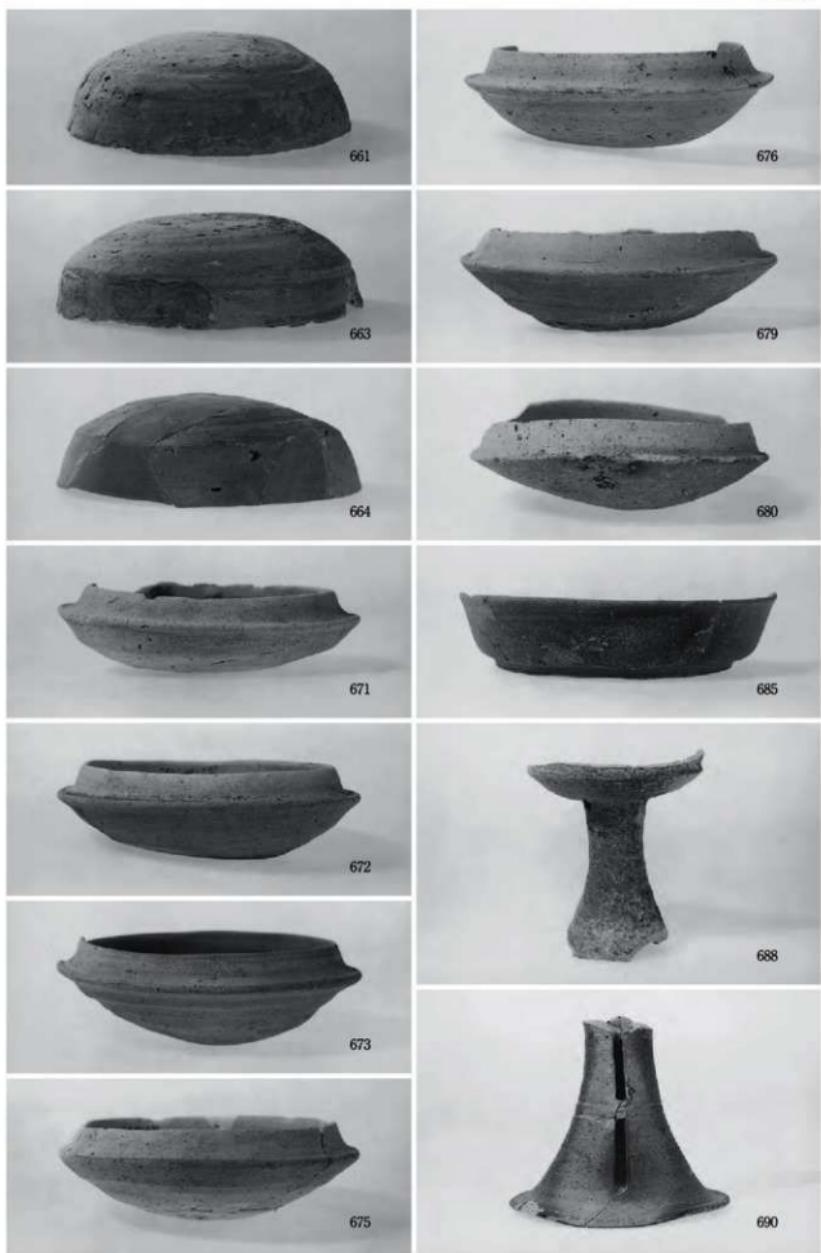
9号窑脉出土遗物



10号窑址出土遗物



10号窑脉·S X 1 · S X 2 · 谷下部灰原·包含层出土遗物



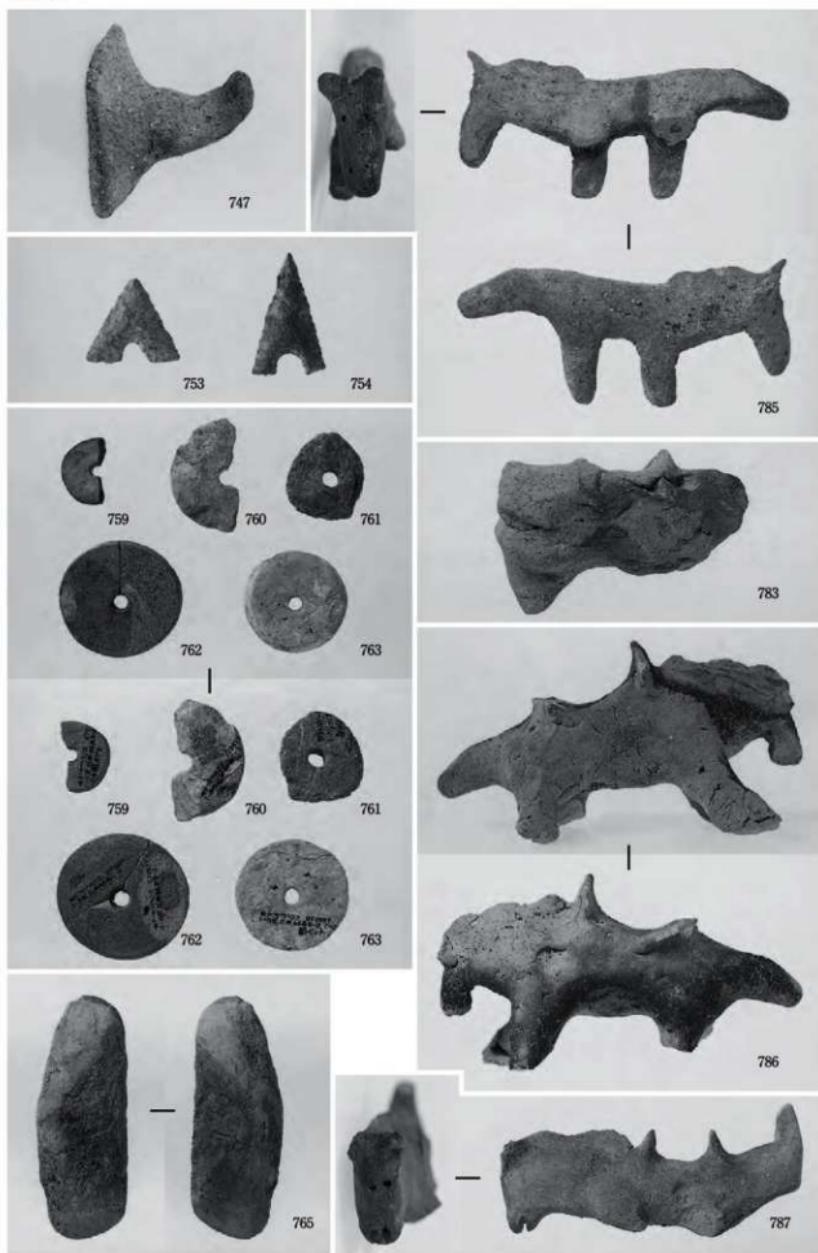
谷下部包含层出土遗物①



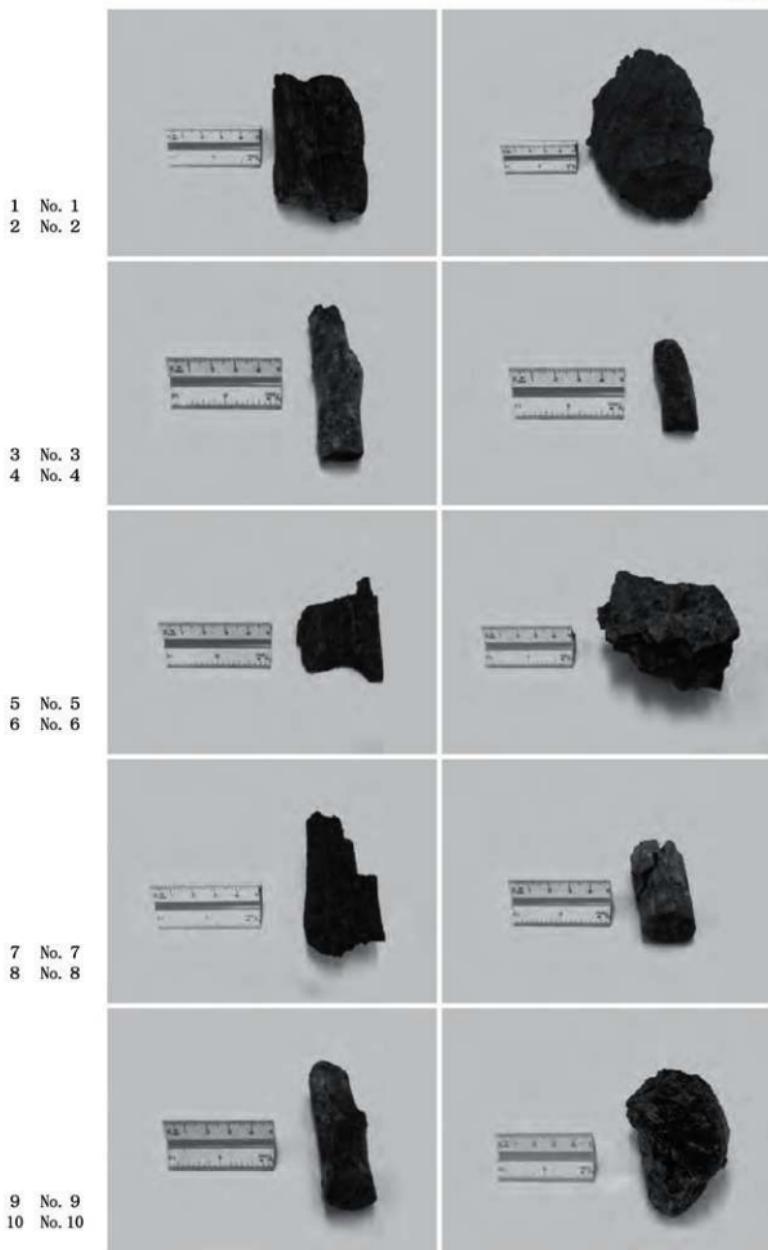
谷下部包含層出土遺物②



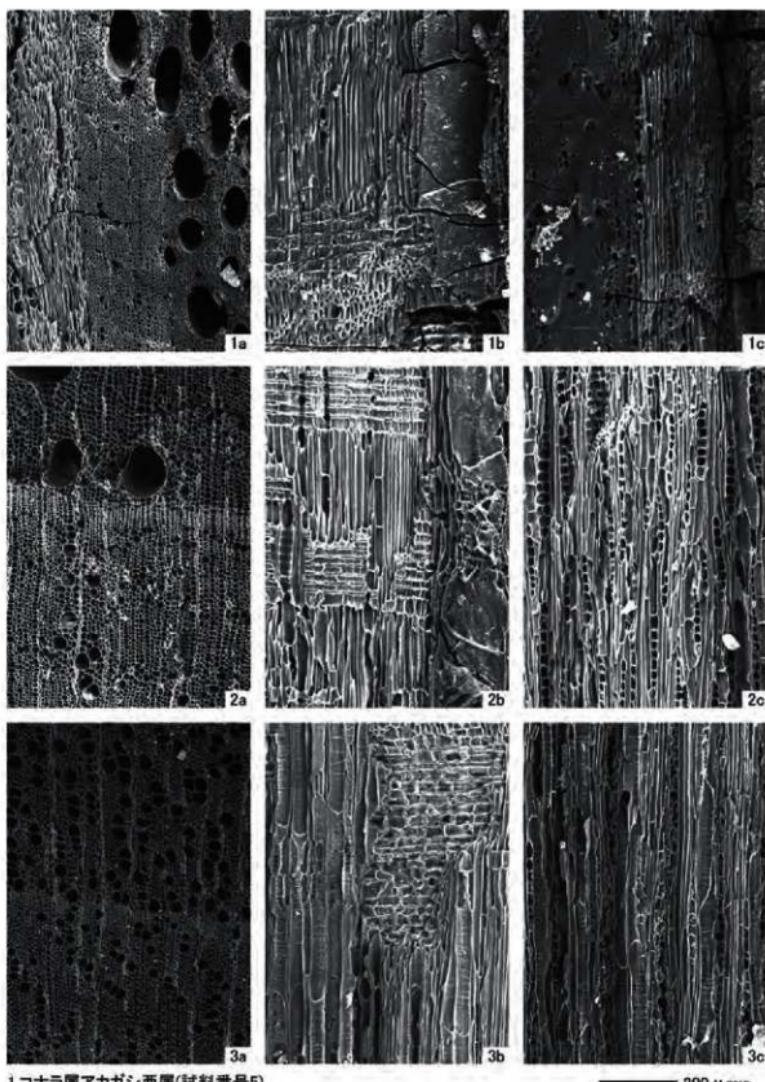
谷下部包含层出土遗物③



谷下部包含層出土遺物④・特殊遺物



炭化物分析試料



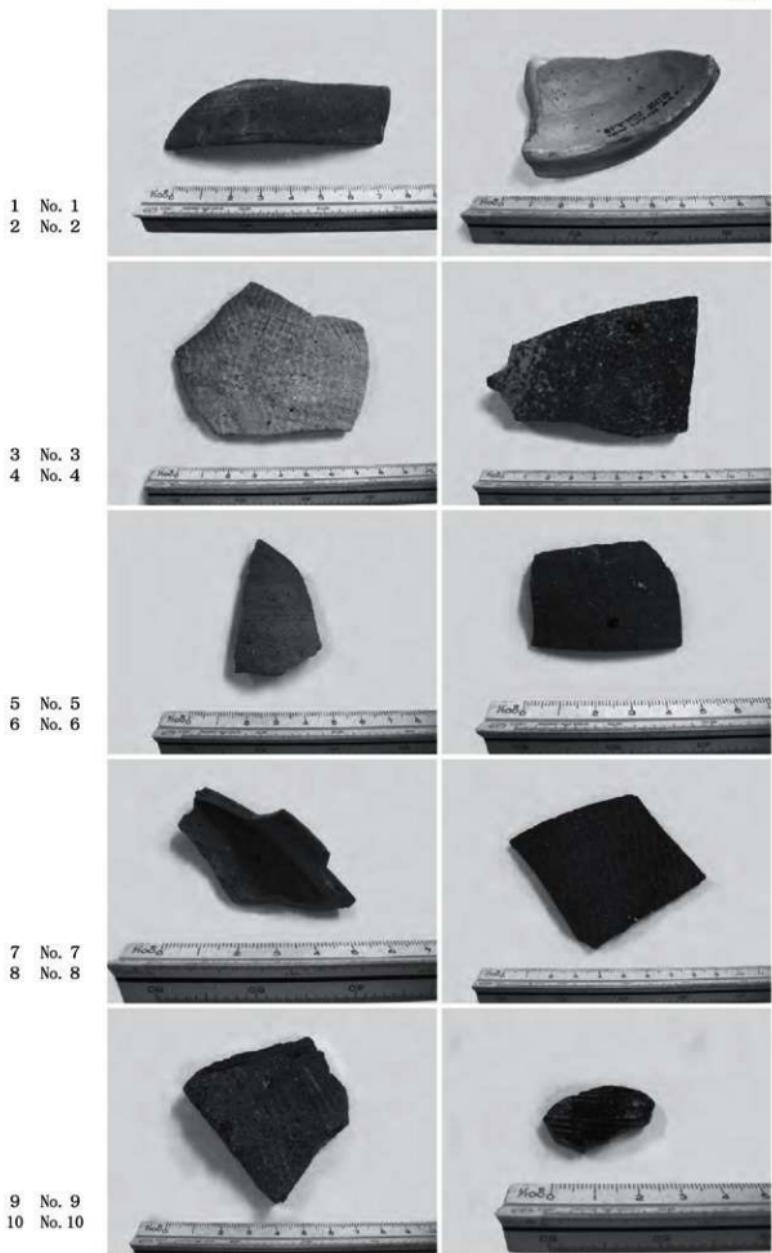
1.コナラ属アカガシ亜属(試料番号5)

2.スダジイ(試料番号1)

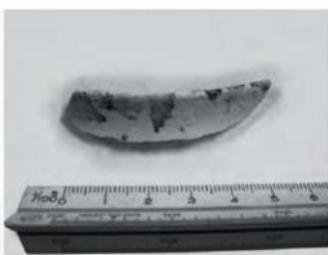
3.リンボク(試料番号3)

a:木口,b:径目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c



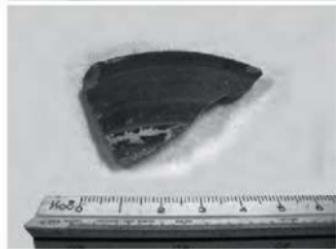
胎土分析試料①



1 No. 11
2 No. 12



3 No. 13
4 No. 14



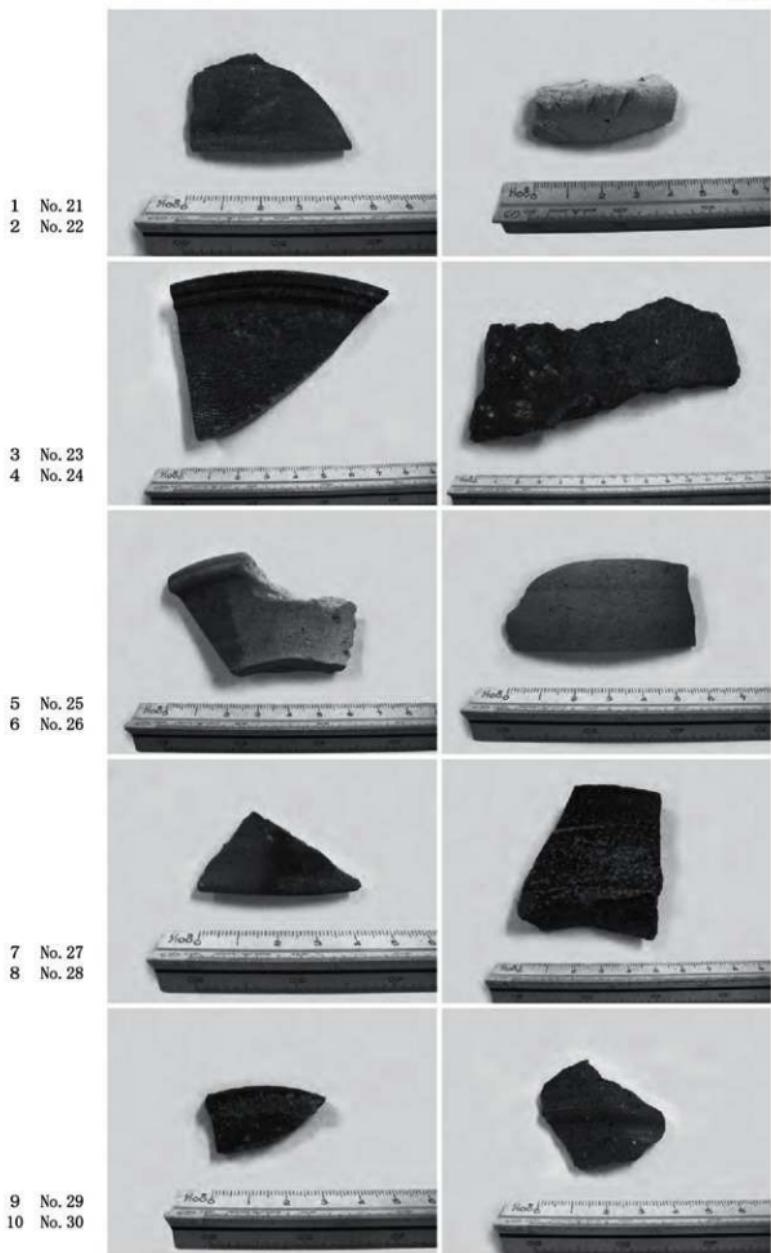
5 No. 15
6 No. 16



7 No. 17
8 No. 18



9 No. 19
10 No. 20



胎土分析試料③



1 No. 31
2 No. 32



3 No. 33
4 No. 34



5 No. 35
6 No. 36

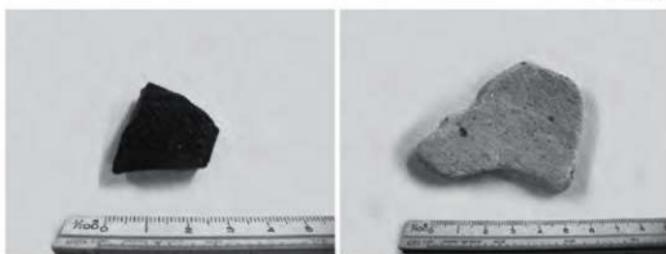


7 No. 37
8 No. 38



9 No. 39
10 No. 40

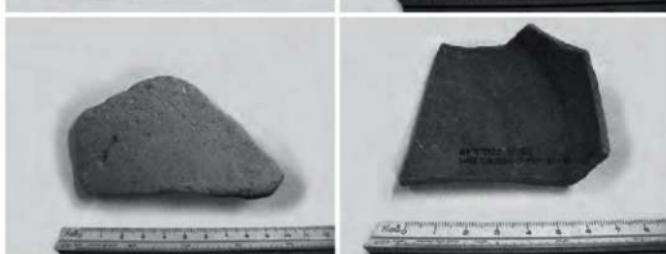
1 No. 41
2 No. 42



3 No. 43
4 No. 44



5 No. 45
6 No. 46



7 No. 47
8 No. 48



9 No. 49
10 No. 50





1 No. 51
2 No. 52



3 No. 53



4 現地説明会の様子①



5 現地説明会の様子②

報告書抄録

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 22	登録番号 2

井手ヶ浦窯跡群

福岡県文化財調査報告書 第230集

平成23年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7-7

印刷 (株)プリンティングコガ
大川市大字一木736-5